

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第206集

# 向館遺跡発掘調査報告書

一般県道上米内停車場線整備関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

頁	行	題	正
20	12	中期末葉と思われる	中期末葉と思われる。
231		床面積 <>は確定	床面積 <>は確定 (d')
234	1	多いようである。(柱1)	多いようである。
第9図			
第13図		第52図	
第18図		第55図	
第59図		第60図	第67図

# 向館遺跡発掘調査報告書

一般県道上米内停車場線整備関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成6年3月現在8,771ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えて行くことは、県民に課られた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

盛岡市上米内地区の県道上米内停車場線の改修工事では、向館遺跡・上米内遺跡という縄文時代の遺跡内をルートが通過することになり、発掘調査することになりました。今回の調査により、盛岡盆地東辺の山間部における縄文時代の遺跡を考える上で貴重な資料を提供することになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県土木部盛岡土木事務所・盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成6年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 工藤 巖

## 例言

1. 本書は、緊急地方道整備事業（一般県道上米内停車場線）に係わる盛岡市上米内字米内沢4-1外に所在する向嶺遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 本遺跡の成果は、平成4年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第195集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」及び、現地説明会（平成4年7月4日）にて公表してきたが、本書を正式な報告とする。
3. 本遺跡の岩手県遺跡番号はKE 92-1003、調査略号はNMT-01である。
4. 発掘調査は、対象面積4,352 m<sup>2</sup>を平成4年4月14日～7月31日の期間で行った。
5. 調査は、佐々木清文・笹平克子が担当し、小山内透が5月11日～5月29日まで参加した。整理および執筆・編集は主に笹平が担当したが、第1～4章と第5章第1節e・f・gの草稿は小山内が執筆している。なお、遺物に関してはすべて笹平が執筆した。
6. 遺跡の基準点測量は、(株)吉田測量設計に委託した。
7. 分析・鑑定は次の方々へ依頼した（敬称略）。

脂肪酸分析	中野寛子	(ズコー社)
石質鑑定	佐藤二郎	(長内水源工業)
8. 本書に使用した空中写真は、(有)NRC岩手空撮に委託して撮影したものである。
9. 本報告書挿図中に使用した土色表記は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」4版1973年を使用した。
10. 本書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1（盛岡）と50,000分の1（盛岡）である。
11. 発掘調査及び遺物整理にあたっては、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である（順不同、敬称略）。

岩手県教育委員会文化課	小田野哲憲	熊谷常正
宮城県教育委員会文化財保護課	村田晃一	
八戸市博物館	大野 亨	
玉山村立玉山小学校	平井 進	
秋田県二ツ井町教育委員会	和泉 昭一	
秋田県埋蔵文化財センター	谷地 薫	
12. 発掘調査による出土品及び記録資料は岩手県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

序	
例言	
I 調査に至る経過	3
II 位置と環境	3
III 遺跡の概観	9
IV 調査方法と整理方法	11
V 検出された遺構と遺物	15
1 縄文時代の遺構	15
(1) 竪穴住居跡	15
(2) 竪穴状遺構	72
(3) 炉跡	75
(4) 埋設土器	75
(5) 土坑	77
(6) 焼土遺構	126
(7) 配石遺構	135
2 時期不明の遺構	139
(1) 柱穴群	139
(2) 溝跡	139
3 遺構外出土遺物	145
(1) 土器、土製品	145
(2) 石器、石製品	203
(3) その他の遺物	204
VI 分析・鑑定	218
VII まとめ	230

## 挿図目次

第1図	岩手県全図	1	第31図	RA16竪穴住居跡出土遺物(2)	51
第2図	遺跡位置図	2	第32図	RA16竪穴住居跡出土遺物(3)	52
第3図	地形分類図	5	第33図	RA16竪穴住居跡出土遺物(4)	53
第4図	表層地質図	6	第34図	RA16竪穴住居跡出土遺物(5)	54
第5図	周辺の遺跡	8	第35図	RA16竪穴住居跡出土遺物(6)	55
第6図	遺跡基本層位柱状図	9	第36図	RA16竪穴住居跡出土遺物(7)	56
第7図	周辺地形と調査範囲	10	第37図	RA17竪穴住居跡	59
第8図	向館遺跡遺構配置図	13、14	第38図	RA17竪穴住居跡出土遺物(1)	60
第9図	RA01、02、04竪穴住居跡	17	第39図	RA17竪穴住居跡出土遺物(2)	61
第10図	RA01、02竪穴住居跡出土遺物	18	第40図	RA17竪穴住居跡出土遺物(3)	62
第11図	RA03竪穴住居跡	20	第41図	RA18竪穴住居跡	65
第12図	RA04竪穴住居跡出土遺物	21	第42図	RA18竪穴住居跡出土遺物(1)	66
第13図	RA05竪穴住居跡	23	第43図	RA18竪穴住居跡出土遺物(2)	67
第14図	RA05竪穴住居跡出土遺物(1)	24	第44図	RA19竪穴住居跡	69
第15図	RA05竪穴住居跡出土遺物(2)	25	第45図	RA19竪穴住居跡出土遺物	70
第16図	RA06、07竪穴住居跡	27	第46図	RE01竪穴状遺構	73
第17図	RA06、07、08竪穴住居跡	29	第47図	RE02竪穴状遺構	74
第18図	RA09竪穴住居跡	30	第48図	RF01、02伊跡、RZ10埋設土器	76
第19図	RA10竪穴住居跡	32	第49図	RD01、02、03、04土坑	78
第20図	RA11竪穴住居跡	34	第50図	RD05、06、07、08、09、10土坑	80
第21図	RA12竪穴住居跡	36	第51図	RD11、12、13、14、15土坑	82
第22図	RA12竪穴住居跡出土遺物(1)	38	第52図	RD16、17、18、19、20土坑	84
第23図	RA12竪穴住居跡出土遺物(2)	39	第53図	RD21、22、23、24土坑	87
第24図	RA12竪穴住居跡出土遺物(3)	40	第54図	RD25、26、27、28、29土坑	89
第25図	RA13、14竪穴住居跡	42	第55図	RD30、31、32、33、34、35土坑	92
第26図	RA15竪穴住居跡	44	第56図	RD36、37、38、39土坑	95
第27図	RA15竪穴住居跡出土遺物(1)	45	第57図	RD40、41、42、43土坑	97
第28図	RA15竪穴住居跡出土遺物(2)	46	第58図	RD44、45、46、47土坑	99
第29図	RA16竪穴住居跡	49	第59図	RD48、49、50、51土坑	101
第30図	RA16竪穴住居跡出土遺物(1)	50	第60図	RD52、53、54、55土坑	103

第61回	遺構内出土遺物(土坑1)	105	第93回	柱穴群5、RG01溝状遺構	144
第62回	遺構内出土遺物(土坑2)	106	第94回	遺構外出土遺物(第I群土器)	146
第63回	遺構内出土遺物(土坑3)	107	第95回	遺構外出土遺物(第II群土器1)	148
第64回	遺構内出土遺物(土坑4)	108	第96回	遺構外出土遺物(第II群土器2)	149
第65回	遺構内出土遺物(土坑5)	109	第97回	遺構外出土遺物(第II群土器3)	150
第66回	遺構内出土遺物(土坑6)	110	第98回	遺構外出土遺物 (第II群土器4、第III群土器1)	151
第67回	遺構内出土遺物(土坑7)	111	第99回	遺構外出土遺物(第III群土器2)	153
第68回	遺構内出土遺物(土坑8)	112	第100回	遺構外出土遺物(第III群土器3)	154
第69回	遺構内出土遺物(土坑9)	113	第101回	遺構外出土遺物(第III群土器4)	155
第70回	遺構内出土遺物(土坑10)	114	第102回	遺構外出土遺物(第III群土器5)	156
第71回	遺構内出土遺物(土坑11)	115	第103回	遺構外出土遺物(第III群土器6)	157
第72回	遺構内出土遺物(土坑12)	116	第104回	遺構外出土遺物(第IV群土器1)	161
第73回	遺構内出土遺物(土坑13)	117	第105回	遺構外出土遺物(第IV群土器2)	162
第74回	遺構内出土遺物(土坑14)	118	第106回	遺構外出土遺物(第IV群土器3)	163
第75回	遺構内出土遺物(土坑15)	119	第107回	遺構外出土遺物(第IV群土器4)	164
第76回	遺構内出土遺物(土坑16)	120	第108回	遺構外出土遺物(第IV群土器5)	165
第77回	遺構内出土遺物(土坑17)	121	第109回	遺構外出土遺物(第IV群土器6)	166
第78回	遺構内出土遺物(土坑18)	122	第110回	遺構外出土遺物(第IV群土器7)	168
第79回	遺構内出土遺物(土坑19)	123	第111回	遺構外出土遺物(第IV群土器8)	169
第80回	遺構内出土遺物(土坑20)	124	第112回	遺構外出土遺物(第IV群土器9)	170
第81回	遺構内出土遺物(土坑21)	125	第113回	遺構外出土遺物(第IV群土器10)	172
第82回	RZ01、02、03、04焼土遺構	127	第114回	遺構外出土遺物(第IV群土器11)	173
第83回	RZ05、06、07、08、09焼土遺構	129	第115回	遺構外出土遺物(第IV群土器12)	174
第84回	遺構内出土遺物(焼土遺構1)	130	第116回	遺構外出土遺物(第IV群土器13)	175
第85回	遺構内出土遺物(焼土遺構2)	131	第117回	遺構外出土遺物(第IV群土器14)	176
第86回	遺構内出土遺物(焼土遺構3)	132	第118回	遺構外出土遺物(第IV群土器15)	177
第87回	RH01配石遺構(F5区)	133、134	第119回	遺構外出土遺物(第V群土器1)	179
第88回	F5区出土遺物(1)	136	第120回	遺構外出土遺物(第V群土器2)	180
第89回	F5区出土遺物(2)	137	第121回	遺構外出土遺物(第V群土器3)	181
第90回	F5区出土遺物(3)	138	第122回	遺構外出土遺物(第VII群土器 (第VII群土器1))	183
第91回	柱穴群1、2	142			
第92回	柱穴群3、4	143			



第123図 遺構外出土遺物 (第VII群土器2・小型土器) ……184	第133図 遺構外出土遺物(石器6) ……210
第124図 遺構外出土遺物 (ミニチュア土器・土製品) ……185	第134図 遺構外出土遺物(石器7) ……211
第125図 遺構外出土遺物(土製品) ……187	第135図 遺構外出土遺物(石器8) ……212
第126図 遺構外出土遺物(土製品) ……188	第136図 遺構外出土遺物(石器9) ……213
第127図 遺構外出土遺物(円盤状土製品) ……189	第137図 遺構外出土遺物(石器10、古銭) ……214
第128図 遺構外出土遺物(石器1) ……205	第138図 向館遺跡竪穴住居跡集成図 ……233
第129図 遺構外出土遺物(石器2) ……206	第139図 底部穿孔埋設土器出土 竪穴住居跡集成図 ……235
第130図 遺構外出土遺物(石器3) ……207	第140図 竪穴住居跡、土坑分布図 ……237
第131図 遺構外出土遺物(石器4) ……208	第141図 RA16～19竪穴住居跡床面 出土遺物集成図 ……241
第132図 遺構外出土遺物(石器5) ……209	第142図 土器集成図 ……243

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡 ……7	第10表 遺構外出土土器・土製品計測表 ……199
第2表 RA12竪穴住居跡出土遺物観察表 ……41	第11表 円盤状土製品計測表 ……201
第3表 RA16竪穴住居跡出土遺物計測表・ 観察表 ……57	第12表 古銭観察表 ……204
第4表 RA17竪穴住居跡出土遺物計測表・ 観察表 ……63	第13表 遺構外出土石器計測表1 ……215
第5表 RA18竪穴住居跡出土遺物計測表・ 観察表 ……68	第14表 遺構外出土石器計測表2 ……216
第6表 RA19竪穴住居跡出土遺物観察表 ……71	第15表 遺構外出土石器計測表3 ……217
第7表 柱穴群観察表 ……140	第16表 竪穴住居跡一覧表 ……231
第8表 遺構外出土土器計測表 ……191	第17表 土坑一覧表 ……238
第9表 遺構外出土土器観察表 ……193	第18表 石器組成表 ……244
	第19表 遺構内石器出土数一覧表 ……245
	第20表 遺構内出土不定形石器一覧表 ……246

## 写真図版 目 次

写真図版 1	調査区透景航空写真 ……………251	写真図版23	RA06~11竪穴住居跡出土遺物 (土器) ……………273
写真図版 2	G 6 区土坑群、RA02竪穴住居跡 ……………252	写真図版24	RA12竪穴住居跡出土遺物 (土器) ……………274
写真図版 3	RA03、05竪穴住居跡 ……………253	写真図版25	RA12、13、15竪穴住居跡出土遺物 (土器・土製品) ……………275
写真図版 4	RA06、07、10竪穴住居跡 ……………254	写真図版26	RA16竪穴住居跡出土遺物 (土器 1) ……………276
写真図版 5	RA11、12竪穴住居跡 ……………255	写真図版27	RA16竪穴住居跡出土遺物 (土器 2) ……………277
写真図版 6	RA14、15竪穴住居跡 ……………256	写真図版28	RA16竪穴住居跡出土遺物 (土器 3) ……………278
写真図版 7	RA16、17竪穴住居跡 ……………257	写真図版29	RA16竪穴住居跡出土遺物 (土器 4) ……………279
写真図版 8	RA18、19竪穴住居跡 ……………258	写真図版30	RA16竪穴住居跡出土遺物 (土器 5) ……………280
写真図版 9	竪穴住居跡炉完掘状況 ……………259	写真図版31	RA17竪穴住居跡出土遺物 (土器 1) ……………281
写真図版10	竪穴住居跡、完掘状況、遺物出土状 況、RE02竪穴状遺構遺物出土状況 ……………260	写真図版32	RA17(土器 2)、18竪穴住居跡出土 遺物(土器 1) ……………282
写真図版11	RE01竪穴状遺構、RF01、02炉跡完掘 状況 ……………261	写真図版33	RA18竪穴住居跡出土遺物 (土器 2) ……………283
写真図版12	RD01、02、04~07、09土坑 ……………262	写真図版34	RA18(土器 3)、19竪穴住居跡、RE01 竪穴状遺構出土遺物(土器) ……284
写真図版13	RD10、12~17土坑 ……………263	写真図版35	RE02竪穴状遺構、RF02炉跡、RZ10 埋設土器、RD01土坑出土遺物(土器) ……………285
写真図版14	RD18~24土坑 ……………264	写真図版36	RD01~03、09、11、13土坑出土遺物 (土器) ……………286
写真図版15	RD25~34土坑 ……………265	写真図版37	RD13土坑出土遺物(土器) ……287
写真図版16	RD35~40土坑 ……………266		
写真図版17	RD41~45、48~50土坑 ……………267		
写真図版18	RD51~55土坑、RZ01、02、06、07焼 土遺構 ……………268		
写真図版19	RZ10埋設土器、F 5 区、RH01、RG01 溝跡・柱穴群 ……………269		
写真図版20	G 6 区木炭痕跡遺物出土状況 ……270		
写真図版21	RA01~04竪穴住居跡出土遺物 (土器) ……………271		
写真図版22	RA05竪穴住居跡出土遺物 (土器) ……………272		

写真図版38	RD15、18、20土坑出土遺物 (土器) ……………288	III群土器1) ……………306
写真図版39	RD22、23、25、26土坑出土遺物 (土器) ……………289	遺構外出土遺物(第II群土器2) ……………307
写真図版40	RD27、29、30土坑出土遺物 (土器) ……………290	遺構外出土遺物(第II群土器3) ……………308
写真図版41	RD32、33土坑出土遺物(土器) ……………291	写真図版59 遺構外出土遺物(第III群土器2) ……………309
写真図版42	RD33、38~40土坑出土遺物 (土器・土製品) ……………292	写真図版60 遺構外出土遺物(第III群土器3) ……………310
写真図版43	RD40、42、43土坑出土遺物 (土器) ……………293	写真図版61 遺構外出土遺物(第III群土器4) ……………311
写真図版44	RD43、44、46土坑出土遺物 (土器・土製品) ……………294	写真図版62 遺構外出土遺物(第III群土器5) ……………312
写真図版45	RD46、51~53土坑出土遺物 (土器) ……………295	写真図版63 遺構外出土遺物(第IV群土器1) ……………313
写真図版46	RD54、55土坑、RZ01、03焼土遺構出 土遺物(土器) ……………296	写真図版64 遺構外出土遺物(第IV群土器2) ……………314
写真図版47	RZ03~06焼土遺構出土遺物 (土器) ……………297	写真図版65 遺構外出土遺物(第IV群土器3) ……………315
写真図版48	RZ06、07焼土遺構、柱穴群5、F5区 出土遺物(土器1) ……………298	写真図版66 遺構外出土遺物(第IV群土器4) ……………316
写真図版49	F5区出土遺物(土器2) ……………299	写真図版67 遺構外出土遺物(第IV群土器5) ……………317
写真図版50	F5区出土遺物(土器3) ……………300	写真図版68 遺構外出土遺物(第IV群土器6) ……………318
写真図版51	遺構内出土遺物(石器1) ……………301	写真図版69 遺構外出土遺物(第IV群土器7) ……………319
写真図版52	遺構内出土遺物(石器2) ……………302	写真図版70 遺構外出土遺物(第IV群土器8) ……………320
写真図版53	遺構内出土遺物(石器3) ……………303	写真図版71 遺構外出土遺物(第IV群土器9) ……………321
写真図版54	遺構外出土遺物(第I群土器1) ……………304	写真図版72 遺構外出土遺物(第IV群土器10) ……………322
写真図版55	遺構外出土遺物(第I群土器2) ……………305	
写真図版56	遺構外出土遺物(第II群土器1、第	

	.....322	写真図版79	遺構外出土遺物(第VII群土器2・小型土器) .....	329	
写真図版73	遺構外出土遺物(第IV群土器11)	.....323	写真図版80	遺構外出土遺物(ミニチュア土器・土製品) .....	330
写真図版74	遺構外出土遺物(第IV群土器12)	.....324	写真図版81	遺構外出土遺物(土製品、円盤状土製品) .....	331
写真図版75	遺構外出土遺物(第V群土器1)	.....325	写真図版82	遺構外出土遺物(円盤状土製品) .....	332
写真図版76	遺構外出土遺物(第V群土器2)	.....326	写真図版83	遺構外出土遺物(石器1) .....	333
写真図版77	遺構外出土遺物(第V群土器3)	.....327	写真図版84	遺構外出土遺物(石器2) .....	334
写真図版78	遺構外出土遺物(第VI群土器・第VII群土器1) .....	328	写真図版85	遺構外出土遺物(石器3) .....	335
			写真図版86	遺構外出土遺物(石器4) .....	336

## 凡例

1. 本報告書に記載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。
2. 遺構略号・番号は、将来的に本遺構の未調査部分の調査が行われる場合を考え、盛岡市教育委員会との協議のもと、盛岡市教育委員会で使用している遺構略記号を用い、遺構種別毎の検出順に連番とした。なお、精査の過程で遺構ではないと判断したものに関しては、欠番とせず新たに検出したものにその番号を当てている。整理段階で遺構略号を変更したものに関しても同様とした。遺構略号は、以下の通りである。

RA……竪穴住居跡    RE……竪穴状遺構    RF……石組炉    RD……土坑  
RH……配石遺構    RG……溝跡    RZ……その他

3. 土層注記は、基本層位にローマ数字を用い、遺構埋土にはアラビア数字を用いた。
4. 挿図中の柱穴及び柱穴状ピットに付した数字は、床面あるいはプラン確認面からの深さで単位はcmである。
5. 文章中の法量及び表中の残存値は（ ）で表示した。また、表では〈 〉は推定値を示している。
6. 拓本は、断面の左側に表面（外面）を置いた。ただし、表裏両面を載せる場合に限り、断面の左側に裏面（外面）を置いた。
7. 挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。



焼土、炉



石器の凹部



炭、炭化物



石器の磨痕

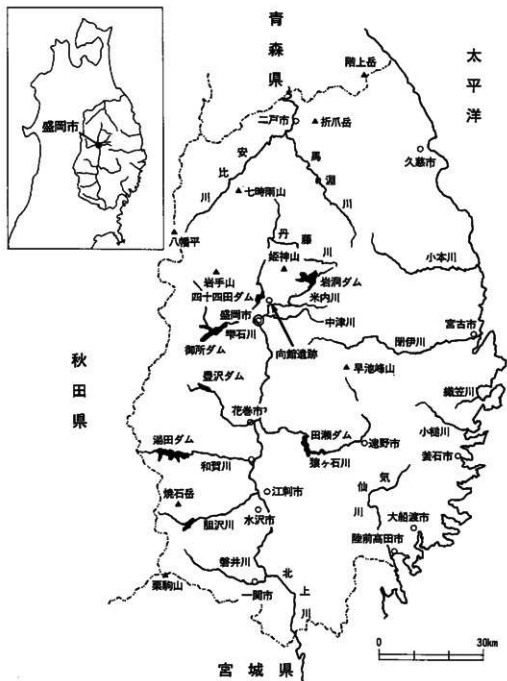


炉石の被火熱部位



石器のたたき痕

凡例



第1図 岩手県全図



第 2 図 遺跡位置図

## I 調査に至る経過

一般県道上米内停車場線は、県道岩泉線から分岐して桜台団地の近くを通り米内川・中津川に沿って盛岡市中心部に至る路線である。近年、桜台団地や庄ヶ畑地区など盛岡市郊外の住宅建設が盛んになり、人口が増加したことや、大型車両の増加にともない、交差点の改良や橋梁の建て替えなど道路整備が急がれる状態となった。

これに対応し、平成元年度より緊急地方道整備事業に組み込まれ、平成2年度から岩手県教育委員会文化課と協議し、平成3年度に一部試掘調査を含む現地調査が実施され、上米内遺跡の対岸に縄文時代の遺跡の存在が確認され、向館遺跡と命名された。向館遺跡の北側丘陵には館跡があり、向館と呼ばれているが、この遺跡とは別のものである。

その結果、上米内遺跡とともに向館遺跡の事前調査が、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業として実施されることとなった。調査は工事の進行計画に合わせ、米内川の橋梁部分を先行させる形で、向館遺跡と上米内遺跡の一部が平成4年に、上米内遺跡の残りの部分に関しては平成5年に行われることとなった。

## II 位置と環境

### 1. 位置と立地 (第1・2図)

向館遺跡の所在する盛岡市は、岩手県のほぼ中央に位置する県庁所在地であり、文化・交通・行政の中心地である。遺跡は、盛岡市中心部から北東に約6.5km、JR山田線上米内駅からは北西に0.5kmの地点に位置する。遺跡西側米内沢の沢向かいには米内浄水場が設置されている。

遺跡の経緯度は、北緯39°44'40"東経141°12'27"である。

遺跡の所在する盛岡市周辺地域は、東北日本弧内帯と外帯の接する地域であり、地質構造及び地形配列は両帯の縁辺的性格を有し、遺跡は、外帯に相当する北上山系のうち地質構造上、北上帯の主要な境界である早池峰構造帯と北部北上帯を南北に区切るように開析して、東-西に流れる米内川によって形成された沖積(砂礫)段丘と北側から流れこむ米内沢によって形成された谷底・氾濫平野上の米内川右岸に立地する。川向かいの左岸には上米内遺跡が位置する。

### 2. 遺跡周辺の地形と地質 (第3・4図)

遺跡の所在する東北弧外帯に相当する北上山系は、先第三系の古期岩類より構成され、新第三紀から第四紀にかけて連続的隆起を行った地域とされている。地形的には高度の異なる数段



の侵食小起伏面が保存されており、高度 400 m 以下の小起伏山地と、高度 550～600 m 及び 700～900 m の侵食小起伏面に連なる中起伏山地とに区分できるが、小起伏山地と侵食小起伏面との構造的関係はまだ明らかではない。

北上山系は、地質構造上南北北上帯と両帯の主要な境界である早池峰構造帯からなるが、早池峰構造帯の形成は中生代に終了しており、直接に現在の山地の地形配列を決定してはいないものの、基盤岩の性質の差は侵食谷の方向や水系の性格等の決定に関与している。

北部北上帯に属する山地は、外山山地と玉山山地に区分される。外山山地は姫神岳の南西部に連なる高度 700～900 m の小起伏山地の東斜面に相当する中起伏山地である。基盤岩は、古生層中に貫入した花崗閃緑岩からなり、深層風化によってマサ化した部分と未風化のブロック部分から構成される。玉山山地は高度 400 m 以下の小起伏山地で、主として古生層と花崗閃緑岩からなるが、一部に第四紀に噴出した玉山溶結凝灰岩も分布する。本山地の尾根には現在と異なる水系によって運ばれた礫も存在しており、第四紀の小起伏面起源の山地と推定できる。

早池峰構造帯に属する山地は、高森山地と朝島山地に区分される。高森山地は中津川と米内川及びその支流によって開析された中起伏山地となっており、朝島山地は高度 350 m 以下の小起伏山地で、両山地とも基盤岩は主に輝緑凝灰岩からなる。

遺跡の西方で山地に続く丘陵は、四十四田丘陵であり、早池峰構造帯上の建石山山地の延長部で小起伏山地の縁辺部に相当する。丘陵を構成する基盤層は古生層からなる。本丘陵は盛岡市郊外として宅地造成等による人工改変地も多い。

本地域の河岸段丘は、段丘堆積物上の火山灰層序から区分される砂礫段丘であり、遺跡の立地する下位の沖積段丘と上位の洪火火山灰層上部以上を載せる段丘・分火山灰層を載せる段丘の三段である。

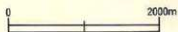
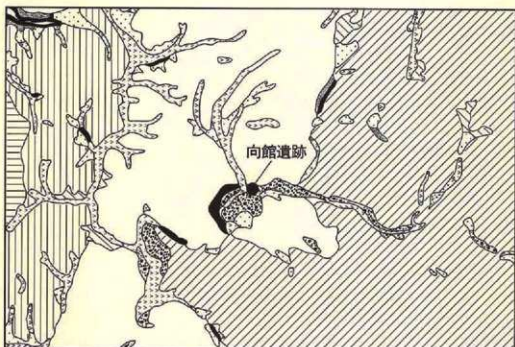
#### 参考文献

岩手県農政部北上山系開発室「盛岡」『土地分類基本調査』1978年

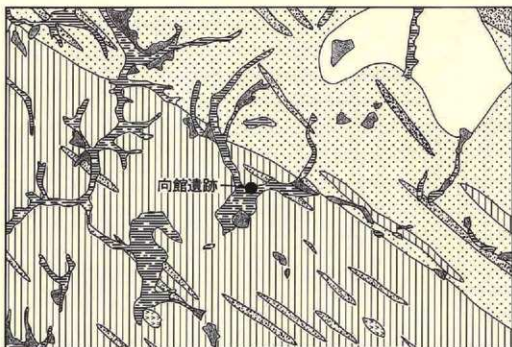
### 3. 周辺の遺跡

盛岡市とその周辺の遺跡数は約 300 程に上るが、向館遺跡の位置する盛岡市郊外北東部地域では、およそ 40 程の遺跡が確認されている。(第 4 図・第 1 表)

当該地域における調査例は少なく、本遺跡と同様県道土米内停車場線整備に伴い調査の実施された土米内遺跡(参・注 1)、盛岡市教育委員会により調査された柿ノ木平遺跡(参 1)と落合遺跡、他は岩手県教育委員会文化課による試掘調査が数例あるのみである。また、「岩手県史」によると畑井野遺跡において縄文時代(早・前・中・後・晩期)の土器片が採集されている。



第 3 図 地形分類図



輝綠凝灰岩



砂岩



泥岩



珪岩質岩石



花崗岩質岩石



蛇紋岩質岩石



砂礫



碎層物



第 4 圖 表層地質圖

上米内遺跡は縄文時代中・後期を主体とする集落及び墓域と確認されており、縄文中期から後期までの住居跡がまとまって検出された。底部穿孔の大口8b式の大形深鉢形土器が倒立した形で埋設されていた。柿の木平遺跡は縄文中期の集落が検出され、上米内遺跡同様、底部穿孔の大口8b式の大形深鉢形土器が埋設されていた。落合遺跡では配石と土坑群が検出されている。

〈盛岡市〉

NO	遺跡名	遺構・遺物	所在地
1	向館	縄文 集落跡	上米内字米内沢
2	上米内	縄文土器(後・晩期)・土師器	上米内字中屋
3	向館跡	中世 館跡	上米内字米内沢
4	大勝館	中世	上米内字大勝
5	野頭館	中世	上米内字野頭
6	松木平	縄文 弥生	上米内字松木平
7	道の下A	縄文	上米内字道の下
8	道の下B	縄文	// //
9	米内沢B	縄文	上米内字道の下
10	竹林館	中世	上米内字米内沢
11	米内沢A	縄文土器(前~晩期)	上米内字米内沢
12	畑井野	縄文土器(前・中期)・石器	上米内字畑井野
13	下三沢	縄文土器(前~晩期)	上米内字道の下
14	上三沢	縄文土器(前~晩期)	// //
15	大堂一里塚	近世	上米内字米内沢
16	盲沢下	縄文	上米内字畑井野
17	止沢	縄文土器(中・後期)	上米内字米内沢
18	畑	縄文土器(中・晩期)	上米内字畑
19	一戸農場	縄文土器(中~晩期)・土師器	上米内字白石
20	下小浜	縄文	上米内字小浜
21	伊勢沢	中世	下米内字伊勢沢
22	種荷社前	縄文土器(中・晩期)・弥生土器・土師器	下米内字大豆門
23	下米内	縄文土器(中期)	下米内字伊勢沢
24	大豆門	縄文土器(中期)・石器・土偶	下米内字大豆門
25	馬場野	縄文土器(中・後・晩期)・土師器	下米内字馬場野
26	佐々木館	中世	下米内字寺並
27	一本松	縄文土器(早・後期)	下米内字一本松
28	熊ノ沢	縄文	// //
29	落合	縄文土器(晩期)・土師器	下米内字落合
30	栗駒社脇	縄文土器(中期)・土師器	浅岸字横邊
31	アカトリ	縄文土器(中期)・土師器	浅岸字ニツ森
32	栗木平	縄文土器(中・後期)・石皿	浅岸字塚根
33	柿ノ木平	縄文大型深鉢形土器(中期)・石器	浅岸字柿木平
34	向田	縄文土器(前・中期)	浅岸字向田
35	稲久保	縄文土器(中期)・土師器・石器	つつじヶ丘
36	寺沢	縄文土器(中・後期)・土師器	浅岸字寺沢

第1表 周辺の遺跡

1. 岩手文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書196集「岩手県埋蔵文化財略報」(平成4年)
  2. 盛岡市教育委員会「柿の木平遺跡」昭和57年度発掘調査概要-1983年
  - 盛岡市教育委員会「柿の木平遺跡」昭和59年度発掘調査概要-1985年
- 注 1. 上米内遺跡は平成5年から6年度継続調査となっている。
2. 第4図、第1表は盛岡市教育委員会「盛岡市遺跡地図」(1980年版)による



第5図 周辺の遺跡

### III 遺跡の概観

#### 1. 周辺の地形 (第6図)

向館遺跡は盛岡市上米内字米内沢に所在し、北から南に向かい標高 203.0~199.5 m と低くなる米内川および米内沢によって形成された河岸段丘と谷底平野上に立地している。

遺跡は、北側が大日向山山地南端の標高 250 m 程、遺跡との比高差約 50 m の急勾配傾斜で、西側は耕作整地によって埋没谷がさらに埋め立てられた比高差 1~3 m 米内沢に、東側から南側にかけては比高差 2~5 m 程の米内川によって限られた南北約 70 m、東西約 200 m におよぶ範囲と推定される。今回の調査範囲は、このうち米内川右岸の段丘西縁に当たる。

#### 2. 遺跡の基本層序 (第7図)

遺跡現況が水田及び畑地であり、耕作整地による著しい擾乱を受けて基本層序は一様ではなく、遺物包含層の遺存状態は極めて不良である。G6区を除くすべての地区では表土(耕作土・盛土)下は漸移層あるいは地山であった。G6区以北ではさらに地山の削平がなされていた。第7図の基本土層図はG6区におけるものである。

I a~c 層は、耕作土・盛土である。土層は 30~70 cm で南側川岸に向かい厚くなる。

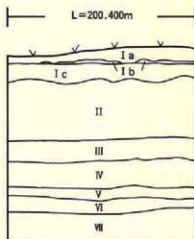
II層は、黒ボク土で小石、角礫を含む遺物包含層である。層厚は 60 cm 前後で上位 10 cm 内外で遺構を検出している。部分的にはIII層との間に暗褐色土層が認められた。

III層は、やや黒味が濃く小石、金雲母を少量含み、層厚は 20 cm 前後である。本層も遺物包含層であるが、G6区では遺物の出土が少量であるが、G7、H7区ではこの層から遺物が出土している。

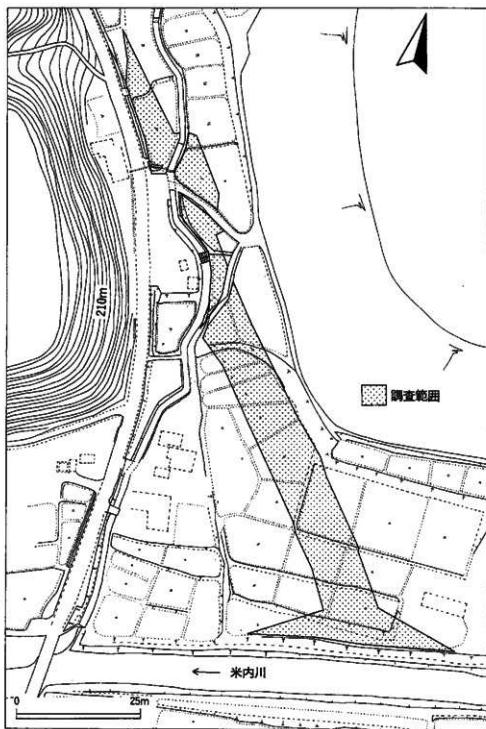
IV層以下は、漸移層的で褐色を基調とした小石を多量に含む砂層である。G7区での遺構検出は本層中に対応する面である。

VII層は、基盤層である。

- I a 黒褐色土 (10 YR 2/2)
- I b 暗褐色土 (7.5 YR 3/4)
- I c 黒褐色土 (7.5 YR 2/2)
- II 黒褐色土 (7.5 YR 2/1)
- III 黒色土 (7.5 YR 2/1)
- IV 黒色土 (10 YR 4/4)
- V 極暗褐色土 (7.5 YR 2/3)
- VI 暗褐色土 (7.5 YR 3/4)
- VII 明黄褐色土 (10 YR 6/6)



第6図 遺跡基本層位柱状図



第7図 周辺地形と調査範囲

## IV 調査方法と整理方法

### 1. 調査方法

#### a グリッドの設定

米内川流域は多くの遺跡が所在することで知られているが、盛岡市教育委員会が小面積の発掘調査を行っているほかは、これまで発掘調査はほとんど行われていなかった。今回調査をするにあたり、盛岡市教育委員会と協議し、将来予想される未調査区の発掘調査をカバーできる調査区の座標設定及びグリッドの設定を行うこととした。すなわち、調査区外の桜台団地内に存在する座標原点 ( $X=-28,500.000 \cdot Y=32,100.000$ ) を基準とし、50 m 間隔で西から東に向かい ABC・・・とアルファベットを、北から南に 123・・・と昇順する数字を当てて大グリッドを設定し、さらに各グリッドを 2 m 間隔で 25 等分して同様に西から東に A~Y、北から南に 1~25 と当てて、それらの組み合わせで小グリッドを表すこととした。ただし、実際に進めるうえで、E5 区の北西隅の座標を基準としてグリッドを組んでいる。

使用した座標値は  $X=-28,300.000 \quad Y=32,125.000$

#### b 粗掘と精査

粗掘は、地形的に数ヶ所、層序と土厚を観察するためのトレンチを入れた後に、遺跡の現況が水田であったこともあり、耕作土及び整地盛土の厚い範囲 (F5・G6 区) では表土除去を重機により行った。

遺構の検出は、F・G5 区と G・H7 区では表土下が地山面であったため容易であったが、G6 区では遺物包含層の残りが良好であることから基本層位毎に 5 cm 単位で掘り下げを行い、遺構の検出に努めている。

精査は、基本的には 2 分法による埋土の観察を行ったが、面的に広がりをもつ竪穴住居跡などは適宜 4 分法を用いた。

遺物の取り上げは、遺構外出土のものは小グリッド単位で層位を記入し、遺構内では遺構名と埋土層位を記入して取り上げている。なお、出土地点を計測した遺物に関しては遺構内外とも取り上げ番号も記入した。

#### c 遺構の記録

遺構の記録は主に実測図作成と写真撮影により、作図に表現できないことはフィールドカードに記録している。

図面は、遺構の平面形、焼土、炭化物範囲、遺物出土状況等を記録した平面図、および断面形、覆土の堆積状態を記録した断面図を作成し、適宜エレベーション図も作成した。作図は遺り方測量を準用し、精査途中で必要に応じて複数回行った。その縮尺は原則的に 1/20 とし、炉・



焼土及び土器埋設遺構については適宜 1/10 で作成した。また、遺構配置図と柱穴群に関しては、縮尺 1/50 で平板測量により作図した。

写真は、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階毎に撮影を行っている。フィルムは 35 mm のモノクロとリバーサルフィルム、さらにモノクロは 6×7 判のものも使用した。また、調査終了全景は航空写真撮影を行った。

## 2. 整理方法

図面の点検・遺物の洗浄・写真の整理は、原則的に現場で野外調査と並行して行うこととしたが、後半は煩雑な調査に追われ、一部は野外調査終了後に行った。

### a 遺構図面

遺構図面は、点検後に必要に応じて第 2 原因を作成した。挿図中の縮尺は竪穴住居跡は 1/60、土坑等は 1/40 を原則とし、任意の縮尺についてはスケールを付している。なお、使用したスクリーン・トーンの種類は凡例のとおりである。

### b 遺物

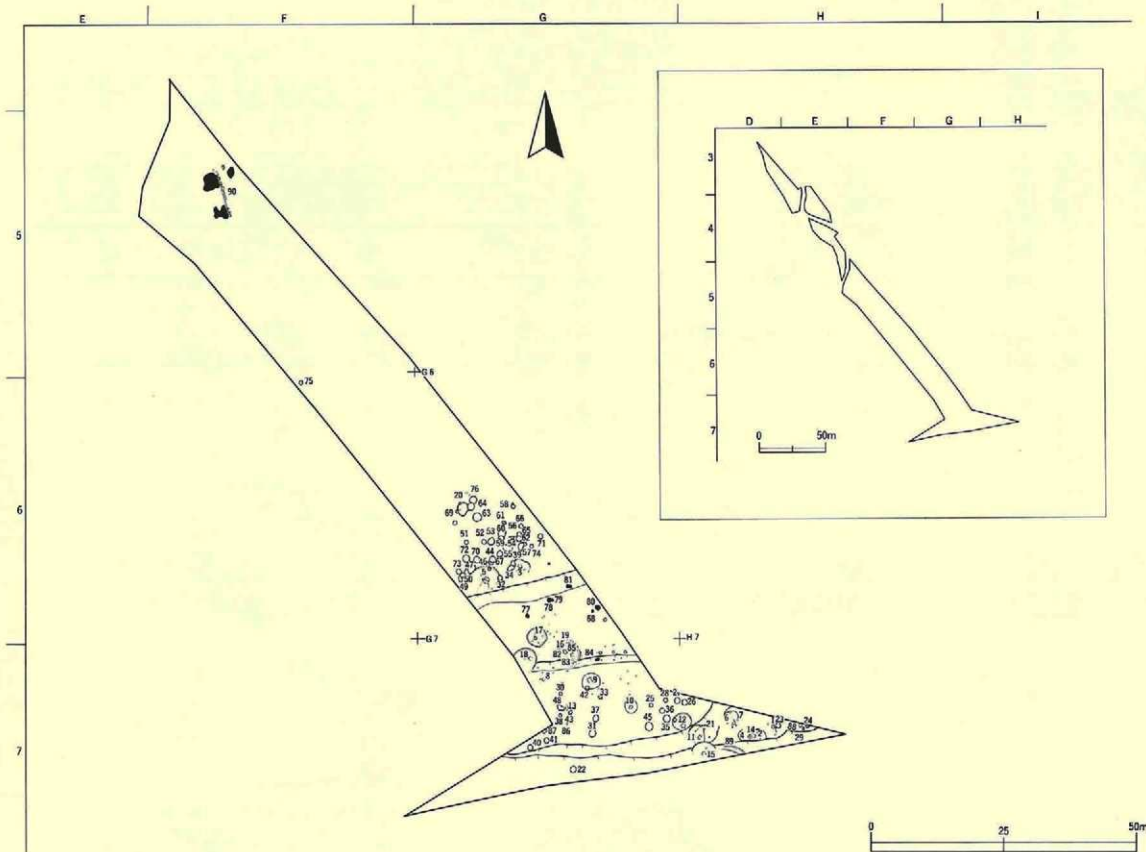
遺物は洗浄後、全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択したあと遺構内外に分けて登録し、注記・接合・復元を行った。

報告書に掲載した遺物は登録した中からさらに選択して実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。作業は、調査員が仕事の計画と指示・点検、作業員が実際の仕事というように分担している。

報告書に記載した遺物の選択基準は、土器は、完形品のすべてと接合復元で実測できたものの大部分、口縁部と体部資料は文様モチーフの明瞭なものを優先し、底部資料は網代痕等のあるものの一部である。同一遺構の破片資料は床面出土のものはできるだけ使用し、同じ文様の破片は重複記載のないようにできるだけ避けている。遺構外出土では類似資料のなかから選択分類している。土製品については出土したすべてを記載した。石器は、遺構内出土では不定形石器を除き、遺構外出土では器種ごとに数点と不定形石器の一部を選択して記載した。計測表には登録した石器をすべて記載している。挿図中の縮尺は、土器 1/3、土製品は 1/2、円盤状土製品 1/3、割片石器は 2/3、礫石器は 1/2 を原則としているが、任意の縮尺についてはスケールを付している。

### c 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格ごとにモノクロはネガアルバムにリバーサルフィルムはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し、台帳に記載した。遺物は、登録したものを石器、遺構内出土土器、遺構外出土土器の順に 35 mm フィルムで撮影し同様に整理を行った。なお、遺物の撮影には当センターの写真技師が当たった。



番号	遺構名	番号	遺構名
1	RA01 駅欠住区跡	46	RD25 土 杭
2	02 #	47	36 #
3	03 #	48	27 #
4	04 #	49	28 #
5	05 #	50	29 #
6	06 #	51	30 #
7	07 #	52	31 #
8	08 #	53	32 #
9	09 #	54	33 #
10	10 #	55	34 #
11	11 #	56	35 #
12	12 #	57	36 #
13	13 #	58	37 #
14	14 #	59	38 #
15	15 #	60	39 #
16	16 #	61	40 #
17	17 #	62	41 #
18	18 #	63	42 #
19	19 #	64	43 #
20	RF01 駅欠状遺構	65	44 #
21	02 #	66	45 #
22	RD01 土 杭	67	46 #
23	02 #	68	47 #
24	03 #	69	48 #
25	04 #	70	49 #
26	05 #	71	50 #
27	06 #	72	51 #
28	07 #	73	52 #
29	08 #	74	53 #
30	09 #	75	54 #
31	10 #	76	55 #
32	11 #	77	RZ01 純 土
33	12 #	78	02 #
34	13 #	79	03 #
35	14 #	80	04 #
36	15 #	81	05 #
37	16 #	82	06 #
38	17 #	83	07 #
39	18 #	84	08 #
40	19 #	85	09 #
41	20 #	86	10 礎石土留
42	21 #	87	RF01 弁 跡
43	22 #	88	02 #
44	23 #	89	RF01 弁 跡
45	24 #	90	RI01 配石遺構

第8図 内館遺跡遺構配置図

## V 検出された遺構と遺物

遺構は主に F5 区、G6、7 区、H7 区でまとまって検出された。北側調査にあたる D3、4 区、E4、5 区、F5 区の一部は旧沢跡にあたり、遺構は検出されなかった。

### 1. 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、種別によりややまとまった分布状況を示している。F5 区飛び地には配石遺構とその関連遺構、G6 区と G7、H7 区には住居跡群、土坑群、焼土遺構が位置する。住居跡の分布は北側に 10 棟、南側に 9 棟が位置している。土坑の分布は G6 区中央部では 33 基とかなり濃密に分布しているのに対し、F6 区に 1 基、G7、H7 区では北部に 18 基、東端に 3 基位置している。種別毎の検出数は以下の通りである。

竪穴住居跡	19 棟	(RA 01~19)	竪穴状遺構	2 棟	(RE 01、02)
炉跡	2 基	(RF 01、02)	土坑	55 基	(RD 01~55)
焼土遺構	9 基	(RZ 01~09)	土器埋設遺構	1 基	(RZ 10)
配石遺構	1 基	(RH 01)	溝跡	1 条	(RG 01)
柱穴群	4 カ所				

なお、竪穴住居跡の床面積は残存する壁から径を推定し計算を行なった推定値である。また、住居跡の遺構図版内の遺物を示す数字と図番号は一致している。

#### (1) 竪穴住居跡

RA 01 竪穴住居跡 (第 9 図、第 10 図 1~4、写図 9、21、52)

〈位置〉 H7 K 09 川側南斜面。

〈プラン〉 不明。南側は旧河道跡と思われ削平を受けている。

〈規模〉 不明 〈検出面〉 耕作土直下。Ⅶ層上面

〈重複関係〉 なし 〈埋土〉 削平のため不明

〈壁の状態〉 削平のため不明

〈床の状態〉 堅くしまった黄褐色の地山土を平坦にして床面としている。炉周辺及び東西はほぼ水平であるが南側に向って傾斜がみられる。炉を割った際、斜面下位まで炭化物を含む堅く締まった黒褐色土の範囲が見られたことから貼床が施されたと思われる。残存する貼床の厚さは 3~10 cm である。

〈炉の状態〉 52×48 cm の円形を呈する石囲炉。大ききの異なる 9 個の自然礫からなる。炉構築の掘り方は明瞭に見られ、床面を 45×60 cm の円形に掘り凹めたのちに据えられ、暗褐色土で

固定されている。炉の南側にも自然礫が直線的に並ぶが掘り方は明瞭に見られず、旧河川の攪乱も受けているため意識的に並べられたものとは断定できない。また、炉の埋土は木根による攪乱を受けているため焼土の残りは悪い。

〈柱穴〉2基確認された。P1の規模は31×27 cm。深さ45 cm。埋土は10 YR 2/3 極暗褐色、砂粒を少量含む。P2は掘りすぎのため上端の規模は不明である。深さは36 cm。底面に礫が残る。埋土は2層に分かれ、上層は7.5 YR 2/3 極暗褐色で粉炭、焼土粒がわずかに含み、下層は7.5 YR 3/4 暗褐色である。

〈遺物出土状況〉削平を受けているため出土遺物は4点のみである。いずれも床面から出土した。1~3はいずれも床面からの出土で第III群土器に属すると思われる。1は沈線と磨り消しによる文様から第III 2 B 群土器であり、大木9式の範疇に入るとと思われる。4はチャート質粘板岩の礫器で自然面を残すが、一面のみ両面から剝離を行なっている。出土遺物の時期からこの竪穴住居跡は中期末葉と思われる。

#### RA 02 竪穴住居跡（第9図、第10図6~15、写図2、10、21、51）

〈位置〉H7G09 川側南斜面

〈プラン〉不明 〈規模〉240×185 cm（残存） 〈床面積〉推定5.1 m<sup>2</sup>

〈検出面〉耕作土直下。VII層地山

〈重複関係〉RA 14より新しい。本住居跡の残存するプランとRA 04の炉の位置関係からRA 04より先行するものと思われる。

〈埋土〉2層に分かれる。1層10 YR 2/1 黒色土、粉炭、小石少量含む。2層10 YR 3/3 暗褐色、黄褐色土をブロック状に含む。

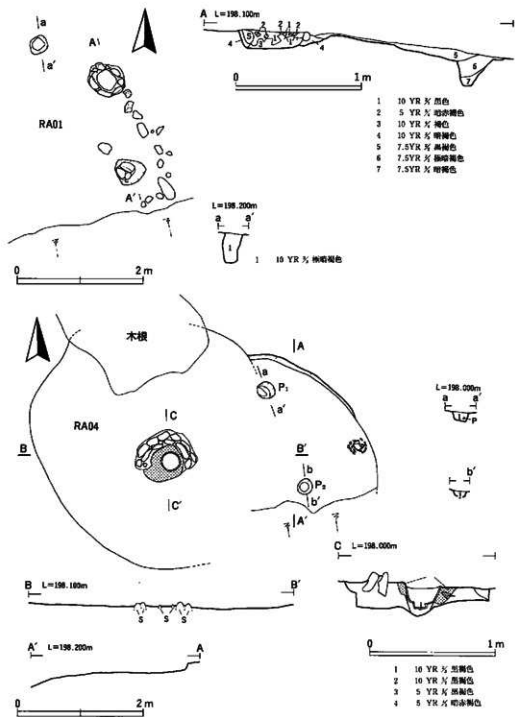
〈壁の状態〉地山の黄褐色土に掘り込まれている。壁高は3~10 cm。床面から垂直に立ち上がる。

〈床の状態〉黄褐色土の地山で堅く締まっている。旧河川による削平のため南に向かってなだらかに傾斜が見られる。

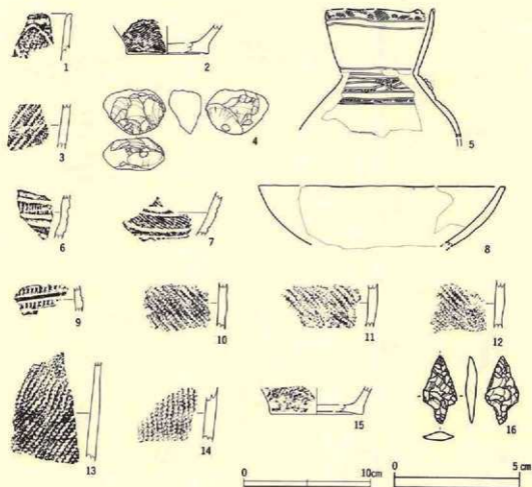
〈炉の状態〉不明

〈柱穴〉2基検出された。P1は規模27×27 cm、深さ18 cm。P2は規模23 cm、深さ23 cm。埋土はいずれも7.5 YR 2/2 黒褐色、粘性しまりなし。

〈遺物出土状況〉遺物は埋土及び床面から出土している。5~9、15は埋土から出土し、第IV群土器に入るものと思われる。16は埋土から出土した円基有茎石鎌である。10~14は東側の床面からまともな出土した土器でいずれも第III群土器に入るものと思われる。床面からの出土遺物とRA 04は中期末葉であり、RA 14も中期に属すると思われることから、本竪穴住居跡は中



第9图 RA01、02、04竖穴住居跡



国番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項	国番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項
10-1	RA01 床面	Ⅱ 2 B ②	20-1		10-10	RA02 床面	Ⅱ 3	20-13	
-3	〃	Ⅱ 3	-3		-11	〃	〃	-12	
-8	RA02 埋土	Ⅳ 3 A ②	-11		-12	〃	〃	-8	
-7	〃	〃	-5		-13	〃	〃	-10	
-9	〃	〃	-6		-14	〃	〃	-7	

国番号	出土地点・層位	法 量 (cm)			分類	写 真	備 考
		口 徑	底 径	高 さ			
10-2	RA01 床面	—	(6.4)	(12.3)	Ⅲ	20-2	
-5	RA02 埋土	8.6	—	(10.3)	Ⅳ 4	-4	
-8	〃	—	(19.5)	(5)	Ⅳ 4	-9	
-15	〃	—	(7.3)	(12.1)	Ⅲ	—	

国番号	出土位置・層位	品 種	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	写 真	備 考
10-4	RA01 床面	硬彫	3.7	4.9	2.5	48.20	チャート質粘板岩	図北01-1	
-10	RA02 埋土	石鏝(円形有蓋)	2.7	1.3	0.4	0.96	チャート	図北02-16	

第10図 RA01、02竪穴住居跡出土遺物

期に属すると思われる。

RA 03 竪穴住居跡 (第 11 図、写図 3、21)

〈位置〉 G 6 H 18 G 6 区南斜面

〈プラン〉 不明 〈規模〉 290×210 cm (残存) 〈床面積〉 推定 5.6 m<sup>2</sup>

〈検出面〉 G 6 区 7 層上面 〈重複関係〉 なし

〈埋土〉 2 層に分かれる。1 層目は小角礫、褐色土をブロック状に含む。北壁際にみられる 2 層目は、焼土粒や小角礫を含む。

〈壁の状態〉 壁高は、25~3 cm。北壁のみが残り、南側は斜面下位のため流失したものである。黄褐色の地山土に掘り込まれている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。

〈床の状態〉 南側になだらかに傾斜がみられる。黄褐色の地山土を水平にしたと思われ、南側は暗褐色土で貼床をした可能性がある。

〈炉の状態〉 石囲炉と思われる。木根により攪乱を受けているため石の並び方は整然としていない。炉の内側に焼土は見られなかった。規模は 66×48 cm である。

〈柱穴〉 2 本検出された。P 1 は、規模 26×25 cm、深さ 30 cm。埋土は 7.5 YR 2/2 黒褐色、小角礫を少量含む。P 2 は、規模 22×21 cm、深さ 20 cm。埋土は 7.5 YR 2/3 極暗褐色、黄褐色土をブロック状に含む。

〈遺物出土状況〉 埋土及び床面より遺物が出土している。1、2、4 は北壁側の床面より出土し、いずれも第 III 群土器に属する。3、5、6 は埋土から出土し、3、6 は第 IV 群土器に属し、5 は第 V 群土器に属すると思われる。1 は深鉢で口縁が平縁で、アルファベット「e」字の変形的な沈線と内側は充填縄文がみられることから大木 10 式に属すると思われる。2 は平縁の小型鉢で逆 U 字文に複節の地文を残す大木 9 式土器である。床面出土土器から竪穴住居跡の時期は中期後葉から末葉と思われる。

RA 04 竪穴住居跡 (第 9 図、第 12 図、写図 9、21、51、53)

〈位置〉 H 7 G 10 H 7 区川側南斜面

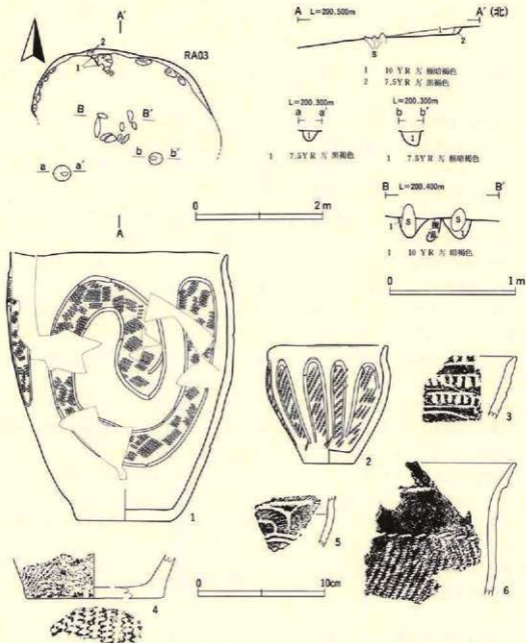
〈プラン〉 円形? 〈規模〉 床面と思われる範囲は 370×320 cm。 〈床面積〉 8.8 m<sup>2</sup>

〈検出面〉 耕作土直下。VII 層地山 〈重複関係〉 RA 02、RA 14 より新しい。

〈埋土〉 耕作土の攪乱により不明。

〈壁の状態〉 不明

〈床の状態〉 地山土を掘り込んでいるが炉の周囲 100×80 cm の楕円形の範囲で 10 YR 2/3 黒褐色の粉炭、焼土粒、砂粒、金雲母を含む堅く締まった部分が見られた。貼床が施されていた



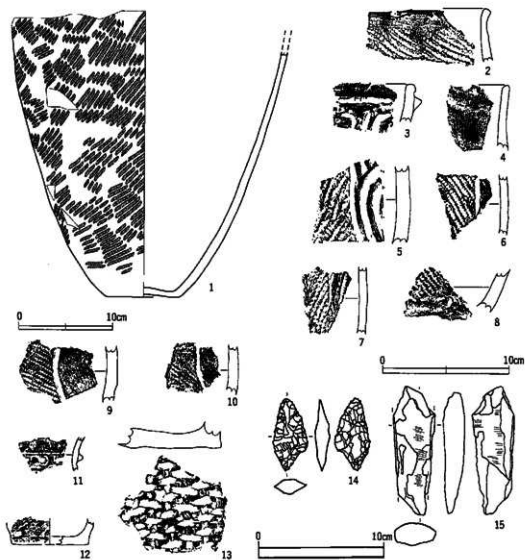
图番号	出土位置・部位	法 量 (cm)			種類	分期	写 回	備 考
		口 径	底 径	高 寸				
11-1	RA03 床面	17.2	7.4	21.4	深鉢	期 2 C	21-14	
-2	≠ 埋土下位	9.5 (最大径 9.9)	4	9.5	小煎鉢	期 2 B②	-16	
-4	≠ 床面	—	10.8	13.3	深鉢底面	期 3	-15	

图番号	出土位置・部位	分期	写 回	特記事項	图番号	出土位置・部位	分期	写 回	特記事項
11-3	RA03 埋土	IV 3 A④	21-17	なし	11-6	RA03 埋土	IV 5	21-19	埋土層の 厚さ 7.6cm 1.1層
-5	≠	V 群	-18	埋土層の 厚さ 2.5cm					

第11图 RA03竖穴住居跡





図番号	出土地点・層位	法 量 (cm)			分類	写 真	備 考		
		口 径	底 径	高 さ					
12-1	RA04 穴内埋戻し層	—	7.8	(30.5)	Ⅲ3	21-20			
図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項
12-2	RA04 埋土 Ⅲ3	21-21			12-8	RA04 埋土 Ⅲ2 B	21-25		
-3	# #	Ⅲ2 A	-22		-9	# #	Ⅲ2 C	-28	
-4	# #	Ⅶ	—		-10	# #	#	-29	
-5	# #	Ⅲ2 A	21-23		-11	# #	Ⅳ3 A ⊕	21-24	
-6	# #	Ⅲ2 B	-27		-12	# #	Ⅶ	—	
-7	# #	Ⅲ2 A	-26		-13	# #	#	21-30	埋戻し層
図番号	出土位置・層位	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	写 真	備 考
14	RA04 穴内 (埋戻)	石鏃(箭射)	2.9	1.4	0.8	1.50	綠閃岩	S1-304 H	
15	RA04 埋土	石鏃	(5.2)	2.7	0.9	(8.74)	軟板岩	S1-e-15	

第12図 RA04竅穴住居跡出土遺物

と思われる。

〈炉の状態〉石囲い土器埋設炉。主軸はN-34°-Wである。現状では南側に開く馬蹄形に礫が二重に巡りその中に土器を埋設している。南側は礫が残っていない。礫の掘方は明瞭に見られ、礫は黄褐色土をブロック状に含む暗褐色土で固定されていた。大ききの異なる自然礫を並べて固定するために楔のように自然礫の間に砕いた礫や円礫を用いていた。内側の礫には明瞭に火を受けた跡が見られ、礫に囲まれた土器の周りにも20~35cmの厚さで焼土が見られた。北側より南側の方が焼土が厚く見られた。土器は床面より23cm掘り込んでいた。規模は96×32cmである。

〈遺物出土状況〉1は炉に埋設された土器である。口縁部は欠損しているが、胴部~底部はほぼ完全な形である。1~3、5~10は第III群土器、11は第IV群土器、4、12は第VII群である。3、11、13は埋土、他は床面より出土している。床面出土の土器及び炉の形態から本住居跡の時期は中期後葉から末葉に位置付けられる。14は炉付近から出土した菱形の石鎌である。15は石剣と思われる。また、一縁辺のみ調整が見られる不定形石器が1点出土している。

#### RA 05 竪穴住居跡 (第13~15図、写図3、9、22、52)

〈位置〉G6E20 G6区南斜面

〈プラン〉不明 〈規模〉350×350cm (残存) 〈床面積〉推定15.8m<sup>2</sup>

〈検出面〉VII層地山 〈重複関係〉なし

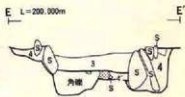
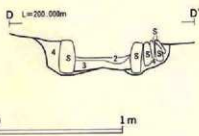
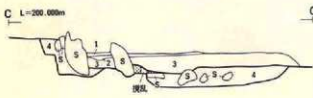
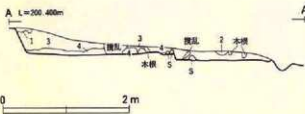
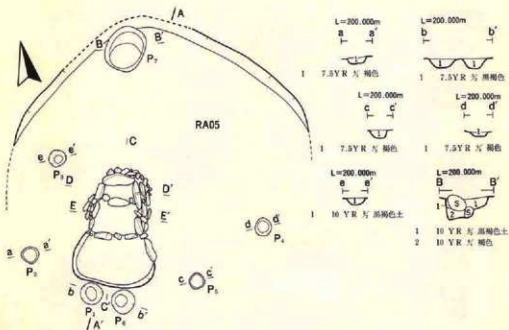
〈埋土〉4層に分かれる。木根による攪乱を受けている。いずれの層も黄褐色土をブロック状に含む。3層は粉炭、礫や土器片をわずかに含む。

〈壁の状態〉黄褐色土の地山に掘り込まれている。北側は木根の攪乱を受けたため不明である。南側は斜面のため流失したと思われる。壁は、床面よりなだらかに外反しながら立ち上がる。

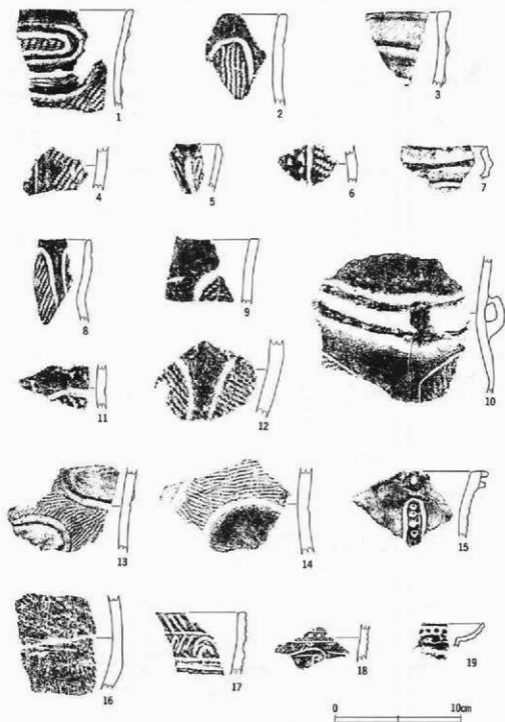
〈床の状態〉黄褐色土の地山で、南側に緩やかな傾斜が見られる。堅く締まっている。

〈炉の状態〉N-18°-Eの長軸192cm、短軸100cmの石組み複式炉である。石組み部は、二組見られる。石組み部は内側に大型の礫を埋め込み、まわりを細かい礫で二重、三重に巡らせている。大型の礫は30cm程度の大きさのものが多く、床面から25cm程度掘り込まれている。二組の石組み部のレベル差はほとんどなく、敷石は見られない。前庭部は、斜面に掛かるため残りが悪い。炉内は焼土がほとんどみられず、前庭部側の石組み部のみ石の掘り方が一部赤変していた。

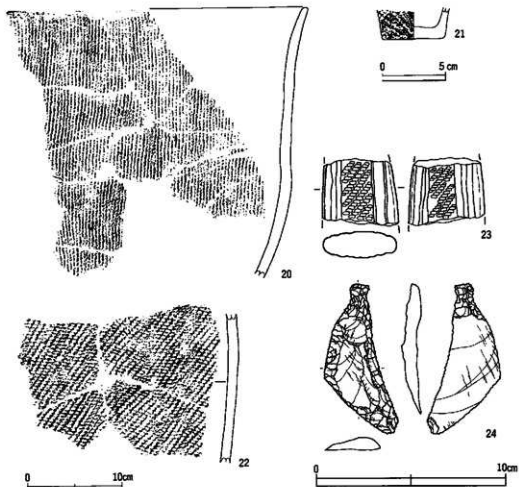
〈柱穴〉6基検出された。P1は規模35×35cm、深さ31cm。P2は規模31×28cm、深さ24cm。P3は規模29×26cm、深さ11cm。P4は規模29×26cm、深さ25cm。P5は25×23cm、深さ25cm。P6は規模38×36cm、深さ33cm。P1、2、5、6は主柱穴であると思われる。埋



第13图 RA05竖穴住居跡



第14圖 RA05整穴住居跡出土遺物（1）



図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
14-1	RA05 床面	III 2 C	22-31		14-12	RA05 床面	III 2 C	22-45	表面に穴 多数付
-2	# #	III 2 B ②	-32		-13	# # #	#	-43	
-3	# #	III 2 C	-33		-14	# # #	#	-44	
-4	# # #	III 2 B ②	-35		-15	# #	埴土	IV 1 A	-42
-5	# # #	#	-36		-16	# # #	#	IV 5	-46
-6	# # #	III 2	-37		-17	# # #	III 1 A	-50	
-7	# # #	#	-38		-18	# # #	III 2	-47	
-8	# # #	III 2 B ②	-39		-19	# # #	V	-48	
-9	# # #	#	-40		15-20	# # #	III 3	-53	
-10	# # #	III 2 C	-34		-22	# # #	#	-51	
-11	# # #	#	-41						

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
15-21	RA05 埴土	—	[4.8]	(2.3)	III 3	22-49	

図番号	出土位置・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	分類	写真	備 考
15-23	RA05 埴土	(3.4)	4.0	1.4	21	土器片・ 未詳	22-52	

図番号	出土位置・層位	類 名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	行 頁	写 真	備 考
15-24	RA05 埴土	石彫(彫物)	(8.0)	(3.9)	(1.1)	(15.67)	標高面物	22-54B-D	先欠

第15図 RA05竪穴住居跡出土遺物(2)

土はP1、6は7.5 YR 3/2 黒褐色。P2、5は7.5 YR 4/3 褐色。P3は10 YR 2/3 黒褐色。P4は7.5 YR 4/4 褐色。

〈その他〉P7は住居内ピットと思われる。規模は70×70 cm、深さ41 cm。出土遺物はなかった。  
〈遺物出土状況〉1~14、20、21、24は第III群土器に属し、床面出土である。15~18は第IV群土器、19は第V群土器に属し、いずれも埋土から出土している。1、11~14は沈線と充填縄文がみられることから大木10式に属すると思われる。1は両側に沈線を施すことにより隆線を作っている。12は壺で機状突起をもち表裏とも赤色顔料の付着がみられる。2、5、8は逆U字文がみられ、大木9式に属する。15は口縁部に中央に刺突のあるボタン状貼りつけと沈線の区画のなかに縦位の円形の刺突がみられる。刺突は列からはずれたものもある。23は表裏とも沈線の区画の中に地文がみられる土製品である。両側の先端部が欠損している。同様のものが大迫町観音堂遺跡で出土している。24は硬質泥岩の縦型の石匙である。炉の形態と床面出土の土器から本住居跡の時期は中期末葉と思われる。

#### RA 06 竪穴住居跡 (第16図、第17図1~7、写図4、9、23)

〈位置〉H7E8 H7区川側南斜面

〈プラン〉不明 〈規模〉340×300 cm 〈床面積〉推定9.6 m<sup>2</sup>

〈検出面〉耕作土直下。VII層黄褐色地山土 〈重複関係〉RA 09より新しい。

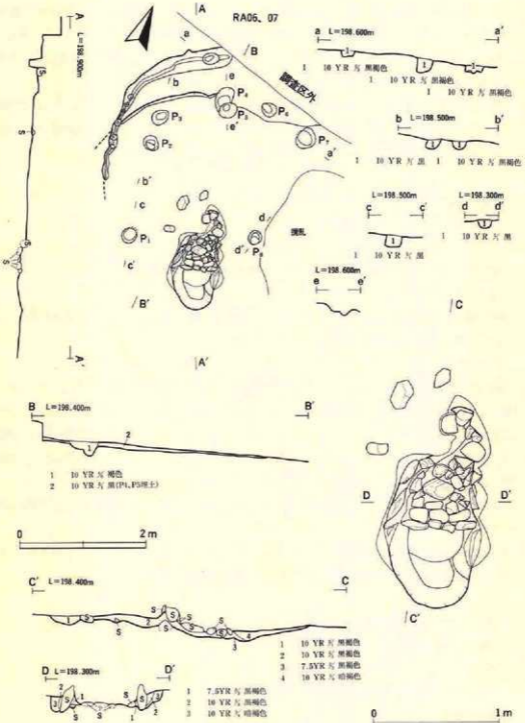
〈埋土〉耕作土の攪乱のために残りは悪い。埋土は10 YR 2/1 黒色土、粉炭をわずかに含む。

〈壁の状態〉不明である。黄褐色土に掘り込まれる。北壁のみわずかに残る。壁高3~8 cmで南側は、斜面下位のため流失したと思われる。

〈床の状態〉黄褐色の地山土、南側になだらかな傾斜が見られる。耕作土による攪乱、川跡による攪乱、木根による攪乱を受けている。

〈炉の状態〉石組複式炉。長軸は残存160 cm、短軸80 cm。N-20°-Wを主軸としている。二組の石組部と前庭部からなる。北側の石組部は耕作による攪乱のため一部の礫のみ残るが規模等は不明である。前庭部側の石組部には円礫による敷石が見られ、いずれの礫も火を受けた痕跡が残る。敷石以外の炉を構成する礫は角張ったものが多く、分割されてから埋められたと思われる。前庭部の「ハ」の字に開く部分の石は抜き取られているが、内側は10 YR 3/4 褐色土の粘土を2~7 cmの厚さで叩き締めている。礫の掘り方は明瞭に見られる。本住居跡の時期は炉の形態から中期末葉と思われる。

〈柱穴〉5基検出された。P1、P3、P5、P7、P8である。P1は規模25×25 cm、深さ41 cm。埋土は10 YR 2/1 黒色土で暗褐色土を塊状に含み、粉炭を少量含む。P2は25×24 cm、31 cm。埋土は10 YR 2/1 黒色土で暗褐色土をブロック状に含み粉炭、金雲母を少量含む。P5は25×



第16图 RA06、07竖穴住居跡

25 cm、深さ 20 cm。埋土は 10 YR 4/6 褐色土で黒褐色土をブロック状に含み、金雲母を少量含む。P7 は 35×30 cm、深さ 22 cm。埋土は 10 YR 2/2 黒褐色土で粉炭、金雲母をわずかに含む。P8 は 22×21 cm、深さ 40.5 cm。埋土は 10 YR 2/1 黒色土で褐色土を斑点状に含み、金雲母をわずかに含む。いずれも主柱穴であると思われる。

〈遺物出土状況〉埋土より土器が数点出土している。土器の時期はまちまちである。1 は沈線と磨り消しによる大木 9 式と思われる文様がみられる。2 は口縁部に連鎖状沈線がみられる第 IV 1 A 群の土器で後期初頭の土器である。5 は羽状縄文の第 II 1 A 群土器である。

#### RA 07 竪穴住居跡 (第 16 図、第 17 図 8、写図 4、23)

〈位置〉H7D7 H7区川側南斜面

〈プラン〉不明 〈規模〉195×34 cm (残存) 〈床面積〉7.2 m<sup>2</sup>

〈検出面〉耕作土直下。VII層黄褐色地山土 〈重複関係〉RA 06 に切られる。

〈埋土〉不明

〈壁の状態〉北西壁のみわずかに残る。壁高 1~6 cm。南側は削平を受けているため不明。

〈床の状態〉一部調査区外に伸びる。

〈炉の状態〉不明

〈柱穴〉3 基検出された。P2、P4、P6 は本住居跡のものと思われる。P2 は規模 23×22 cm、深さ 27 cm。埋土は 10 YR 2/2 黒褐色土、粉炭をわずかに含み暗褐色土をブロック状に含む。P4 は残存 40×36 cm、深さ 13.5 cm。埋土は 10 YR 2/1 褐色、粉炭、小石及び金雲母をわずかに含む。さらに P5 に切られている。P6 は規模 24×25 cm、深さ 33.5 cm。埋土は 10 YR 2/2 黒褐色土、暗褐色土をブロック状に含み、粉炭をわずかに含む。

〈周溝〉北壁側に検出された。幅 30~8 cm、深さ 8~1.5 cm。直径 10 cm 程度の副穴が部分的に見られる。

〈遺物出土状況〉埋土より沈線と磨り消しによる大木 9 式の土器が出土している。RA 06 との切り合い関係より、本竪穴住居跡の時期は中期末葉以前と思われる。

#### RA 08 竪穴住居跡 (第 17 図、写図 9、23)

〈位置〉G7K5 川側に向かう緩やかな南斜面

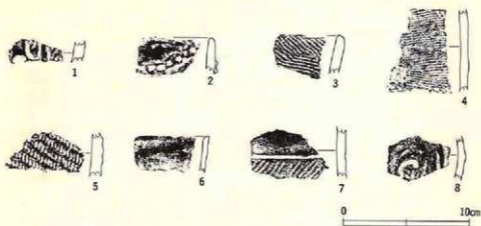
〈プラン〉不明 〈規模〉残存 250×350 cm。

〈検出面〉IV層褐色土。水田床土直下 〈重複関係〉なし

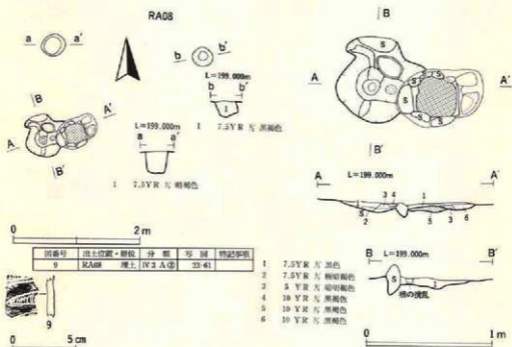
〈埋土〉不明

〈壁の状態〉削平のため不明。

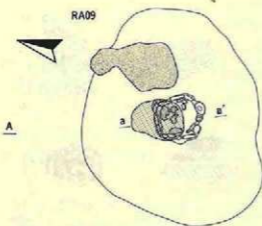




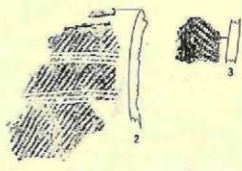
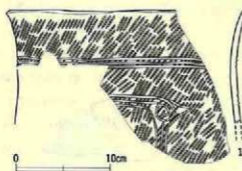
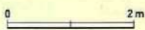
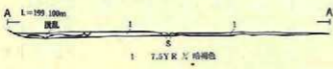
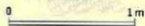
図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
17-1	RA06 埋土	III 2	—		17-5	RA06 埋土	III 1 A	23-28	
-2	# #	IV 1 A	23-24		-6	# #	VII	27	
-3	# #	VI	25		-7	# #	III 2	26	
-4	# #	#	28		-8	RA07 #	III 2 B	29	



第17図 RA06、07、08竪穴住居跡



- 1 10 YR 与 10 YR 同色
- 2 10 YR 与 10 YR 同色
- 3 10 YR 与 10 YR 同色
- 4 10 YR 与 10 YR 同色
- 5 5 YR 与 10 YR 同色
- 6 7.5YR 与 10 YR 同色
- 7 7.5YR 与 10 YR 同色
- 8 7.5YR 与 10 YR 同色
- 9 10 YR 与 10 YR 同色



図番号	出土地点・層位	造 型 (cm)			分類	写真	備 考
		口徑	底徑	高さ			
18-1	RA09 埋土	25.7	—	(15.7)	皿2 A	23-63	

図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
18-2	RA09 埋土	皿2 A	23-64		18-5	RA09 埋土	皿2 B	23-62	
-3	" "	皿2 B	67		-6	" "	皿2 B①	66	
-4	" "	皿2 A	65		-7	" "	皿2 B	—	

第18図 RA09竪穴住居跡

〈床の状態〉7.5 YR 2/1 黒色土が一部貼床として使用されていた可能性がある。

〈炉の状態〉石組複式炉の可能性があり2つの石組部と前底部で構成されていたと思われる。長軸は118 cmでN-20°-Eを主軸とする。短軸は40 cm。東側の石組部では、厚さ5 cm程の焼土が検出されたが、もう一つの石組み部がほとんど抜き取られており、焼土も見られなかった。石はいずれも円礫で床面と思われる高さより10~15 cm掘り込んでいた。前底部は、粘土を敷いたと思われる硬い部分が残る。炉内より地文のみの縄文土器の破片が3点出土している。炉の位置は住居跡の中央部よりやや西側の壁よりに位置し、床面より若干掘り込まれていたと思われる。

〈柱穴〉床の範囲が明確ではないため確定できないが、この炉に伴う可能性がある柱穴は2基である。P1は規模38×36 cm、深さ35.5 cm。埋土は7.5 YR 3/3 暗褐色土、暗褐色、金雲母、粉炭をわずかに含み、埋土から地文のみのⅢ群土器が2点出土している。P2は規模30×32 cm、深さ37 cm。埋土は7.5 YR 2/2 黒褐色、金雲母を含む。

〈遺物出土状況〉埋土よりⅣ群土器が1点出土している。

#### RA 09 竪穴住居跡（第18図、写図9、23）

〈位置〉G7O07 川側緩やかな南斜面

〈プラン〉不明（円形？） 〈規模〉356~293 cm（残存） 〈床面積〉7.3 m<sup>2</sup>

〈検出面〉Ⅳ層褐色土。水田床土直下 〈重複関係〉新旧関係は不明であるがプラン内にRD21が検出された。

〈埋土〉開田のため削平を受けている。

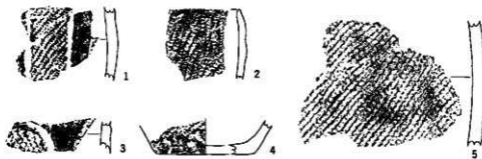
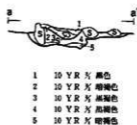
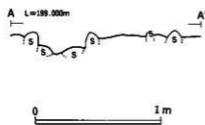
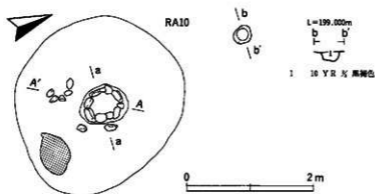
〈壁の状態〉不明

〈床の状態〉G7区Ⅳ層褐色土を床面にしている。一部7.5 YR 2/2 黒褐色で堅くしまりのある335×275 cmの範囲があり、金雲母及び粉炭を含む。この範囲は炉を中心として見られたことから貼床の可能性が考えられる。また炉の西側に135×70 cmの不整形で炭化物を床面に残す部分があり、炭化物の厚さは5~3 cm程度であった。

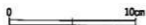
〈炉の状態〉貼り床のみられたほぼ中央に85×75 cmの楕円形で焼土が検出された。焼土の厚さは15 cmで、その下から北側の炉石が検出された。炉は86×81 cmの方形石囲炉。南側で一つの石の抜き取りが見られた。炉石は床面から13~23 cm掘り込んでおり、石の掘り方も明瞭である。炉の検出状況や床面の炭化物の様子から本住居跡は焼土住居と思われる。

〈柱穴〉検出されなかった。

〈遺物出土状況〉床面より第Ⅲ群土器が出土している。1、2、4は平行沈線や棘状文、曲線文などがみられ、大木8b式である。3、5、6、7は縦位に無文帯と地文がみられることから大木9式



図番号	出土位置・層位	分相	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分相	写真	特記事項
19-1	RA10 埋土	Ⅲ 2 B	23-68		4	RA10 埋土	Ⅲ 3	23-71	
-2	# #	Ⅲ 3	-69		5	# #	Ⅲ 3	-72	
-3	# #	Ⅲ 2 B	-70						



第19図 RA10竪穴住居跡

と思われる。炉の形態や出土遺物から本竪穴住居跡は中期後葉であると思われる。

#### RA 10 竪穴住居跡 (第 19 図、写図 4、23)

〈位置〉 G 7 S 07 川側南斜面

〈プラン〉 不明 〈規模〉 400×261 cm (残存) 〈床面積〉 5.1 m<sup>2</sup>

〈検出面〉 IV層暗褐色土。水田床土直下 〈重複関係〉 なし

〈埋土〉 不明

〈壁の状態〉 不明

〈床の状態〉 G 7 区IV層褐色土の砂質土。1~2 cm 程度の焼土や粉炭が部分的に見られた。263×252 cm の円形の範囲で暗褐色の貼床が見られた。炉の南側から 70×47 cm の方形の範囲で焼土が検出された。厚さは 3 cm 程度であったが現地性のものであると思われる。炭化物も混入することから焼失住居の可能性はある。

〈炉の状態〉 楕円形の石囲炉。規模は 66×56 cm。全て円礫で床面から 10 cm 程度掘り下げている。石の掘り方は明瞭に見られた。炉内に焼土は見られない。炉の南東に炉と同じように石組に見える部分があった。しかし、石の内側からは焼土等は検出されなかった。

〈柱穴〉 炉の検出されたほぼ同じレベルから、埋土下位に焼土の塊が入る柱穴が 1 基検出された。規模は 30×28 cm、深さ 32 cm である。

〈遺物出土状況〉 1、2、4 は埋土、3 は床面、5 は炉内より出土した。いずれも第Ⅲ群土器である。1 は、RL の単節縦回転の地文で沈線により磨り消し面との区画がみられる。3 は複節の地文と沈線による磨り消し面との区画がみられる。出土遺物と炉の形態から本竪穴住居跡の時期は中期後葉と思われる。

#### RA 11 竪穴住居跡 (第 20 図、写図 5、23、51)

〈位置〉 H 7 A 09 川側区南斜面

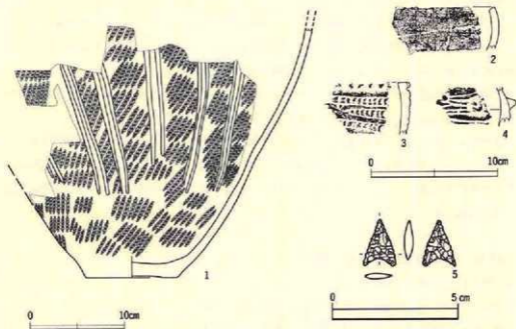
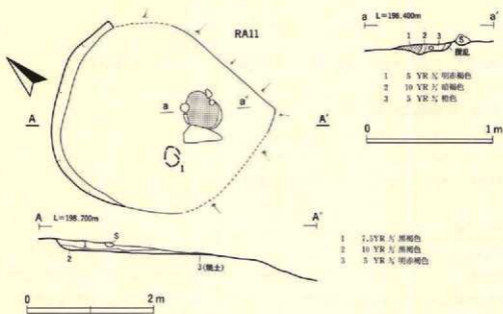
〈プラン〉 円形? 〈規模〉 340×298 cm (残存) 〈床面積〉 7.5 m<sup>2</sup>

〈検出面〉 IV層暗褐色。開田の際の盛土の直下 〈重複関係〉 RE 02 より新しい。

〈埋土〉 3層に分かれる。1層目は 7.5 YR 2/2 黒褐色で暗褐色土をブロック状に含金雲母、粉炭をわずかに含む。2層目は 10 YR 2/2 黒褐色で黄褐色土をブロック状に含む。炉のレベルと比較して差がないことから貼床の可能性がある。3層目は炉の埋土と思われる。

〈壁の状態〉 壁高 18~4 cm。北壁から西壁の斜面上位の部分のみ残る。G 7 区V層の礫層に挟まれている。壁は床面よりなだらかに外反しながら立ち上がる。

〈床の状態〉 南の斜面下位に向って傾斜する。黒褐色土で堅く締まっている。貼床の下にはす



図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分期	写 真	備 考		
		口 径	底 径	高 径					
70-1	RA11 床面	—	9.6	126.60	期2 群	23-25			
図番号	出土位置・層位	分期	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分期	写真	特記事項
70-2	RA11 埋土	VI	23-74		70-4	RA11 埋土	IV 3 A ③	23-26	
-3	# #	IV 3 A ④	-75						
図番号	出土位置・層位	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	写真	備 考
70-5	RA11 埋土	石鉢(凹形)	1.9	1.3	0.3	0.44	珉質灰岩	出 3 A 5	

第20図 RA11竪穴住居跡

ぐ礫層が見られる。

〈炉の状態〉石囲炉。4つの円礫と長さ60cmの大きな礫を使用している。円礫は、一部のみ残っており、多くは抜き取られたと思われる。炉の一部は攪乱を受けているが、炉内の焼土は最大厚7cmであった。規模は82×64cmである。

〈柱穴〉なし

〈遺物出土状況〉床面より地文のみの縄文土器数点出土した。これらは第III群土器と思われる。1は深鉢で口縁部が欠損しており、複節による地文と大木8b式と思われる沈線文がみられた。床面にまとまった形で出土したが、掘り込みはみられなかった。埋土より第IV群土器と思われる2、3、4が出土した。3は平縁の口縁部で瘤状小突起を密に一列に貼りつけ、沈線による区画の内側に刻み目を充填している。4は貼り瘤と沈線による連続弧状文がみられる。埋土より凹蓋無茎石鍬、黒曜石の未製品が出土している。床面に石器の剥片（チップ？）が北壁際に散らばってみられた。床面の遺物から本住居跡は中期後葉と思われる。

#### RA 12 竪穴住居跡（第21～24図、写図5、24、25、51～53）

〈位置〉G7Y09。川側南斜面。

〈プラン〉楕円形 〈規模〉380×340cm 〈床面積〉10.2m<sup>2</sup>

〈検出面〉IV層褐色土。開田の際の盛土直下。〈重複関係〉なし

〈埋土〉5層に分かれる。1層目は10YR 3/2黒褐色土で住居の中央部に部分的に見られ、小石及び粉炭をわずかに含む。2層目は7.5YR 2/3極暗褐色土で北壁際から西壁側にかけて見られた。金雲母及び粉炭を含む。3層目は10YR 2/1の黒色土で粉炭をわずかに含み、住居の中央部の1層の下面に見られた。4層目は10YR 2/3黒褐色土で南壁側の斜面下位に見られた。小石及び金雲母を含む。5層目は7.5YR 2/2黒褐色で黄褐色土を粒状に含み、北壁側の2層の下面にみられた。この層には遺物が多く含まれていた。

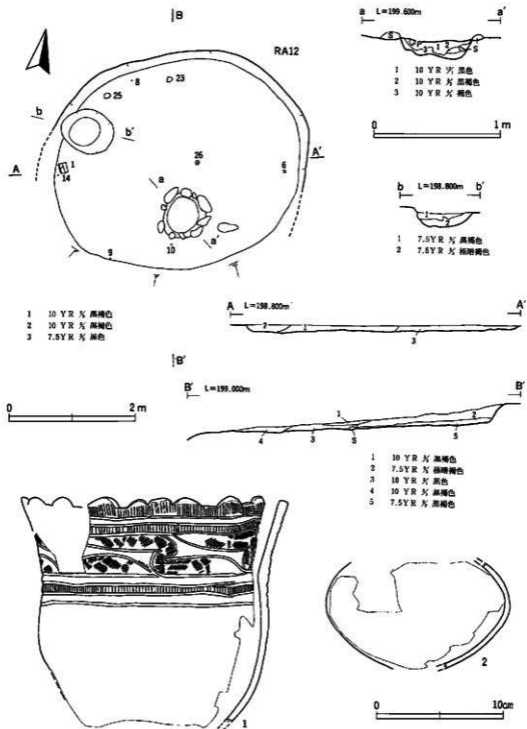
〈壁の状態〉IV層下位の砂礫層に掘り込まれている。南壁は斜面下位にあたり流失しており、壁は北側半分のみ残る。壁高は36～1cmである。壁は床面より緩やかに外反しながら立ち上がる。

〈床の状態〉礫層を水平にしている。堅いが、凹凸がわずかに見られる。

〈炉の状態〉石囲炉。円礫を並べている。炉の内側にはわずかな焼土粒が見られたが、層位として確認できなかった。床面より礫の深い掘込みは見られない。規模は88×86cmのやや楕円形である。床面とのレベル差はあまりなかったと思われる。

〈柱穴〉不明

〈遺物出土状況〉埋土下位及び床面より多くの遺物が出土した。1は埋土下位から西壁際の床



第21图 RA12竖穴住居跡



面より出土した鉢で口縁には山形と台状の突起がみられ、体部には右下がりの入組帯状文が施され区画帯内には刻み目が充填されている。沈線が一条通りその下は無文研磨施されている。床面から出土した遺物は4、6、8～10、13～15、18、23、25、26、29、32、33である。埋土から出土した遺物は2、3、5、7、12、17、19～22、24、27、28、30、31、34である。2は胴部に最大径をもつ壺であり、内外面とも無文研磨されている。3、5は地文を残し、沈線による文様がみられることから後期初頭の土器と思われる。4、9～14、16～19、21は後期後葉に位置付けられる土器と思われ、貼瘤、入組帯状文、刻目文がみられる。11、16は炉内より出土した土器である。16、17は同一個体と思われる。19は内面、21は外面に炭化物付着がみられた。6～8、15、20、22～24は粗製土器であり、いずれも後期に属するものと思われる。23は底面に笹葉痕がみられる。25は完形の蓋で沈線と刺突による文様であり、つまみを有する。26はほぼ完形の小型壺であり、口縁は内湾気味に立ち上がる。口縁部から底面まで沈線による文様がみられる。27は耳栓であり、赤色顔料の付着がみられる。28は土坑の埋土下位より出土した土製の装飾品である。29、30とも円基有蓋石鉢である。31、32とも縦型石匙である。33は一部自然面を残し、刃部を両面から調整している礫器である。埋土下位や床面から不定形石器やフレーク等が多く出土した。未製品のものが多く、チップも床面からまとまって出土していることから石器製作を行っていた可能性が考えられる。床面の出土遺物から後期中葉の住居跡と思われる。

〈その他〉床面確定とともに土坑を検出した。規模は72×70cmの楕円形で深さ30cmで埋土下位の北壁側より土製の装飾品の破片が出土した。本住居跡に伴うか、先行するものかは不明である。埋土は2層に分かれ、上層は7、5 YR 2/2 黒褐色土で粉炭、小石、暗褐色土をブロック状に含む。下層は7、5 YR 2/3 極暗褐色土で粉炭、小石を含む。人為的な堆積状況と思われる。

#### RA 13 竪穴住居跡 (第25図、写図9、25)

〈位置〉G7M07 川側緩やかな南斜面

〈プラン〉不明 〈規模〉不明 〈床面積〉不明

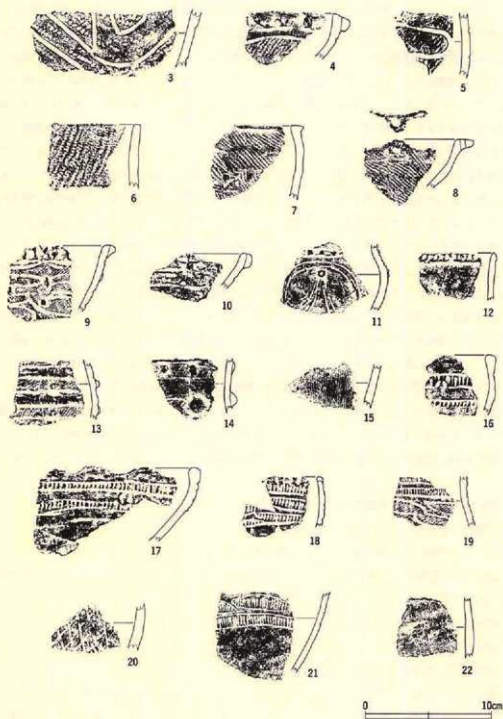
〈検出面〉IV層褐色土。水田床土直下 〈重複関係〉新旧関係は不明であるがプラン内にRD22、RD27が位置する。

〈埋土〉不明

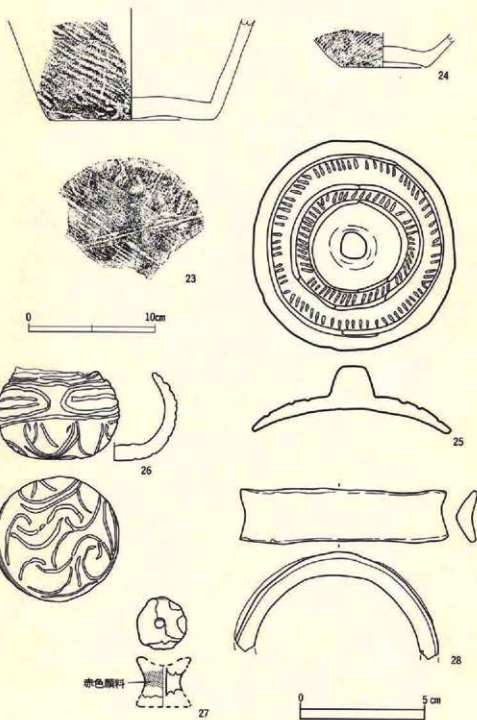
〈壁の状態〉不明

〈床の状態〉褐色土の砂質土と思われる。

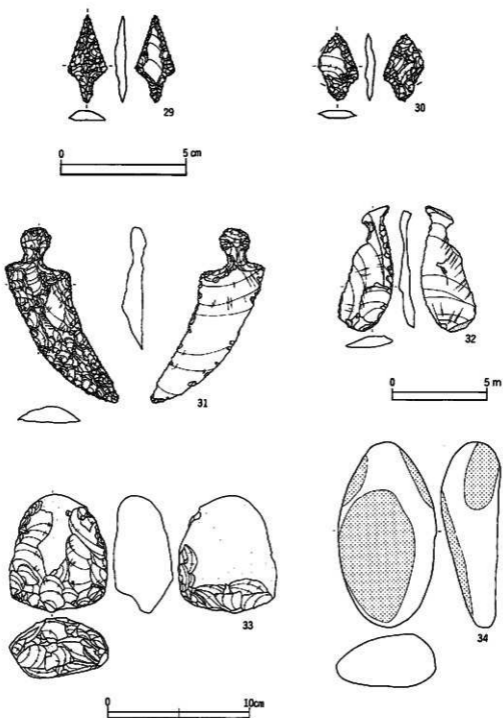
〈炉の状態〉石組部は攪乱を受けているためはっきりしないが石組部と前庭部を有する複式炉であると思われる。石組部は二つに分かれると思われ、段差が見られた。炉石はほとんど抜き取られていたが、石組部に残っていた炉石が接合できたことから、同一の礫を打ち欠いて調整



第22圖 RA12豎穴住居跡出土遺物(1)



第23圖 RA12竪穴住居跡出土遺物(2)



第24图 RA12竖穴住居跡出土遺物(3)

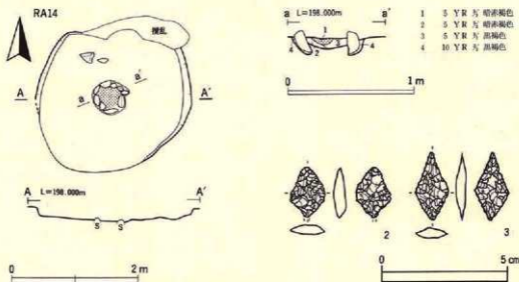
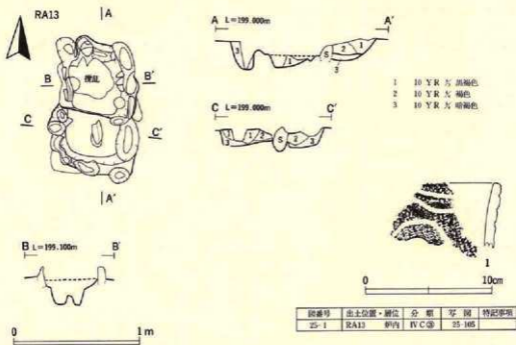
第2表 RA12 竪穴住居跡出土遺物観察表

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			類 別	分 類	写 図	特 記 事 項
		口 径	底 径	高 さ				
21-1	床面	[19.3]	—	(18.2)	鉢	IV 3 A ㊶	24-77	

番号	出土位置・層位	分 類	写 図	特記事項	番号	出土位置・層位	分 類	写 図	特記事項
21-2	埋土	IV 3 A	24-78		22-16	炉内	IV 3 A ㊶	24-92	
22-3	埋土	IV C ㊸	-79		-17	埋土	〃	-93	
-4	床面	IV 3 A	-80		-18	床面	〃	-94	
-5	埋土	IV 1 C ㊸	-81		-19	埋土	〃	-95	内面に炭化物付着
-6	床面	IV 5	-82		-20	埋土	IV 5	-96	
-7	埋土	IV 5	-83		-21		IV 3 A ㊶	-97	外面に炭化物付着
-8	床面	IV 3 A ㊶	-84		-22	埋土	IV 5	-98	
-9	床面	IV 3 A ㊶	-85		-23	床面	IV 5	-100	笹葉痕
-10	床面	IV 3 A ㊶	-86		-24	埋土	IV 5	-99	
-11	炉内	〃	-87		-25	床面	IV 3 A	25-102	
-12	埋土	〃	-89		-26	床面	IV	-101	
-13	床面	〃	-88						
-14	床面	〃	-90						
-15	床面	IV 5	-91						

No	出土位置・層位	種 類	最大計測値 (cm)			重量 (g)	付着物	残存状態	写 図	備 考
			外 径	内 径	高 さ					
23-27	埋土	耳栓	2.1	1.45	1.6	5	赤色顔料	欠損	25-104	
23-28	包囲内埋 埋土下位	裝飾品?	8.2	6.6	2.1	18			-103	

番号	出土位置・層位	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	写 図	備 考
24-29	床面	石鏃(円錐有茎)	3.5	1.6	0.5	1.35	珪質泥岩	51-RA12-29	
-30	埋土	石鏃(円錐有茎)	2.7	(1.6)	0.4	(1.50)	チャート	〃 -30	茎・茎欠損
-31	〃	石鏃(線型)	9.3	6.0	1.3	31.91	珪質泥岩	S2-〃 -31	
-32	床面	石鏃(線型)	6.7	2.9	0.9	9.02	珪質泥岩	〃 -32	
-33	〃	礫器	8.3	6.9	4.2	271.56	硬質泥岩	〃 -33	磨有
-34	埋土	磨石	13.1	7.0	4.2	500.00	凝灰岩	53-〃 -34	



図番号	出土位置・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	写真	備考
25-2	RA14 埋土下位	石鏃(片基有茎)	12.0	1.4	0.5	(1.01)	均質泥岩	図集RA14-2	茎欠
-3	" "	石鏃(菱形)	2.7	1.3	0.4	1.12	均質泥岩	" -2	

第25図 RA13、14竪穴住居跡

を加えずに埋め込んで使用していたと思われる。主軸はN-5°-Eであり、規模は120×72 cmである。石組部の敷石はなかったと思われる。南側前庭部の底面には粘土を敷いており、中央部には南北の縦位に礫を据えていた。石の掘り方はあまり広くなく、石の大きさとあまり差異がなかった。北側石組部に残る北側の粘土の塊は石を固定するように貼ってあった。精査時は石組部と前庭部の切り合い関係は確認できなかったが二つの石囲炉の切り合いである可能性も考えられる。炉の形態から中期末葉の住居跡と思われる。

〈遺物出土状況〉遺物は埋土より第IV群土器が1点出土している。RLの縦回転の地文の上から沈線による文様を施文している。後期初頭の土器と思われる。

#### RA 14 竪穴住居跡 (第25図、写図6、51)

〈位置〉G7F09 川側南斜面。

〈プラン〉円形 〈規模〉225×213 cm 〈床面積〉4.2 m<sup>2</sup>

〈検出面〉VII層黄褐色土。耕作土直下。〈重複関係〉RA 02、RA 06より古い。

〈埋土〉1層で10 YR 3/2 黒褐色 粉炭、金雲母をわずかに含み、黄褐色土をブロック状に含む。

〈壁の状態〉黄褐色土の地山。北壁は、根の攪乱により一部不明。南壁は、斜面下位にあたり削られている。壁高19~5 cm。床面よりほぼ垂直に立ち上がる。

〈床の状態〉黄褐色土の地山。ほぼ水平であるが、南側はわずかに傾斜する。

〈炉の状態〉円形の石囲炉。円礫を床面より13 cm程度掘り下げて埋め込んでいる。炉の規模は54×52である。炉石の掘り方は明瞭に見られる。炉内の焼土は4 cm程度残っており、その下層も赤変が見られた。炉石の赤変は見られなかった。

〈柱穴〉なし

〈遺物出土状況〉埋土下位より円形有茎石鉢、菱形石鉢が出土している。2は有茎石鉢で茎部と先端部に欠損がみられる。RA 02、RA 06との切り合い関係から中期後葉の住居跡と思われる。

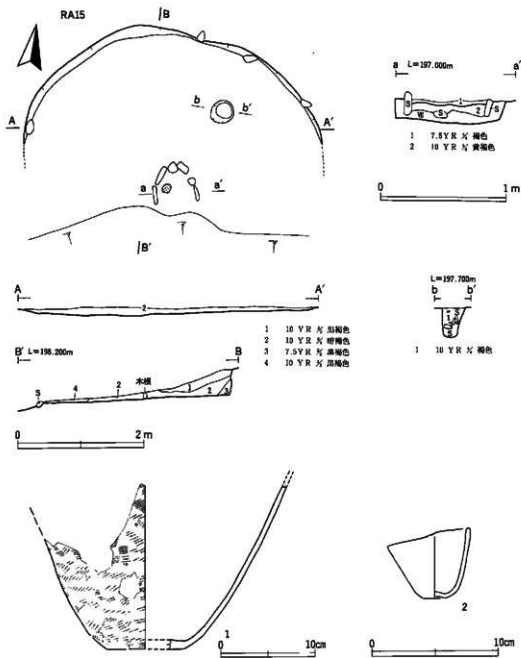
#### RA 15 竪穴住居跡 (第26~28図、写図6、9、25、51~53)

〈位置〉H7A11 川側南斜面

〈プラン〉円形? 〈規模〉453×310 (残存) 〈床面積〉12.2 m<sup>2</sup>

〈検出面〉VII層黄褐色土。水田床土直下 〈重複関係〉なし。RA 11の斜面下位にあたる。

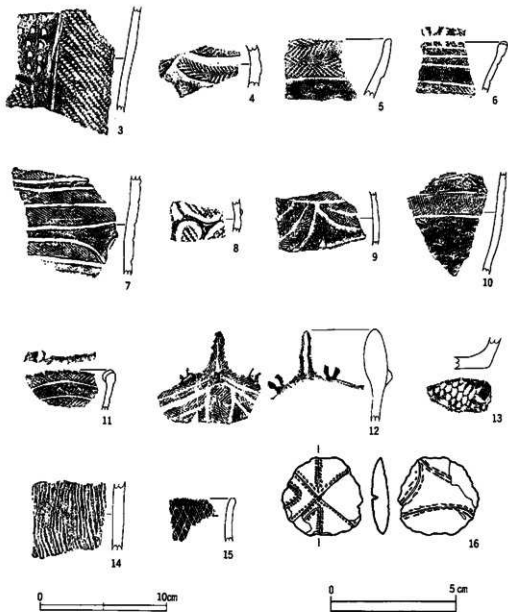
〈埋土〉4層に分かれる。1層目は10 YR 2/2 黒褐色土で粉炭、小石、礫を含み北壁側に見られる。2層目は10 YR 3/4 暗褐色土で粉炭、小石を少量含み、褐色土をブロック状に含む。1層目の下層にあたり北壁側から中央部にかけて広い範囲で見られた。3層目は7.5 YR 2/2 黒褐色土



层位号	出土地点·层位	坑 量 (cm)			分 类	写 图	附 号	备 考
		口 径	坑 径	高 度				
25 1	RA15 埋土下位	—	[K.2]	(17.2)	IVS	25-106		
-2	# 深洞	6.8	1.9	9.5	IVS	-167		

第26图 RA15竖穴住居跡



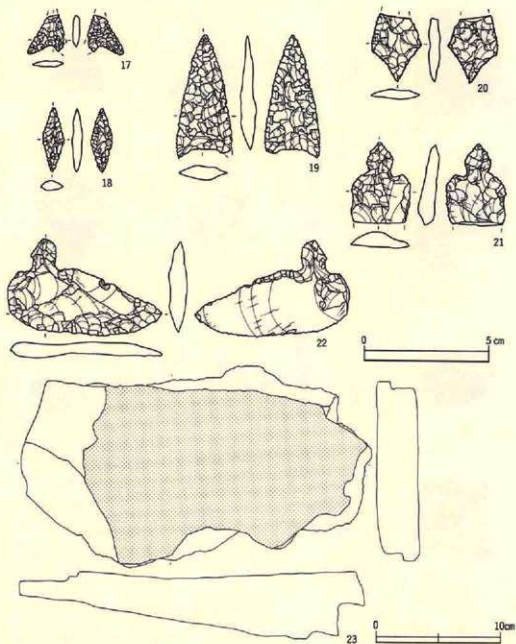


図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
27-3	RA15 埋土	Ⅱ 2	25 109		27-10	RA15 埋土	Ⅳ 3 A ㊤	25-113	
-4	#	#	IV 3 A ㊤	-108	-11	#	#	IV 3 A ㊤	-116
-5	#	#	#	-110	-12	#	#	#	-120
-6	#	#	#	-111	-13	#	Ⅲ	#	-118
-7	#	#	#	+112	-14	#	Ⅳ 5	#	-115
-8	#	#	Ⅱ 2 A	-117	-15	#	#	#	
-9	#	#	IV 3 A ㊤	-114					

図番号	出土地点・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形状(#)	分類	写真	備 考
27-16	RA15 埋土	3.2	3.2	0.7	4 尖形	25 119		

第27図 RA15竪穴住居跡出土遺物(1)



図番号	出土位置・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	写図	備考
18-17	RA15 埋土	石鏃(片形)	(1.5)	(1.4)	0.2	(0.42)	チャート	自然石片	先欠
-18	"	"	2.5	0.8	0.4	0.67	粘板岩	"	"
-19	"	"	5.0	2.2	0.7	(4.87)	粘板岩	"	先欠
-20	"	"	(2.7)	2.6	0.4	(1.89)	粘板岩	"	先欠
-21	"	石鏃(片形)	(3.3)	2.4	0.7	(4.33)	チャート質粘板岩	自然石片	先欠
-22	"	石鏃(片形)	3.9	6.2	0.7	14.10	粘板岩	"	"
-23	"	床面	(13.2)	(28.3)	3.4	(2910.0)	凝灰岩	自然石片	"

第28図 RA15竪穴住居跡出土遺物(2)

で粉炭、小石を少量含み北壁側に部分的に見られた。4層目は10 YR 3/2 黒褐色土で粉炭、礫を少量含み斜面下位の南側に見られた。

〈壁の状態〉斜面下位にあたり、南壁は川による削平を受け不明である。北壁は壁高38~1.5 cmである。VII層黄褐色土の地山に掘り込まれている。壁は床面より直立気味に立ち上がる。

〈床の状態〉地山土を水平にしている。凹凸はほとんど見られない。

〈炉の状態〉石囲炉である。規模は72×64 cm(残存)で南側の炉石は見られなかった。炉石の掘り方は明瞭にみられ、床面から25 cm程度掘り下げていた。炉内は1層目が炉の埋土で粉炭や金雲母をわずかに含み、焼土は1 cm程度の単位で帯状に見られた。2層目は炉石を固定するために使われた土である。

〈柱穴〉1基検出された。規模は37×35 cm、深さ39 cm。埋土は10 YR 4/4 褐色土で粉炭、小石、黄褐色土をブロック状に含み、無節の地文のみの土器片が1点出土している。

〈遺物出土状況〉住居跡の埋土2層目からの遺物が多い。1は北壁側の埋土下位から出土した。体部から底部までの無節の地文のみの深鉢である。2は床面から出土した完形の小型鉢で表面は無文研磨されている。3~22は埋土から出土している。3、8は第III群土器である。4~7、9~12は第IV群土器で沈線による区画の内側に刻み目の充填や沈線による弧線連続文などがみられた。6、11は平縁の口縁部であり、6は口唇部、11は裏面に縦長に刻み目を持つ瘤の貼付がみられた。12は口縁部に突起や縦長に刻み目を持つ瘤と突起の下部に瘤状突起の貼付がみられた。13の底面には網代痕がみられる。14、15はいずれも後期の粗製土器と思われる。16は周縁に欠損がみられ、表裏とも沈線の両側に刺突による文様体をもつ土製品である。表面と思われる側のみ中央に穴みられるが裏面まで貫通していない。用途については不明である。17~20は石鏝で凹基のものと菱形のものがある。17は基部と刃部、19は基部、20は刃部に欠損がみられる。21は刃部に欠損がみられる縦型の石匙である。22は横型の石匙である。23は床面から出土した石皿で、磨り面は一面のみで脚があるかどうか不明である。

#### RA 16 竪穴住居跡(第29~36図、写図7、10、26~30、51、53)

〈位置〉G7M 01 G7区なだらかな南斜面

〈プラン〉不明 〈規模〉410×392 cm(残存) 〈床面積〉12.3 m<sup>2</sup>

〈検出面〉IV層暗褐色。耕作土直下〈重複関係〉RA 19より新しい。RZ 06、07、09より先行する。

〈埋土〉大きく4層に分かれる。1層目は10 YR 2/1 黒色土で粉炭、小石、金雲母をわずかに含む。2層目は10 YR 2/2 黒褐色土で粉炭、焼土粒、小石、金雲母をわずかに含み、住居跡の埋土の多くを占める。3層目は10 YR 2/3 黒褐色土で粉炭、焼土粒、小石、金雲母をわずかに含み壁側に見られた。4層目は7.5 YR 2/2 黒褐色土で金雲母、暗褐色土のブロック、焼土粒をわずか

に含む。東、西壁際にみられた。

〈壁の状態〉暗褐色土。掘りすぎのため壁は大部分不明。壁高 60～11 cm。南側は試掘トレンチによる削平を受けている。壁は床面よりなだらかに外反しながら立ち上がる。

〈床の状態〉暗褐色土。堅く締まってほぼ水平である。炭化物が炉の付近で広がって見られた。炉を覆うように多くの炭化物が見られたため焼失住居と思われる。

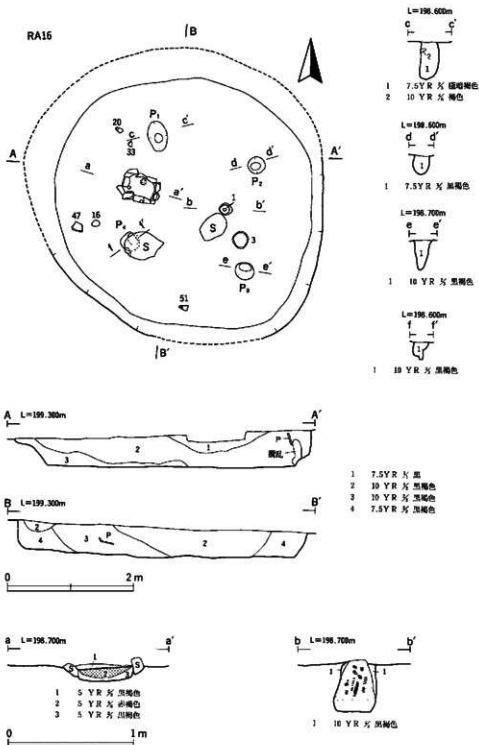
〈炉の状態〉不整形の石囲炉。主軸は N-75°-W で住居の中央よりやや西側に位置する炉は同一の礫を分割して炉石としている。焼土は、中央部が最も厚く 7 cm であった。石の掘り方は明瞭に見られない。

〈柱穴〉4 基検出された。P1 は 50×31 cm、深さ 73.5 cm。埋土は 7.5 YR 2/3 暗褐色で褐色土をブロック状に、金雲母をわずかに含む。P2 は規模 28×27 cm、深さ 45 cm。埋土は 7.5 YR 2/2 黒褐色土で金雲母をわずかに含む。P3 は 28×28 cm、深さ 43.6 cm。埋土は 10 YR 2/3 黒褐色土で粉炭、金雲母をわずかに含む。P4 は規模 30×28 cm、深さ 56 cm。埋土は 10 YR 2/3 黒褐色土で褐色土をブロック状に含む、金雲母をわずかに含む。P3 以外は貼床の下から検出された柱穴である。いずれも主柱穴であると思われる。

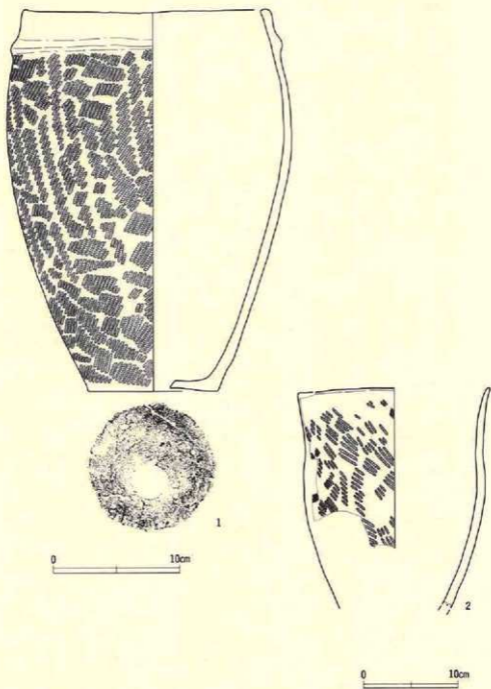
〈遺物出土状況〉埋土及び床面から遺物が出土している。土器量に比べ石器の出土は少なかった。3 は床面から出土した深鉢の口縁部から体部で出土地点は埋設土器と炉を結ぶラインより南側にあたり、口縁部のみを埋めた倒立した形で検出されたが床面から浅い掘り込みのため掘り方は明瞭に見られなかった。深鉢は大ぶりまたは小ぶりの山形口縁をもつものと平縁のキャリパー形土器と思われるものがある。深鉢と思われるものが最も多く出土しているが 6、8、15、16、20 のような小型鉢や壺と思われるものも出土している。文様体の特徴としては、隆沈線および沈線の手法による渦巻き文や棘状のモチーフと渦巻文と楕円文、逆 U 字文の組合せもみられた。3～8、14、31、33～35、37～40 は沈線による文様がみられ、18、21～30、48 は隆沈線または隆沈線による文様であり、いずれも大木 8b 式である。9～13、15、41～46、49 は沈線と磨り消しによる楕円文、逆 U 字文がみられ、いずれも大木 9 式である。46、49 は口縁部に渦巻き状突起を有し、波状口縁と思われる。49 は楕円文の内側に円形の刺突の充填がみられる。9、10 は平縁である。11～13 は逆 U 字文を区画した沈線が胴部から底部付近まで伸びている。15 は波状口縁で、口縁に無文帯をもち、逆 U 字文を突起状の口縁の下位のみに残していると思われる。51～54 は粗製土器の口縁部であるが、51 は頸部に隆沈線による平行沈線がみられ、52 は口縁に幅広い沈線、53 は波状口縁に無文帯、54 は折り返し口縁的な隆帯を口縁部にもつ。石器は菱形の石鏃、磨石のほか一縁辺のみ調整が見られる不定形石器、フレイクが 5 点出土している。

出土遺物と炉の状況から本住居跡の時期は中期後葉と思われる。

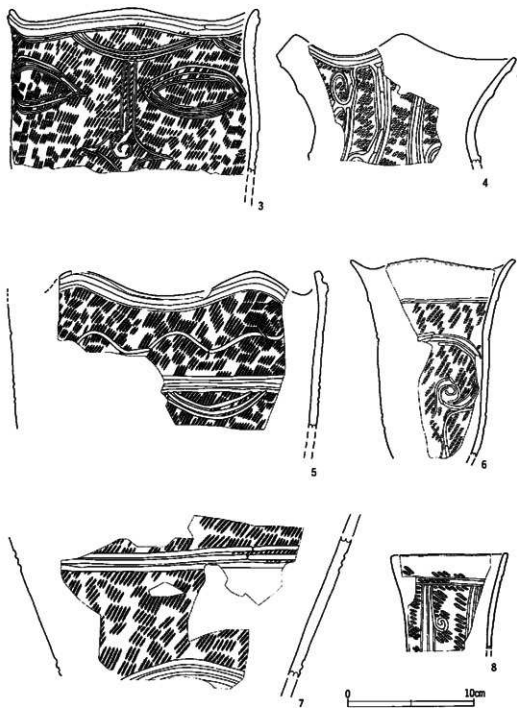
〈その他〉1 は床面下から検出された底部穿孔の埋設土器である。倒立した形で埋められてい



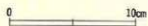
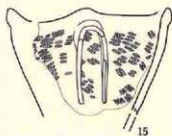
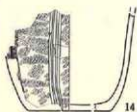
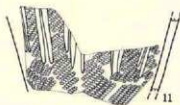
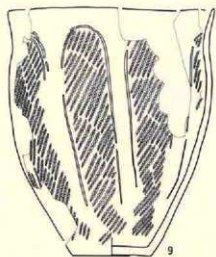
第29图 RA15竖穴住居跡



第30圖 RA16竪穴住居跡出土遺物(1)

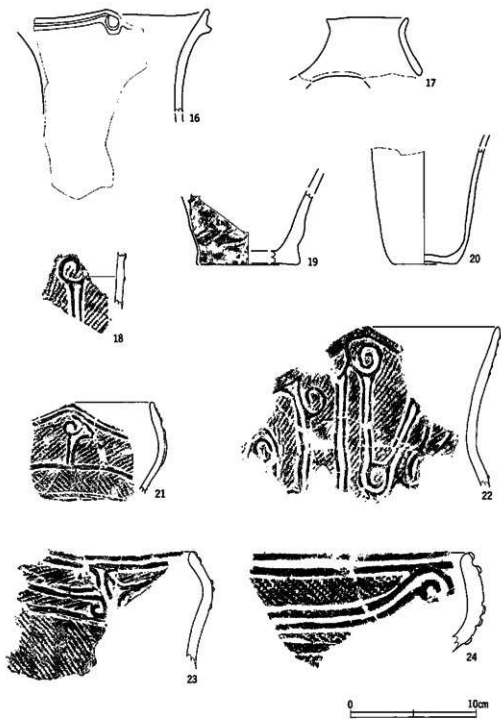


第31圖 RA16雙穴住居跡出土遺物(2)



第32図 RA16亞穴住居跡出土遺物(3)

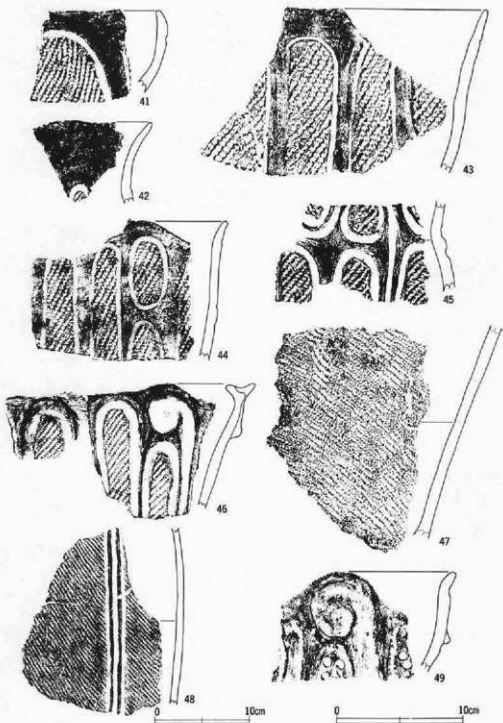




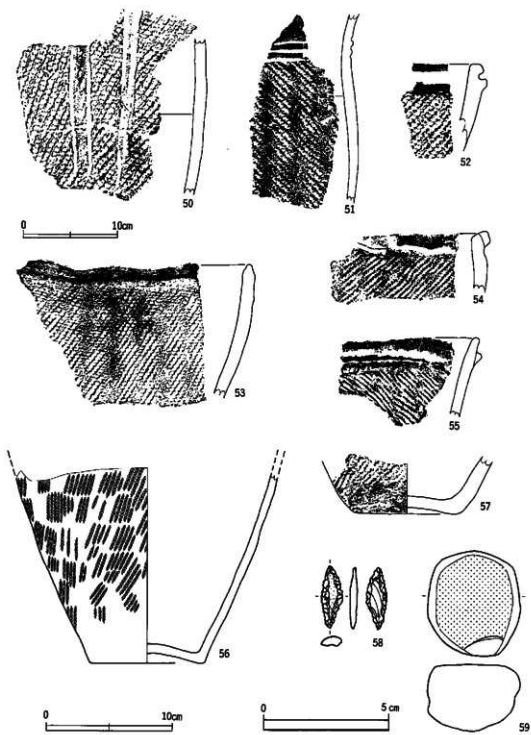
第33圖 RA16豎穴住居跡出土遺物(4)



第34图 RA16窑穴住居跡出土遺物(5)



第35图 RA16磬穴住居跡出土遺物(6)



第36圖 RA16雙穴住居跡出土遺物(7)

第3表 RA16 堅穴住居跡出土遺物計測書・観察表

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			類別	分 類	写図	備 考	
		口 径	底 径	高 さ					
30-1	床面	25.5	13.6	41.1	深鉢	III 3	26-121	埋設土層 最大径30.0cm 内面に炭化物の付着がみ られる。	
-2	埋土下位	[20.2]	—	(23.4)	鉢	III 3	-123		
31-3	床面	26	—	(17.4)	鉢	III 2 A	-124		
-4	埋土下位	—	—	(9)	鉢	鉢	27-126		
-5	埋土 (東西ベルト)	—	—	(16.7)	鉢	鉢	-125		
-6	床面 埋土下位	[13]	—	(15.8)	鉢	鉢	-127		
-7	南北ベルト 埋土	—	—	(13.8)	鉢	鉢	-129		
-8	床面	[9.3]	—	(7.7)	小形鉢	鉢	-128		
32-9	埋土下位	[21.9]	8.3	26.2	鉢	III 2 B②	26-122		
-10	鉢	[19.73]	—	(6.2)	鉢	鉢	—		
-11	埋土	—	—	(6.6)	鉢	III 2 B	—		
-12	埋土下位	—	9.2	(9.3)	鉢	鉢	27-134		
-13	埋土	—	[7.8]	(5.6)	鉢	鉢	-135		
-14	埋土 (東西ベルト西)	—	[6.6]	(7.1)	鉢	III 2 A	-131		
-15	埋土	[12.8]	—	(8.5)	鉢	III 2 B②	-130		
33-16	床面	—	—	(13.5)	鉢	III 2	-133		
-17	埋土	6.5	—	(4.9)	不明	不明	-132		
-19	貼床中	—	[8]	(5.8)	鉢	III 3	—		
-20	床面	5	—	(9.6)	鉢	鉢	27-156		
36-56	埋土上位	—	11.8	(20.5)	鉢	鉢	30-191		
-57	埋土下位	—	8	(4.7)	鉢	鉢	-194		
番号	出土位置・層位	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	写 図	備 考
36-58	埋土	石鏡(鏡形)	2.5	0.8	0.3	0.68	チャート 質粘板岩		51
-59	鉢 RA16	磨石	4.2	3.7	2.8	62.67	凝灰岩		53
番号	出土位置・層位	分 類	写図	特記事項	番号	出土位置・層位	分 類	写図	特記事項
33-18	埋土	III 2 A	28-157		34-38	埋土	III 2	27-135	
-21	P12埋土	鉢	-158		-39	鉢	III 2 A	28-172	
-22	埋土	鉢	-160		-40	鉢	鉢	29-177	
-23	鉢	鉢	-162		35-41	鉢	III 2 B	-178	
-24	鉢	鉢	-159		-42	鉢	鉢	-176	
34-25	鉢	鉢	-161		-43	鉢	鉢	-190	
-26	埋土下位	鉢	-163		-44	鉢	鉢	-179	
-27	埋土	鉢	—		-45	鉢	鉢	-180	
-28	鉢	鉢	-164		-46	埋土下位	鉢	-182	
-29	鉢	鉢	-170		-47	床面	III 3	-184	
-30	鉢	鉢	-165		-48	鉢	III 2 A	-181	
-31	鉢	鉢	-167		-49	埋土	III 2 B	-183	
-32	鉢	鉢	-188		36-50	鉢	III 2 A	30-185	
-33	鉢	鉢	-171		-51	床面	III 2 A	-186	
-34	鉢	鉢	29-175		-52	貼床	III 3	-187	
-35	床面	鉢	28-166		-53	埋土	鉢	-189	
-36	埋土	鉢	—		-54	鉢	鉢	—	
-37	鉢	鉢	28-168		-55	鉢	鉢	-193	
写図のみ	鉢	鉢	-169						
鉢		III 2	29-173						
鉢		鉢	-174						

た。土器は粗製土器でRLの地文のみ見られ、完形であるが焼成後、底部に穿孔を行なっている。出土地点は住居跡の中央部よりやや東側に位置する。

RA 17 竪穴住居跡（第37～40図、写図7、10、31、32、51～53）

〈位置〉 G7J01 G6区平坦部

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 370×340 cm 〈床面積〉 9.8 m<sup>2</sup>

〈検出面〉 III層黒色土 〈重複関係〉 なし

〈埋土〉 7層に分けられる。1層目は10 YR 2/3 黒褐色土で粉炭を含む。2層目は7.5 YR 2/2 黒褐色土で粉炭をわずかに含む。3層目は10 YR 2/2 黒褐色土で礫及び粉炭をわずかに含む。焼土を縞状に含む。4層目は10 YR 2/3 黒褐色土で粉炭をわずかに含む。5層目は10 YR 3/3 暗褐色土で粉炭及び褐色土をブロック状に含む。6層目は7.5 YR 2/1 黒色土で焼土をブロック状に含む。粉炭を含む。7層目は10 YR 3/1 黒褐色土で粉炭及び小石、金雲母をわずかに含む。埋土に多くの焼土及び粉炭を含むことから焼失住居と思われる。

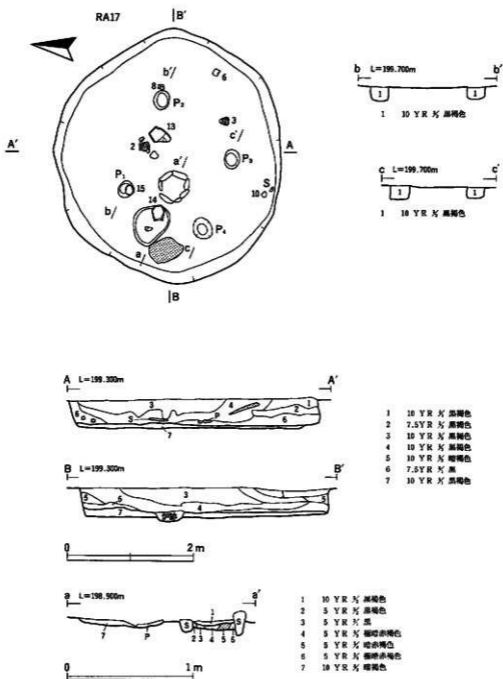
〈壁の状態〉 黒色土の中に暗褐色土が入るところで壁を止めたが、駄目押しで暗褐色土の中に硬い部分が見られ、壁は床より垂直に立ち上がった。壁高は40 cm程度である。

〈床の状態〉 ほば水平である。茶褐色土を貼床にしている。50×35 cmの円形、厚さ1 cm程度の焼土が壁際に残る。

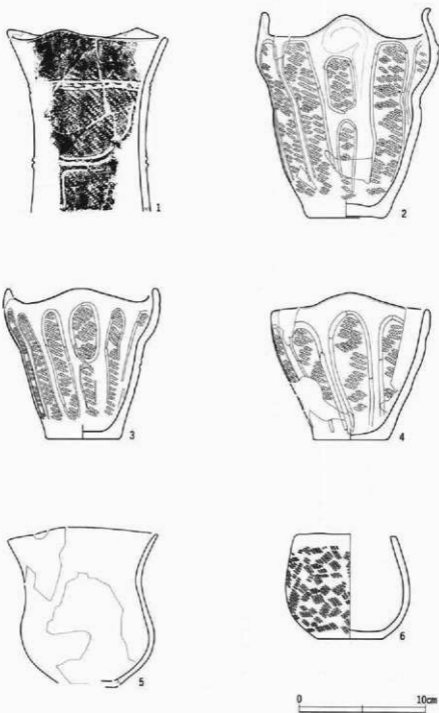
〈炉の状態〉楕円形の石囲炉である。規模は52×50 cm、炉のなかの焼土は5 cm程度残る。主軸はN-75°-Wである。炉は住居跡の中央部よりやや西壁よりに位置する。炉石は川原の礫を加工せずに用いている。礫は北側から西回りで礫の間の隙間がないようにきっちりと埋められているが、火による赤変は見られなかった。炉の西側に隣接して、70×55 cmの楕円形で深さ10 cm程度の掘り込みがみられた。掘り込みの埋土は10 YR 3/3 暗褐色土で粉炭、焼土粒、砂粒を含む。この掘り込みは炉に伴う施設である可能性も考えられる。

〈柱穴〉 4本検出された。P1は28×23 cm、深さ22 cm。P2は規模31×22 cm、深さ28 cm。P4は規模30×22 cm、深さ19 cm。埋土はいずれも10 YR 2/3 黒褐色土で金雲母を多く含んでいる。いずれも主柱穴と思われる。

〈遺物出土状況〉 床面および埋土から遺物が出土している。1は埋土から出土した小波状口縁の小型鉢で口縁部に無文帯をもち、頸部の平行沈線間に刺突がみられる。胴部は隆線による軟状文がみられる。7は隆線による文様がみられる。このことから1、7は大木8b式と思われる。2、3は床面から出土した波状口縁の小型鉢で楕円文と逆U字文による文様が見られる。2は口縁部に渦巻状突起をもつ。4は埋土から出土した小型鉢であり、逆U字文のみの文様である。8は平縁の深鉢で、逆U字文が見られる。10は床面から出土した深鉢の胴部である。これらの土器は大木9式と思われる。5は埋土から出土した小型壺で無文研磨されている。6は床面から出

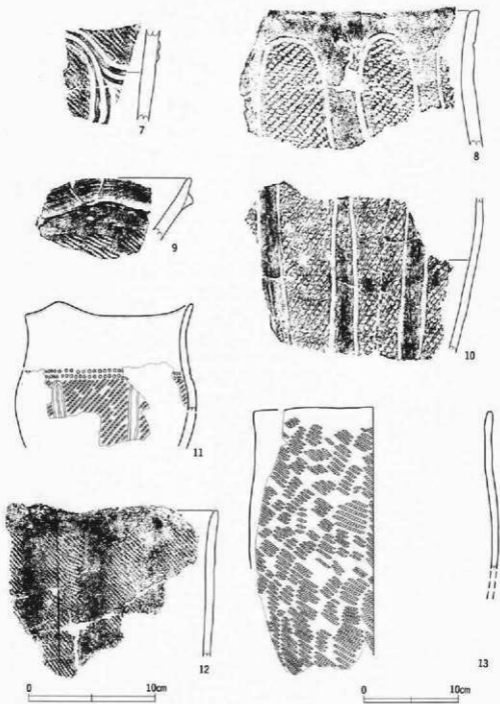


第37圖 RA17竪穴住居跡

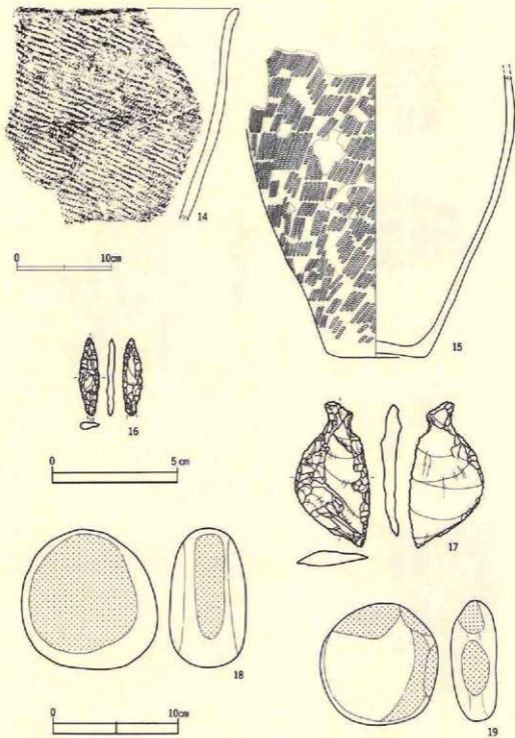


第38圖 RA17豎穴住居跡出土遺物(1)





第39圖 RA17竪穴住居跡出土遺物(2)



第40圖 RA17豎穴住居跡出土遺物(3)

第4表 RA17 竪穴住居跡出土遺物計測表・観察表

図番号	出土地点・層位	法 量 (cm)			類別	分 類	写図	備 考
		口 径	底 径	高 さ				
38-1	埋土	[12.7]	—	(13.5)	小壺鉢	Ⅲ 2 A	31-195	
-2	床面	13.3 <14.5>	6.0	16.7	#	Ⅲ 2 B ①	-196	
-3	#	[11.7]	5.8	12.1	#	Ⅲ 2 B ②	—	
-4	埋土	[12.4]	5.8	11.7	#	#	31-197	
-5	#	[11.9]	—	(12.2)	小型壺	Ⅲ 3	—	
-6	床面	7.9	5.2	8.4	#	#	31-198	
39-13	#	[25]	—	(28)	深鉢		32-206	
40-15	#	—	8.8	(33)	#		-209	

番号	出土位置・層位	分 類	写図	備 考	番号	出土位置・層位	分 類	写図	備 考
39-7	埋土	Ⅲ 2 A	31-199		39-11	埋土	Ⅲ 2	31-205	
-8	#	Ⅲ 2 B ②	-200		-12	#	Ⅲ 3	32-207	
-9	埋土	Ⅲ 3	-203		-14	床面	#	-208	
-10	床面	Ⅲ 2 B	-204						

番号	出土位置・層位	器 型	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	写 図	備 考
40-16	埋土	石鏃(尖蓋)	(3.1)	0.8	0.8	(0.80)	珪質泥岩	51-RA17-16	
-17	RA17	石匙(縦型)	5.8	3.0	0.8	10.42	衝積粒凝灰岩	52-#-17	
-18	RA17	磨石	11.3	10.8	6.3	1140.0	流紋岩質凝灰岩	53-#-18	
-19	RA17	磨石	9.8	9.5	3.7	560.0	凝灰岩	#-19	

土した小型壺である。9は口縁に隆帯を有する粗製土器と思われる。11は波状口縁で口縁部に無文帯をもち頸部には横位2列の円形の刺突がみられ、胴部は複節の地文に平行沈線による文様がみられる。12、～15はいずれも深鉢の粗製土器である。12は縦位に磨り消しがみられる。16は尖基石鉢や縦型石匙、小型の磨石が2点出土しているほか不定形石器も出土した。

出土遺物からこの住居跡の時期は中期後葉であると思われる。

#### RA 18 竪穴住居跡（第41～43図、写図8、10、32～34、53）

〈位置〉G7I02 G7区平坦部

〈プラン〉不明 〈規模〉420×390 cm（残存） 〈床面積〉15.3 m<sup>2</sup>（推定）

〈検出面〉IV層褐色土中 〈重複関係〉なし

〈埋土〉風倒木によって攪乱を受けている。一部7.5 YR 2/3 極暗褐色土で粉炭、小石を少量含む埋土が見られる。

〈壁の状態〉褐色土。壁高13～4 cm。西壁は、調査区外に伸びるため不明。南側は風倒木のため不明。

〈床の状態〉ほぼ水平であるが、風倒木によって攪乱を受けている。褐色の砂質土を掘り込んでいる。壁は床面より垂直に立ち上がる。一部10 YR 2/3 黒褐色土を貼床にしていた可能性がある。

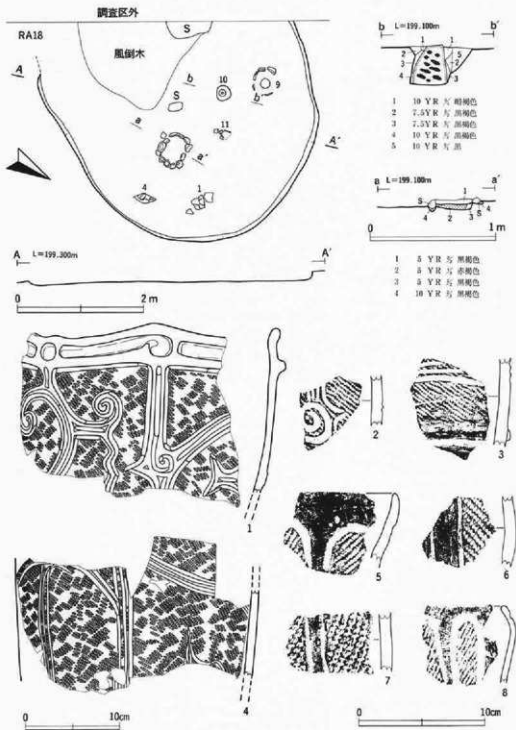
〈炉の状態〉楕円形の石囲炉。規模は56×46 cm。主軸はN-88°-Wであった。円礫を床面から5 cm程度掘り込んでいた。東側の礫は抜き取られているものみられた。炉石は加工しないで用いているものと割って用いているものがある。残っている炉石は、内側に明瞭に火を受けた痕跡が見られた。炉の内側の焼土の厚さは4 cmであった。

〈柱穴〉不明

〈遺物出土状況〉9は住居跡の北壁よりから出土した注口付き浅鉢である。口縁部には5つの突起と1つの注口がある。渦巻き文をモチーフにした文様が見られ頸部に無文帯を持つ。1はわずかな山形口縁を持ち、頸部から底部にかけて渦巻き文と棘状モチーフの文様がみられる。1～4、9は大木8b式である。5、6、7、8は逆U字文と磨り消しの組合せがみられ、3は沈線と隆帯による文様がみられる。これらの土器は大木9式である。10は波状口縁の粗製の深鉢である。11は小型鉢でRLの単節の地文がみられる。15はRLの単節の地文で体部と底部の境に原体の末端処理と思われる連続した綾線り文状の文様が見られ、底面には単節の縄文がみられる。13は磨製石斧で刃部にわずかな欠損がみられる。14は小型の磨石で磨面は一面のみである。

出土遺物から住居跡の時期は中期後葉と思われる。

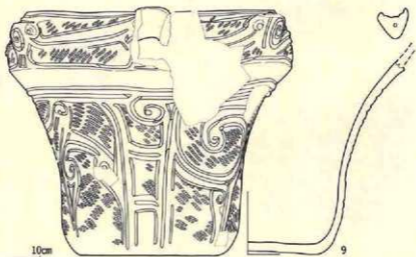
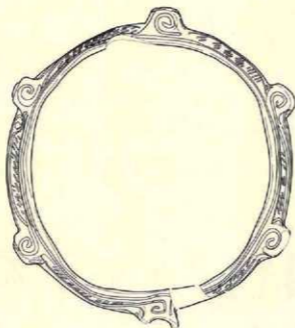
〈その他〉1は床面から掘り込まれた底部穿孔の埋設土器である。倒立した形で埋められている。床面から口縁部までの深さは60 cm。掘り方は明瞭に見られた。土器は粗製土器で地文のみ見られ焼成後に底部の穿孔を行なっている。



第41図 RA18竪穴住居跡



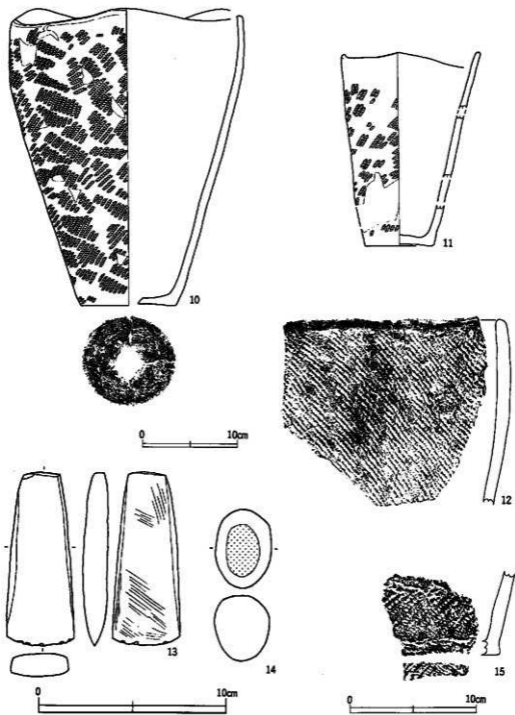
0 10cm



0 10cm

9

第42圖 RA18豎穴住居跡出土遺物(1)



第43圖 RA18竪穴住居跡出土遺物(2)

第5表 RA18 竪穴住居跡出土遺物計測表・観察表

番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項	番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項
41-1	床面	III 2 A	32-210		41-7	床面	III 2 B	34-219	
-2	埋土(南側)	〃	34-216		-8	〃	III 2 B ㊟	-221	
-3	埋土	〃	-217		43-11	〃	III 3	33-214	
-4	床面	〃	32-211		-12	〃	〃	-215	
-5	埋土	III 2 B	34-220		-15	埋土	VII	34-222	遺物、植物には炭化は認められ、炭化に類する内面に炭化物が残る。
-6	〃	III 2 B	-218						

図番号	出土地点・層位	法 量 (cm)			類 別	分 類	写図	備 考
		口 径	底 径	高 さ				
42-9	床面	19.8 (22.7)	10.8	19.8	注口付深鉢	III 2 A	33-212	
43-10	床面	24.4	10	31.8	深鉢	III 3	-213	埋設土器。最大径が口径である。内面に炭化物が付着している。

番号	出土位置	器 名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	写 図	備 考
43-13	床面	磨製石斧	9.3	3.7	1.3	76.76	細粒炭灰岩	53-RA18-13	
-14	埋土	磨石	4.3	3.0	3.5	55.1	塊状岩質炭灰岩	〃 -14	

RA 19 竪穴住居跡 (第44~45図、写図8、10、34、52、53)

〈位置〉 G7M02 G6区平坦部

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 448×390 cm

〈検出面〉 III層黒褐色土下面 〈重複関係〉 RA 16より先行する。

〈埋土〉 7.5 YR 2/2 黒褐色土で粉炭、金雲母、小石を少量含み、暗褐色土をブロック状に含む。

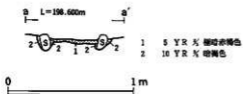
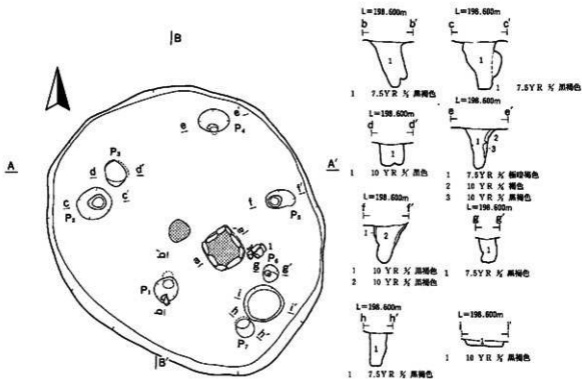
〈壁の状態〉 IV層褐色土に掘込まれる。壁高53~16 cm。壁は床面より直立気味に立ち上がる。

〈床の状態〉 褐色土をほぼ水平にしている。炉の北側に焼土と粉炭が混じる35×32 cmの楕円形の範囲が見られた。焼土の厚さは2~4 cmである。

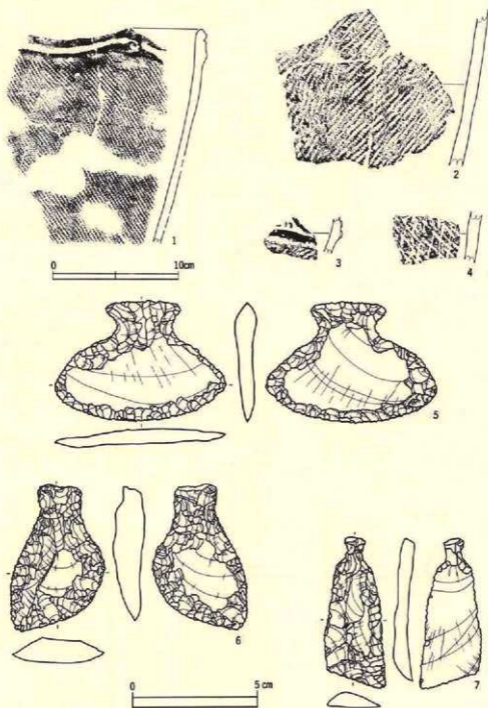
〈炉の状態〉 方形の石囲炉。主軸はN-35°-Wであり、規模は60×56 cm。炉石は床面より12 cm程度掘り込まれ、掘り方は明瞭である。炉の内側の焼土の厚さは3 cmである。

〈柱穴〉 7基検出された。P1は規模は37×37 cm、深さ73 cm。埋土は7.5 YR 2/2 黒褐色土で底面に礫を残す。P2は規模55×50 cm、深さ78 cm。埋土は7.5 YR 2/2 黒褐色土で金雲母をわずかに含む。P3は規模42×35 cm、深さ40 cm。埋土は10 YR 2/1 黒色土で金雲母を含み、





第44图 RA19竖穴住居跡



第45圖 RA19竪穴住居跡出土遺物

第6表 RA19 竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置・層位	分類	写図	備考	番号	出土位置・層位	分類	写図	備考
45-1	床面	Ⅲ 3	34-223		45-3	床面	Ⅲ 2 A	34-225	
-2	〃	〃	-226		-4	埋土	VII	-224	

番号	出土位置・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	写図	備考
45-5	埋土	石匙(横型)	4.9	6.9	0.9	23.61	珪質泥岩	52-RA19-5	
-6	〃	石匙(縦型)	5.9	3.8	1.3	22.43	泥質凝灰岩	〃 -6	
-7	〃	石匙(縦型)	6.0	2.4	0.8	8.81	硬質泥岩	〃 -7	

褐色土をブロック状に含む。P 4 は規模 50×37 cm、深さ 78 cm。埋土 1 層目は 7.5 YR 2/3 極暗褐色土で金雲母をわずかに含む、2 層目は 10 YR 4/6 褐色土で金雲母をわずかに含む。3 層目は 10 YR 2/2 黒褐色土で金雲母をわずかに含む。P 5 は規模 45×30 cm、深さ 62 cm。埋土 1 層目は 10 YR 2/3 黒褐色土で褐色土をブロック状に含む、金雲母をわずかに含む。2 層目は 10 YR 2/2 黒褐色土で金雲母をわずかに含む。P 6 は 28×25 cm、深さ 26 cm。埋土は 7.5 YR 2/2 黒褐色土で金雲母をわずかに含む。P 7 は 30×30 cm、深さ 50 cm。埋土は 7.5 YR 2/2 黒褐色土で金雲母をわずかに含む、底面に礫を残す。支柱穴は P 1、P 2、P 4、P 5 の 4 本と思われる。P 1 から P 2 までの距離は 170 cm、P 2 から P 4 は 215 cm、P 4 から P 5 は 160 cm、P 5 から P 1 は 212 cm である。

〈遺物出土状況〉床面からの遺物は少ない。1～3 は床面より出土した土器である。1 は波状口縁で小型の渦巻き状突起をもつ粗製土器である。3 は隆線による文様であると思われる、いずれも大木 8 b 式であると思われる。石器は縦型石匙 2 点、横型 1 点、その他不定形石器が 2 点出土している。床面出土土器の時期から本竪穴住居跡は中期後葉と思われる、重複する RA 17 の出土遺物と重なる時期もあることから大きな時期の開きはないと思われる。

〈その他〉柱穴の他に炉の南側の南東壁寄りに床面に掘り込まれていたピットが P 8 である。規模は 65×58 cm、深さ 8 cm の楕円形で埋土は 10 YR 2/3 黒褐色土で粉炭、金雲母をわずかに含む。RA 17 にみられる掘り込みと類似している。

## (2) 竪穴状遺構

### RE 01 竪穴状遺構 (第46図、写図11、34)

〈位置〉 G6C10 G6区平坦部

〈プラン〉 不整形円形 〈規模〉 280×240 cm

〈検出面〉 VII層黄褐色土 〈重複関係〉 柱穴群5より新しい。RD43より新しい。

〈埋土〉 6層に分かれる。1層は7.5 YR 3/2 黒褐色土、2層は10 YR 2/3 黒褐色土、3層は10 YR 4/4 褐色土、4層は10 YR 2/4 暗褐色土であった。

〈壁の状態〉 黄褐色土に掘り込まれている。壁高31～18 cm。北壁と西壁に一部攪乱を受けている。東壁は土坑を切っているが埋土では明確に見られなかったため、掘り過ぎていて、南壁は床面より垂直に立ち上がる。

〈床の状態〉 黄褐色土である。凹凸が見られ水平ではない。西壁にむかって緩やかに高くなっている。貼り床がみられた。中央部には深さ30 cmの凹みがみられる。

〈炉の状態〉 検出されなかった。

〈柱穴〉 なし

〈遺物出土状況〉 埋土より遺物が出土している。4は第I群土器で貝殻腹縁圧痕が見られる口縁部である。1、2、5は第IV1群土器であり、沈線による文様が見られる。8は第IV3A③群土器で刻み目文がみられる。9は入り組み三叉文がみられる口縁部で第VA群土器と思われる。本竪穴状遺構の時期は不明である。

### RE 02 竪穴状遺構 (第47図、写図10、35)

〈位置〉 H7B09 川側南斜面

〈プラン〉 不明 〈規模〉 不明

〈検出面〉 VII層黄褐色土 〈重複関係〉 RA11より先行する。

〈埋土〉 RA11の駄目押しで柱穴を検出する際に床面下から検出された。

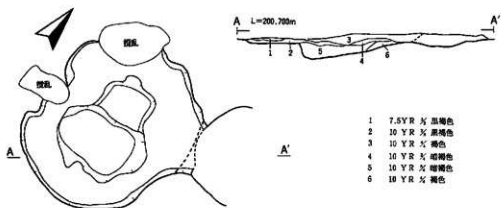
〈壁の状態〉 不明。

〈床の状態〉 水平にならない。南側と東側は削平を受けており不明。北側から南側、西側から東側にかけて傾斜がみられる。また、北壁際と思われる部分に規模23×17 cm程度、深さ10 cm程度の掘り込みがみられた。

〈炉の状態〉 不明

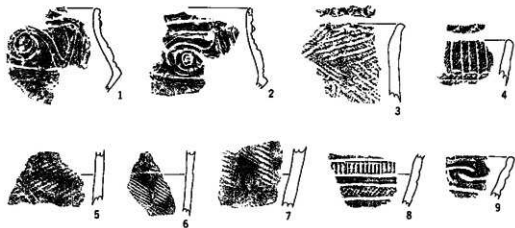
〈柱穴〉 3本検出された。P1は規模26×24 cm、深さ32 cm。埋土は10 YR 3/2 黒褐色土。P2は規模32×25 cm、深さ46 cm。埋土は2層に分かれ、1層は10 YR 3/3 暗褐色土で褐色土をブロック状に含む。2層は7.5 YR 3/2 黒褐色土。P3は40×35 cm、深さ20 cm。埋土は10 YR 3/2 黒褐色土であった。

〈遺物出土状況〉 床面と思われる面から土器が一個体まとまって出土している。周囲には現地



- 1 7.5YR 灰 蓝褐色
- 2 10 YR 灰 黑褐色
- 3 10 YR 灰 褐色
- 4 10 YR 灰 暗褐色
- 5 10 YR 灰 暗褐色
- 6 10 YR 灰 褐色

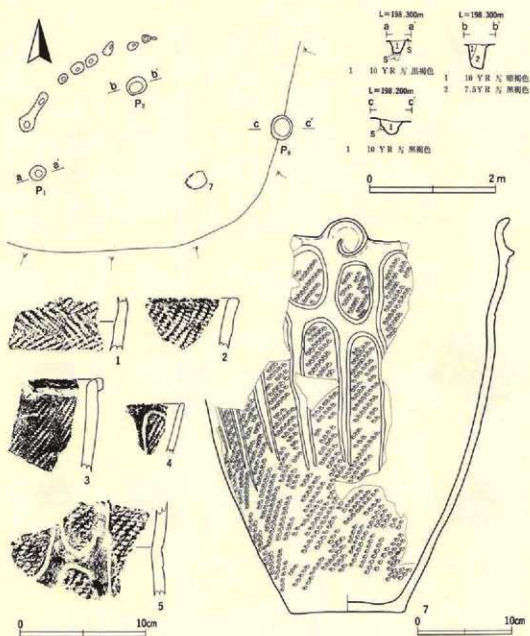
0 2m



0 10cm

図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
46-1	RE01 雑土	IV 1 D	34-227		46-6	RE01 雑土	IV 5	34-232	鉄製石鏃
-2	# #	#	-228		-7	# #	物	-233	
-3	# #	VI	-229	積層石灰	-8	# #	IV 3 A ①	-234	
-4	# #	I 2 B	-230		-9	# #	V 1 A	-235	
-5	# #	IV 1 C	-231						

第46図 RE01竪穴状遺構



図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
47-1	RE02 埋土	ⅡB	35-236		47-4	RE02 埋土	Ⅱ2 B②	35-238	
-2	#	#	Ⅲ3	-237	-5	# P1	Ⅱ2 B	239	
-3	#	#	#	-240					

図番号	類別	法 量 (cm)			出土位置・層位	分類	写真	備考
		口徑	底徑	高さ				
47-7	深鉢	—	11.9	42.1	床面	Ⅱ2 B③	35-241	

第47図 RE02竪穴状遺構

性ではない焼土がみられ、その上におかれた状態で出土している。渦巻き状突起を有し、口縁部はやや外反する。口縁から胴部は楕円文や逆U字文がみられる大木9式の土器である。またP1の埋土から出土した5は大木9式土器である。出土遺物の時期からこの竪穴状遺構の時期は中期後葉である可能性が高い。

### (3) 炉跡

#### RF 01 炉跡 (第48図、写図11)

G7K10グリッドに位置する。北側は調査区外にかかる。検出面はⅦ層である。方形石囲炉と思われ、規模は88×84cmである。焼土は部分的にしか残っていないが、厚さは4cm程度であった。主軸はN-56-Eである。炉石は南側の2個しか残っていなかった。出土遺物はなかった。周囲から出土した遺物や検出状況から時期は縄文時代中期後葉から後期後葉のものと思われる。

#### RF 02 炉跡 (第48図、第48図1～3、写図11、35)

G7I10グリッドに位置する。南側は川による削平のため不明であり、北側は調査区外にかかる。検出面はⅦ層である。重複関係があり、RD03より先行する。方形の石囲炉と思われる。主軸は推定N-15-Eである。規模は推定88×84cmである。炉内は攪乱を受けたと思われ、焼土の残りは悪いが7～8cm程度の厚さがみられた。炉石は床面から15cm程度掘り下げていた。炉石の内側に焼けた跡がみられた。

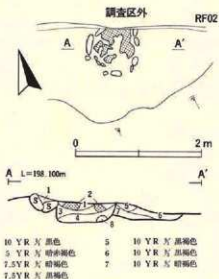
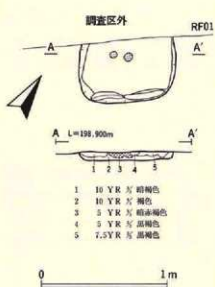
1は口唇部から口縁部にかけて横位に円形の刺突がみられた。3は第Ⅲ2群土器と思われる。時期は中期後葉から後期初頭と思われる。

### (4) 埋設土器

#### RZ 10 埋設土器 (第48図、写図19、35)

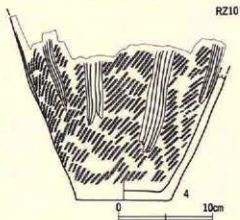
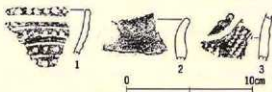
G7M09グリッドに位置する。川側の南斜面上で検出した。検出面はⅧ層の階層であった。土器は正立した形で埋められていた。口縁部は欠損していた。また土器内は蜂の巣となっていたため、土の分析はできなかった。土器は15cm程度掘り込んでいた。

埋設された土器は複節に沈線による文様がみられる大木8b式の土器と思われる。



- 1 10 YR 5/ 灰赤・黄褐色
- 2 10 YR 5/ 暗褐色
- 3 10 YR 5/ 黒褐色
- 4 10 YR 5/ 褐色

0 10cm



図番号	出土位置・部位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・部位	分類	写真	特記事項
48-1	RF02 埋土	IV	35-242		48-3	RF02 埋土	III 2 C	35-244	
-2	#	#	243						
図番号	出土地点・部位	土 質 (cm)			類別	分類	写真	備 考	
		口径	縦径	高さ					
48-4	埋土上面	-	10	(19.7)	埋跡	III 2 B	35-245		

第48図 RF01、02炉跡、RZ10埋土器



#### (5) 土坑

RD 01 土坑 (第 49 図、第 61 図 1～13、15、写図 12、35、36)

〈位置〉 G7N14

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 154×110 cm、底径 100×98 cm、深さ 80 cm。

耕作土直下で 80×80 cm の楕円形の焼土が検出され、掘り込んだ結果、土坑となった。重複関係はなし。長軸は東—西である。断面形は一部袋状を呈するものの壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ水平であり礫面となっており、現地性と思われる焼土が 40×40 cm の不整形で検出された。焼土の最大厚は 2 cm であった。埋土は 3 層に大別できる。廃棄と思われる焼土の多く混じる 7 a 層までと、しまりに欠けコブシ大から人頭大の大きさの礫を含み、褐色土、黄褐色土がブロックおよび霜降り状に混じる 11 層までと、しまりのあるクロボク土の 12 層までである。11 層までは多くの遺物が混入していた。埋土の状況から人為的堆積とおもわれる。

埋土よりⅢ群、Ⅳ群土器が多く出土したが明確な時期決定はできない。埋土が人為的堆積と思われることから後期もしくは後期より新しい時期であると思われる。

RD 02 土坑 (第 49 図、第 61 図 14、第 80 図 3、写図 12、36、52)

〈位置〉 H7L08

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 90 cm、底径約 80 cm、深さ 27 cm。

VII 層上面で検出した。北側 50 cm に RF 02・RD 03・08 が近接する。掘り込みは礫層に達している。壁はやや開き気味に立ち上がり、底面は凹凸が見られる。埋土はしまりに欠けるクロボク土を基調とした 5 層からなり、下位にいく程褐色土が多く混じる。

埋土から撚糸の地文をもつⅢ群に属する粗製土器が 1 点出土している。また、錐部を欠損したつまみを有する石錐が 1 点出土している。

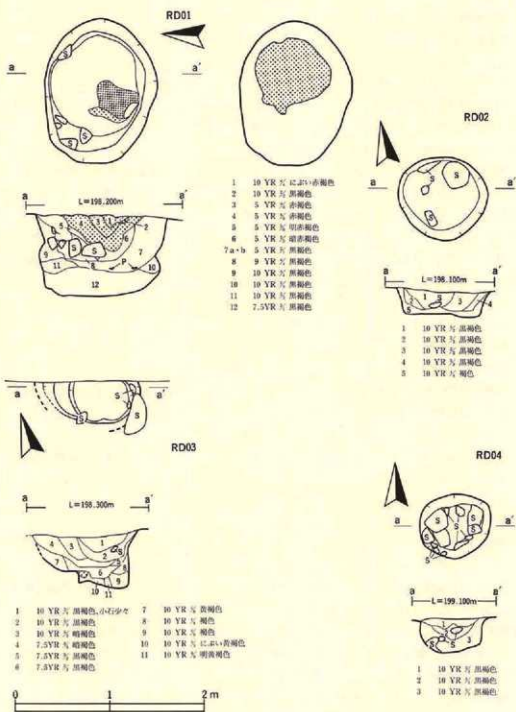
RD 03 土坑 (第 49 図、第 61 図 17、写図 36)

〈位置〉 H7N08

〈プラン〉 不明 〈規模〉 長軸 108 cm、深さ 60 cm。

VII 層上面で検出した。北側が調査区外、西側は RF 02 によって壊されている。西側に幅 15 cm、深さ 35 cm の階段状のテラスを有する。遺存部分の長軸方位は N-65°-W である。壁は西側テラス部分より上位は緩やかに立ち上がるほかは垂直に立ち上がり、開口部がやや外反する。底部は東側に傾斜している。埋土は 11 層からなり、全体的にしまりに欠け、上位のクロボク土と下位の褐色土に大別される。10 層は焼土がブロック状に入る。

遺物の出土はⅣ群に属する粗製土器が 1 点出土している。



第49图 RD01、02、03、04土坑

RD 04 土坑 (第 49 図、写図 12)

〈位置〉 G 7 V 07

〈プラン〉 不整形円形 〈規模〉 開口部径約 70 cm、底径約 50 cm、深さ 36 cm。

IV層上面で検出した。壁及び底面は鍋底状を呈する。埋土はクロボク土を基調とした3層からなり、黄褐色土が全体的に混じり、ややしまりがある。2層は礫と小石を含む。埋土の状況から人為的な堆積と思われる。出土遺物はなし。

RD 05 土坑 (第 50 図、写図 12)

〈位置〉 G 7 Y 07

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 110×88 cm、底径 100×72 cm、深さ 32 cm。

IV層上面で検出した。西側は RD 06 に近接する。長軸方位は N-50°-W である。掘り込み面は礫層に達している。壁は外反気味に立ち上がり、底面は凹凸がみられる。埋土はクロボク土を基調とする4層からなり、壁の崩落土と思われる4層を除き、しまりに欠ける。出土遺物はなし。

RD 06 土坑 (第 50 図、写図 12)

〈位置〉 G 7 X 06

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 110 cm、底径約 95 cm、深さ 26 cm。

IV層上面で検出した。掘り込み面は RD 05 同様礫層に達している。壁は外反気味に立ち上がる。底面は凹凸がみられる。埋土はクロボク層を基調とする3層からなり、壁の崩落土と思われる最下層のみしまりがある。出土遺物はなし。

RD 07 土坑 (第 50 図、写図 12)

〈位置〉 G 7 W 06

〈プラン〉 不整形円形 〈規模〉 開口部径 95×80 cm、底径 69×50 cm、深さ 38 cm。

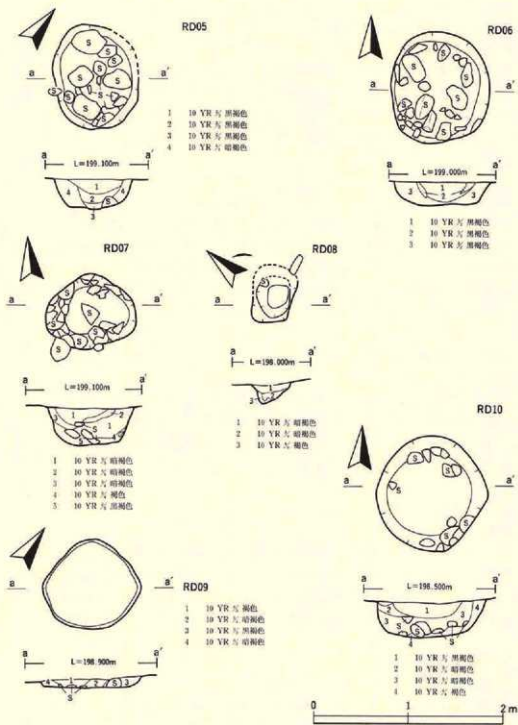
IV層上面で検出した。長軸方位は東-西である。掘り込み面は礫層に達している。壁は外反しながら立ち上がる。底面は凹凸がみられる。埋土は5層からなるが、上位の暗褐色土と下位の黒褐色土に大別され、中位には壁の崩落によるコブシ大の礫が混じる。出土遺物はなし。

RD 08 土坑 (第 50 図)

〈位置〉 H 7 N 09

〈プラン〉 隅丸長方形? 〈規模〉 長軸 60 cm、短軸 42 cm、深さ 20 cm。

IV層上面で検出した。RD 03 と近接し、RD 03 精査時に北半を消失した。長軸方位は N-50°-E である。壁は底面との明瞭な線をなさずおおむね緩やかに立ち上がる。埋土は3層からなり、



第50图 RD05、06、07、08、09、10土坑

1、2層がクロボク土、3層が褐色土で全体的にしまりに欠ける。出土遺物はなし。

RD 09 土坑 (第 50 図、第 62 図 19～32、写図 12、36)

〈位置〉 G 7 L 05

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径 100 cm、底径 90 cm、深さ 10 cm。

IV層上面で検出した。断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。埋土はしまりに欠けるクロボク土を主体にした4層からなる。

出土遺物は中期から晩期までとまとまりがなく時期決定とならない。第 62 図 21～23 はいずれも第IV群3類に属し、後期中葉のものである。25 は地文が燃糸と思われる雲形文がみられる。

RD 10 土坑 (第 50 図、写図 13)

〈位置〉 G 7 N 09

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径 120 cm、底径 90 cm、深さ 38 cm。

IV層上面で検出した。壁は外反気味に立ち上がり、底面は平坦である。埋土はクロボク土を基調とする4層からなり、1、4層でしまりが認められた。全体的に褐色土がブロック状に混じり、3層下位にはコブシ大の河原石が多量に混入していた。埋土の状況からみて人為的の堆積と思われる。出土遺物はなし。

RD 11 土坑 (第 51 図、第 62 図 33～38、写図 36)

〈位置〉 G 6 G 20

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 93×78 cm、底径 120×118 cm、深さ 112 cm。

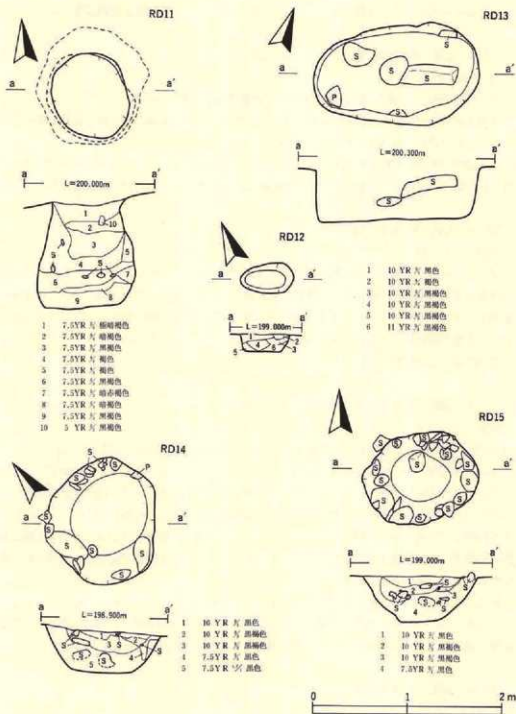
RA 07 と重複がみられ、RA 07 精査時にIII層中で検出した。検出状況から本遺構が古いものと思われる。長軸方位は N-20°-W である。断面形はフラスコ状を呈し、部分的に頸部が崩落していた。底面は平坦である。壁は底面から 30 cm 程度上の最大形に向かい内薄し、外傾したのち内傾して立ち上がる。埋土は9層からなり、1～3層は角礫混じりのクロボク土4層は頸部の崩落土、5～9層は炭化物を含むクロボク土である。7層は焼土が混じる。10層は焼土混じりのブロックである。

埋土からはIV群土器がまとまって出土している。第 62 図 33、34 は口縁に突起をもつ粗製土器である。35、37 は地文を残し沈線による文様がみられる。36 は吊手付小型鉢と思われ、無文研磨と沈線による文様がみられる。体部に突起をもち、突起を貫通する孔がみられた。

RD 12 土坑 (第 51 図、写図 13)

〈位置〉 G 7 P 06

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 56×30 cm、底径 42×19 cm、深さ 20 cm。



第51图 RD11、12、13、14、15土坑

IV層上面で検出した。長軸方位はN-65°-Wである。壁は外反気味に立ち上がる。底面は平坦である。埋土は6層からなり全体的にしまりがなく、1層が褐色土、2層以下はクロボク土で1、4、5層には砂粒が多く混じる。出土遺物はなし。

RD 13 土坑 (第51図、第63図39~44、第64図45~54、写図13、36、37)

〈位置〉G6G19

〈プラン〉楕円形 〈規模〉開口部径176×166cm、底径160×88Acm、深さ55cm。

RA 05、RD 18と重複関係にある。本遺構はRA 05の精査時に不明瞭なプランで黒褐色の落ち込みを確認し、その精査過程でRD 18をも検出したものである。新旧関係は検出状況からみてRD 18、本遺構、RA 05の順で新しいと判断した。長軸方位はN-60°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。埋土は西半の上位にクロボク土、以下はしまった褐色土が堆積し、中位には人頭大の河原石2個と長さ50cmの亜角礫1個が存在した。埋土からみて人為的堆積と思われる。

出土遺物はIII群、IV群土器が出土している。第64図45、47、49はIII2群に属し、沈線と磨しによる文様がみられる。第63図39~41、43はIV5群、第63図42、第64図46、48、50、54はIV群に属する。40、41は無文研磨されている。39、46は口縁部に突起をもつ粗製土器である。43は撚糸を地文に残している。42は大型の甕であり、胴部中央付近に隆帯を貼りつけ、さらに隆帯の上に横位の刺突がみられる。隆帯付近に最大径をもち隆帯より上では波状を主体とした沈線による文様が見られるが、以下は無文研磨されている。50、51、53、54は地文を残し、いずれも波状文や曲線文など沈線による文様がみられ、さらに口縁部が外反気味に立ち上がる。50、54は折り返し口縁の波状口縁で頂部に刻み目がみられる。54はボタン状の貼り付けが波状口縁の頂部直下にみられる。53は平縁である。52は小型鉢の吊手部分であり、突起部には上から孔が貫通している。埋土から第IV1群土器がまとまって出土していることから、後期初頭より新しいものと思われる。

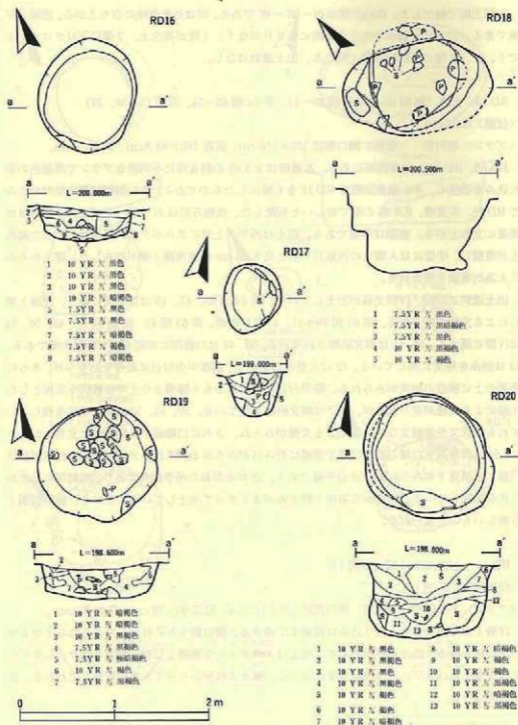
RD 14 土坑 (第51図、写図13)

〈位置〉G7W08

〈プラン〉不整形円形 〈規模〉開口部径136×112cm、底径90×76cm、深さ50cm。

IV層上面で検出した。掘り込みは礫層まで達する。壁は緩やかに外反しながら立ち上がるが凹凸がみられる。底面は平坦である。埋土はクロボク土を基調とした5層からなり、しまりのある5層中にはコブシ大の礫が多量に混じる。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。出土遺物はない。

RD 15 土坑 (第51図、第65図55~61、写図13、38)



第52图 RD16、17、18、19、20土坑



〈位置〉 G7W07

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 122×96 cm、底径 62×55 cm、深さ 50 cm。

IV層上面で検出した。長軸方位は東一西である。掘り込み面は礫層に達している。断面形は掘り鉢状を呈し、壁及び底面は凹凸がみられる。埋土はクロボク土を基調とした4層からなり、しまりのある4層中にはコブシ大の礫が多量に混じる。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。

III 2群とIV群土器が出土している。56は沈線と磨り消しによる文様からIII 2 C群に属すると思われる、57は口縁部の無文帯と以下地文が残ることからIII 2 C群に属する可能性が高い。58、59は網目状縞糸文の地文であり、胎土や焼成から後期の粗製土器と判断した。60は隆帯に沿った刺突列点文がみられたことから中期末葉の土器と判断したが後期初頭の土器である可能性もある。61は口縁部の破片で口唇部から表面に赤色顔料の付着がみられ、口縁頂部にボタン状の貼り付けがみられた。

#### RD 16 土坑 (第52図、写図13)

〈位置〉 G7Q08

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 120 cm、底径約 95 cm、深さ 34 cm。

IV層上面で検出した。壁は直立気味に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土はしまりに欠けるクロボク土の9層からなり、4層中には礫が混じる。出土遺物はなし。

#### RD 17 土坑 (第52図、写図13)

〈位置〉 G7L09

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 75×60 cm、底径 62×44 cm、深さ 46 cm。

IV層上面で検出した。長軸方位は北一南である。壁は外反気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土はクロボク土を基調としている。中位には焼土をブロック状に含み、壁際にはしまりのある褐色土が堆積している。本遺構は位置、埋土の状況、他の土坑との比較から RA 15の柱穴の可能性も考えられる。出土遺物はなし。

#### RD 18 土坑 (第52図、第65図62、63、第66図64～72図、第80図7、写図14、38、53)

〈位置〉 G6G19

〈プラン〉 楕円形? 〈規模〉 開口部径 158×95 cm、頸部径 105×95 cm、底径約 100 cm、深さ 88 cm

RA 05、RD 13と重複関係にあり、本遺構が最も古く、南側の一部がRD 13によって壊されている。長軸方位はN-60°-Wである。断面形はフラスコ状を呈するが、長軸方向に階段状の凹凸がみられる。底面はほぼ平坦である。埋土中位には人頭大の河原石がびっしりと含まれて

いたことから人為的堆積と思われる。

出土遺物はIV群土器が多く出土している。62、63、72は網目状燃糸文で口縁部が4つの波状を呈する粗製土器で同一個体と思われ、底部には網代痕が残る。64、65は地文の上に沈線による文様が見られ、IV1群土器と思われる。66は刻み目文が見られるIV3A③群土器である。67は表裏とも無文で裏面にタール状付着物がみられ、表面には赤色顔料が付着していた。時期は不明であるが後期に属する可能性がある。69は口縁部に突起を有する粗製土器である。また、石錘が1点出土している。土坑の時期は不明であるがRD13が後期初頭に属する可能性が高いことからそれ以前の時期であると思われる。

#### RD 19 土坑 (第52図、第80図7、写図14、51)

〈位置〉G7J11

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径約120cm、底径約100cm、深さ38cm。

IV層上面で検出した。壁は直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土はしまりのないクロボク土を基調とした7層からなり、4層には炭化物、焼土をブロック状に含み、底面にはコブシ大の河原石が敷かれていた。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。出土遺物は突基有茎石織が1点出土している。

#### RD 20 土坑 (第52図、第66図73~76、写図14、38)

〈位置〉G7L11

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径約140cm、底径105cm、深さ78cm。

IV層上面で検出した。壁は内湾気味に立ち上がり、開口部に向かって外反する。底面は鍋底状を呈する。埋土はクロボク土を基調とする13層からなるが、中位に一部褐色土が堆積し2層中には焼土を少量含む。全体的には砂粒が混じり、13層で特に多い。

出土遺物は73、74がIII2A群、75は沈線と磨り消しによる文様が見られ、地文は充填縄文と思われるIV1B①d類である。

#### RD 21 土坑 (第53図、写図14)

〈位置〉G7O05

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径約90cm、底径約80cm、深さ43cm。

IV層上面で検出した。本遺構の北側1mにはRA09の炉が位置し、重複関係にあるものと思われる。RA09は耕作により壁が消失しているため新旧関係は不明である。壁は内傾して直立気味に立ち上がる。底面は鍋底状を呈する。埋土は基本的にはクロボク土5層からなり全体的に褐色土と礫が混じる。出土遺物はなし。



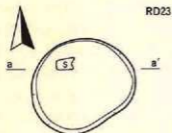
RD21



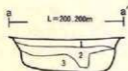
- 1 7.5YR 5 黑褐色
- 2 10 YR 5 黑褐色
- 3 7.5YR 5 黑褐色
- 4 10 YR 5 黑褐色
- 5 7.5YR 5 黑褐色
- 6 10 YR 5 黑褐色
- 7 10 YR 5 暗褐色



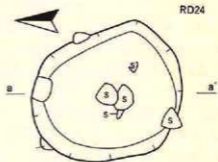
RD22



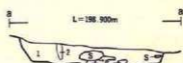
RD23



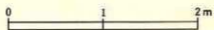
- 1 10 YR 5 黑褐色
- 2 10 YR 5 黑褐色
- 3 10 YR 5 棕色



RD24



- 1 10 YR 5 黑褐色
- 2 10 YR 5 黑褐色



第53图 RD21、22、23、24土坑

RD 22 土坑 (第 53 図、第 67 図 77、写図 14、39)

<位置> G7N07

<プラン> 楕円形 <規模> 開口部径 112×88 cm、底径約 60 cm、深さ 70 cm。

IV層上面で検出した。本遺構の北西隣には RA 13 の炉が位置し、重複関係にあるものと思われるが、RA 13 の壁が耕作により消失しているため新旧関係は不明である。長軸方位は東—西である。東側に幅 10 cm のテラスを有する。壁はテラスの部分で階段状となる他は外反気味に立ち上がる。掘り込みは腰層まで達しており底面及び底面には凹凸がみられる。埋土は全体的にしまっており、上位にクロボク土、下位に褐色土が堆積し、褐色土の上位には礫が多量に含まれる。埋土からみて人為的堆積と思われる。

埋土よりⅢ群土器が 1 点出土している。

RD 23 土坑 (第 53 図、第 67 図 78～80、第 68 図 81～84、第 80 図 4、写図 14、39、52)

<位置> G6E18

<プラン> 円形 <規模> 開口部径約 110 cm、底径 100 cm、深さ 36 cm。

IV層上面で検出した。本遺構は RD 25 と重複しており本遺構が新しい。壁は外反気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は全体的にしまっている 3 層からなり、3 層褐色土中には焼土粒がわずかに混じる。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。

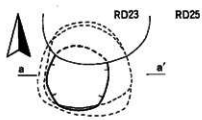
第 67 図 79 は小型の蓋付土器である。蓋部と胴部は焼成前に切り離されたと思われる。切断面には凹凸がみられ、蓋部を胴部にきっちりはめ込むことができる。外面の蓋部には「へ」の字状、胴部は直線的な形の各 2 ヶ所の突起状の吊り手があり、それぞれ孔が貫通しており、蓋部、胴部を同時に紐状のもので結び合わせることができる。また、外面には赤色顔料の付着がわずかにみられる。胴部の突起部で最大径をもち、突起部を結ぶように隆帯状の平行沈線がみられる。蓋部、胴部とも無文研磨されたあと曲線文など沈線による連続した文様がみられ、突起部以下は横位の削り調整がみられる。時期は後期初頭に位置付けられると思われる。78、81、83 は沈線と磨り消しにより、「H」字状、楕円文などがみられ、中期に属すると思われる。78 は平縁であり、81 は波状口縁である。83 は底部付近である。80 は折り返し口縁で頸部に無文帯を有し、そのすぐ下に 2 本の沈線を施していることから、後期の粗製土器であると思われる。82 は底部になで調整がみられるが時期は不明である。84 は網目状捺糸文を地文とした粗製土器で後期のものと思われる。埋土から巖型石匙が 1 点出土している。

RD 24 土坑 (第 53 図、写図 14)

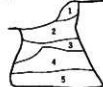
<位置> G7U09

<プラン> 楕円形 <規模> 開口部径 161×136 cm、底径 136×110 cm、深さ 30 cm。

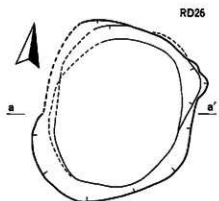
IV層上面で検出した。長軸方位は東—西である。壁は外反気味に立ち上がる。底面はほぼ平



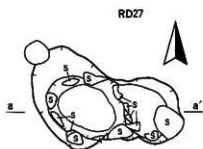
L=200.400m



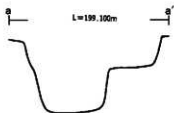
- 1 7.5YR 灰褐色
- 2 7.5YR 暗褐色
- 3 7.5YR 暗褐色
- 4 7.5YR 灰褐色
- 5 10 YR 灰褐色



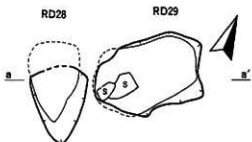
L=200.200m



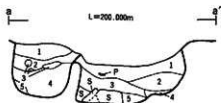
L=199.100m



0 1 2 m



L=200.000m



- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1 10 YR 暗褐色 | 1 7.5YR 灰褐色 |
| 2 10 YR 暗褐色 | 2 10 YR 暗褐色 |
| 3 10 YR 暗褐色 | 3 10 YR 暗褐色 |
| 4 7.5YR 暗褐色 | 4 10 YR 暗褐色 |
| 5 10 YR 暗褐色 | 5 7.5YR 暗褐色 |

第54圖 RD25、26、27、28、29土坑

坦であり、礫がみられた。埋土はしまりのあるクロボク土の単層で中央部に河原石を多く含む。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。出土遺物はなし。

RD 25 土坑 (第 54 図、第 68 図 85、写図 15、39)

〈位置〉 G 6 E 18

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 65 cm、底径約 95 cm、深さ 95 cm。

IV層上面で検出した。RD 23 によって北側が壊されている。断面形はフラスコ状を呈する。壁は 50 cm 程度まで内傾した後開口部まで直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。埋土はクロボク土を基調とした 5 層からなる。

出土遺物はⅢ群土器が埋土より 1 点出土している。底部に削り調整を行なっている。

RD 26 土坑 (第 54 図、第 68 図 86~93、写図 15、39)

〈位置〉 G 6 D 19

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 190 cm、底径 150 cm、深さ 58 cm。

IV層上面で検出した。東側には RA 03 が隣接し、北西側は一部木根により攪乱されていた壁は概ね垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土はしまりに欠けるクロボク土を基調としている。

出土遺物はⅡ群、Ⅲ群土器がある。91 はⅡ群土器であり、胎土に繊維を多量に含む。86、87、90 はⅢ群土器に属し、沈線と磨り消しによる文様がみられる。86 は波状口縁である。87 は充填縄文である。90 は平縁で口縁部に刺突列がみられる。88、89 は時期不明の粗製土器である。92、93 は底部であり、92 は網代痕、93 は笹葉痕が底面にみられる。

RD 27 土坑 (第 54 図、第 69 図 94~101、写図 15、40)

〈位置〉 G 7 M 07

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 150×100~70 cm、底径 63×42 cm、深さ 74 cm。

IV層上面で検出した。東隣には RA 13 の炉が位置し、重複関係にあると思われるが、耕作により RA 13 が削平を受けたためプランを明確にできず新旧関係は不明である。長軸方位は東一西である。東側に幅約 40 cm、深さ 30 cm のテラス状の平坦な面を持つ。壁は外反気味に立ち上がり、北西側に一部崩落がみられた。掘り込みは蹠層まで達し、壁および底面は凹凸がみられる。埋土はクロボク土を基調とし、褐色土と黄褐色土がブロック状あるいは縞状に混じる。埋土の状況から人為的堆積と思われる。出土遺物は破片のみで第Ⅳ I 群の土器と思われる 94、96 は口縁部に円形の刺突がみられる。99 は沈線に沿って円形の刺突がみられる。100、101 は底部に笹葉痕がみられる。

RD 28 土坑 (第 54 図、写図 15)

〈位置〉 G 6 C 20

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 (80) × 50 cm、底径 84 × 50 cm、深さ 74 cm。

IV層上面で検出した。北東側には RD 29 が隣接する。長軸方位は N-20°-W である。壁はほぼ直立気味に立ち上るが、北側では内傾して立ち上がる。底面は平坦である。埋土は基本的に暗褐色土の 3 層からなり褐色土がブロック状に混じる。出土遺物はなし。

RD 29 土坑 (第 54 図、第 69 図 102~106、写図 15、40)

〈位置〉 G 6 C 20

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 124 × 73 cm、底径 114 × 67 cm、深さ 68 cm。

IV層上面で検出した。長軸方位は N-50°-E である。壁は東側で湾曲するほかは直立気味に立ち上がる。底面は東側が一段高くなるものの平坦である。埋土はクロボク土を基調とした 5 層からなり、底面には人頭大の河原石 2 個が残っていた。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。

出土遺物は第 III 群土器が 102 で波状口縁に沈線による逆 U 字文がみられる。第 IV 群土器 103~106 である。104 の口縁部は波状「く」の字に外反する。口縁部から頸部の沈線まで無文帯をもち、沈線以下は沈線と磨り消しによる波状文や曲線文がみられる。105、107、108 は異条の斜行縄文である。106 は口縁部と胴部を区切るように隆起線を巡らしている。隆起線上には意図的な刻みや刺突はみられないが、胴部にみられる網目状燃糸文がわずかに残る。波状口縁で頂部と思われる部分から縦の隆起線が横位の隆起線に接続し、その交点に中央に刺突を施したボタン状貼りつけが見られる。さらに横位の隆起線以下は網目状燃糸文上に沈線による波状文や懸垂文が見られる。

RD 30 土坑 (第 55 図、第 70 図 107~109、写図 15、40)

〈位置〉 G 6 D 16

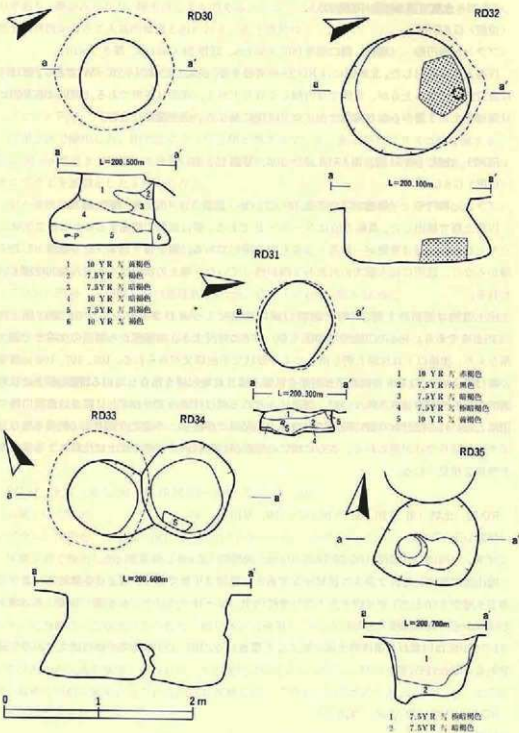
〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 80 cm、底径約 125 cm、深さ 75 cm。

地山面で検出した。フラスコ状ビットである。底面は平坦である。埋土は全体的にしまりのある 6 層からなる。1 層は礫を多く含む黄褐色土、以下はクロボク土を基調としている。埋土の状況から人為的堆積と思われる。

107~109 はいずれも第 IV 群土器に属すると思われる。107、108 は異条の斜行縄文であり平縁であると思われる。

RD 31 土坑 (第 55 図、写図 15)

〈位置〉 G 6 E 16



第55图 RD30、31、32、33、34、35土坑



〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径90×75 cm、底径92×82 cm、深さ25 cm。

地山面で検出した。長軸方位はN-70°-Wである。壁は内湾気味に立ち上がる。底面には凹凸がみられる。埋土は基本的に4層からなり、全体的にしまりがあり褐色土をブロック状に含む。出土遺物はなし。

RD 32 土坑 (第55図、第70図110~115図、第71図116~121、第80図5、写図15、41、52)

〈位置〉 G6F16

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約130 cm、底径約130 cm、深さ64 cm。

地山面で検出した。壁は北側でやや内湾するほかは直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。埋土はクロボク土を基調としており、全体的に焼土が粒子状に混じり北側下位には廃棄焼土が約26 cm堆積していた。

出土遺物は114と116が第II群、110~113、115、117は第IV群土器、120が第V群土器と思われる。110は口縁部がやや外反する波状口縁で折り返し口縁を意識した沈線の施文とボタン状の貼りつけがみられる。体部は地文を残し、沈線による波状文などがみられる。111、112は地文に斜行沈線がみられる。112は小型壺で地文を残し、沈線による波状文などがみられる。底部には網代痕が残る。114は平縁で罌状の隆起線をもち、沈線と磨り消しによる文様がみられる。117は鉢の突起部と思われる。119、121は網代痕がみられ、118は木葉痕がみられる。120は口縁部に突起をもつ。後期初頭の遺物が多く出土している。またつまみ部が欠損した巖型の石匙が1点出土している。

RD 33 土坑 (第55図、第71図122~125、第72図126~131、写図15、41、42)

〈位置〉 G6G16

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約80 cm、底径約120 cm、深さ95 cm。

地山面で検出した。東側がRD34によって壊されている。断面形はフラスコ状である。底面は平坦である。埋土は上位のクロボク土と下位の褐色土に大別される。下位の褐色土はRD34構築時の埋め戻しに用いられたと思われる。

出土遺物は第II群、III群、IV群土器が出土している。第72図129は第II群1Bに属する。第72図126は沈線と磨り消し、充填縄文がみられる。第71図122は内外面ともナデ調整がみられる。123~125は地文を残し、沈線による文様がみられる。125は平縁で口縁部に隆線と沈線による文様とボタン状の二列の縦の刺突がみられる。124は第III群または第IV群の土器と思われる。130は底面に木葉痕を残し、内面に炭化物の付着がみられる。131の底部は網代痕がみられる。

RD 34 土坑 (第55図、写図15)

〈位置〉 G 6 G 16

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 100 cm、底径約 75 cm、深さ 95 cm。

地山面で検出した。壁は直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。埋土はしまりのあるクロボク土を基調とし、中位には幅 10 cm 程度の黄褐色粘土がみられた。埋土の状況から人為的堆積と思われる。出土遺物はなし。

#### RD 35 土坑 (第 55 図、第 72 図 132~134、写図 16)

〈位置〉 G 6 H 15

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 100 cm、底面は長軸 67 cm、短軸 35 cm、深さ 57 cm。

地山面で検出した。北側が RD 44 に壊されている。壁はやや外反気味に立ち上がる。底面は楕円形を呈するが西側に直径 30 cm、深さ 9 cm の柱穴状の掘り込みが見られる。埋土はクロボク土の 2 層からなる。

132 は鉢の突起部と思われる。ボタン状の貼りつけがみられる。134 の底部はなで調整と思われる。

#### RD 36 土坑 (第 56 図、写図 16)

〈位置〉 G 6 H 16

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 140×90 cm、底径約 70 cm、深さ 106 cm。

地山面で検出した。RD 41 と重複関係にあり、本遺構が新しい。長軸方位は N-70°-E である。壁は北西側が RD 41 に壊されているほかは直立気味に立ち上がり、頸部付近から外傾する。東側に幅 30 cm、深さ 25 cm のテラスを有する。底面は平坦である。埋土はクロボク土の 5 層からなり、全体的にしまっている。6 層は褐色土である。出土遺物はなし。

#### RD 37 土坑 (第 56 図、写図 16)

〈位置〉 G 6 G 10

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径 100×85 cm、底径 112×105 cm、深さ 25 cm。

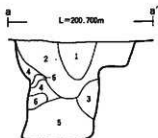
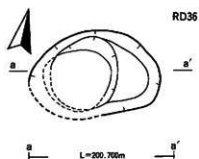
地山面で検出した。壁は内傾気味に立ち上がり、断面形はフラスコ状を呈する。底面は平坦である。埋土はしまりがあり 3 層目の褐色土が最も厚く堆積していた。底面に幅 40 cm ほどの三角形の平石が出土した。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。出土遺物はなし。

#### RD 38 土坑 (第 56 図、第 72 図 135~137、第 73 図 138、第 81 図 10、写図 16、42、53)

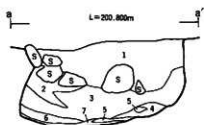
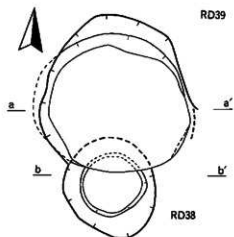
〈位置〉 G 6 G 15

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径 100 cm、底径 61 cm、深さ 92 cm。

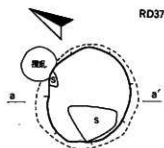
地山面で検出した。RD 39 と重複関係にあり、本遺構が古い。壁は外反気味に立ち上がるが



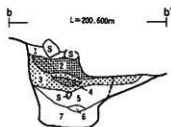
- 1 10 YR 灰 黑褐色
- 2 7.5YR 灰 暗褐色
- 3 7.5YR 灰 黑褐色
- 4 10 YR 灰 黑褐色
- 5 10 YR 灰 黑褐色
- 6 10 YR 灰 褐色



- 1 7.5YR 灰 暗褐色
- 2 7.5YR 灰 暗褐色
- 3 7.5YR 灰 暗褐色
- 4 7.5YR 灰 黑褐色
- 5 10 YR 灰 褐色
- 6 5 YR 灰 暗赤褐色
- 7 10 YR 灰 黑褐色



- 1 10 YR 灰 黑色
- 2 10 YR 灰 黑褐色
- 3 10 YR 灰 褐色



- 1 7.5YR 灰 暗褐色
- 2 5 YR 灰 赤褐色
- 3 7.5YR 灰 暗褐色
- 4 5 YR 灰 暗赤褐色
- 5 10 YR 灰 暗褐色
- 6 10 YR 灰 褐色
- 7 7.5YR 灰 黑褐色

第56图 RD36、37、38、39土坑

東側のほうが開きが大きい。底面は平坦である。埋土は7層からなり、上位の焼土及び焼土を多く含む層、中位のクロボク土、下位のしまりに欠けるクロボク土の3つに大別することができる。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。

第72図135は櫛状突起をもつ大型壺である。胴部下位に沈線による文様の区画がみられ、沈線より下は無銘の地文がみられる。口縁部から胴部にかけては無文研磨した後沈線による文様を施している。また、表裏面ともわずかに赤色顔料が付着している。137は口縁部から胴部の下位まで沈線による文様がみられ、下位から底部にかけては無文研磨されている。文様を区画する沈線や隆線はみられない。また沈線と突起による土製の胴輪が出土した。いずれも後期初頭に属する遺物と思われる。凹んだ部分と磨面がこの凹石が1点出土している。

RD 39 土坑(第56図、第73図139、140、第80図6、写図16、42、53)

〈位置〉G6G14

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径170cm、底径150cm、深さ90cm。

地山面で検出した。壁は西側が内傾気味に立ち上がるほかは直立気味に立ち上がる。底面は鍋底状を呈する。埋土はクロボク土を基調とした7層からなる。1層下面にはコブシ大から人頭大の河原石が多く混じって見られ、3層以下には焼土がブロック状及び粒子状が混じって見られた。埋土の状況から人為的堆積と思われる。

第73図139は折り返し口縁を有する粗製土器土器で後期のものと思われる。また刃部に欠損がみられる磨製石斧が1点出土している。

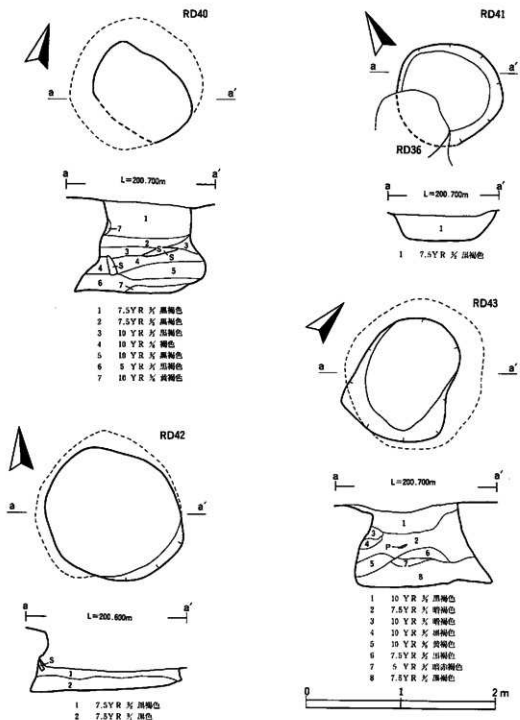
RD 40 土坑(第57図、第73図141~144、第74図145、147、第81図8、9、写図16、42、43、53)

〈位置〉G6F12

〈プラン〉楕円形 〈規模〉開口部径110×80cm、底径約134cm、深さ97cm。

地山面で検出した。断面形はフラスコ状である。壁は内傾気味に立ち上がり、頸部付近で直立する。南側は木根による擾乱を受け、一部頸部の崩落が見られた。埋土はしまりのあるクロボク土を基調とした7層からなり、全体的に礫を多く含む。2層には焼土、4層には褐色土がブロック状に混じる。

第73図141は深鉢で残存部分は平縁であるが、波状口縁であると思われる。底部から胴部にかけて外反気味に立ち上がり、頸部より内湾し口縁部は外反する。口縁部から頸部にかけて波状文や平行沈線による文様をもち、胴部は網目状燃糸文を残す。142は小型鉢であり口縁部は波状で口縁部から胴部上半まで波状文や平行沈線による文様がみられ、胴部は複節斜行縄文がみられる。143、144は地文を残し、沈線による文様が見られる。147は木葉痕が底部にみられる。141~144は後期初頭に属する土器と思われる。磨石が2点出土している。



第57图 RD40、41、42、43土坑

RD 41 土坑 (第 57 図、写図 17)

〈位置〉 G 6 H 16

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 110 cm、底径約 90 cm、深さ 30 cm。

地山面で検出した。壁は西側の一部が RD 36 に壊されているほかは底面より外反しながら立ち上がる。底面は平坦である。埋土はクロボク土の単層である。出土の遺物はなし。

RD 42 土坑 (第 57 図、第 74 図 148~156、写図 17、43)

〈位置〉 G 6 E 14

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 140 cm、底径約 150 cm、深さ 62 cm。

地山面で検出した。壁は内傾気味に立ち上がり、断面形はフラスコ状である。底面は平坦である。埋土はクロボク土の 2 層からなる。

第 III、IV 群に属する土器が出土している。第 74 図 151 は沈線と磨り消しによる文様がみられることから III 2 C 群土器とした。150 は口縁部の無文帯、155 は複節の地文から III 3 群土器に属する可能性がある。148 は口縁と口唇部に円形の刺突がみられ、胴部は無文研磨した後沈線による文様がみられる。149 は折り返し口縁をもつ。153 は地文の上から沈線による文様がみられる。152 は口縁部がやや外反し、154 は榧葉状の沈線がみられる。156 は底面に筆葉痕を残す。後期初頭に位置付けられる遺物がまとまって出土している。

RD 43 土坑 (第 57 図、第 75 図 157~168、写図 17、43、44)

〈位置〉 G 6 D 10

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 134×80 cm、底径約 160 cm、深さ 97 cm。

地山面で検出した。RE 01 と重複し、本遺構が古い。壁は内湾気味に立ち上がり、頸部から外反する。断面形はフラスコ状を呈する。底面は平坦である。埋土は全体的にしまりのあるクロボク土 8 層からなる。7 層は廃棄された焼土と思われる。

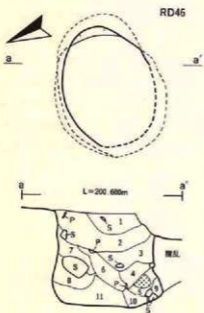
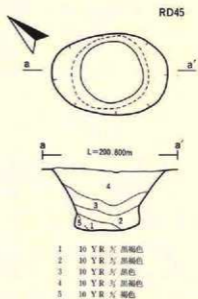
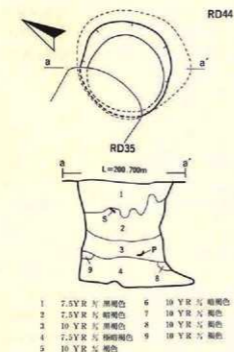
III 群土器と IV 群土器が出土している。第 75 図 157 は沈線による隆線がみられる。158~162 は平行沈線、曲線文による文様がみられる。158 は平行沈線により区画した部分に円形の刺突がみられる。163~167 は粗製土器である。164、165 は同一個体と思われ、平縁で表面に粗い削り調整後無節の RL の地文を施している。裏面に輪積痕が明瞭に残る。167 は底面に網代痕がみられる。168 は円盤状土製品で打ち欠きによる整形がみられる。

RD 44 土坑 (第 58 図、第 76 図 169~171、写図 17、44)

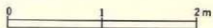
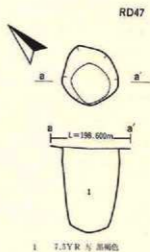
〈位置〉 G 6 H 12

〈プラン〉 円形 〈規模〉 開口部径約 100 cm、頸部径 90 cm、底径約 120 cm、深さ 110 cm。

地山面で検出した。RD 35 と重複し、本遺構が新しい。断面形はフラスコ状を呈し、壁は外



- |                  |
|------------------|
| 1 10 YR 5/ 黑褐色   |
| 2 10 YR 5/ 黑褐色   |
| 3 10 YR 5/ 黑褐色   |
| 4 5 YR 5/ 黑褐色    |
| 5 5 YR 5/ 红-赤褐色  |
| 6 10 YR 5/ 褐色    |
| 7 10 YR 5/ 黑褐色   |
| 8 7.5YR 5/ 黑褐色   |
| 9 7.5YR 5/ 暗褐色   |
| 10 7.5YR 5/ 棕暗褐色 |
| 11 10 YR 5/ 黑褐色  |



第58图 RD44、45、46、47土坑

反気味に立ち上がる。底面は凹凸がみられる。埋土はしまりのないクロボク土の4層からなる。

第76図169は口縁部の無文帯とわずかに沈線がみられることからⅢ群土器の可能性はある。170は網代痕がみられ、171は木葉痕がみられた。171はⅣ群の粗製土器である可能性がある。土坑の時期は切り合い関係より後期より新しいと思われる。

#### RD 45 土坑 (第58図、写図17)

〈位置〉 G 6 J 14

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径 122×87 cm、頸部径 65 cm、底径 80 cm、深さ 62 cm。

地山面で検出した。長軸方位 N-35°-W である。壁はやや鍋底の底面より内湾気味に立ち上がり、底面から10cm程度から外反する。埋土はクロボク土の4層からなる。出土遺物はなし。

#### RD 46 土坑 (第58図、第76図173~175、第77図176~186、写図44、45)

〈位置〉 G 6 F 17

〈プラン〉 楕円形 〈規模〉 開口部径推定 120×90 cm、底径 152×115 cm、深さ 99 cm。

地山面で検出した。西南部分が木根により壊されている。長軸方位は東-西である。壁は平坦な底面から内湾気味に立ち上がったのち、わずかに外反する。断面形はフラスコ状を呈する。埋土はクロボク土を基調とした11層からなり、全体的にしまりがあり小石と炭化物を含む。

出土遺物は多く、おもに第Ⅳ1群土器が出土している。第76図172は深鉢で折り返しの6つわずかな突起がみられる波状口縁をもち、口縁頂部に刻み目と縦位の2個の刺突がみられ、その下にボタン状貼りつけをもつ。口縁部から胴部上半まで波状文や平行沈線などによる文様がみられ、それ以下は地文のみである。173、175、178は地文の上に沈線による文様がみられる。178も折り返し口縁である。176、177は口縁部の文様帯で隆線とボタン状の貼りつけがみられる。179~181はⅣ群の粗製土器である。179は葡萄状沈線が施されている。180、181は折り返し口縁で口縁部が外反する。182は口縁部に突起をもつ。183は小波状口縁で凹んだ部分に刺突がみられる。184には補修孔がみられる。186は腕輪型土製品で地文が残る。後期初頭の土器がまともに出て出土している。

#### RD 47 土坑 (第58図)

〈位置〉 G 6 P 23

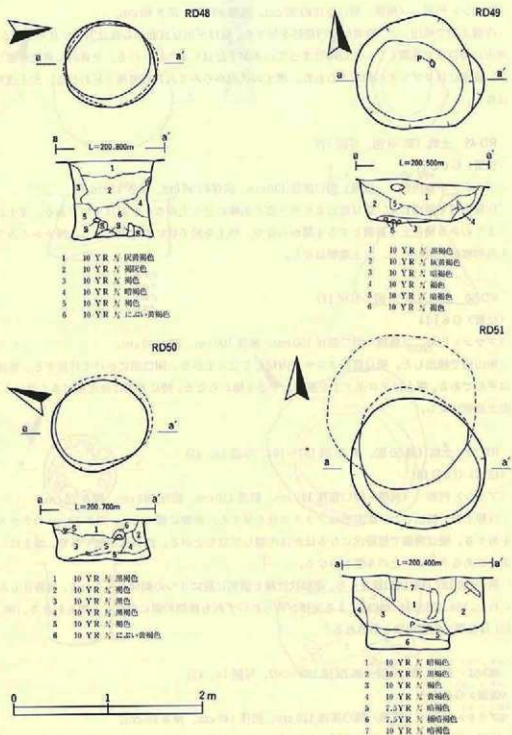
〈プラン〉 不整形円形 〈規模〉 開口部径 60 cm、底径 45 cm、深さ 90 cm。

地山面で検出した。柱穴状ピットである。埋土はクロボク土の単層である。出土遺物はなし。

#### RD 48 土坑 (第59図、写図17)

〈位置〉 G 6 B 11





第59图 RD48、49、50、51土坑

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径約95 cm、底径95 cm、深さ80 cm。

IV層上面で検出した。断面形は円筒形を呈する。壁は平坦な底面から直立気味に立ち上がる。埋土は褐色土を基調とし、上位はしまっているが下位はしまりにかける。全体的に焼土が混じり、底面にはコブシ大の礫がみられた。埋土の状況からみて人為的堆積と思われる。出土遺物はなし。

#### RD 49 土坑 (第59図、写図17)

〈位置〉G6D17

〈プラン〉不整形円形 〈規模〉開口部径130 cm、底径約95 cm、深さ45 cm。

IV層上面で検出した。壁は底面よりやや直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。埋土はしまりのある褐色土を基調とする4層からなり、焼土を粒子状に微量混入する。埋土からみて人為的堆積と思われる。出土遺物はなし。

#### RD 50 土坑 (第59図、写図17)

〈位置〉G6J14

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径100 cm、底径100 cm、深さ40 cm。

地山面で検出した。壁は底面よりやや内傾して立ち上がり、開口部にかけて外反する。底面は平坦である。埋土はクロボク土を基調とする5層からなる。特に3層は炭化物が多く混じる。出土遺物はなし。

#### RD 51 土坑 (第59図、第78図187~194、写図18、45)

〈位置〉G6D18

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径140 cm、頸部110 cm、底径162 cm、深さ76 cm。

IV層上面で検出した。断面形はフラスコ状を呈する。南側に幅40 cm、深さ78 cmのテラスを有する。壁は南側で階段状になるほかは内傾して立ち上がる。底面は平坦である。埋土はしまりのあるクロボク土の5層からなる。

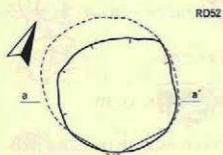
第78図187は波状口縁をもち、連鎖状沈線と頂部に縦に3つの刺突がみられる。補修孔もみられた。189、193、194は沈線による文様がみられいづれも後期初頭に属すると思われる。190、191は後期の粗製土器と思われる。

#### RD 52 土坑 (第60図、第78図195~202、写図18、45)

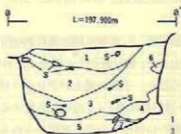
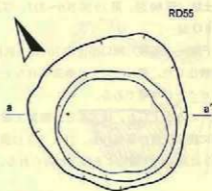
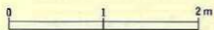
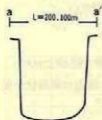
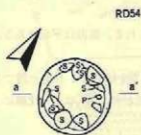
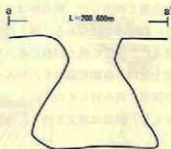
〈位置〉G6C19

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径120 cm、底径140 cm、深さ68 cm。

IV層上面で検出した。壁は床面より内傾して立ち上がる。底面は平坦である。埋土はしまり



- 1 7.5YR 与 黑褐色
- 2 7.5YR 与 暗褐色
- 3 10 YR 与 暗褐色
- 4 10 YR 与 黑褐色



- 1 8 YR 与 黑褐色
- 2 8 YR 与 黑色
- 3 7.5YR 与 黑色
- 4 10 YR 与 褐色
- 5 7.5YR 与 黑褐色
- 6 5 YR 与 赤褐色

第60图 RD52、53、54、55土坑

のあるクロボク土5層からなり、褐色土と黄褐色土が全体的にブロック状に混じる。埋土の状況から人為的堆積と思われる。

出土遺物は縄文土器であるが破片のみで時期もまちまちである。

RD 53 土坑 (第60図、第78図203~205、第80図2、写図18、45、51)

〈位置〉 G 6 I 16

〈プラン〉不整形円形 〈規模〉開口部径90×70 cm、頸部68×42 cm、底径約130 cm、深さ108 cm。

地山面で検出した。断面形はフラスコ状を呈する。壁は内傾して立ち上がり、頸部から外反する。底面は平坦である。埋土は全体的にしまりがあり、上位にクロボク土、下位の褐色土に大別され、中位に焼土が混じる。

出土遺物は後期初頭のもののみがみられた。第78図204は折り返し口縁部で無文帯をもち波状口縁の頂部に刻み目とその下に4つの円形の刺突がみられた。205は口縁部が平縁で外反し無文帯をもち、胴部は地文を残し、沈線による文様がみられる。凹基無茎の石族が1点出土している。

RD 54 土坑 (第60図、第79図206~217、写図18、46)

〈位置〉 F 6 O 04

〈プラン〉円形 〈規模〉開口部径約76 cm、底径約63 cm、深さ84 cm。

地山面で検出した。壁は底面より垂直に立ち上がり、凹凸がみられる。底面は平坦である。埋土はクロボク土の単層である。

遺物は破片のみ出土した。ほとんどが粗製土器である。第79図209は第II 1 B群土器であり、口唇部に指頭圧痕がみられる。211、212は後期初頭の土器と思われ、211は平行沈線による文様、212は連鎖状沈線による施文がみられる。

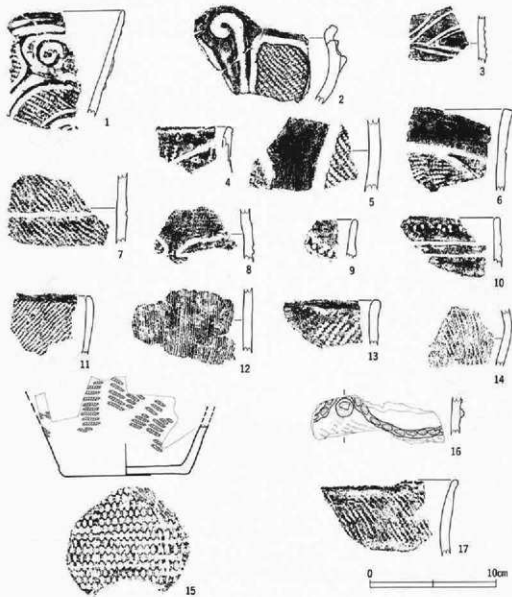
RD 55 土坑 (第60図、第79図218~220、写図18、46)

〈位置〉 G 6 D 12

〈プラン〉不整形円形 〈規模〉開口部径約170 cm、底径約100 cm、深さ約88 cm。

地山面で検出した。壁は底面より緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は鍋底状を呈する。埋土は5層からなり、下位に焼土がブロック状に混じる。

第79図219は口縁部が「く」の字に外反するほぼ完形小型鉢である。4つの波状の小さな突起をもち、突起の口唇部は指頭圧痕がみられる。表面は無文研磨され、裏面はなで調整がみられる。表裏面とも炭化物の付着がみられる。

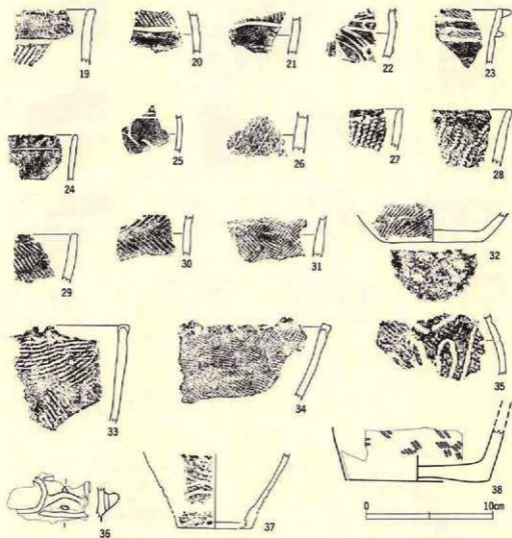


図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
61-1	RD01 礎土中	Ⅲ2 A	35-246	鉄製の欠片	61-9	RD01 礎土中位	IV 1 A	36-258	
-2	〃 礎土中～下位	Ⅲ2 B (C)	-249		-10	〃 〃	IV D	35-252	
-3	〃 礎土	IV 1 D	-254		-11	〃 〃	Ⅳ	36-256	
-4	〃 礎土中位	IV 1	-247		-12	〃 〃	IV 5	-255	
-5	〃 〃	Ⅲ2 C	-250		-13	〃 〃	Ⅳ	-257	
-6	〃 〃	Ⅲ2 C	-253		-14	RD02 礎土中位	Ⅲ3	-260	
-7	〃 〃	Ⅳ	—		-16	RD01	IV 1 A	-259	
-8	〃 〃	IV 1 D	35-248		-17	RD03	IV 5	-261	

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
61-15	RD01 礎土中	—	9.8	(8)	Ⅳ	35-254	鉄部に銅代面

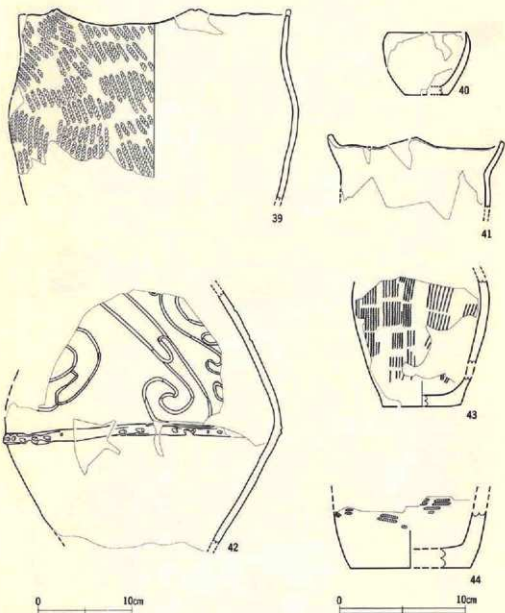
第61図 遺構内出土遺物(土坑1)



図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項
62-19	RD09 埴土	Ⅷ	26-262		62-28	RD09 埴土	Ⅷ 3	26-270	
-20	〃	Ⅷ 2	-263		-29	〃	Ⅷ	-274	
-21	〃	Ⅳ 3 A ①	-264	粘層の欠 落が疑な い。	-30	〃	Ⅷ	-272	
-22	〃	Ⅳ 3 A ①	-265		-31	〃	Ⅷ	-273	
-23	〃	Ⅳ 3 A ①	-266		-32	RD11	Ⅳ 5	-275	
-24	〃	Ⅷ	-271		-34	〃	〃	-276	
-25	〃	V 1 C	-267	-35	〃	Ⅳ 1 D	-277		
-26	〃	Ⅷ	-268	-36	〃	〃	-278		
-27	〃	Ⅷ 3	-269						

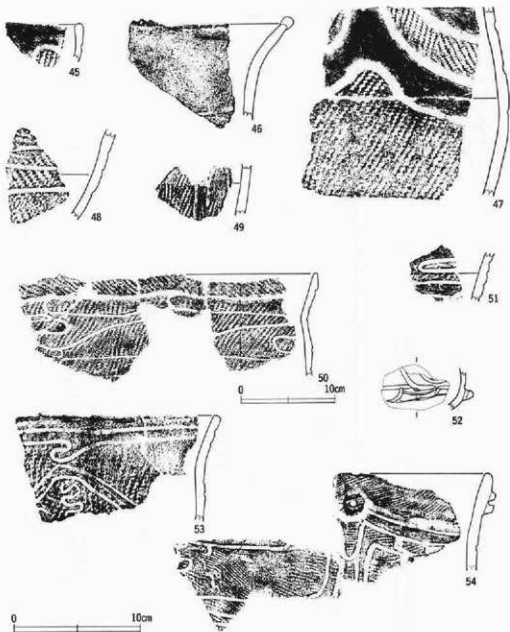
図番号	出土位置・層位	寸 法 (cm)			分類	写 真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
62-32	RD09 埴土	—	7.8	(3.1)	Ⅷ	—	
-37	RD11	—	(6)	(5.8)	Ⅳ 1 D ②	26-279	
-38	〃	—	(11.4)	(4.3)	Ⅷ	—	

第62図 遺構内出土遺物(土坑2)



図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写 真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
63-39	BD13	(28.8)	—	(20.4)	IV 5	37-290	
-40	#	(6.3)	(3.4)	5	IV	-293	
-41	#	13.8	—	(5.3)	IV	-287	
-42	#	(29.7)	—	(27.1)	IV 5	-285	
-43	#	—	(6.3)	(10.4)	IV 1 D③	-293	
-44	#	—	(9.1)	(6.7)	VI	-294	

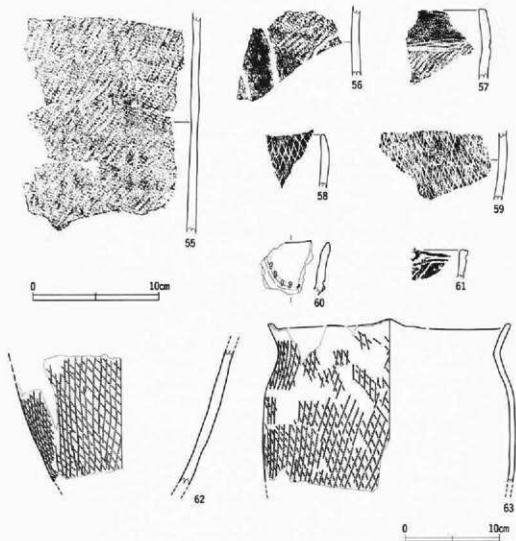
第63図 遺構内出土遺物(土坑3)



図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項
64-45	RD13	Ⅲ 2 B	36-281		64-50	RD13 埋土	IV 1 C ㊟	37-286	器底部分に 刻文あり
-46	#	IV 5	-284	器底部分に 刻文あり	-51	#	IV 1 D	36-282	
-47	#	Ⅲ 2 C	37-289		-52	#	IV 1 C ㊟	-290	器底部分に 刻文あり
-48	#	IV 1 C ㊟	-288		-53	#	IV 1 D	37-281	
-49	#	Ⅲ 2 B	36-283		-54	#	IV 1 C ㊟	-282	器底部分に 刻文あり

第64図 遺構内出土遺物（土坑4）



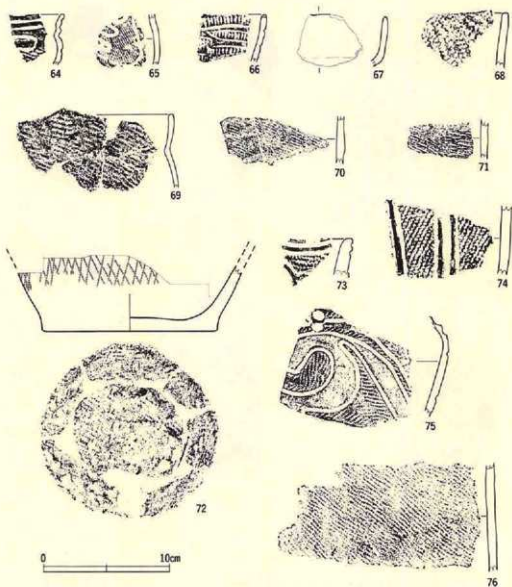


図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項
65-55	RD15 埋土	VI	38-296		65-59	RD15 埋土	IV	38-300	
-56	# #	III 2 C	-297		-60	# #	III 2 C	-301	割取物品
-57	# #	VII	-299		-61	# #	IV 1 D	-302	1.5cm幅の 片断(中心部 破損)
-58	# #	IV	-298		-62	RD18	IV 5	-304	

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写図	備 考
		口 径 (25.6)	底 径 (17.5)	高 寸 (36.7)			
65-63	RD18				IV 5	38-303	

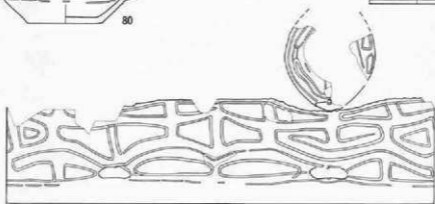
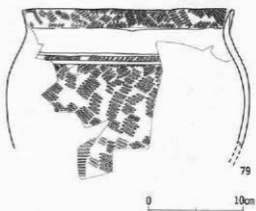
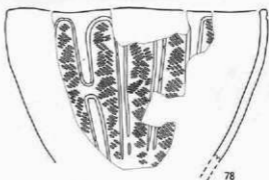
第65図 遺構内出土遺物(土坑5)



図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項
66-64	RD18 埋土	Ⅴ1 D	38-306		65-70	RD18 埋土	ⅤB	38-312	
65	" "	Ⅳ1 C	-309		71	" 埋土下位	ⅤB	-309	
66	" "	Ⅳ3 A ⊙	—		73	RD00 埋土	Ⅱ2 A	-314	
67	" "	ⅤB	38-311	表面に 点状の 刻印が 認められ る。	74	" "	"	-315	
68	" "	ⅤB	-307		75	" "	Ⅳ1 B ⊙d	-316	
69	" 溝南付近	Ⅳ5	-305		76	" "	ⅤB	-313	

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写図	備 考
		口 径	残 径	高 さ			
66-72	RD18 底面付函	—	13.9	(6.0)	Ⅳ5	38-310	新羅時代瓦

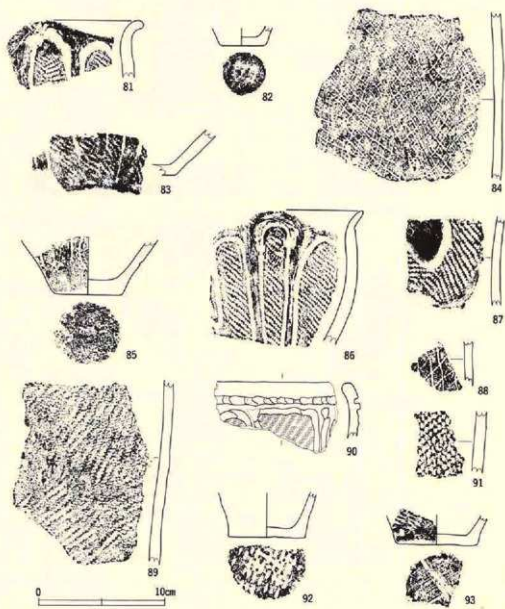
第66図 遺構内出土遺物（土坑6）



図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項
67-77	KD22 埋土	Ⅲ 2 C	39-317	

図番号	出土位置・層位	造 量 (cm)			分類	写 真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
67-78	KD23 埋土	27.5	—	(16.3)	Ⅲ 2 B①	39-318	
-79	#	22.5	—	(17.7)	IV 5	-320	最大径(25.7)cm
-80	#	#	#	(8.7) × (7.7) (10.7) (7.8)	IV 1 D②	-322	表面に赤色顔料付着 切取土層

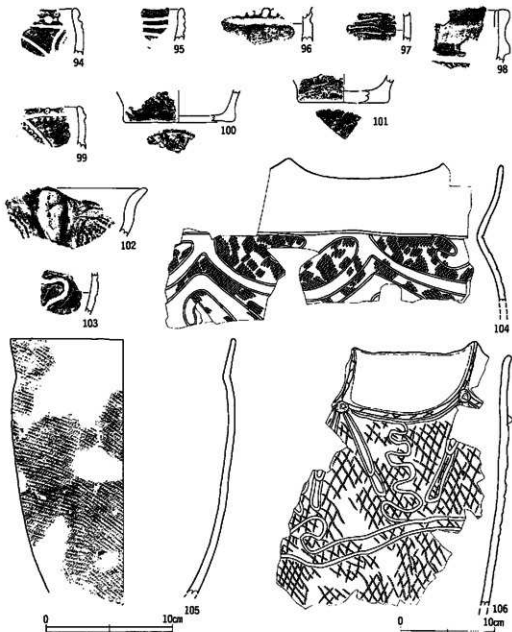
第67図 遺構内出土遺物(土坑7)



図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
68-81	RD23 壇上	Ⅱ 2 B ②	29-319		68-88	RD26 壇上	VII	39-329	
83	# #	Ⅱ 2 B	—		89	# #	VII	—	330
84	# #	VII	29-321		90	# #	Ⅱ 2	—	326
86	RD26 #	Ⅱ 2 H ②	—327		91	# #	Ⅱ 1 B	—	331
87	# #	Ⅱ 2 C	—325						

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写真	備 考
		口 径	高 径	底 径			
68-82	RD23 壇上	—	3.5	(1.4)	VII	—	裏面にナブ調整がみられる
67-85	RD25 #	—	5.3	(4.6)	VII	—	裏面に埋いヤズリ調整
92	RD26 #	—	6.1	(3.5)	VII	29-324	前代貨
93	# #	—	6.2	(2.3)	VII	—328	管車貨

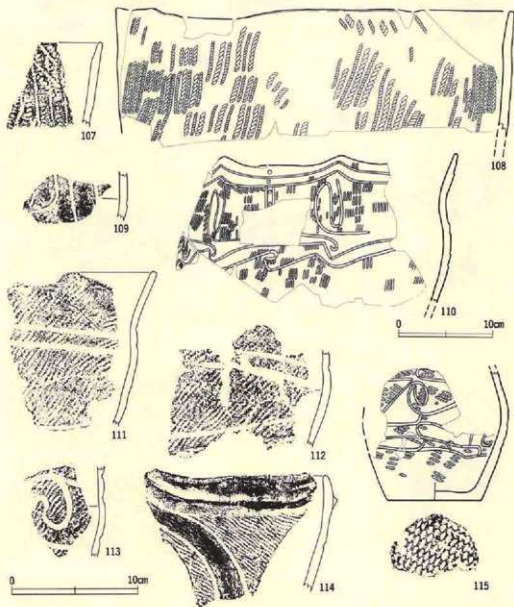
第68図 遺構内出土遺物 (土坑 8)



図番号	出土位置・層位	分類	牙 圓	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写 取	特記事項
94-96	RD27 埋土	IV 1	40-336		99-99	#		IV 1	40-337
-95	#	#	IV	-332	-102	RD29		組 2 B ⊕	-340
-96	#	#	IV 1	333	-103	#		IV 1	-341
-97	#	#	埋	-334	-104	#		IV 1 D	-342
-98	#	#	Ⅲ 2 A	-335	105	#		IV 1 B ⊕ c	-339

図番号	出土位置・層位	法 定 (cm)			分類	写 取	備 考
		口 徑	底 徑	高 寸			
99-100	RD27 埋土		(8.5)	(2.3)	VII	—	密着痕
-101	#	—	(7)	(2.2)	VII	—	#
-105	RD29 #	(23.7)		(27)	IV 5	40-338	

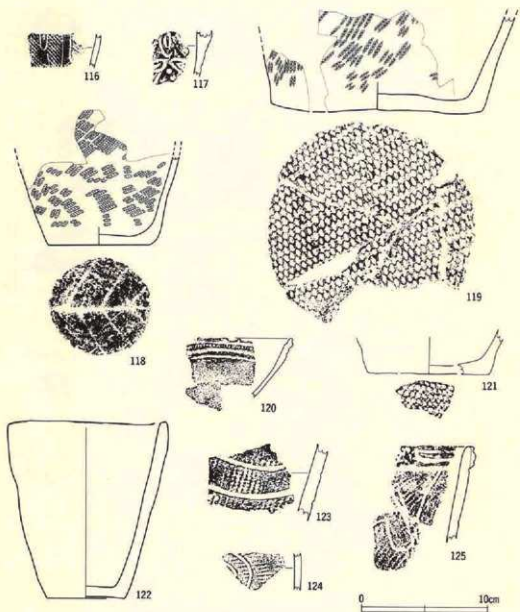
第69図 遺構内出土遺物 (土坑 9)



図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写 真	特記事項
70-107	RIX30 埋土	IV 5	40-344	付加品	70-112	RIX32 埋土	IV 1	41-347	
-109	" "	IV 1	-345		-113	" "	IV 1	-357	
-110	RIX32 "	IV 1 B Q	41-346		-114	" "	Ⅲ 2 C	-352	
-111	" "	IV 1	-351						

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写 真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
70-106	RIX30 埋土	Ø1.6	—	(10)	IV 5	40-343	付加品
-115	RIX32 "	—	7.4	(10.4)	IV 1 C	41-348	銅代貨

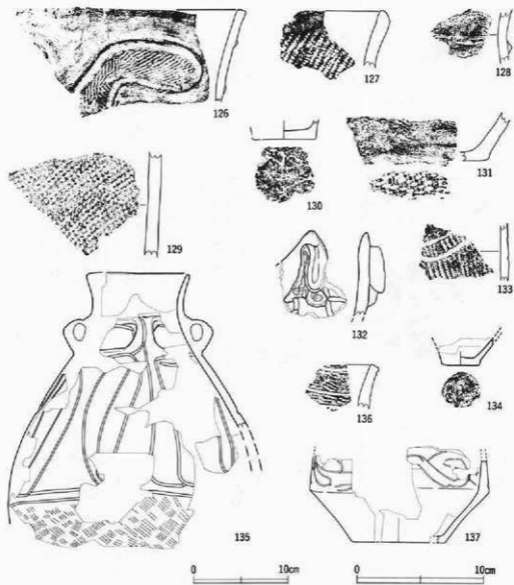
第70図 遺構内出土遺物 (土坑10)



図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項
71-116	RI02	Ⅱ 2 B	41-254		71-123	RI03	埴土	IV 1 e②	41-359
-117	"	"	IV 1 A	-253	-124	"	"	VII	42-264
-120	"	"	V 1 D	-249	-125	"	"	IV 1 目②	41-369
-121	"	"	VII	-250					新代瓦

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写図	備 考	
		口 徑	底 徑	高 寸				
71-118	RI02	埴土	7.6	(19.8)	VII	41-349	木箱出	
-119	"	"	16.8	(7.9)	VII	-358	新代瓦	
-122	RI03	"	12.6	6.2	14	VII	-358	内面十字割製

第71図 遺構内出土遺物(土坑11)



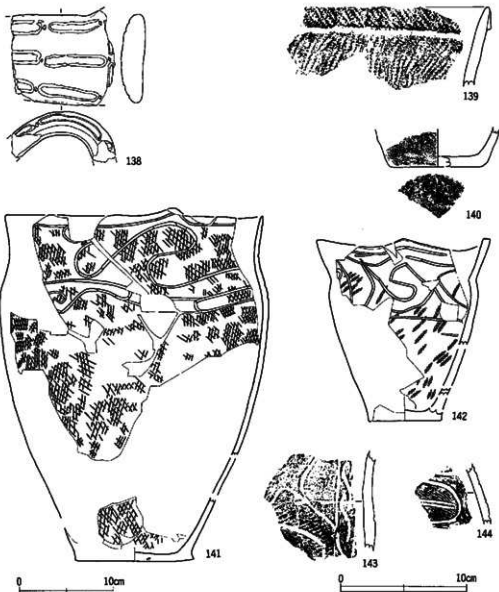
図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
72-126	R003	埋土	III 2 C	42-362	72-131	R103	埋土	VII	41-361 銅代紙
-127	"	"	III 3	-363	-132	R105	"	IV 1 B	42-367 尖起部
-128	"	"	埋	—	-133	"	"	VII	-370
-129	"	"	II 1 E	42-365	-136	R108	"	VII	-371
-130	"	"	埋	—					

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
72-134	R005	埋土	—	3.1	(2.2)	VII	42-369 炭色土片
-135	R008	"	(10.8)	—	(29.1)	IV 1 D②	-366 内外面赤色顔料付着
-137	"	"	—	(7.3)	(7.6)	IV 1 D①	-368

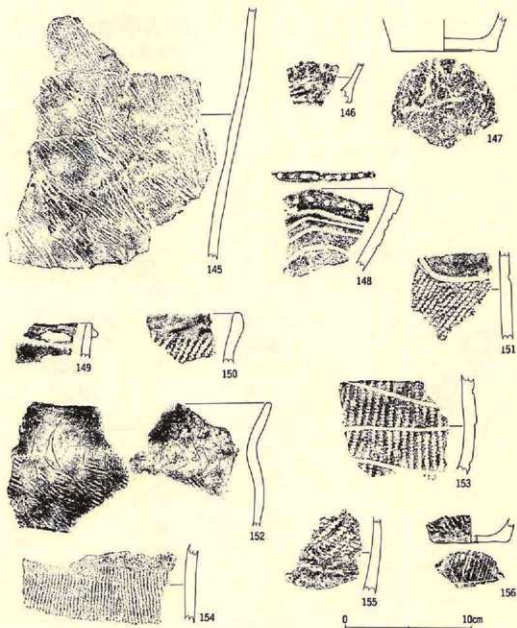
第72図 遺構内出土遺物 (土坑12)





図番号	出土地点・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	分類	写真	備	考
73-138	RD38 埴土	長径 (10.5) 短径 (6.6)	7.2	1.8	14.3	埴物部土 製瓦	42-372	残厚1/3	
図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
73-139	RD38 埴土	IV 5	43-373	羽子目し 片断	73-143	RD40 埴土	IV 1 B ① d	43-378	
-140	# #	VII	-375	異型片	-144	# #	IV 1	-377	
図番号	出土位置・層位	長 度 (cm)			分類	写真	備	考	
		口 径	底 径	高 さ					
73-141	RD40 埴土	(27.2)	12.6	—	IV 1 B ①	42-374			
-142	# #	—	(5.6)	14.5	IV 1 B ①	43-375			

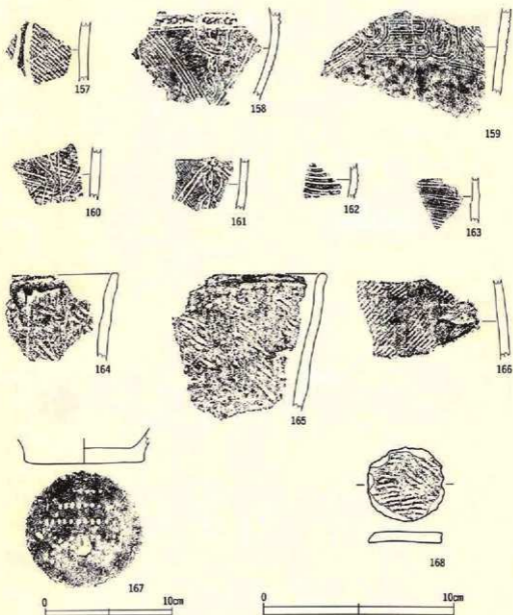
第73図 遺構内出土遺物 (土坑13)



図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項
74-145	RD40 埋土	VII	43-276		74-151	RD42 埋土	III 2 C	43-385	
-146	〃	VII	—		-152	〃	IV 5	-385	釉面
-148	RD42	IV 1 B ②	43-381		-153	〃	IV 1 C ②	-383	
-149	〃	VII	-385	折片高L 1.46	-154	〃	VII	-388	
-150	〃	VII	-386		-155	〃	VII	-387	

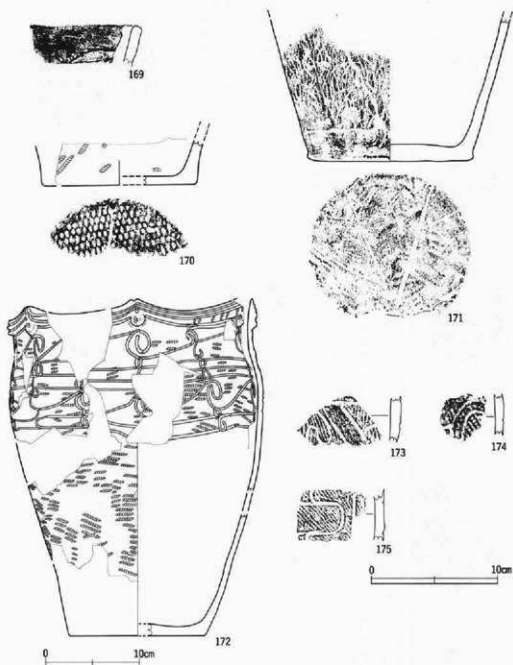
図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写図	備 考
		口 徑	底 径	高 径			
74-147	RD40 埋土	—	8.4	(3)	VII	43-380	木製底
-156	RD42	〃	5.9	(1.9)	VII	-384	木製底

第74図 遺構内出土遺物 (土坑14)



図番号	出土位置・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	分類	写真	備	考
75-168	RD43 埋土	4.0	3.9	0.6	12	円筒状土	—	打ち欠き	
図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
75-157	RD43 埋土	III 2 A	43-390		75-162	RD43	IV 1 D	44-395	
-158	"	"	IV 1 B CD d	44-397	-163	"	IV 5	-396	
-159	"	"	IV 1 D CD d	43-392	-164	"	埋土	VB 5	43-391
-160	"	"	IV 1 B CD d	44-394	-165	"	"	VB 5	44-399
-161	"	"	IV 1 B CD d	-398	-166	"	"	VB 6	
図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写真	備	考	
		口 径	底 径	高 さ					
75-167	RD43 埋土	—	9.5	(2.6)	箱	44-398	銅板版		

第75図 遺構内出土遺物 (土坑15)

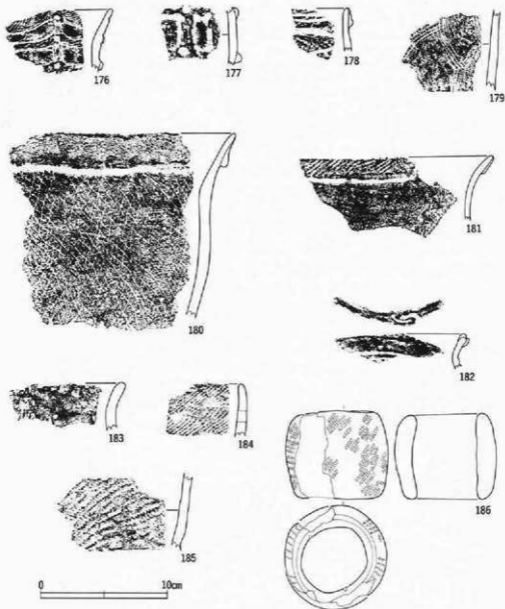


図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
76-169	RD44 埋土	VII	44-400		76-171	RD46 埋土	VII	44-405	
-173	RD46 #	IV 1	-404		-175	#	IV 1 C	-406	

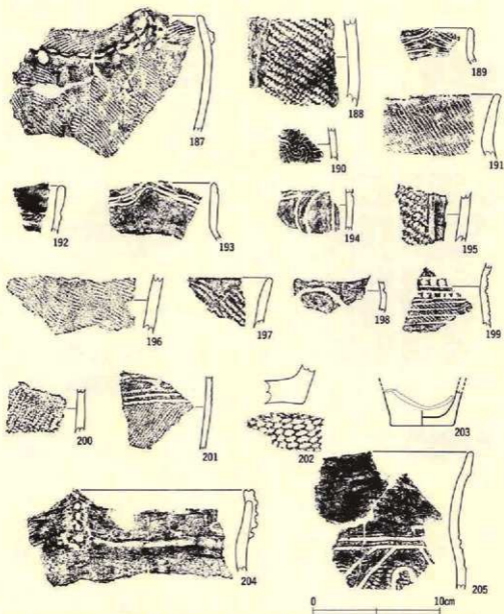
図番号	出土位置・層位	品 量 (cm)			分類	写真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
76-170	RD44 埋土	—	(12.2)	(3.7)	VII	44-401	
-171	#	#	13.2	(11.3)	IV 5	-402	
-172	RD46 #	(25.9) (26.7)	14.2	36.1	IV 1 D②	45-416	折り返し口縁

第76図 遺構内出土遺物 (土坑16)



図番号	出土位置・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	分類	写図	備	考
77-186	RD46 埋土	長径 8.1 短径 5.2	7.1	1.6	23.0	陶輪形土製品	41-415	残存3/4	
図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写図	特記事項
77-176	RD46	埋土	IV1B①C	44-407	77-181	RD46	埋土	IV 5	44-412
-177	#	#	#	-408	-182	#	#	IV 1 D	-414
-178	#	#	IV 1	-409	-183	#	#	VII	-410
-179	#	#	IV 5	-411	-184	#	#	VII	-413
-180	#	#	#	-403	-185	#	#	VII	

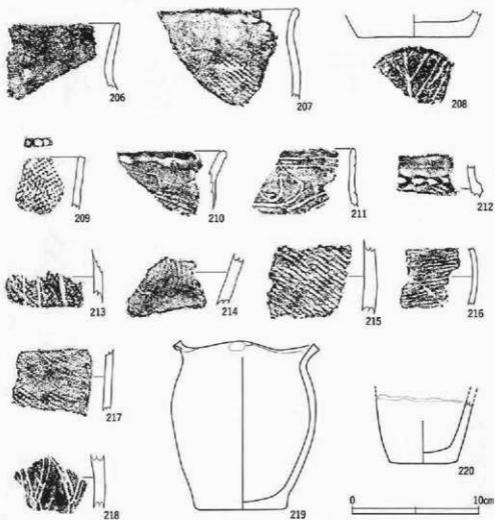
第77図 遺構内出土遺物 (土坑17)



図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
78-187	RD51 雑土	IV 1 A	45-417		78-186	RD52 雑土	VI	45-426	
-188	〃	III 2 B	-418		-197	〃	〃	-427	
-189	〃	IV 1 B ① b	-422		-198	〃	〃	IV 1 D	-428
-190	〃	IV 1 C ②	-421		-199	〃	〃	IV 3 A ②	-432
-191	〃	IV 5	-420		-200	〃	〃	VI	-430
-192	〃	VI	-419		-201	〃	〃	IV	-429
-193	〃	IV 1	-423		-202	〃	〃	VI	-431 時代版
-194	〃	IV 1	-424		-204	RD53	〃	IV 1 B ① a	-434 片之破し口縁
-195	RD52	III 2 H	-425		-205	〃	〃	IV 1 B ① d	-435

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
78-203	RD53 雑土	-	5	(3)	雑	45-433	

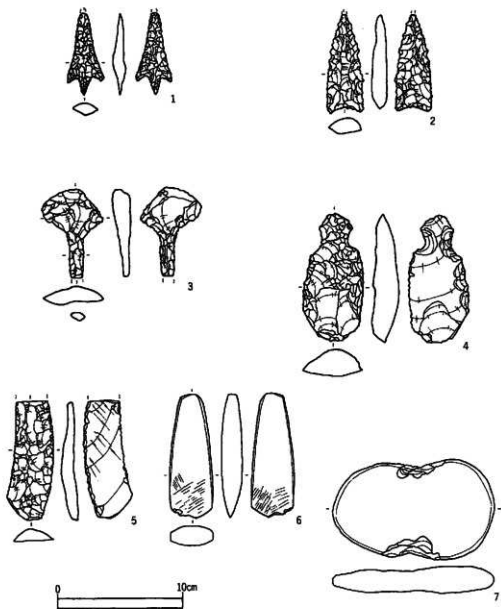
第78図 遺構内出土遺物 (土坑18)



図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
79-206	RD64	Ⅶ	46-436		79-213	RD64	埴土	Ⅱ 2 B	46-443
-207	〃	Ⅶ	437		-214	〃	〃	Ⅶ	-445
-208	〃	〃	438	本筆肌	-215	〃	〃	Ⅶ	-446
-209	〃	Ⅱ 1 B	439	器底左側	-216	〃	〃	Ⅶ	-444
-210	〃	〃	440		-217	〃	〃	Ⅶ	-447
-211	〃	Ⅳ 1 B ㊶	441		-218	RD65	〃	Ⅳ 1	-449
-212	〃	Ⅳ 1 A	448						

図番号	出土位置・層位	法 量 (cm)			分類	写真	備 考
		口 径	底 径	高 径			
79-219	RD55 埴土	11.6	7.2	13.4	Ⅳ 5	46-448	
-220	〃	—	5.4	(5.4)	Ⅶ	-450	

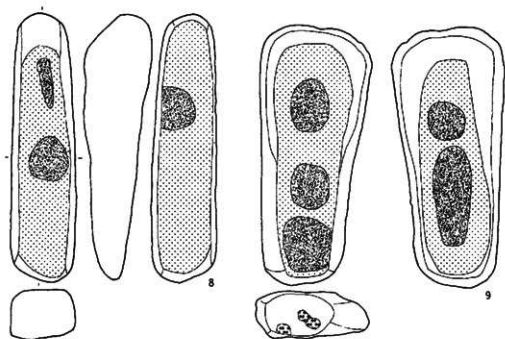
第79図 遺構内出土遺物(土坑19)



図番号	出土位置・層位	器名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	写真	備考
第0-1	RD19 層土	石鏃(凹底有茎)	(3.3)	1.5	0.5	(1.15)	チャート	SI-RD19	
-2	RD63 #	石鏃(凹底)	(4.0)	1.5	0.6	(3.33)	泡質凝灰岩	-RD63	先欠
-3	RD02 #	石鏃(つまみ)	(3.5)	2.4	0.7	(3.60)	珸質泥岩	53-RD02	先欠
-4	RD23 #	石鏃(線型)	5.1	2.4	1.0	11.45	珸質泥岩	-RD23	
-5	RD02 #	石鏃(線型)	(4.8)	1.8	0.5	(5.40)	珸質泥岩	-RD02	つまみ欠
-6	RD39 #	磨製石斧	5.9	1.7	0.8	11.47	凝灰岩	53-RD39	
-7	RD16 #	石鏃	5.4	3.6	1.4	108.5	凝灰岩	RD16	

第80図 遺構内出土遺物 (土坑20)





図番号	出土位置・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	写真	備考
81-8	RD40 埋土	磨石	14.4	3.5	3.7	288.8	凝灰岩	S3-RD40	
-9	RD40 #	磨石	13.9	6.0	2.6	360.0	凝灰岩	-RD40	
-10	RD38 #	磨石	12.2	7.3	5.2	585.0	流紋岩質凝灰岩	-RD38	

第81図 遺構内出土遺物(土坑21)

#### (6) 焼土遺構

##### RZ 01 焼土遺構 (第 82 図、第 84 図 1、写図 18、46)

G 6 H 24 グリッドの II 層中で検出した。80 cm×90 cm の不整形の範囲内に焼土及び炭化物を粒子状に含む範囲が認められた。その範囲内に火熱による赤変の強い 52×22 cm の不整形の焼土面がみられた。焼土の最大厚は 17 cm である。縁辺及び周辺に火熱による赤変した石が数個残っていた。石の掘り方は明瞭に見られなかったが、焼土に伴う可能性が高いことから石組炉であった可能性が考えられる。

埋土より第 VII 群土器が 1 点出土している。

##### RZ 02 焼土遺構 (第 82 図、写図 18)

G 6 K 22 グリッドの II 層中で検出した。焼土は 100×70 cm の不整形である。最大厚は 10 cm である。縁辺にはコブシ大からややおおぶりの石が数個残っていたことや周辺から遺物がまともって出土していたことから住居跡の石組炉の可能性も考えられる。

##### RZ 03 焼土遺構 (第 82 図、第 84 図 2～11、85 図 1～4、6、写図 46、47)

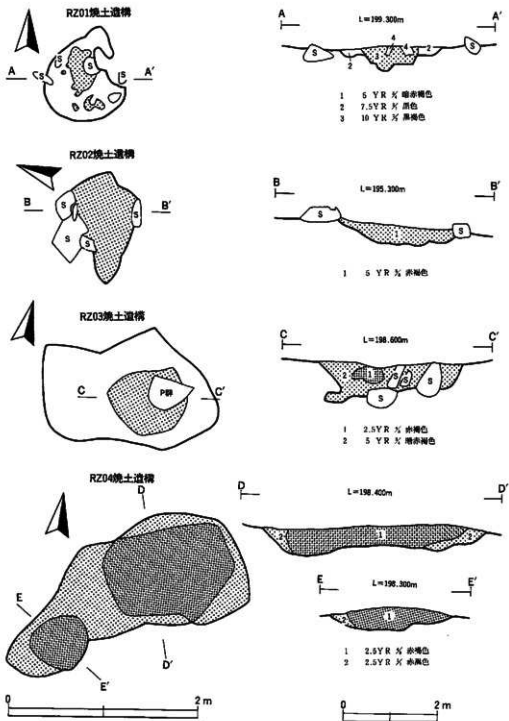
G 6 M 22 グリッドの II 層中で検出した。190×124 cm の火熱による赤変の弱い範囲に赤変の強い 80 cm 前後の円形に焼土面が広がる。焼土の最大厚は 15 cm である。赤変の強い焼土面で縄文土器がまともって出土した。焼土内には赤変した石が見られた。

埋土より第 II、III、IV 群土器が出土している。2 は口唇部に指頭圧痕がみられ、裏面の口縁の一部に地文を残す第 II 1 A 群土器である。5～7 は第 III 2 群土器でいずれも中期後葉から末葉のものと思われる。8 は後期初頭の土器と思われ、折り返し口縁状の隆帯と口縁に無文帯と刺突を持つ。9 は口唇部に刻み目をもち、沈線による文様がみられる後期初頭の土器と思われ。第 84 図 4、10、11、第 85 図 1～4、6 は第 IV 群に属する粗製土器と思われ。第 84 図 4 は折り返し口縁で刺突による突起がみられる。

##### RZ 04 焼土遺構 (第 82 図、第 85 図 5、8～10、写図 47)

G 6 O 22 グリッドの II 層中で検出した。焼土は 260×120～60 cm の不整形に広がる。赤変が強い部分は東西の二ヶ所ある。東側は 150×110 cm の楕円形で焼土の最大厚は 20 cm である。西側は径約 50 cm の円形で焼土の最大厚は 11 cm であった。

焼土中より第 III、IV 群土器が出土している。8 は第 III 2 A 類で隆線による文様がみられる。5、9、10 は後期初頭の第 IV 1 類に属すると思われ、9、10 は地文の上から沈線による文様がみられた。



第82圖 RZ01、02、03、04燒土遺構

**RZ 05 焼土遺構** (第 83 図、第 86 図 1、写図 47)

G 6 J 22 グリッドの II 層中で検出した。火熱のため赤変したと思われる縄文土器の深鉢が検出された。深鉢は西側に底部を向け斜位に埋められていたと思われ、その周り 30~40 cm の範囲で焼土がみられた。焼土の最大厚は 20 cm であった。

深鉢は口縁部に欠損があるものの、頸部から胴部はほぼ完全な形であった。口縁部から頸部は沈線による文様体で胴部は地文のみである。後期初頭の第 IV 1 群土器であると思われる。

**RZ 06 焼土遺構** (第 83 図、第 85 図 7、11~16、第 86 図 2、写図 18、47、48)

G 7 M 01 グリッドの II 層中で検出した。RA 16 と重複するが検出面は RA 16 より上である。RZ 07 の北側に近接し、レベル差が 10 cm 程度ある。焼土は円形で径約 60 cm、最大厚 7 cm であった。

出土した土器の時期は明確でないが、後期初頭の土器が多いと思われる。第 86 図 2 は頸部から口縁部にかけて外反する複節の地文をもつ粗製土器で底部には横位にナデ調整がみられる。7 は注口土器の注口部と思われる。16 は底部に透かしが見られる。

**RZ 07 焼土遺構** (第 83 図、第 85 図 17、写図 18、48)

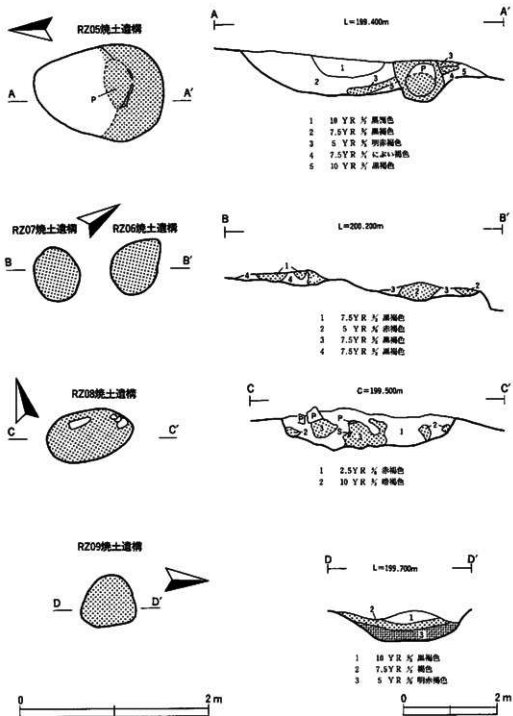
G 7 M 02 グリッドの II 層中で検出した。RA 16 と重複するが検出面は上である。焼土は径約 50 cm の円形で、最大厚 7 cm であった。焼土中より粗製土器が 1 点出土している。

**RZ 08 焼土遺構** (第 83 図)

G 7 P 02 グリッドの II 層中で検出した。焼土は径約 95×54 cm の楕円形で、最大厚 23 cm であった。出土遺物はない。

**RZ 09 焼土遺構** (第 83 図)

G 7 N 01 グリッドの II 層中で確認した。RA 16 と重複するが本遺構の方が新しい。焼土は径約 55 cm の円形で、最大厚 8 cm であった。レンズ状に広がり、下位ほど火熱による赤変が強いことから掘り凹められた地床炉の可能性はある。出土遺物はない。



第83圖 RZ05、06、07、08、09 燒土遺構

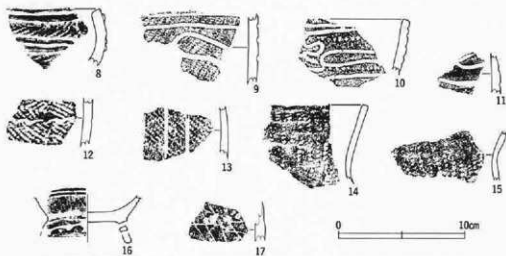
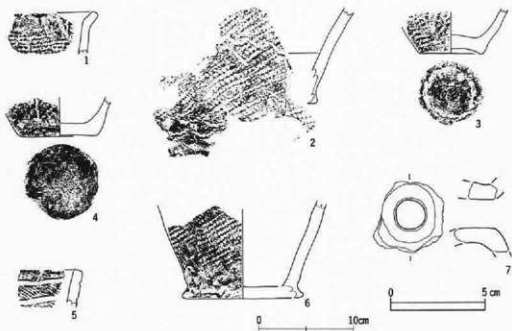


図番号	出土地点・層位	造 度 (cm)			分類	写 真	備 考
		口 径	底 径	高 さ			
84-4	RZ-03 焼土	22.5		9.1	IV 5	46-453	

図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分類	写真	特記事項
84-1	RZ-01 焼土	VI	46-451		84-7	RZ-03	III 2 C	—	
-2	RZ-03	II 1 A	47-452	陶職I底	-8	〃	IV 1 B ①	47-455	
3	RZ-03	VI	47-456		9	〃	IV 1	460	
-5	RZ-03	III 2 B ②	47-456		-10	〃	IV 5	457	
-6	RZ-03	III 2 C	—		-11	〃	IV 5	—	

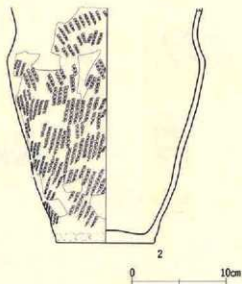
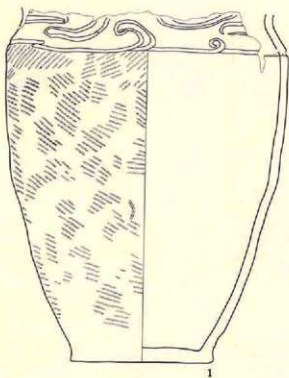
第84図 遺構内出土遺物(焼土遺構1)



図番号	出土地点・層位	法 量 (cm)			分 類	写 真	備 考
		口 徑	施 程	高 さ			
85-3	RZ-03		5.2	(3.2)	Ⅷ	47-462	
-4	#		6.0	(3.1)	ⅣD	463	
-6	#		9.5	(7.1)	Ⅷ	464	

図番号	出土位置・層位	分 類	写 真	特記事項	図番号	出土位置・層位	分 類	写 真	特記事項
85-1	RZ-03	Ⅷ	47-459		85-11	RZ-06 焼土	Ⅳ 1	47-469	
-2	#	Ⅳ 5	454		12	# 焼土	Ⅷ	473	
-5	RZ-04 焼土	Ⅷ	464		-13	# 焼土	Ⅳ	472	
-7	RZ-03	Ⅷ	-		-14	# 焼土	Ⅳ 5	471	
-8	RZ-04 焼土	Ⅲ 2 A	47-465		-15	#	Ⅳ 5	470	
-9	#	#	Ⅳ 1	466	-16	#	V	468	
-10	#	#	Ⅳ 1	467	-17	RZ-07 焼土	Ⅳ	48-476	

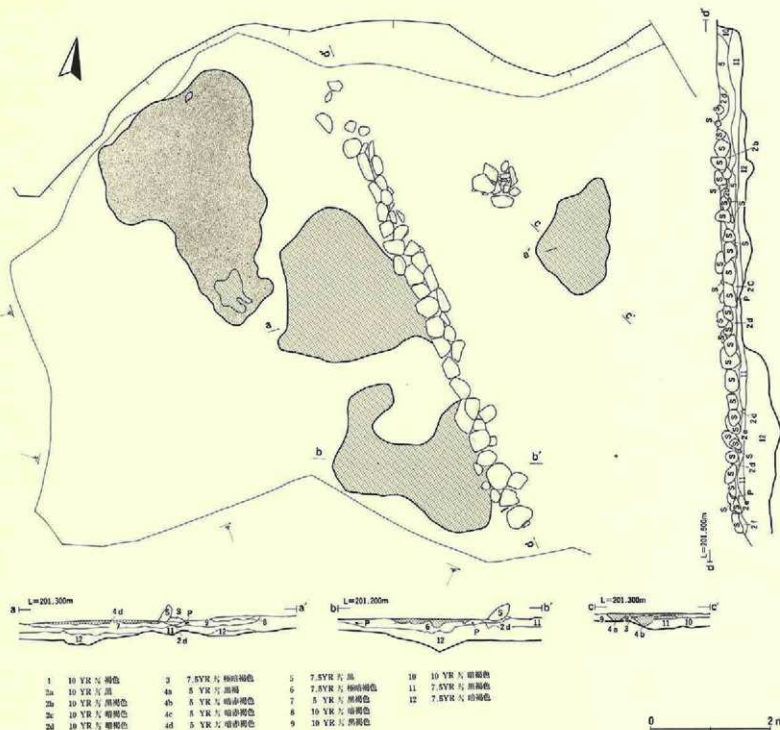
第85図 遺構内出土遺物(焼土遺構2)



図番号	出土地点・層位	法 量 (cm)		写 図	備 考
		口 徑	底 徑		
編-1	RZ-65 焼土	IV	11.5	24.2	47-474
-2	RZ-66 焼土	VII	7.8	18.8	48-475

第86図 遺構内出土遺物 (焼土遺構 3)





第87图 RH01配石遗槽 (F5区)

## (7) 配石遺構

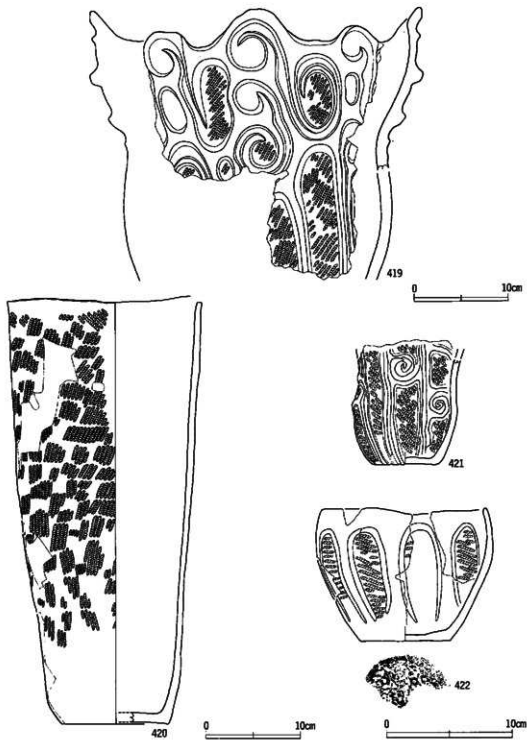
### RH 01 配石遺構 (第 87~90 図、写真 19、49、50)

本遺構は、住居跡、土坑群の集中する G 6 区南東部及び H 7 区北西部から北に 50 m 程離れた地点、F 5 F 10 グリッドを中心とする範囲内に位置する。遺構の所在する区域は現状が畑地として整地されていたが、耕作土と整地盛土を除去したところ南側が不明瞭な東西約 11 m、南北約 8 m のクロボク土の落ち込みとして確認したものである。整地により調査区東側に削出されたノリ面の土層観察からは、漸移層から落ち込みの始まる南北の壁が確認され、落ち込みの南北両サイドは 1 m 程の深さで削平されていた。当初この落ち込みは大型住居跡あるいは東側の比高差 50 m の高台に位置する向館跡に関連する空堀と思われたが精査の結果、埋没谷であることが判明し、本来はこの埋没谷の開析によって生じた北側及び南東側が馬の背状の微高地、西側及び南西側が旧米内沢に注ぐ急傾斜の崖地形であったものと思われる。

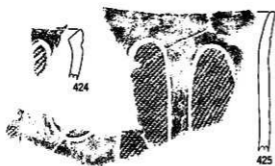
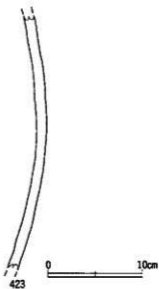
配石遺構は、この埋没谷内に沢筋と直行するかたちで存在し、位置的には東側の急斜面地から約 15 m、西側崖からは約 6 m 程の地点で、谷底から 1 m 程上位、落ち込みの上面からは深さ 1 m を測る面で検出された。構築面は幾分整地され、西側に向い緩やかに傾斜している。石組みは人頭大の河原石を用い、N-20°-W の傾きで南北方向に直線的に 2~3 重に配した列石であり、南側の崖際からの長さは約 7 m、幅は 50 cm 前後の規模である。列石埋置の掘り方は平面では確認できなかったが、土層断面の観察からおおよそ 20 cm 平均の深さの掘り込みが認められた。

列石の北東約 1.5 m の地点にはコブシ大から人頭大の石 10 数個を用いた集石が検出された。また、周囲にはやや広範囲にわたり火熱による赤変の弱い焼土の広がり 3 ヶ所と炭化物の広がり確認されている。集石下部には土坑は検出されなかった。

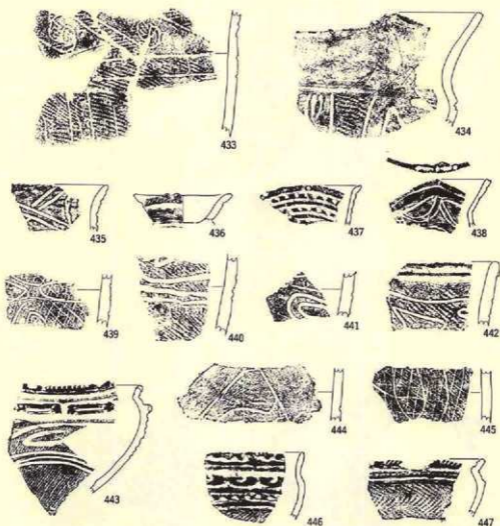
遺物は配石構築面の下位層からは縄文中期から晩期の土器が出土している。419、421~428、430 は第 III 2 群土器と思われる。419 は渦巻き状口縁を有する深鉢である。421 は小型鉢で平行沈線と渦巻き文がみられる。422、424、425 は平縁で逆 U 字文がみられる。422 は小型鉢で底面には網代痕が残る。427 は渦巻き状突起を有し、逆 U 字文または楕円文の文様であると思われる。429、432、433~435、438~442、444、445 は後期初頭の第 IV 1 群土器と思われる。429 は口縁部に突起、折り返し口縁状の隆帯と中央に刺突のあるボタン状貼りつけをもち、沈線による文様がみられる。432 は平縁で口縁部に孔がみられる。433、439、444、445 は地文を残し、沈線による文様である。434 は波状口縁で口縁部に無文帯をもち、胴部は地文を残し、懸垂文等沈線による文様を残す。438 は波状口縁で口唇部に刺突と沈線による文様をもち、口縁は折り返し口縁状に沈線による文様がみられる。この土器は表裏とも赤色顔料の付着が見られた。436、437、443、446、447 は晩期の第 V 群土器に含まれる。



第88图 F5区出土遗物(1)



第89图 F5区出土遗物(2)



图番号	出土地点・层位	法 量 (cm)			分 類	写 真	備 考		
		口 徑	底 径	高 径					
88-420	F 5 田代跡	22.0	19.3	45.2	Ⅲ	49-497			
-421	〃 〃			9.2	Ⅲ 2 A	-498			
-422	〃 〃	12.8	7.3	10.5	Ⅲ 2 B②	49-495			
图番号	出土位置・层位	分 類	写 真	特記事項	图番号	出土位置・层位	分 類	写 真	特記事項
89-419	F5C10 田代跡	Ⅲ 2 B①	48-485		90-435	F 5 田代跡	Ⅳ 1 D	50-500	
-423	RH01 堀土	Ⅲ 3	49-489		-436	〃 〃	Ⅵ	-501	
-424	〃 〃	Ⅲ 2 B	-490		-437	RH01 堀土	V 1 B	-502	
-425	RH01 堀土	Ⅲ 2 B②	-491		438	〃 〃	Ⅳ 1 D	-503	古来の品 土質が 異なる
-426	F 5 田代跡	Ⅲ 3	-492		439	F 5 D 9 田代跡	Ⅳ 1 C②	-504	
-427	F 5 F10 〃	Ⅲ 2 B①	50-493		440	F 5 堀土 〃	Ⅳ 1 C②	-505	
-428	〃 〃	Ⅲ 2	-494		441	F 5 G 7 〃	Ⅳ 1 D	-506	
-429	F 5 F 8 〃	Ⅳ 1 B	495		442	F 5 〃	Ⅳ 1 C②	-507	
-430	〃 〃	Ⅲ 2 B	-496		443	〃 〃	Ⅳ 1 D	-508	
-431	F 5 〃	Ⅲ 3			444	〃 〃	Ⅳ 1 C	-509	
-432	F 5 〃	Ⅲ	50-497		445	F 5 〃	Ⅳ 1 C②	-510	
90-433	F 5 F10 〃	Ⅳ 1 C②	-498		446	〃 〃	V 1 D	-511	
-434	〃 〃	Ⅳ 1 B① d	-499		447	〃 〃	V 1 E	-512	

第90图 F 5 区出土遺物 (3)

## 2. 時期不明の遺構

### (1) 柱穴群

5ヵ所でまとまって検出した。埋土からの遺物はほとんどなく時期は不明なものが多かった。

#### 柱穴群1 (第91図)

G7区R03~T04グリッドでIV層上面で4本検出した。PP3とPP4は底部に石が残っていた。遺物の出土はなかった。

#### 柱穴群2 (第91図)

G6区K23~L24グリッドでIV層上面で8本検出した。規模は30×30cm前後、深さは40~35cmである。付近から後期の土器が多く出土しており、規模、深さに共通性があることから竪穴住居跡の柱穴であった可能性も考えられる。

#### 柱穴群3 (第92図、写図19)

G7区P01~R01グリッドでIV層上面で11本検出した。PP17、18、20の3本は一列に並んでいるように見えるが他のピットは規則性がみられない。時期は不明である。

#### 柱穴群4 (第92図)

G7区K02~L02規則性はみられない。

#### 柱穴群5 (第92図、写図93)

G6区C12~F12グリッドでIV層上面で10本検出した。PP30は埋土より第II1A群の繊維を多量に含む土器を2点出土した。PP35は第I1b群の縄文を残す深鉢の胴部と第VII群に属する粗製土器を出土している。PP38は第IV1群と思われる平行沈線による文様の土器が出土している。また、第III2B類の土器も出土している。いずれも規則性がなく、時期も明確ではない。

### (2) 溝跡

#### RG01 溝跡 (第19図、写図19)

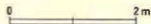
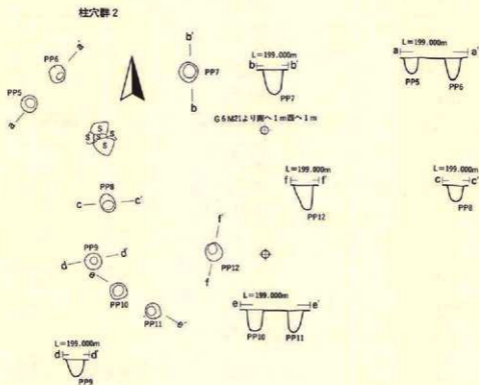
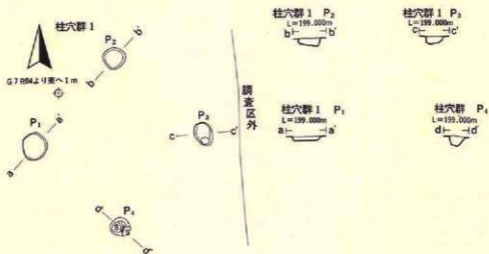
RG01はH7E10~C7F11グリッドに位置する。検出面はIV層である。規模は長さ460cm、幅約55cm、深さ45cmである。西-東方向に走行すると思われる。西側は擾乱を受けており、東側は調査区外にのびるため不明である。出土遺物はなく、耕作土直下の検出のため時期は不明である。

第7表 柱穴群観察表

N.o	グリッド名	径、深さ (cm)	埋 土	そ の 他
PP1	G7 R04	45×10、6	10YR3/2黒褐、粘性なし、しまり有、砂粒・金雲母を多く含む	
PP2	G7 R03	36×34、12	10YR2/2黒褐、粘性しまり有、砂粒・金雲母をわずかに含む	
PP3	G7 T04	40×30、12	10YR2/3黒褐、粘性しまりやや有、焼土・粉炭・金雲母を多く含む	
PP4	G7 S04	33×30、17	10YR2/2黒褐、粘性しまりなし	
PP5	G6 K23	27×27、25	10YR2/2黒褐色、粘性しまり有、金雲母をわずかに含む	
PP6	G6 K23	27×27、34	#	
PP7	G6 L23	31×30、35	#	
PP8	G6 K23	30×23、25	1. 10YR2/2黒褐色、粘性有しまりなし、金雲母少量含む 2. 7.5YR2/2黒褐、粘性しまり有、金雲母を少量含む	
PP9	G6 K24	26×26、27	1. 10YR2/2黒褐色、粘性しまり有、小石・金雲母を少量含む 2. 10YR1.7/1黒、粘性有、しまりなし、金雲母を少量含む	
PP10	G6 K24	26×26、32	10YR2/2黒褐色、粘性しまり有、小石・金雲母をわずかに含む	
PP11	G6 L24	25×25、32	#	
PP12	G6 L24	30×27、38	10YR2/1黒、粘性しまり有、金雲母少量含む、暗褐色土を少量含む	
PP13	G7 P02	17×16、18	10YR2/3黒褐色、粘性しまりやや有	
PP14	G7 R01	25×25、7	7.5YR2/3極暗褐色、粘性しまりやや有	
PP15	G7 R01	36×23、14	10YR2/3黒褐色、粘性有しまりなし、小礫を少量含む	
PP16	G7 P02	38×35、7	10YR2/2黒褐色、粘性有、しまりなし、褐色土をブロック状に含む、金雲母を含む	
PP17	G7 Q02	50×47、26	1. 7.5YR2/1黒色、粘性有、しまり有、黒褐色を塊状に含む 2. 7.5YR4/4褐色、粘性なし、しまり有、砂粒・金雲母多量に含む	
PP18	G7 R02	48×43、17	7.5YR2/3極暗褐色、粘性有、しまり有、褐色土をブロック状に含む	
PP19	G7 P02	35×30、15	10YR2/2黒褐色、粘性やや有、しまりなし、粉炭・金雲母少量含む	

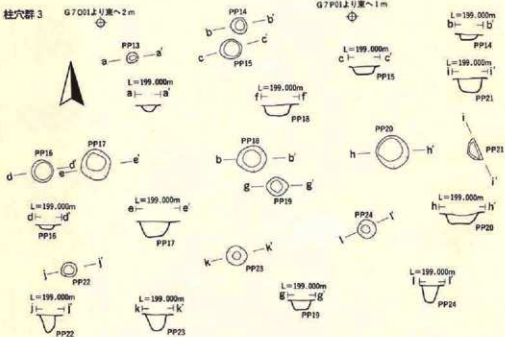
N.o	グリッド名	径、深さ (cm)	埋 土	そ の 他
PP20	G7 S02	55×51、15	1. 7.5YR3/3黒褐色、粘性有、しまり有、小角礫少量含む 2. 7.5YR3/3暗褐色、粘性しまり有 3. 10YR2/3黒褐色、粘性しまり有、金雲母少量含む	
PP21	G7 S02	40×20(残存)25	1. 10YR2/3黒褐色、粘性やや有、しまりなし、調査区外にかかる、金雲母少量含む 2. 10YR3/3暗褐色、粘性やや有、しまりなし	
PP22	G7 Q01	25×24、28	10YR2/2黒褐色、粘性有、しまりなし、粉炭・焼土粒・小石少量含む	
PP23	G7 R02	34×32、25	10YR2/2黒褐色、粘性やや有、しまりなし、粉炭・金雲母少量含む	
PP24	G7 S02	30×30、27	10YR2/2黒褐色、粘性やや有、しまりなし、粉炭・金雲母を少量含む	
PP25	G7 J03	25×20、9	10YR2/1黒色、粘性有、しまりやや有、金雲母含む	
PP26	G7 L03	27×25、14	7.5YR2/2黒褐色、粘性有、しまりなし、金雲母含む	
PP27	G7 M03	35×30、23	7.5YR2/1黒、粘性有、しまりなし、褐色土をブロック状に含み、金雲母を含む	
PP28	G7 M03	24×23、10	7.5YR 黒褐色、粘性有、しまりやや有、粉炭少量含む	
PP29	G7 M05	45×40、12	7.5YR2/1黒色、粘性有、しまりなし、金雲母・小石少量含む	
PP30	G6 D09	47×43、29	黒色土、褐色土が少量含む、しまりなし	埋土よりII I A群土器が2点出土している
PP31	G6 F10	28×26、11	黒色土、褐色土が粒子状に混じる、焼土粒を少量含む	
PP32	G6 C10	45×40、20	黒褐色土、炭化物・焼土を粒子状に含む、しまりなし	
PP33	G6 C10	43×38、20	黒褐色土、褐色土の粗粒含む、しまり有	
PP34	G6 D10	35×13、11	黒褐色土、炭化物少量含む、ややしまる	
PP35	G6 E11	47×50、56	黒色土、褐色土がブロック状に入る、ややしまり有	埋土より第I 2 b群1点と第VII群土器1点が出土している
PP36	G6 H12	34×32、24	黒色土、褐色土をブロック状に含む、しまり有、粘性なし	
PP37	G6 B12	49×48、34	上位は黒色土、炭化物を含む、下位は黒褐色土で、褐色土のブロック状に入る	
PP38	G6 B12	35×39、38	上位は黒色土で炭化物を含む、下位は黒褐色土で黒褐色のブロック状に入る	埋土より第III群2、IV 1群が各1点、第VI群土器が2点出土している
PP39	G6 C13	53×36、27	上位は10YR2/2黒褐色で炭化物を含む、下位は暗褐色土で、しまりなし	



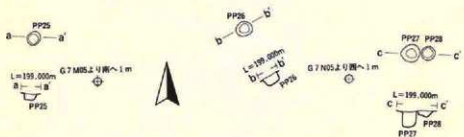


第91図 柱穴群 1、2

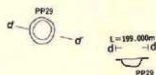
柱穴群 3 G7001より東へ2m



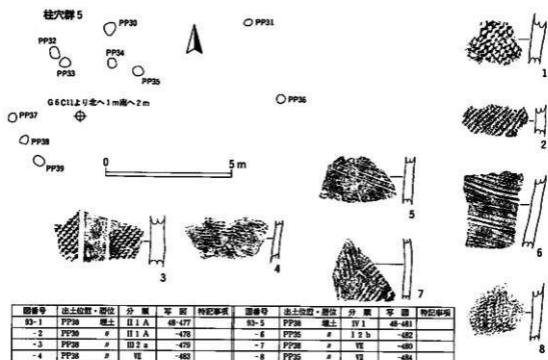
柱穴群 4



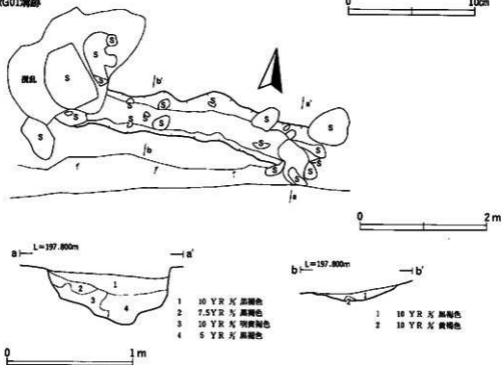
柱穴群 4



第92図 柱穴群 3、4



RG01溝跡



第93図 柱穴群 5、RG01溝跡

### 3. 遺構外出土遺物

#### (1) 土器、土製品

遺構外から出土した土器は縄文土器がほとんどであった。土器は川側の畑地より二段高くなっている水田部にあたるG 6、G 7区で多く出土した。このグリッドでは基本層序II層の遺物包含層である黒色土が厚く堆積しているため、早期から続縄文にあたる土器が出土している。遺物の多くはこのII層とI層から出土している。またG 6区ではD、Eラインに木根跡がありこの付近から後期の完形土器等が出土している。

II層を調査するにあたってはグリッド毎に5 cm程度掘り下げていくごとにB 1～B 7と深さで区別を行なったが層位としてのまとまりをつかむことができなかった。よって土器の分類に関しては土器の文様や器形などの特徴から行なっている。第IV群土器については後期の編年が確立していないため、時期差のあるものも文様という括りでとらえているため、必ずしも同時期のものを一括していない部分がある。

#### 第I群土器（縄文時代早期の土器）

押型文系と貝殻沈線文系に分けられる。

##### 1類 押型文系土器

A類 菱形、重層山形、山形の押型文がみられる。(第94図1～7、写図54)

1～3、5には沈線がみられる。

B類 斜格子目の押型文がみられる。(第94図8、写図54)

##### 2類 貝殻沈線文系土器

A類 貝殻条痕文のみられるもの(第94図9～14、写図54)

9、10は同一個体の口縁部と思われ、口唇部に絨状体の押捺がみられ、さらにその下には爪形の刺突がみられる。11は貝殻腹縁文がみられる。14は表側からの補修孔がみられる。

B類 貝殻腹縁文がみられるもの(第94図15～21、写図55)

19～21は口縁部で口唇部まで施文が達しており横位の沈線がみられる。19は貝殻押引文がみられる。21は同心円状の沈線による文様がみられる。15、17は同一個体の可能性があり、貝殻腹縁による沈線が横位にみられる。16は爪形の刺突がみられる。18は底部付近である。

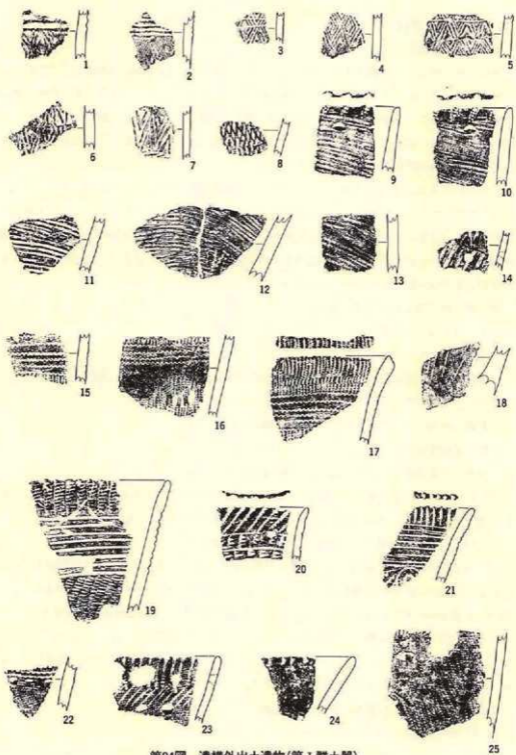
C類 縄文と貝殻腹縁文と刺突がみられるもの(第94図22、23、25、写図55)

22、23は爪形の刺突がみられる。23は表側からの補修孔、半置半転の縄文が口縁部にみられる。25は口縁部に一部に貝殻腹縁文がみられる。

D類 無文のもの(第94図24、写図55)

24は口縁部に沈線による刻み目がみられ、以下は無文である。

これらの土器はG 6区平坦部のE 12～D 12付近で半数以上出土している。層位はII層中と



第94圖 遺構外出土遺物(第I群土器)

木根と思われる黒色土中である。1～8は盛岡市大新町遺跡、玉山村下田八幡遺跡で出土している早期前葉に相当する日計式系統の押型文と思われる。15～17は寺ノ沢式、18も尖底で貝殻腹縁文が放射状に見られることから寺ノ沢式土器に類似すると思われる。19～21は白浜式土器と思われる。

### 第II群土器（縄文時代前期の土器）

縄文時代前期前葉に位置付けられるもの（第95～98図65～71、83、写図56～58）

1類 胎土に繊維を多量に含み、縄文が施文されるもの

A類 斜行縄文を地文とするもの

（第95図26～28、第96図30～33、第97図52～58、61、64、写図56、57）

LR、RL両方みられる。30は口縁部に三重の燃糸圧痕がみられる。31、32は口縁部に綾線文がみられる。33は口唇部に刻み目がみられ、口縁部にRL、LR交互の燃糸圧痕がみられる。52、53は焼きがよくないが同一個体と思われ、52の口唇部にはわずかに圧痕がみられる。26、28、54、57は口唇部に強い刺突がみられ、平縁であるが小波状の曲線をもち、表裏面ともナデ調整がみられる。26、61の原体は同一のものと思われる。55、56は口唇部に縄文がみられるが裏面の調整はみられない。64は花卉状口縁で裏面のナデ調整がみられる。

B類 組縄縄文または組紐縄文を地文とするもの（第96図34～45、写図57）

34～39は尖底とおもわれる。40は補修孔が2ヵ所みられ、1ヵ所は穴が裏面まで通していない。41～43は口唇部に刺突がみられる。45は口唇部に刻み目がみられ、裏面にナデ調整と爪形の刺突が横位にみられるが爪形の刺突は意図的なものかどうかは不明である。

C類 羽状縄文を地文とするもの（第97図46～51、59、60、第98図71、写図57）

いずれも裏面にナデ調整がみられる。46、47は結東第1種羽状縄文と思われる。59は口縁部であるが口唇部は施文が見られず、平縁である。60は小波状口縁で繊維の混入はさほど多くない。71は口縁部に圧痕がみられる。

D類 燃糸文を地文とするもの（第95図29、第98図65、写図56、58）

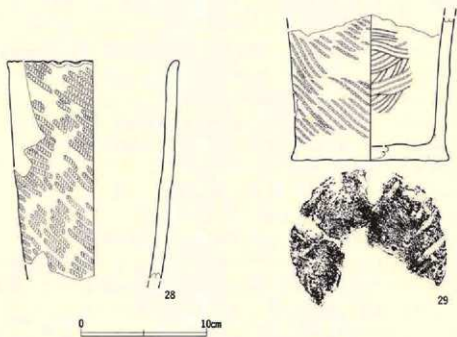
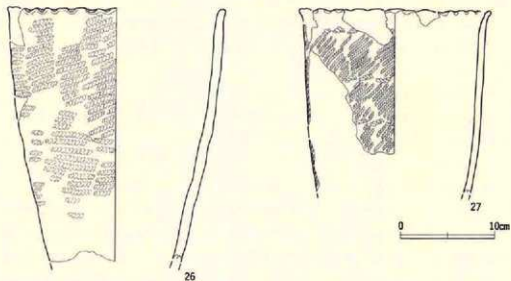
裏面の調整が明瞭に残る。29の底部にはナデ調整がみられる。

E類 網目状燃糸文を地文とするもの（第98図66～70、写図56、58）

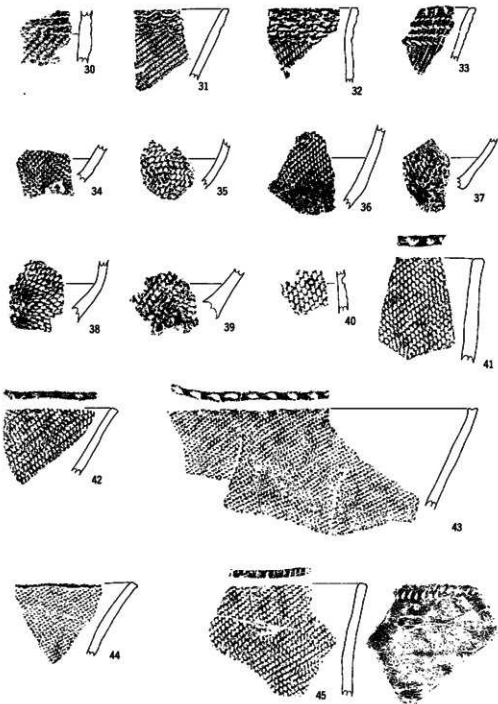
いずれも繊維の混入がみられ、裏面にはナデ調整がみられる。66、67は鋸歯状の口縁で凸部には指頭圧痕が見られ、凹部には指ナデがみられる。70は口縁部で波状突起の一部と思われる。

F類 地文の他に粘土紐の貼りつけがみられるもの（第98図68、78、写図56、58）

68はバケツ形の器形で指頭圧痕による小波状口縁を呈し、2つの波状突起をもつ。口縁部に逆U字型の粘土紐の貼りつけが4ヵ所みられる。突起部には縦位、体部には横位の網目状燃糸文がみられる。78は口縁部で波状突起の一部と思われる。地文を施文した後粘土紐の貼りつけ

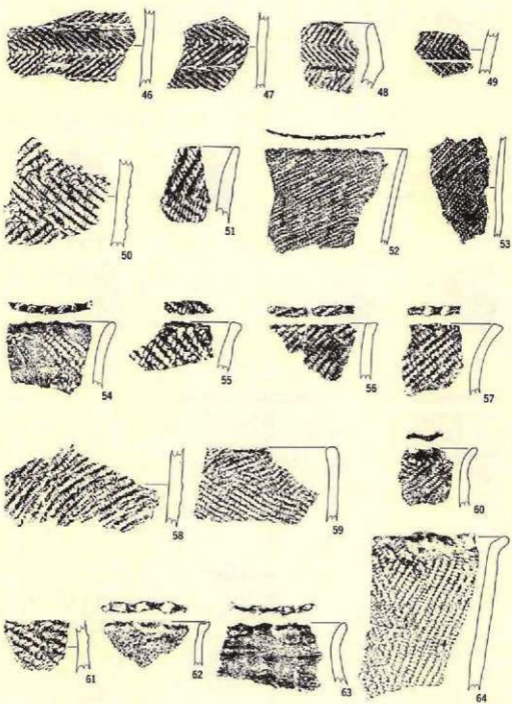


第95圖 遺構外出土遺物(第II群土器1)

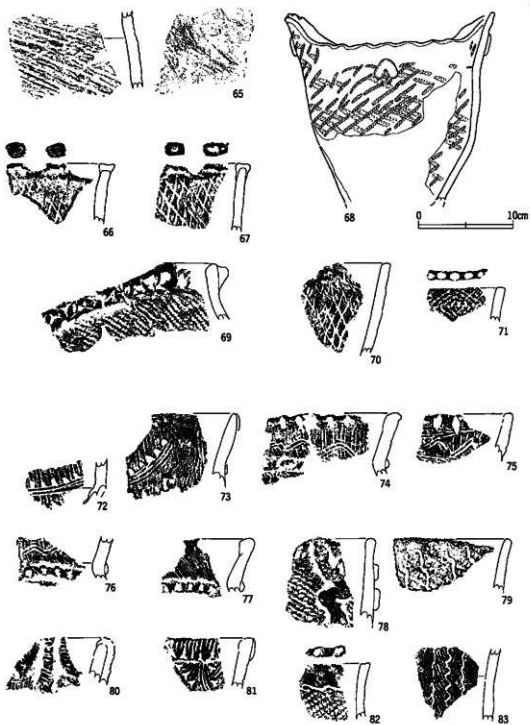


第96圖 遺構外出土遺物(第Ⅱ群土器2)





第97圖 遺構外出土遺物(第II群土器3)



第98圖 遺構外出土遺物(第II群土器4、第III群土器1)

を行っており、裏面はナデ調整を行なっている。

G類 口縁が無文であるもの(第97図62、63、写図58)

62、63とも口唇部に指頭圧痕がみられる。

B類は早稲田6類、C類は大木1式であると思われ、A～D類はいずれも前期前葉までの時期に属する。滝沢村仏沢Ⅲ遺跡、二戸市長瀬B遺跡などで出土している。

E～Gはやや後出し、前期中葉のものと思われる。68は大木4式と思われ、盛岡市上八木田I遺跡からも出土している。

第Ⅲ群土器(縄文時代中期の土器)

1類 縄文時代中期前葉の土器(第98図69、72～83、第99図84～86、写図56、58～62)

A類 粘土紐隆帯、または櫛歯状工具による沈線文様がみられるもの(第98図69、72～78、80、81、写図56、58)

72～81、86は破片であるがいずれも口縁部から頸部にあたり口縁部が外反する器形とおもわれる。81は外側に折り返し口縁をもち、その段差の境に刺突がみられる。69は口縁部に鋸歯状の粘土紐の貼りつけがみられ、以下は斜行縄文の地文がみられる。72、73は同一個体と思われ、縦位の沈線と斜位の平行沈線、平行沈線に沿った刺突がみられる。74、75、79は同一個体と思われ、頸部に粘土紐の隆帯に刺突が見られ、口縁部から頸部にかけて波状沈線と平行沈線が描かれている。77、86も同一個体と思われ、内側に折り返し口縁がみられるキャリバー型の器形をもち、口縁部に刺突、頸部に粘土紐の隆帯に刺突、頸部までは斜位の沈線がみられ、体部は綾織り文の地文がみられる。80は口縁の突起部と思われ、粘土紐の隆帯をもち、隆帯と口部に刻み目がみられる。81は外側に折り返し口縁をもち、その段差の境に刺突がみられる。69は口縁部に鋸歯状の粘土紐の貼りつけがみられ、以下は斜行縄文の地文がみられる。a類は大木7a式と思われる。

B類 地文以外の文様体が見られないもの(第98図79、82、83、第99図84、85、写図58、59)

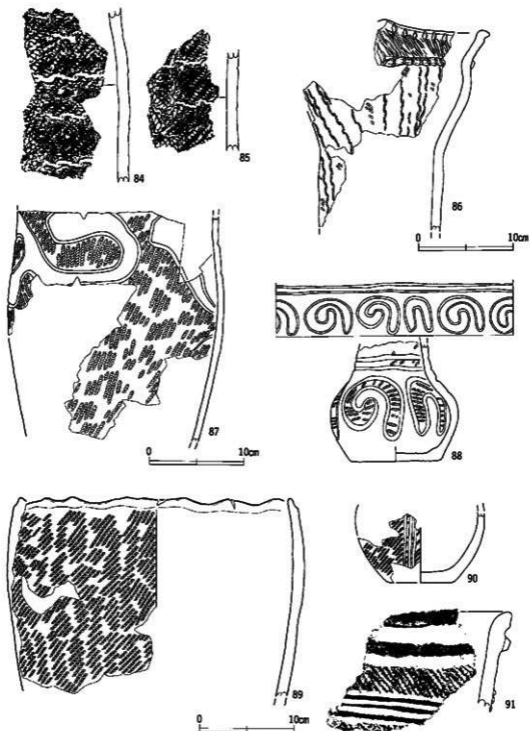
大半は中期前葉に属すると考えられるが、一部前期に属する可能性のある土器を含む。

79、83は縦位、84、85は横位に綾織り文がみられる。

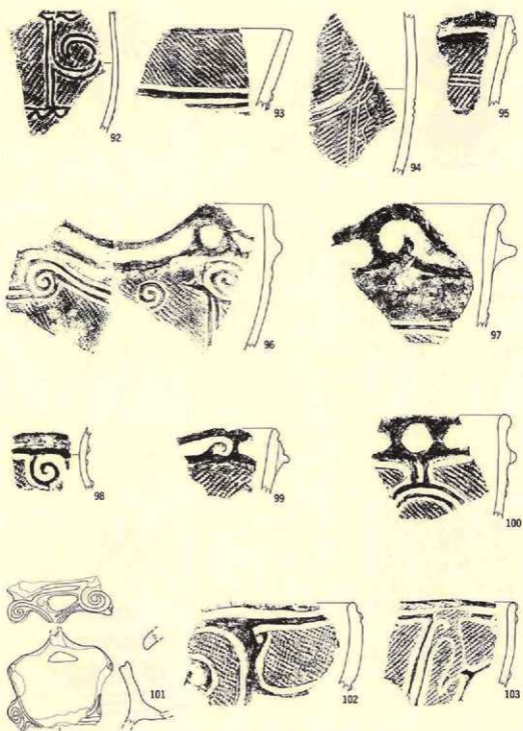
2類 縄文時代中期後葉から末葉の土器(第99図87～91、第100～103図、写図59～62)

A類 隆帯または沈線により平行沈線と渦巻き文を主体とした文様がみられるもの(第99図90～第101図112、写図59～60)

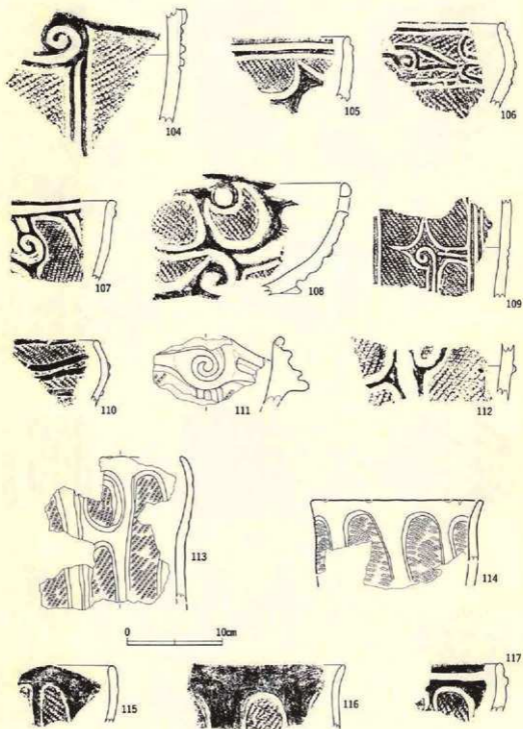
大木8b式に比定される土器群である。大木8aに含まれるものもあると考えられるが細分できなかった。文様は2種類に分けられる。口縁部から体部まで隆帯による文様がみられるものと口縁部から頸部にかけて隆帯による文様をもち体部は沈線による文様がみられるものであ



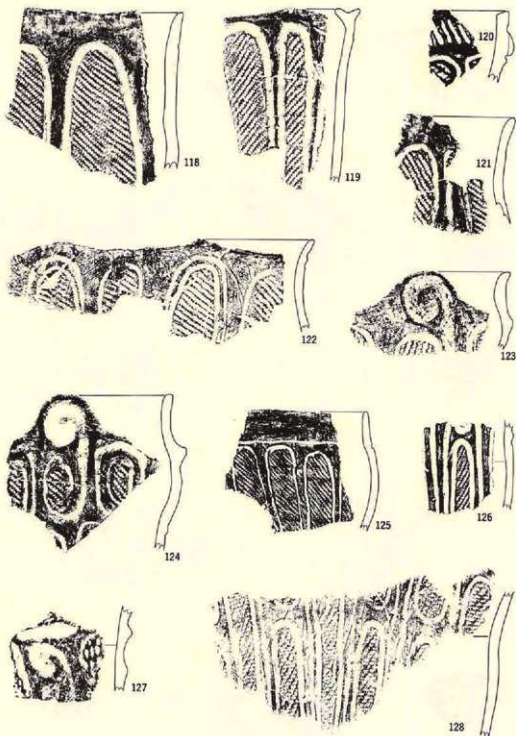
第99图 道桥外出土遗物(第Ⅲ群土器2)



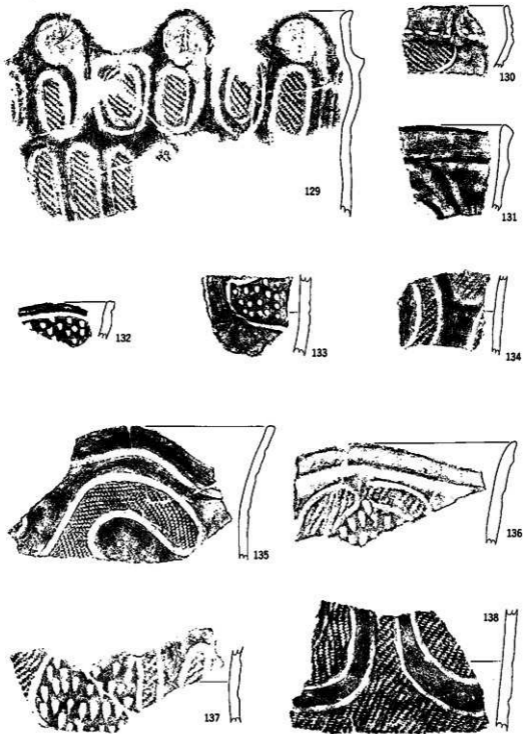
第100图 遺構外出土遺物(第III群土器3)



第101圖 遺構外出土遺物(第III群土器4)



第102圖 遺構外出土遺物(第Ⅲ群土器5)



第103圖 遺構外出土遺物(第Ⅲ群土器 6)



る。双方とも轉状文がみられるものもある。器種は、大型深鉢、小型深鉢、浅鉢などがみられ、もっとも大型深鉢が多いと思われる。口縁は平縁と波状口縁がみられる。102、106、110は深鉢で内湾気味に立ち上がるキャリバー型の器形と思われる。96、97、99、111は波状口縁であり、口縁部上端に隆帯が回り、頂部に渦巻き文が見られるため口唇部が肥厚する。101は深鉢口縁部の突起と思われる。105は浅鉢で口縁部はやや外反し、口縁部に焼成前にあけた渦巻き文の一つのモチーフと思われる穴がみられ、体部下端まで隆帯による渦巻き文がみられる。103は隆帯の欠落がみられる。

B類 沈線と磨り消しによる楕円文、逆U字文を主体とした文様がみられるもの(第101図113～第103図129、写図60～62)

大木9式に比定される土器群である。いずれも磨り消しがみられ、充填縄文と断定できるものは見当たらない。口縁部の形態により以下のように細分した。

①波状口縁頂部に渦巻き文を有するもの(123、124、129)

器形は口縁部がやや外反し胴部は寸胴気味のキャリバー型とおもわれる。129の突起部は8から9個あると思われる。

②平縁または小波状口縁で口縁頂部に渦巻き文をもたないもの(113～122、125、126、128)

楕円の沈線で囲まれた部分の地文は単節斜行のものがほとんどであるが113、128は地文が複節である。122、124、126、128、129は楕円文の沈線が二重に巡る。119は口唇部に沈線をもち、隆線による立体的な逆U字文がみられた。

C類 沈線による変形アルファベットの波状文と刺突を伴うもの(第99図87、88、第102図127、第103図130～138、写図61～62)

大木10式に比定される。地文の残るものはいずれも充填縄文である。88は沈線と「の」字と逆U字の文様の充填縄文が施された小型壺である。130は胴状突起的な隆線を口縁部にもち、それに沿って刺突がみられる。131は口縁部の磨り消し部分と思われる。127、132、133、136、137は沈線で区画された内側に刺突を充填しているとおもわれる。ただし、127は渦巻き文がみられるため、b類である可能性もある。134～137は沈線で区画された内側に充填縄文がみられる。87、138は沈線で区画された内側を磨り消し、外側に充填縄文を施文している。136、137は同一個体と思われ、口縁部に折り返し口縁状の段差がみられる。135、136は口縁が大きく外反する波状口縁と思われる。

3類 地文のみ施文されているもの(第99図89、写図59、62)

89は地文は複節で口縁部に幅1cm程度の無文帯をもち、小波状口縁になっている。その他撚糸で平縁のものや口縁部の無文帯が隆帯状になっているもの、LR、RLの平縁の斜行縄文な

どもみられる。

#### 第IV群土器（縄文時代後期の土器）

1類 後期初頭から前葉の土器(第104図105、第106図158~165、第107~109図、第110図214~227、写図63~68)

本遺跡では最も多く出土している。G6D12~17、G6E10~18、G6F13付近の木根と思われる黒色土、またはII層中より出土している。後期の竪穴住居跡が存在していた可能性も考えられる。時期的には関東の堀之内I、II式、十腰内I式、大湯式、門前式に類似するものを含む。この時期の細分は文様によるもので時期的な細分ではない。

##### A類 連鎖状隆起文や中空把手を有する土器（第106図158~160、写図65）

158は深鉢口縁部の突起部と思われ、中空突起と思われる。159は口縁部に無文帯をもち、平行沈線と円形の刺突がみられる。中期末葉の刺突を有する土器である可能性もある。160は口縁が平縁の深鉢で連鎖状隆起文が口縁と胴部にみられる。

##### B類 ボタン状貼付文または磨消縄文の顕著なもの（第106図163~108図183、写図63~65）

###### ①類 口縁部文様体と体部文様体に区別がみられるもの

###### a類 刺突がみられるもの（第106図163、第108図191、写図65、66）

163は波状口縁を有し、沈線の区画内を円形の刺突で縦位一列に充填している。191は口縁部に無文帯をもち、隆線に刺突がみられ、口縁部が外反する深鉢と思われる。

###### b類 口縁部に沈線のみ文様をもつもの（第104図145、147、第106図164~170、写図63、65）

164、169は口唇部に刻み目をもつ。145、165、168は折り返し口縁で折り返し部分にも平行沈線による文様がみられ、頸部まで斜行沈線など沈線による文様がみられる。胴部は地文のみである。168は波状口縁頂部にボタン状貼りつけがみられる。147は波状口縁で折り返し口縁状に平行沈線が見られ、頸部までは沈線による文様とボタン状の貼りつけがみられる。胴部は地文のみである。166、167は波状口縁で頸部に斜行沈線による菱形の文様がみられた。166は縦位に原体圧痕がみられる。170は頸部と胴部の文様体を平行沈線で区切っている。

###### c類 口縁部に隆起線の文様をもつもの（第104図146、第107図171~175、178、179、写図63、65）

146は深鉢で波状の折り返し口縁部を有し、隆線の両側に沈線がみられる。隆線は平行線と「Y」字状のモチーフがみられる。隆線の縦、横の接点には円形の刺突が見られる。胴部は地文のみである。171、172、174、175は隆線上に地文が残る。171、172、174とも沈線の接点に縦位の円形の刺突がみられる。171の隆線のモチーフは曲線的で146より後出するものと思われ

る。173 は隆線と沈線による文様で、隆線と沈線の接点にボタン状の貼りつけがみられる。179 は折り返し口縁で折り返し口縁上に平行沈線がみられ、口縁部は二本の沈線の間で刺突がみられ、沈線の内側は4本の沈線による文様が見られる。178 は折り返し口縁部で平行沈線による文様がみられる。また、縦、横に円形の刺突がみられる。

d類 体部に沈線による文様をもつもの(第107図176、177、180、写図65、66)

176 は折り返し口縁上に平行沈線、頸部から胴部にかけて連続した沈線による文様が見られる。口縁から頸部は沈線による区画がみられ、「V」字状の沈線とボタン状貼りつけが縦位に平行してみられる。177、180 は平縁で頸部まで沈線による文様がみられ、胴部は地文上に沈線による文様と思われる。176 は沈線文様の中央部に円形の刺突をボタン状貼りつけのかわりに施していると思われる。

②類 文様が口縁部から体部まで連続するもの(第104図149、第107図181、第108図182~188、写図63、66)

149 は6つの波状口縁を有し、波状頂部にボタン状貼りつけと縦位に2つの刺突がみられる。隆線は地文を残し、斜行沈線や円形の文様を残す。181、182 は折り返しの波状口縁をもち、ボタン状貼りつけを波状頂部直下にボタン状貼りつけがみられる。胴部は斜行沈線や曲線文などがみられる。187、188 は壺である。188 は橋状突起を有する。

C類 地文を残し沈線による文様がみられるもの(第106図161、162、第108図184~109図207、写図65、66、67)

①類 同心円状の平行沈線がみられるもの(第108図183、189、190、写図66)

いずれも平縁である。183 は口縁に無文帯をもち、ボタン状貼りつけと同心半円状の沈線がみられる。190 は横位の3つの刺突を中心に沈線がみられる。

②類 沈線が細く、縦に文様が展開するもの(第108図186、192~198、写図66)

平行沈線による文様が見られる。193、194 は小型浅鉢である。193 は平行沈線上に刺突が縦位にみられる。194 は口唇部に縄文が残る。

③類 沈線が太く、横に文様が展開するもの(第108図199~207、写図66、67)

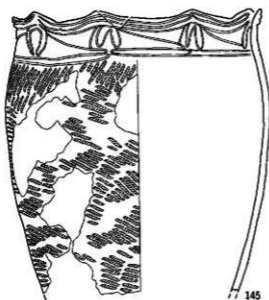
平行沈線や波状文などがみられる。206、207 は同一個体で口縁部と口唇部に円形の刺突がみられた。

④類 ①~③いずれにも属さないもの(第106図161、162、184、185、199、写図66)

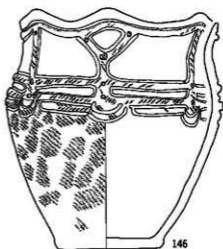
155 は沈線を両側にみられる隆線がみられる。156 は壺の頸部と思われ、外反する。

D類 地文の磨消しと沈線による文様がみられるもの(第104図145、第105図、第109図202~110図221、写図63、64、67、68)

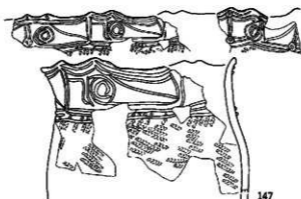
文様が口縁部から体部上半までみられるものと文様が体部下端までみられるものがみられ



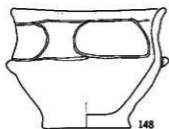
145



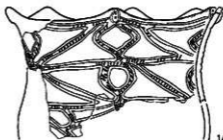
146



147



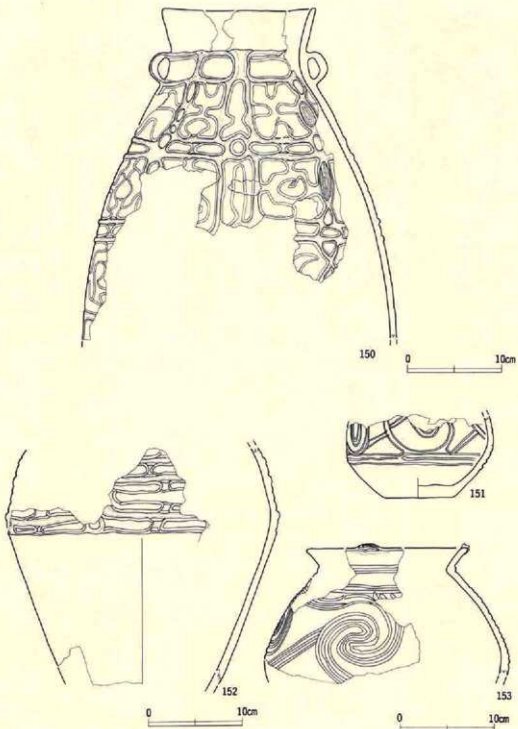
148



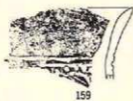
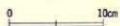
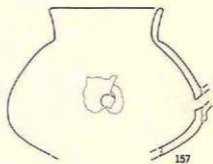
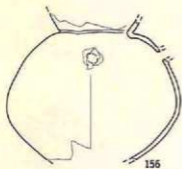
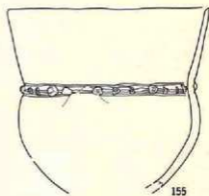
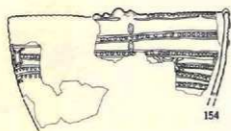
149



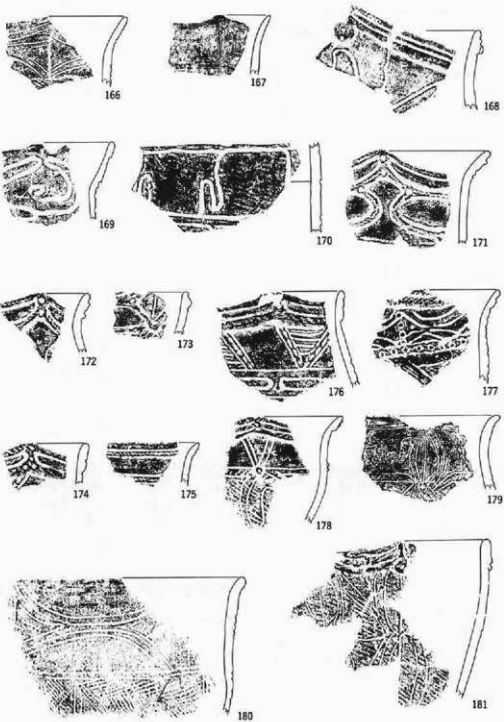
第104图 遺構外出土遺物(第IV群土器1)



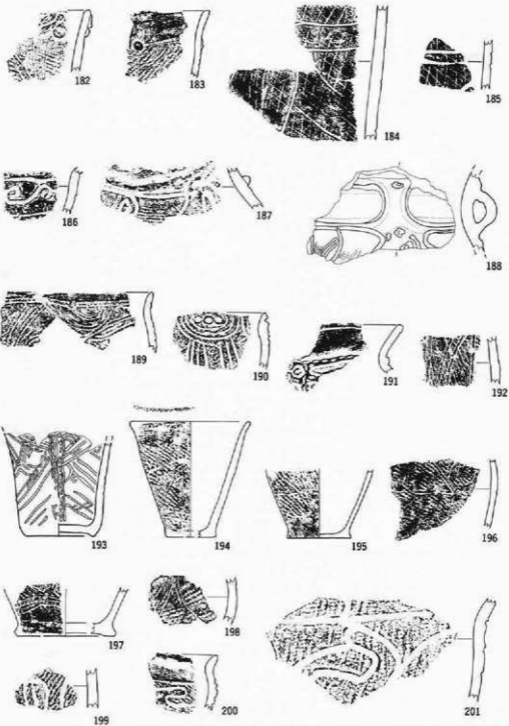
第105圖 遺構外出土遺物(第Ⅳ群土器2)



第106圖 遺構外出土遺物(第IV群土器3)

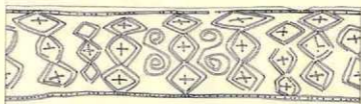
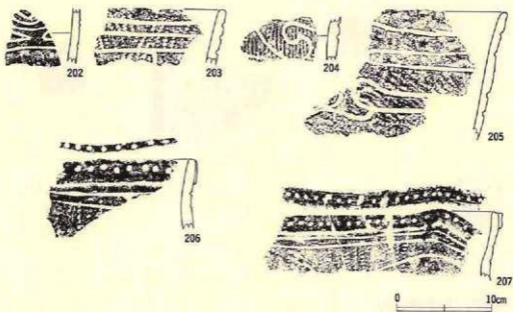


第107圖 遺構外出土遺物(第IV群土器4)



第108圖 遺構外出土遺物(第IV群土器5)





第109图 遺構外出土遺物(第IV群土器6)

る。145、150は壺であり、内面は磨き調整の後黒色処理を行っており、土師器の内面黒色処理と類似したものと思われる。外面は化粧土がぬらされてる。150は橋状突起を有する球胴型の大型である。長方形の区画内にX字状の文様モチーフや曲線文による文様がみられ、下にいくにしたがって、長方形が大きくなっていく。208は吊り手付き小型壺で内外面とも赤色顔料の付着がみられる。吊り手は左右2ヵ所、計4ヵ所みられる。口縁部には突起がみられ、文様は刺突がみられる隆線により4つに分割し、その内側に沈線による文様を配している。横位の隆線以下は無文研磨されている。底部は平底である。142は小型鉢で胴部中央に吊り手状の突起がみられ、上下両方から孔をあけている。底面には笹葉痕がのこる。142、210は二本の沈線とその間を埋めるように楕円形の文様がみられる。209は刺突が見られる平行沈線間に菱形とその中に「十」字を配した文様により構成され、前面のみ渦巻き文が一对にみられる。文様の沈線の単位は151、214、215、218、221、224は2本が1単位、217は3本、219、220、225は4本と思われる。213、223は表面に赤色顔料の付着が見られた。213は小型壺の切斷土器の胴部とおもわれ、上側に刻み目状の凹凸がわずかにみられる。216は胴部から底部のみの小型壺と思われ、ボタン状貼りつけと吊り手状突起が2本みられる。突起は上側からのみ孔を空けられている。底面は無文である。文様は隆線を胴部中央にもち、隆線上は流線と沈線による文様がみられ、隆線以下は無文研磨されている。220は口唇部の山形の部分に4つの刻み目がみられた。153は壺で口縁が「く」の字に外反する。口唇部に突起をもち胴部は3本の平行沈線による入り組み文的な沈線による文様がみられる。227は口縁部に横位の沈線による文様と縦位の沈線による文様がみられる。

類例として、崎山弁天遺跡第IV群土器、沖附(2)遺跡第III群土器、田面木平遺跡(1)、貝島貝塚第II群土器などがある。

2類 後期中葉の土器(第110図228~111図232、写図68)

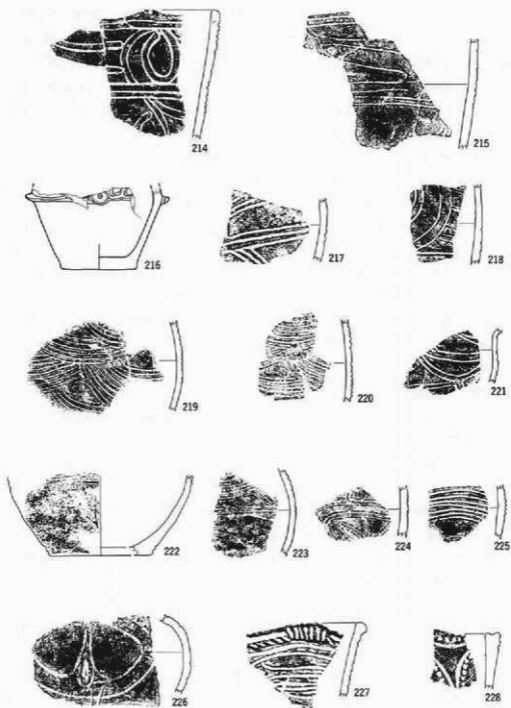
A類 帯縄文がみられる土器(第111図229~232、写図68)

229、230とも波状口縁で口縁部が外反する。229は円形の刺突がみられ、縦位の帯縄文による文様もみられる。230は口縁部に広い無文帯をもつ。231は小波状口縁で縦位に一段おきに向きを変えている不整な弧状沈線がみられ入組帯文的にもみえる。最下の沈線以下は無文研磨がみられる。232は平縁の口縁で、沈線により折り返し口縁状隆帯に沈線と磨り消し、刺突がみられる。

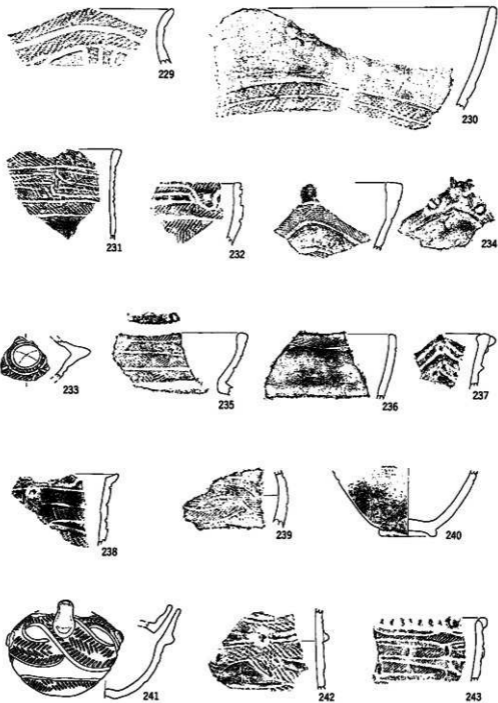
B類 沈線に沿って連続刺突が見られもの(第110図228、写図68)

1点のみの出土である。口唇部に沈線がみられ、刺突は三日月形である。胎土は粗く、化粧土の顕著な使用はみとめられない。

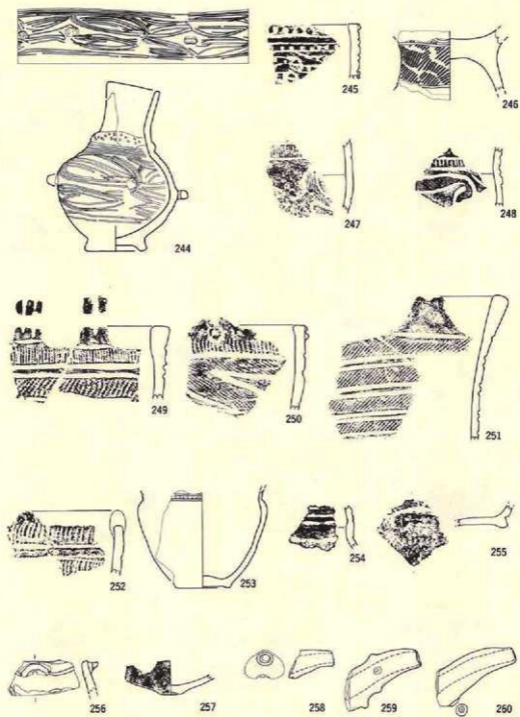
3類 後期後葉から末葉の土器(第111図234~112図244、246、写図68、69)



第110圖 遺構外出土遺物(第IV群土器7)



第111圖 遺構外出土遺物(第Ⅳ群土器 8)



第112图 遗構外出土遺物(第IV群土器9)

## A類 瘤付土器

- ①類 平行沈線、入組状の磨消縄文がみられるもの(第111図233~236、239、241、第112図246、写図68、69)

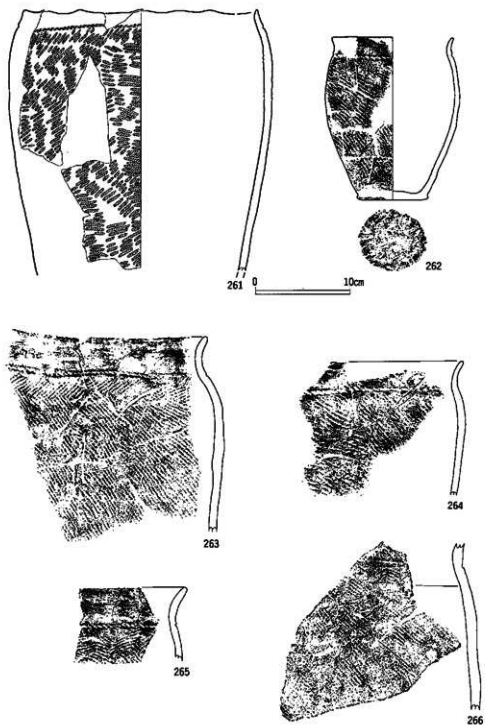
233は壺の突起部と思われ、突起の周りには沈線による文様がみられる。234は深鉢の山形の口縁突起部で突起は無文研磨され、沈線の区画による帯縄文と磨り消しがみられ、内面には2つの瘤がみられる。235は平縁の壺と思われ、口唇部に突起がみられる。236は平縁で瘤はみられない。直立気味に立ち上がることから注口土器または壺と思われる。239、241は弧状沈線による入組状文の文様がみられる。

- ②類 貼瘤がみられるもの(第106図154、155、第111図237、238、242、243、第112図244、245、写図64、68、69)

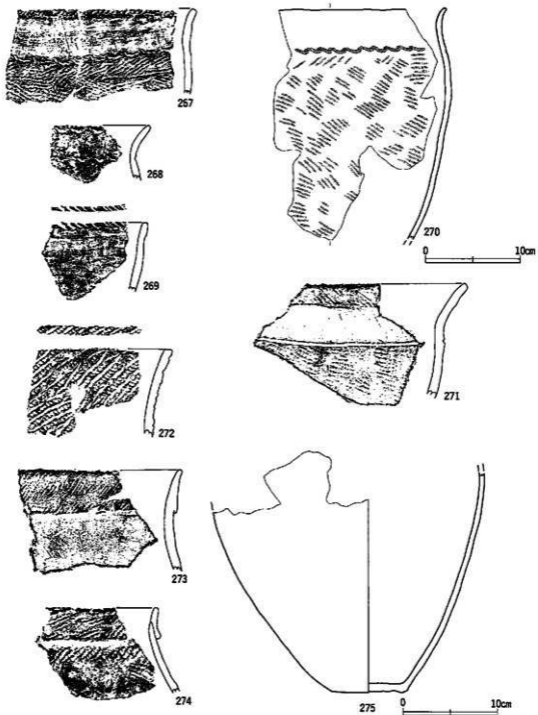
238、242、243は入組状文と磨り消しによる文様がみられる。238、243とも口縁部であるが、243は小さな瘤を連続的に配し、瘤の間に刻み状の調整を加えているのに対し、238は貼り瘤の周りの調整は不完全である。238、242は胴部の瘤が立体的で頂部が尖っているのに対し、243は扁平である。154、245は数条の沈線に瘤が付くものである。245は口縁部に円形の瘤に貼り付けがみられる。平行沈線の間には円形の刺突がみられる。胴部の貼り瘤には刻み目がみられる。154は平縁で口唇部に部分的に大きな突起がみられ、その下部の無文帯には粘土の貼り付けが縦位に3つ並ぶ。口縁部は刺突により、瘤状の突起を作り出している。口唇部に近い部分の刺突は三日月状であるが、胴部では円形である。平行沈線による文様は上下左右の4つの弧状文により8つのブロックに分かれる。245と154では口縁の貼り瘤の方法から154が後出する文様と思われる。237は帯縄文に貼り瘤を付けている。口唇部は無文である。波状口縁頂部に胴部より大きな瘤を貼り付けている。238は吊り手付小型壺である。頸部に隆帯状の高まりがみられ平行沈線間は刺突の充填がみられる。頸部から胴部にかけては平行沈線がみられ、胴部は斜行沈線と弧状文による文様がみられ、前後に一つずつの貼り瘤はみられる。吊り手は粘土紐を貼り付けその内側に上から孔をあけている。底部は高台を作り付けている。155は鉢で頸部に平行沈線の間を充填するように頂部が尖った貼瘤がみられる。

- ③類 刻目文がみられるもの(第112図240、247~250、252、253、写図69)

253は頸部に刻目文がみられ、以下は無文である。248は入組状文の他に刻目文がみられる。5点のうち最も刻目文の幅が狭いことや入組文が縄文であることから最も古い土器と思われる。247は入組文が刻目文である。250、252とも口縁部に刻目文がみられる。250は口唇部に刻目がみられ、ボタン状貼り付けがみられる。249は口縁部に台状突起がみられ、口唇部の刻み目は沈線で強く引かれており、左側は2本、右側は1本みられた。また、刻目文が刷毛目状に細かくみられた。249は後出する251と同様、後期末葉の土器と思われる。

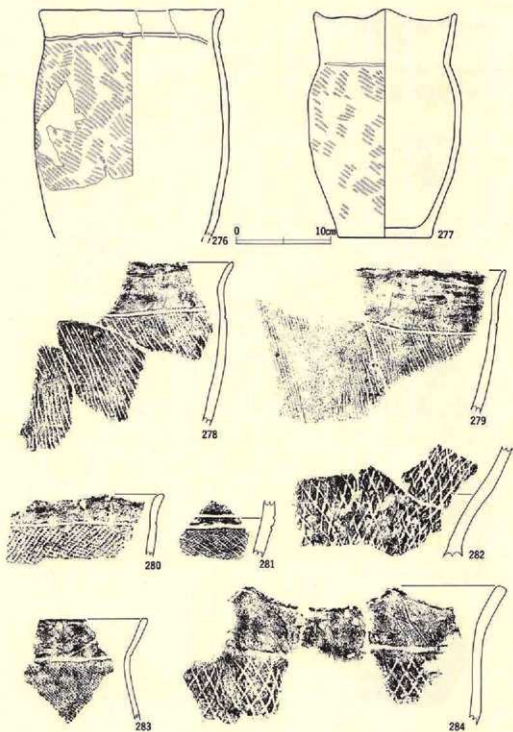


第113圖 遺構外出土遺物(第IV群土器10)

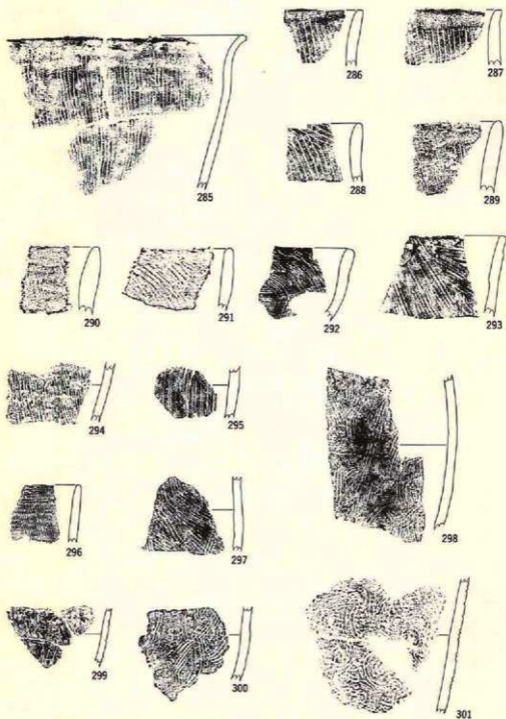


第114図 遺構外出土遺物(第IV群土器11)

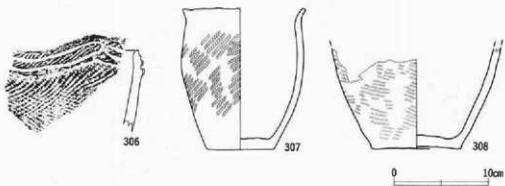
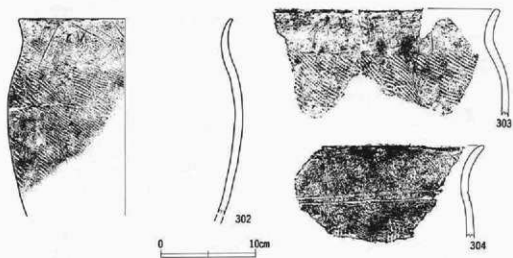




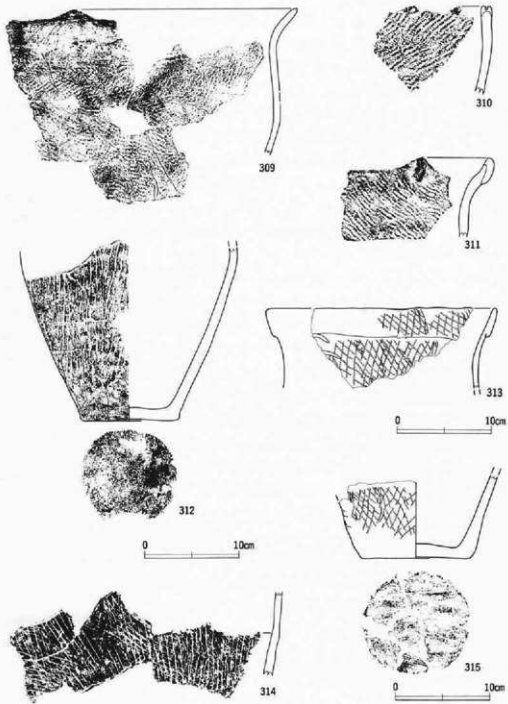
第115圖 遺構外出土遺物(第IV群土器12)



第116図 遺構外出土遺物(第IV群土器13)



第117図 遺構外出土遺物(第IV群土器14)



第118圖 遺構外出土遺物(第IV群土器15)

④類 口縁に大型の台状突起を有する土器 (第112図251、写図69)

251は帯縄文がみられる。沈線と沈線の間は狭い無文帯がみられる。

4類 注口土器、吊り手土器 (第106図156、157、第112図254～258、260、写図64、69)

156、157は無文研磨されている。156は口縁部が「く」の字に外反するが、157は直立気味である。258は注口土器の頸部と思われ、「く」の字に外反する。257は注口土器の底部である。258～260は注口部である。259は上下に貼瘤がみられる。259は下位のみである。256は吊り手部で表裏に赤色顔料の付着がみられた。255は底部と思われる。

5類 粗製土器 (第113図261～118図308、写図70～73)

後期に属する粗製土器を一括した。深鉢が多い。261～266は頸部に原体圧痕がみられる。267は口唇部刻目がみられた。268は口唇部付近にも原体圧痕がみられる。267、268、270は燃糸圧痕がみられる。269は無文で口唇部に刻みがある。271は付加縄文で口唇部から地文がみられる。272～274は折り返し口縁である。272は頸部に無文帯をもち、地文との境に沈線がみられる。275は無文研磨されており、粗製土器でない可能性も考えられる。276～280、283、284は口縁部に無文帯をもち、頸部に沈線がみられる。278、279は燃糸、284は波状口縁で網目状燃糸の地文である。280は付加縄文で口縁の頂部から頸部の沈線まで縦位の沈線がみられた。277は波状口縁でほぼ完形の鉢である。283は「く」の字に外反する。285～288、290、294、312は燃糸、289、291、292、295～301は櫛葉状沈線による文様であり、直線的なものと曲線的なものがみられる。293は板状のもので表面をなでている。304は頸部に2本の沈線がみられる。306は折り返し口縁で沈線による文様がみられる。307は小型鉢で頸部がわずかに外反する。302～305、308、309は無節の地文である。309は波状口縁で口縁部に無文帯がみられる。310は山形の突起があり刻み目がみられる。311は波状口縁で表側に貼瘤がみられる。282、313～315は網目状燃糸文の地文である。313、315は同一個体と思われる。折り返し口縁である。底部は笹葉痕がみられる。282、314とも体部下端から底部付近と思われる。

第V群土器

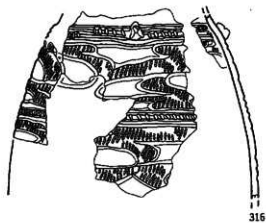
1類 縄文時代晩期の土器 (第119図～第122図、写図75～77)

A類 三叉状入組文を主体とするもの (第120図324～329、写図76)

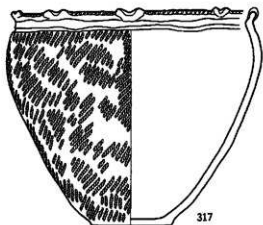
325は波状口縁で口縁部以外は無文研磨がみられ、注口土器と思われる。326、329は帯縄文の文様がみられる。327、328は口唇部に刻み目を持つ突起がみられる。文様から大河Bと思われる。

B類 羊歯状文、C字状文を主体とするもの (第119図316～318、第120図330～332、写図75、76)

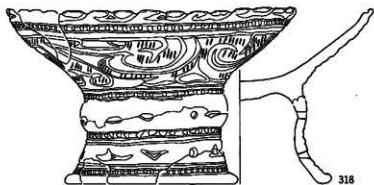
319、331、332は壺、317、318は鉢である。320は高坏であり、高台部分に2列の透かしがみ



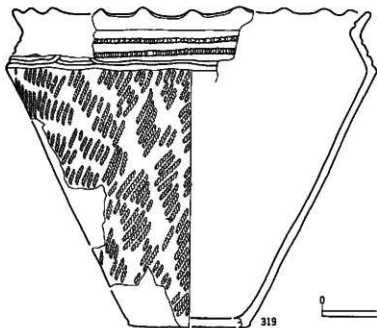
316



317



318



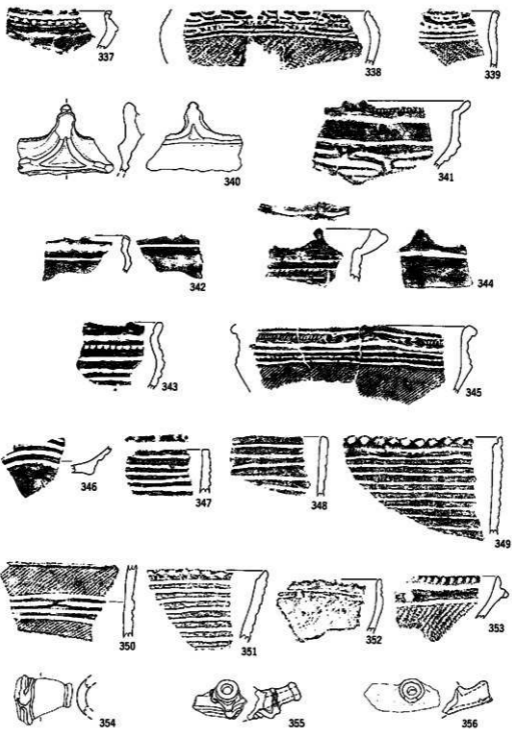
319

0 10cm

第119図 遺構外出土遺物(第V群土器1)



第120圖 遺構外出土遺物(第V群土器2)



第121图 遺構外出土遺物(第V群土器3)



られた。318、319 は透彫り的な文様がみられ、平行沈線化してきた羊歯状文上に縦型の刻みをもった突起がみられる。331 は平縁の口縁をもつ。331、332 は文様に地文を残さず、完全に磨り消しがみられる。332 は胴部に地文がみられる。文様から大洞 B—C と思われる。

C 類 口縁部の平行沈線と刻み目文、胴部の×字文、雲形文を主体とするもの（第 120 図 320、321、第 120 図 333～336、第 121 図 337～339、写図 75、76）

316、317 は平縁の鉢と思われる。333 は口唇部に刻み目をもち、内面にタール状付着物がみられる。大洞 C1 と思われる。

D 類 平行線化の著しい土器（第 119 図 318、319、第 120 図 323、第 121 図 340～351、写図 75、76、77）

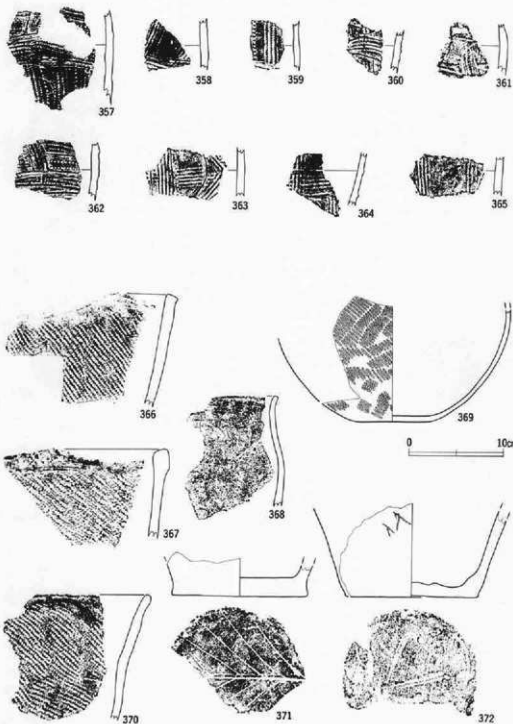
340 は深鉢の突起部で口唇部に刻み目、三角形状に見える隆線とその交点に瘤状の貼りつけがみられる。341、342 は山形突起が口唇部にみられる。344 は口唇部に沈線による文様がみられる。347 は鉢の底部にあたる。349 は口唇部に刺突がみられる。348、350 は口唇部に表面の上からの刺突がにより、口唇部が薄くなっている。また、裏面の口唇部直下には沈線がみられる。351 は平縁で刺突がみられない。時期は晩期後葉と思われる。

E 類 粗製土器（第 121 図 352、353、写図 77）

いずれも後葉の土器と思われ、沈線上に 352 は二組の貼り瘤、354 は突起がみられる。

F 類 注口土器（第 121 図 354～356、写図 77）

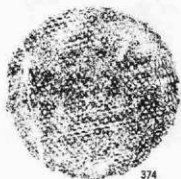
後期の土器と思われ、355 は注口の下部に突起がみられる。



第122圖 遺構外出土遺物(第VI群土器、第VII群土器1)



373



374



375



376



377



378



379



380



381



382



383



384



385



386

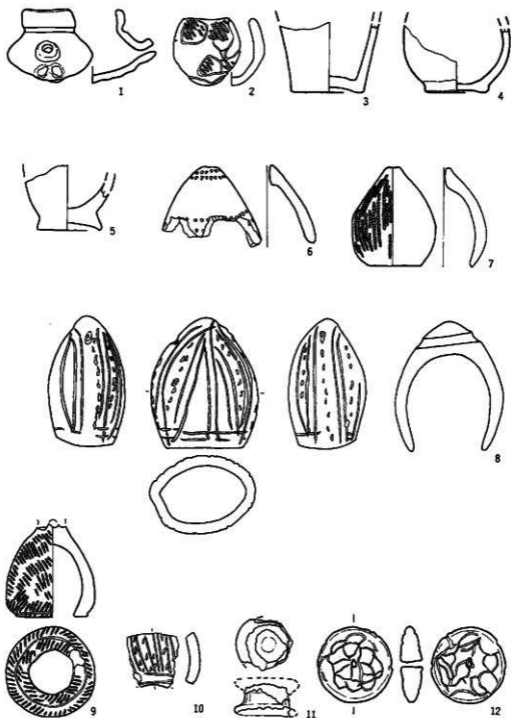


387



388

第123圖 遺構外出土遺物(第Ⅶ群土器2・小型土器)



第124図 遺構外出土遺物(ミニチュア土器・土製品)

## 第VI群土器

### 1類 縄縄土器 (第122図357~365、写図78)

同一個体の深鉢と思われ、微隆線、三角刺突列、縄文がみられる。357、362は裏面にタール状の付着物がみられる。363、364は断面のみ胎土が黒色である。

## 第VII群土器

時期不明の粗製土器、底部等を一括した。(第122図366~第123図374、写図78~79)

366~368、370は口縁部である。366、367は波状口縁である。368は無文研磨されている。369は胴部~底部で底面は丸底風である。口縁の状況や地文から367、368は第III群土器、366、369、370は第IV群土器である可能性がある。371~374は底部である。371は木葉痕、372、373、は笹葉痕、373、374、は網代痕が底面にみられた。

### 小型土器、ミニチュア土器

#### 小型土器 (第123図375~388、写図79)

鉢形土器、台付土器、壺形土器が出土している。375、379は底面が無文であるが、376は網代痕がみられ、377、378は笹葉痕がみられた。380~384は台付土器である。388は底面にわずかに木葉痕がみられた。無文のものや地文が残るものがある。

#### ミニチュア土器 (第124図1~5、写図80)

5点出土した。1は注口土器で注口の下に突起がみられた。2はほぼ完形の丸底の土器で沈線と磨り消しによる文様がみられる。3~5は胴部~底部付近である。いずれも丁寧な器面調整がみられる。

### 土製品 (第124図6~第127図、写図80~82)

#### 鐙型土製品 (第124図6~10、写図80)

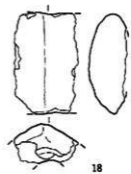
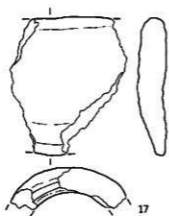
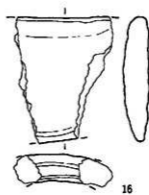
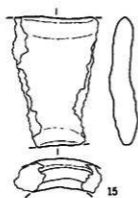
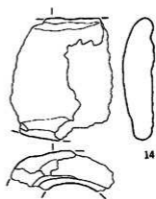
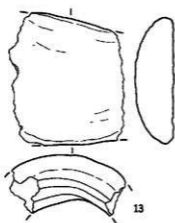
5点出土した。6、7、9は頂部に孔がみられた。7、9は地文がほとんどであったが、6は頂部の孔を中心に三角形と円形の刺突がみられた。8は頂部に孔はなく、側面の刺突の一番上部の刺突が貫通している。文様は縦位の沈線と櫛歯状工具による刺突であり10と類似している。6、7、9の断面が円形なのに対して、8は不整楕円形である。

#### 耳飾 (第124図11、写図80)

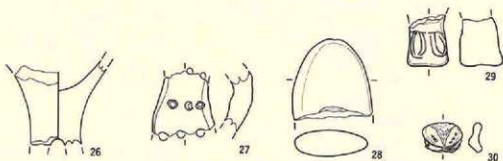
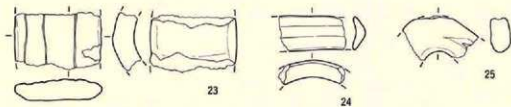
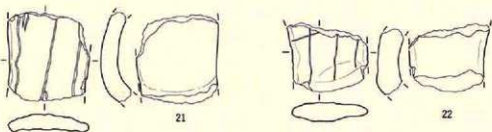
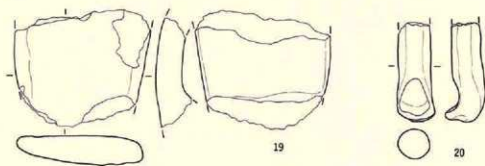
1点のみの出土であった。滑車状を呈すると思われ、上下面とも中央部に凹がみられる。RA12出土のものは赤色顔料の付着がみられた。

#### ボタン状土製品 (第124図12、写図80)

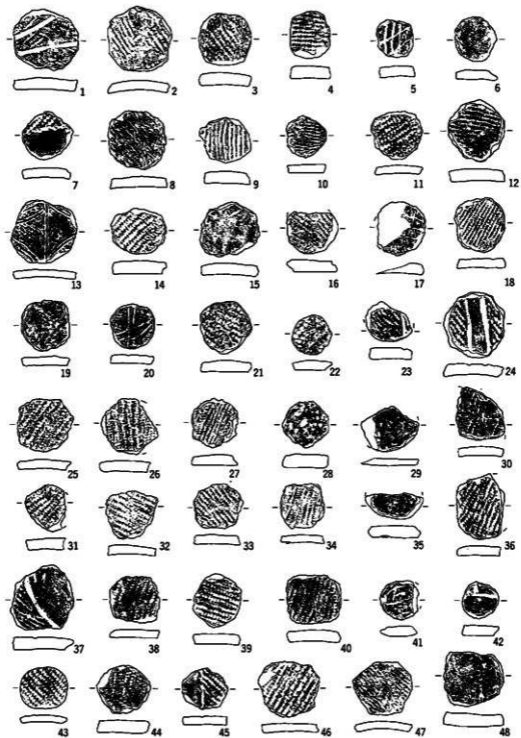
名称については問題が残るが、中央部に直径2mm程度の孔がみられることからこの名称を用いた。周縁部はなで調整がみられる。表裏面とも沈線による文様がみられる。



第125圖 遺構外出土遺物(土製品)



第126圖 遺構外出土遺物(土製品)



第127圖 遺構外出土遺物(円盤状土製品)



**碗輪形土製品**（第125図13～17、写図80）

厚手で幅広いものである。欠損しているため、形状は明確でないが、断面形は円形と思われる。

**土偶**（第125図18～第126図23、29、写図80、81）

板状を呈する土偶である。細沈線による正中線がみられた。19は肩から背中にかけての部位、20、29は脚部であると思われる。

**裝飾品**（第126図24、写図81）

外面にくびれを有する環状のものでRA12の住居跡内土坑からも出土している。

**環状土製品**（第126図25、写図81）

ドーナツ状を呈す。全面無文研磨がみられる。土器の突起部の可能性も考えられる。

**不明土製品**（第126図26～28、30、写図81）

形状が不明なものを一括した。26は下面と思われる部分に幅8mm程度の孔が貫通していたと思われる。上面には丁寧な調整がみられる。27は円形の刺突がみられる。土器の突起部である可能性もある。28は無文研磨されている。30は裏面に指の第一関節の押印が残り、表面には沈線と刺突による文様がみられる。

**円盤状土製品**（第127図1～48、写図81、82）

打ち欠きや研磨による周縁の加工がみられる。形状は方形と円形のものがみられた。土器の底部を用いているものもみられた。16は煤の付着がみられた。

第8表 遺構外出土土器計測表

&lt; &gt; 最大径 ( ) 現存値 ( ) 推定値

図番号	器種	出土地点・層位	法 量 (cm)			分 類	写真図版	備 考
			口 径	底 径	器 高			
95-26	深 鉢	G6K23 II層 B5	17.3	—	20.3	II 1A	56-26	
-27	〃	G6H12 II層 B5	14.5	—	14.7	〃	-27	
-28	〃	G6 II層	13.7	—	17.4	〃	-28	
-29	深 鉢	G6R24 II層	—	12.4	11.5	II 1B	-29	
98-68	〃	G6K25 II層 B4	22.2	—	—	III 1A	-68	
99-87	〃	G7 III層	15.1	—	(18.5)	III 2C	59-87	
-88	小型 壺	G6F16 付近木根	4.6	7.2	9.4	〃	-88	
-89	深 鉢	G6N25 II層 B3	20.8	—	15.6	III 3	-89	
-90	小型 鉢	G7N03 III層	—	5.0	(5.4)	III 2	-90	
101-114	深 鉢	G6N05 II層	13.7	—	(7.1)	III 2B ②	60-114	
104-145	〃	G6D16 付近木根	26.2	—	(30.3)	IV 1B ①b	63-145	
-146	〃	G6F17 II層	15.7	8.0	19.1	IV 1B ①c	-146	完形
-147	〃	G6E13 木根	[15.4]	—	(9.3)	IV 1B ①b	-147	
-148	把り手付 小型 鉢	G6D17 付近II層	12.3	6.8	9.5	IV 1D	-148	完形
-149	深 鉢	G6D14~16 II層	[22.8]	—	(12.5)	IV 1B ②	-149	
105-150	大型 壺	G6L21 II層 B5	[16.2]	—	(35.1)	IV 1D	-150	
-151	小型 壺	G6G17 II層	<11.7>	5.5	(6.7)	〃	64-151	
152-152	壺	G6P24 II層 B3	—	—	(24.8)	IV 1D	-152	
-153	〃	G6E11 木根	11.8	—	9.8	〃	-153	
106-154	深 鉢	G6I24 II層 B2	[23.3]	—	—	IV 3A ②	-154	
-155	〃	H6T9 II層	15.3	—	(14.2)	〃	-155	
-156	注口土器	G6M24 II層 B4	<18.4>	—	(15.5)	IV 4	-156	
-157	〃	G6I25 II層 B2	9.0 <15.5>	—	(11.7)	〃	-157	
108-193	小型 鉢	G6E17 II層	—	5.4	(8.3)	IV 1C ②	66-193	
-194	〃	G6D16 付近木根	9.0	4.0	9.2	〃	-194	
109-208	把り手付 小型 壺	G6P11 木根	3.6 <9.0>	2.8	10.2	IV 1D	67-208	赤色顔料付着
-209	小型 壺	G6E13 II層	<9.3>	3.9	(8.5)	〃	-209	
110-216	把り手付 小型 鉢	G6K20 II層 B 2	<10.5>	5.9	(6.5)	〃	-216	
-222	深 鉢	G6E18 木根	—	8.1	(6.3)	〃	68-222	
111-240	鉢	G6K24~25 II層	—	4.5	(5.4)	IV 3A ③	-240	
-241	注口土器	H7M10 II層	—	2.4	(6.6)	IV 3A ①	69-241	
112-244	把り手付 壺	G6M22 II層 B3	4.3	4.9	13.4	IV 3A ②	-244	

図番号	器種	出土地点・層位	法 基 (cm)			分 類	写真版	備 考
			口 径	底 径	器 高			
112-257	小型鉢	G6I25 II層 B2	—	4.2	(7.8)	IV 3A ③	69-257	
113-261	深鉢	G7D17 付近木根	24.3	—	(27.5)	IV 5	70-261	
-262	小型深鉢	G6E15 木根	12.9 <14.3>	6.9	17.3	—	-262	
114-270	深鉢	G6E15 II層 B2	—	6.7	(24.6)	—	71-270	
114-275	深鉢	G6F23 II層 B2	—	6.7	(23.2)	IV 5		
115-276	深鉢	G6D12 II層	19.3	—	(24.3)	—	72-276	
-277	—	G6 II層	[15.0] <16.0>	9.6	24.4	—	-277	
117-302	—	G6D14 付近木根	22.8	—	(20.8)	—	73-302	
-307	小型深鉢	G7D11 木根	9.6	5.3	11.3	—	-307	
-308	深鉢	G6E18 木根	—	9.6	(10.8)	—	-308	
118-312	—	G6D13 木根	—	7.7	(13.6)	—	74-312	
-313	—	G6F14 木根	[24.4]	—	—	—	-313	
-315	—	G6F14 木根	—	11.5	(8.2)	—	-315	
119-316	査	G6R24 II層 B 7	—	—	(11.7)	V 1B	75-316	
-317	深鉢	G6J23 II層 B 5	17.3 <18.0>	5.6	15.4	—	-317	
-318	台付鉢	G6P24 II層 B3	20.3	[12.7]	(2.2)	—	-318	
-319	深鉢	G6D11 木根	[25.2] <26.1>	[8.5]	22.5	V 1D	-319	
-320	鉢	G6R24 II層 B7	17.8	—	—	V 1C	-320	
-322	—	G6D23 II層 B3	[13.7]	—	(6.0)	—	-322	
-323	査	G6 II層	11.7 <14.4>	—	(13.8)	V 1D	-323	
122-369	—	G6I25 II層	—	5.2	(10.0)	VII	78-369	
-371	深鉢	G6F16 木根	—	10.7	(3.4)	—	-371	
-372	—	G6O23 II層	—	10.5	(7.4)	—	-372	
123-373	—	G6F13~14 木根	—	9.8	(6.8)	—	-373	
-374	—	G6E18 木根	—	14.3	—	—	-374	
123-375	小型鉢	G6E18 木根	—	7.5	(14.9)	—	79-375	
-376	—	G6O22 II層 B3	—	5.1	(12.1)	—	-376	
-377	—	G6J23 II層 B5	—	5.8	(4.2)	—	-377	
-378	—	G6D14 付近木根	—	5.5	(4.8)	—	-378	
-379	—	G6M24 II層 B6	—	5.7	(4.2)	—	-379	
-380	台付鉢	G6M23 II層	—	6.5	(6.8)	—	-380	
-381	—	H7F11 III層	—	8.2	(3.0)	—	-381	
-382	—	G7 III層	—	7.2	(3.2)	—	-382	
-383	—	G6E18 II層	—	6.0	(3.2)	—	-383	
-385	小型鉢	G6D18 II層	6.4	2.2	4.1	—	-385	
-386	—	G6E18 木根	—	2.5	(5.4)	—	-386	
-387	—	G6F18 II層	—	4.3	(5.6)	—	-387	
-388	—	—	—	3.2	(3.6)	—	-388	

第9表 遺構外出土土器観察表

番号	グリッド	層位	器種部位	分類	写真図	特記事項
94-1	G6L21	II層 B7	胴部	I 1A	54-1	
-2	G6L25	II層 B5	〃	〃	-2	
-3	G6E12	木根付近	〃	〃	-3	
-4	G6E12	木根付近	〃	〃	-4	
-5	G6E12	木根付近	〃	〃	-5	
-6	G6L21	II層 B5	〃	〃	-6	
-7	G6D12	II層	〃	〃	-7	
-8	G6D18付近	〃	〃	I 1B	-8	
-9	G6E12	木根	口縁部	I 2A	-9	
-10	G6J25	II層 B5	〃	〃	-10	
-11	G6D13	II層	胴部	〃	-11	
-12	G6D13 G6L02	II層 B2	〃	〃	-12	
-13	G6F13	II層	〃	〃	-13	
-14	G6D12	〃	〃	〃	-14	補修孔有り
-15	G6D12	〃	〃	I 2B	55-15	
-16	G6E12	木根付近	〃	〃	-16	
-17	G6E12	口縁部	〃	〃	-17	
-18	G6D23	II層 B6	底部付近	〃	-18	尖底と思われる
-19	G6L02 G6D18付近	II層 B2	口縁部	〃	-19	
-20	G7L02	II層 B2	〃	I 2B	-20	補修孔有り
-21	G6F18	II層	〃	〃	-21	
-22	G6D18付近	木根	胴部	I 2C	-22	
-23	G7	I層	口縁部	〃	-23	補修孔有り
-24	G6M21	II層 B6	〃	I 2B	-24	
-25	G6D13	木根	胴部	I 2C	-25	
96-30	G7	III層	〃	II 1A	57-30	
-31	G6D23	II層 B6	口縁部	〃	-31	
-32	G6N21	II層	〃	〃	-32	
-33	G6F24	II層 B6	〃	〃	-33	
-34	G6K22	II層	底部	II 1B	-34	尖底と思われる
-35	G6	I層	〃	〃	-35	〃
-36	G6K25	II層 B3	〃	〃	-36	〃
-37	G6N21	〃	〃	〃	-37	〃
-38	G6N21	〃	〃	〃	-38	〃
-39	G6M23	II層	〃	II 1B	-39	〃
-40	G6D13	〃	胴部	〃	-40	補修孔有り
-41	G7O2	II層	口縁部	〃	-41	
-42	G6O20	II層	〃	〃	-42	
-43	G7	III層	〃	〃	-43	
-44	G6K23	II層 B6	〃	〃	-44	
-45	G6E12	木根	〃	〃	-45	
97-46	G6H24	II層	胴部	II 1C	-46	
-47	G6O20	II層 B3	〃	I 1A	-47	
-48	G6H25	II層	口縁部	〃	-48	
-49	G7M02	III層	胴部	〃	-49	
-50	G6E14	木根	〃	〃	-50	
-51	G6T24	II層	口縁部	〃	-51	
-52	G7	III層	〃	II 1A	-52	
-53	G7	〃	胴部	〃	-53	
-54	G6M21	II層	口縁部	〃	-54	
-55	G6I25付近	〃	〃	〃	58-55	
-56	G7J03	II層 B3	〃	〃	-56	
-57	G6P24	II層 B4	〃	〃	-57	

番号	グリッド	層位	器種部位	分類	写図	特記事項
-58	G7N01	II層 B7	胴部	II 1A	58-58	
-59	G6J22	II層	口縁部	II 1C	-59	
-60	G6L21	#	#	#	-60	
-61	G6J25	II層 B4	胴部	II 1A	-61	
-62	G6K23	II層 B5	口縁部	II 1G	-62	
-63	G6D17	木根	#	#	-63	
-64	G6R23	II層	#	II 1A	-64	
98-65	G6O20	II層	胴部	III 1B	-65	
-66	G6L23	II層	口縁部	III 1A	-66	
-67	G6	#	#	II 1D	-67	
-69	G6L23	II層	#	III 1A	-69	
-70	G6P25 G6L21	#	#	II 1C	-70	
-71	G6E12	#	#	III 1B	-71	
-72	G7I03	II層 B3	頸部	III 1A	-72	
-73	G6M25	II層 B3	口縁部	II 1F	-73	
-74	G7Z01	II層 B4	#	III 1A	-74	
-75	G7J02	II層	#	#	-75	
-76	G7区	I層	頸部	II 1E	-76	
-77	G7	III層	口縁部	III 1A	-77	
-78	G6M24	II層	#	II 1F	-78	
-79	G6N21	#	#	II 1E	-79	
-80	G7J02	II層 B3	#	III 1B	-80	
-81	G7	III層	#	III 1A	-81	
-82	G6J24	II層 B6	#	#	-82	
-83	G6	I層	胴部	#	-83	
-84	G6H25	II層	#	III 1B	59-84	
-85	G6N21	#	#	#	-85	
-86	G7	III層	深鉢	III 1A		
-91	G6	II層	#	III 2A	59-91	
100-92	G6K25	#	胴部	#	-92	
-93	G7	I層	深鉢	#	-93	
-94	G7	III層	#	#	-94	
-95	G7I01	II層 B2	口縁部	#	-95	
-96	G6P22	II層 B1	深鉢	III 2A	-96	
-97	G6O23	II層	#	#	-97	
-98	G7	III層	頸部	#	60-98	
-99	G6G25	II層 B2	深鉢	#	-99	
-100	G6	I層	#	#	-100	
-101	G6E15	木根	深鉢突起部	#	-101	
-102	G6L23	II層	深鉢	#	-102	
-103	G6	I層	#	#	-103	
101-104	G7	III層	#	#	-104	
-105	G6J25	II層	#	#	-105	
-106	G7	III層	#	#	-106	
-107	G6	I層	#	#	-107	
-108	G6	II層	鉢	#	-108	
-109	G7	III層	深鉢	#	-109	
-110	G7	#	#	#	-110	
-111	G6H22	II層 B5	#	#	-111	
-112	E4	I層	胴部	#	-112	
-113	G7	III層	深鉢	III 2B②		
-115	G7	III層	浅鉢?	III 2B②	60-114	
-116	G7	#	深鉢	#		
-117	H6M	II層	口縁部	#		

番号	グリッド	層位	器種部位	分類	写真	特記事項
102-118	G6M25	#	深鉢	#	61-118	
-119	G7	III層	#	#	-119	
-120	G6F07	II層	#	#	-120	
-121	G7	III層	#	#	-121	
-122	G7L01	#	#	#	-122	
-123	G7L01	III層 B2	#	III 2B ①	-123	
-124	G7	III層	#	#	-124	
-125	G6L26	II層	#	III 2B ②	-125	
-126	G7	III層	#	#	-126	
-127	G7	#	#	III 2C	-127	
-128	G7	#	#	III 2B ②	-128	
103-129	G6	I層	#	III 2B ①	62-129	
-130	G6L23	II層 B6	#	III 2C	61-130	
-131	G6K22	II層	#	#	-131	
-132	G7	II層	口縁部	#	62-132	
-133	G7M02	II層	胴部	#	-133	
-134	G7K10	II層	#	III 2C	-134	
-135	G7	I層	深鉢	#	-135	
-136	G6K23	II層 B6	#	#	-136	137と同一個体
-137	G6L22	II層	#	#	-137	
-138	G6L22	#	#	#	-138	
写真 62-139	G7	I層	#	III 3		
-140	G7	III層	#	#	62-140	
-141	G7M02	II層 B3	#	#	-141	
-142	G6D16	木根	#	#	-142	
-143	G7	I層	#	#	-143	
-144	H7	I層	#	#	-144	
-158	G6H12	木根	深鉢突起部	IV 1A	65-158	
-159	G7	I層	深鉢	#	-159	
-160	G7 東側	I層	#	#	-160	
-161	G7	III層	#	IV 1C ④	-161	
-162	G6K26	II層	#	#	-162	
-163	G6O14	#	#	IV 1B ① a	-163	
-164	G6F13	木根	#	IV 1B ① b	-164	
-165	G6D17	木根	#	#	-165	
107-166	G6E14	木根	#	#	-166	
-167	G6	II層	#	#	-167	
-168	G6P22	II層	#	#	-168	
-169	G6P22	II層 B6	#	#	-169	
-170	G6	II層	#	#	-170	
-171	G6O17	II層	#	IV 1B ① c	-171	
-172	G6E17	木根	#	#	-172	
-173	G6E18	木根	#	#	-173	
-174	G6E12	木根	#	#	-174	
-175	G6O19~21	II層	#	#	-175	
-176	G6K22	#	#	IV 1B ① d	-176	
-177	G6E15	II層	#	#	-177	
-178	G6D14	#	#	IV 1B ① c	-178	
-179	G6E15	#	#	#	-179	
-180	G6D13	木根	#	IV 1B ① d	66-180	
-181	G6D13	II層	#	IV 1B ②	-181	
108-182	G6E14	#	#	#	-182	
-183	G6D17 付近	木根	#	IV 1C ①	-183	

番号	グリッド	層位	器種部位	分類	写図	特記事項
-184	F5E8		深鉢	IV 1C ④	66-184	配石検出面出土
-185		I層	胴部	〃		-185
-186	G6	II層	〃	IV 1B ③		-186
-187	G6P25 付近	〃	蓋	IV 1B ②		-187
-188	G6	〃	〃	〃		-188
-189	G6E17	木根	口縁部	IV 1C ①		-189
-190	G6E14	II層	〃	〃		-190
-191	G6E13	木根	〃	IV 1B ① a		-191
-192	G6E15	II層	胴部	IV 1C ②		-192
-195	G6E15	木根	〃	〃		-195
-196	G6D13	木根	胴部	〃		-196
-197	G6F13	木根	底部	〃		-197
-198	G6E15	木根	胴部	〃		-198
-199	G6E18	木根	〃	IV 1C ④		-199
-200	G7	II層	口縁部	IV 1C ③		-200
-201	G6I21	II層	胴部	〃		-201
109-202	G6D14	〃	〃	〃	67-202	
-203	G7 区	II層	〃	〃		-203
-204	G6D13	II層	〃	〃		-204
-205	G6I21	〃	深鉢	〃		-205
-206	G6E10	〃	〃	〃		-206
-207	G6E14	〃	〃	〃		-207
-210	G6D17	II層	小型深鉢	IV 1D		-210
-211	G6E17	II層	口縁部	〃		-211
-212	F5・6		〃	〃		-212
-213	G6D13	II層	小型蓋	〃	-213	配石検出面 赤色顔料付着 切土器
110-214	G6D16	〃	深鉢	〃	-214	
-215	G6D17	〃	〃	〃	-215	
-217	G6D14	木根	胴部	〃	68-217	
-218	G6E17	木根	〃	〃	-218	
-219	G6E12	木根	〃	〃	-219	
-220	G6E18	木根	〃	〃	-220	赤色顔料付着
-221	G6E18	木根	〃	〃	-221	
-223	G6D24	II層 B5	蓋?	〃	-223	赤色顔料付着
-224	G6E13	木根	胴部	〃	-224	
-225	G6O22, G6P03	II層	〃	〃	-225	
-226	G7	III層	蓋?	〃	-226	
-227	G6E13	木根	深鉢	〃	-227	
-228	G6E15	II層	口縁部	IV 2B	-228	
111-229	G6E13	II層	深鉢	IV 2A	-229	
-230	G6J22	II層 B4	〃	〃	-230	
-231	G6	II層	〃	〃	-231	
-232	G6D13	木根	口縁部	〃	-232	
-233	H7L10	III層	深鉢	IV 3A ①	-233	
-234		I層	蓋突起部	〃	-234	
-235	G7	I層	蓋	〃	-235	
-236	G6I23	II層 B2	〃	〃	-236	
-237	H7F09	III層	深鉢	IV 3A ②	-237	
-238	H6T09	〃	〃	〃	-238	
-239	H7	III層	蓋	IV 3A ①	-239	
-242	H6T09	〃	深鉢	IV 3A ②	69-242	
-243	G7	I層	〃	〃	-243	

番号	グリッド	層位	器種部位	分	額	写真	特記事項
-245	G7	I層	鉢	//		69-245	
-246	G6D18 付近	II層	底部付近	IV 3A ㊶		-246	
-247	G6	I層	胴部	IV 3A ㊶		-247	
-248	G7K	III層	//	IV 3A ㊶		-248	
-249	H7M10	//	鉢	//		-249	
-250	H7	//	//	//		-250	
-251	G7	//	//	IV 3A ㊶		-251	
-252	G7	I層	//	IV 3A ㊶		-252	
-254			注口	IV 4		-254	
-255	G7	III層	把り手部	//		-255	
-256	G7	//	//	//		-256	
-258	H7	III層	注口	IV 4		-258	
-259	H7G10	//	//	IV 7		-259	
-260	G7	//	//	IV 4		-260	
-263	G6E14	II層	深鉢	IV 5		70-263	
-264	G6E15	木根	//	//		-264	
-265	G6C18 付近	II層	//	//		-265	
-266	G6E13	木根	//	//		-266	
-267	G6E14	II層	//	IV 5		-267	
-268	G6K23	// B5	//	//		-268	
-269	G6L22	//	//	//		-269	
-271	G6E13	木根	//	//		71-271	
-272	G6L24	II層 B5	//	//		-272	
-273	G6E18	木根	//	//		-273	
-274	G6R25	II層 B3	//	//		-274	
-278	G6E13	木根	//	//		72-278	
-279	G6E11	II層	//	//		-279	
-280	G6E13	//	//	//		-280	
-281	G6	I層	煮胴部?	//		-281	
-282	G6	//	深鉢	//		-282	
-283	G6G25	II層 B3	//	//		-283	
-284	G6	II層	//	//		-284	
116-285	G6D13	木根	//	//		73-285	
-286	G6D14	II層	//	//		-286	
-287	G6E13	木根	//	//		-287	
-288	G6E14	木根	//	//		-288	
-289	G7	III層	//	//		-289	
-290	G6N25	II層 B3	//	//		-290	
-291	G6J23	II層 B4	//	//		-291	
-292	G6K23	//	//	//		-292	
-293	G6L21	II層	//	//		-293	
-294	G6	II層	//	//		-294	
-295	G7	III層	//	//		-295	
-296	G6L22	II層 B5	//	//		-296	
-297	G6E17	II層	//	//		-297	
-298	G6E18	木根	//	//		-298	
-299	G6D17 付近	木根	//	//		-299	
-300	G6E18	木根	//	//		-300	
-301	G6D13	木根	//	//		-301	
-303	G6D16	木根付近	//	//		-303	
-304	G6E18	II層	//	//		-304	
-305	G6E14	木根	//	IV 5		-305	
-306	G6F14	II層	//	//		-306	
118-309	G6M24	II層	//	//		74-309	
-310	G6I23	//	//	//		-310	



番号	グリッド	層位	器種部位	分類	写図	特記事項
-311	G6J23	II層 B4	深鉢	〃	74-311	
-314	G7	III層	〃	〃	-314	
110-321	G6R24	II層	〃	〃	75-321	
120-324	G7	III層	口縁部	V 1A	76-324	
-325	G6J25	II層	注口土器?	〃	-325	
-326	G6	〃	胴部	〃	-326	
-327	〃	〃	口縁部	〃	-327	
-328	G7G01	II層	体部	〃	-328	
-329	G7	〃	口縁部	〃	-329	
-330	G7	〃	〃	V 1B	-330	
-331	G6P24	II層 B5	〃	〃	-331	
-332	G7	II層	壺	〃	-332	
-333	G6F14	〃	鉢	V 1C	-333	
-334	G6	〃	〃	〃	-334	
-335	G7	III層	皿	〃	-335	
-336	G7	〃	〃	〃	-336	
121-337	G6U12	II層 B1	鉢	〃	-337	
-338	G6I24	II層 B2	〃	〃	-338	
-339	H7P10	II層	〃	〃	-339	
-340	G6I20 付近	II層	深鉢突起部	V 1D	-340	
-341	G6	〃	鉢	〃	-341	
-342	G7I103	〃	口縁部	〃	-342	
-343	G6	〃	鉢	V 1C	-343	
-344	G6E22	II層 B2	〃	〃	-344	
-345	G6H24	II層 B5	壺	〃	-345	
-346	表探		壺底部	〃	-346	
-347	H7	III層	深鉢	〃	-347	
-348	H7E06	〃	〃	〃	-348	
-349	G8	I層	〃	〃	-349	
-350	H7	II層	胴部	〃	-350	
-351	G6	〃	深鉢	〃	-351	
-352	F5 区	14層下	小型鉢	〃	-352	配石検出面出土
-353	G6	II層	鉢	〃	-353	
-354	G6D13 付近	II層	注口	V 1F	-354	
-355	G6J25	II層 B1~2	〃	〃	-355	
-356	G6J25	II層	〃	〃	-356	
122-357	G6D11	木根付近	深鉢	VI	78-357	
-358	G6D11	木根付近	〃	〃	-358	
-359	G6D12	II層	〃	〃	-359	
-360	G6	I層	〃	〃	-360	
-361	G6I24	II層 B2	〃	〃	-361	
-362	G6D11	木根付近	〃	VI	-362	
-363	G6G23	II層 B2	〃	〃	-363	
-364	G6J22	II層 B4	〃	〃	-364	
-365	G6J22	〃	〃	〃	-365	
-366	G7	III層	〃	VII	-366	
-367	G7	〃	〃	〃	-367	
-368	G6L21	II層	小型壺	〃	-368	
-370	G7	III層	深鉢	〃	-370	

第10表 遺構外出土土器・土製品計測表  
ミニチュア土器

( ) 内は現存値

図版番号	計測値 (cm)				重量 (g)	出土地点 層位	写 図	備 考
	口径	器高	底径	器厚				
124-1	1.5	2.9	0.5	0.2	14.0	G6N06 II層 B3	80-1	
2	1.7	2.6	0.6	0.2	10.2	H7 III層	-2	
3	—	(2.8)	2.9	0.2	16.4	G7 I層	-3	
4	2.6	—	—	—	—	G7 III層	-4	
5	—	(2.6)	2.6	0.4	18.1	G6N04 II層	-5	

鐔形土製品

図版番号	最大計測値 (cm)			重量 (g)	出土地点 層位	写 図	備 考
	高さ	幅	厚さ				
124-6	3.30	3.90	0.50	14.0	G6F14 木根	80-6	欠損
7	4.00	3.35	0.45	17.0	G6G25 II層 B4	-7	完形
8	5.30	4.30	0.50	30.0	G6E13 II層	-8	//
9	2.25	2.05	0.04	2.0	G6D14 付近II層	-9	欠損
10	3.70	3.60	0.55	29.0	G6D13 木根	-10	//

耳飾り

図版番号	最大計測値 (cm)			重量 (g)	出土地点 層位	写 図	備 考
	外径	内径	高さ				
124-11	2.30	1.80	1.30	4.0	G7P11 III層	80-11	欠損

土偶

図版番号	最大計測値 (cm)			重量 (g)	出土地点 層位	写 図	備 考
	長さ	幅	厚さ				
126-19	5.7	7.3	1.8	66.0	G6E13	81-19	
20	5.3	2.0	1.6	18.0	3段目水田 床上土	-20	
29	2.8	2.1	2.2	12.0	G6P23 II層 B3	-29	

腕輪形土製品

図版番号	計測値 (cm)				重量(g)	出土地点 層位	写真	備考
	口径	器高	底径	器厚				
125-13	(8.5)	(5.1)	7.0	2.0	9.9	G6K24~25 II層	80-13	無文 残1/4
14	(7.0)	(3.7)	6.5	1.6	5.2	G6J23 II層 B4	-14	// 残1/6
15	(8.2)	(4.8)	6.9	1.3	4.2	G6K22 II層 B4	-15	// 残1/6
16	(7.8)	(5.3)	6.5	1.4	4.5	G6D19 付近	-16	// 残1/4
17	(7.4)	(4.4)	7.3	1.5	5.9	G6L22 II層 B4	-17	// 残1/6
18	(7.6)	(4.8)	5.4	2.0	3.1	G6E12 付近	-18	// 残1/6
21	(6.2)	(4.6)	4.3	0.9	2.1	G6E17 木根	81-21	沈線による 文様 残1/3

その他 土製品

図版番号	計測値 (cm)				重量(g)	出土地点 層位	写真	備考
	口径	器高	底径	器厚				
124-12	—	—	0.8	2.9	6.0	G6L20 II層 B5	80-12	
126-22	3.3	3.9	0.9	—	15.0	G6E17 木根	81-22	
23	2.9	4.4	0.9	—	17.2	//	-23	
24	1.8	3.4	0.9	—	4.0	H7F09 II層	-24	
25	1.9	3.9	1.1	—	9.0	G6F17 木根	-25	土器?
26	4.2	4.8	0.6	—	64.0	G6P23 II層 B3	-26	//
27	3.5	3.3	1.1	—	13.0	G6D17 付近	-27	//
28	4.2	4.2	1.4	—	25.0	H7 I層	-28	
30	1.6	2.1	0.3	—	2.0	G7 2段目水田	-30	III層

第11表 円盤状土製品計測表

図版番号	出土地点・層位	計測値 (cm)			重量 (g)	図線の加工	残存状態	写 図	備 考
		長径	短径	厚さ					
127-1	G6E14 木根	5.5	4.8	0.9	28g	打ち割き	完形	81-1	
-2	G6M21 II層B4	5.2	5.0	0.7	25	打ち割き一部研磨	〃	-2	
-3	G6K21 〃 B下	4.2	4.0	0.9	21	研磨	〃	-3	方形
-4	G6M21 II層B5	3.8	3.3	0.9	14	研磨	一部欠	-4	〃
-5	G6E13 木根	3.1	3.0	0.8	9	打ち割き	〃	-5	〃
-6	G6F23 〃 B3	3.7	3.4	0.6	10	打ち割き	完形	-6	
-7	G6D13 木根	3.7	3.5	0.7	13	〃	〃	-7	方形
-8	G6M24 II層B4	4.9	4.7	0.8	21	〃	〃	-8	
-9	G6D13 木根	3.7	3.6	1.0	16	〃	〃	-9	方形
-10	G6E17 〃	3.2	3.2	0.6	8	〃	〃	-10	
-11	G6N22 II層B3	4.1	4.0	0.7	11	〃	〃	-11	
-12	G6H23 〃 B2	4.9	4.6	0.9	20	〃	〃	-12	
-13	G6E13 木根	5.2	5.0	0.6	20	〃	〃	-13	
-14	G6I25 II層B4	4.4	3.6	1.0	16	〃	〃	82-14	
-15	G6O01 〃 B3	5.0	4.2	0.8	19	〃	〃	-15	すず付着
-16	G6N02 〃 B下	4.1	(3.5)	0.9	14	〃	一部欠	-16	
-17	G6D14 木根	4.3	(4.1)	0.8	14	〃	表半欠	-17	
-18	G6K22 II層B4	4.3	3.9	0.7	15	〃 一部研磨	完形	-18	
-19	G6E18 木根	4.0	3.8	0.6	12	〃	〃	-19	
-20	G6E14 〃	3.5	3.5	0.6	11	研磨	〃	-20	
-21	G6I24 II層B4	4.0	4.0	0.9	17	打ち割き一部研磨	完形	-21	
-22	G6I25 〃 B4	3.1	(2.9)	0.7	8	研磨	一部欠	-22	
-23	G6O2 〃 B6	(3.7)	(2.8)	0.9	11	〃	半欠	-23	
-24	G7R02 III層B3	5.2	4.9	0.9	28	打ち割き	完形	-24	
-25	G7E11 III層	4.2	4.5	0.7	17	〃	〃	-25	

図版番号	出土地点・層位	計測値 (cm)			重量 (g)	図線の加工	残存状態	写  図	備  考
		長径	短径	厚さ					
-26	G7L02 Ⅲ層B2	4.4	3.7	0.8	14	打ち割き	完形	82-26	方形
-27	G7V13 盛土	3.7	3.7	0.8	12	〃	〃	-27	
-28	G7X13 Ⅲ層	3.5	3.5	1.0	15	〃	〃	-28	
-29	G7P02 〃 B2	(4.5)	(3.6)	0.6	8	研磨	1/3 残	-29	底部
-30	G7P01 〃 B3	3.7	3.3	0.8	11	打ち割き	〃	-30	
-31	G7 〃	(4.2)	(4.0)	0.7	13	〃	一部欠	-31	方形
-32	G7I03 〃 B3	(4.3)	(3.8)	0.8	12	〃	〃	-32	
-33	G7 〃	3.9	3.6	0.7	13	〃	完形	-33	
-34	G7I02 〃 B2	3.6	3.4	0.6	10	〃	一部欠	-34	方形
-35	G7X13 〃	(4.5)	(2.1)	0.8	9	〃 一部研磨	一部残	-35	底部
-36	G7W13 盛土	5.1	(4.0)	0.7	19	打ち割き	一部欠	-36	
-37	G7F12 Ⅲ層	(5.1)	(5.1)	1.0	30	〃 一部研磨	〃	-37	
-38	G7 盛土	4.0	4.0	0.6	12	打ち割き	〃	-38	方形
-39	G7 攪乱	4.2	3.7	0.8	15	〃 一部研磨	完形	-39	
-40	G6OR23-25 Ⅱ層	4.4	3.9	0.8	21	〃	〃	-40	方形
-41	G6 Ⅱ層	3.1	(3.0)	0.7	6	打ち割き	一部欠	-41	
-42	G6 B1	2.9	2.9	0.9	8	打ち割き一部研磨	〃	-42	
-43	F5F11	3.8	3.4	0.6	9	研磨	完形	-43	
-44	F5E9	4.0	3.8	1.0	20	打ち割き一部研磨	〃	-44	
-45	F5	3.5	3.3	0.7	9	打ち割き	〃	-45	
-46	F5E9	4.7	4.6	0.6	16	〃	〃	-46	
-47	G6E15 木根	4.7	4.3	0.6	15	〃 一部研磨	〃	-47	
-48	G6F14 〃	4.8	4.6	1.1	27	打ち割き	〃	-48	底部

## (2) 石器、石製品 (第 129～138 図、写図 83～86)

### 石器

遺構外から出土した石器は 588 点であった。うち未製品は 417 点で微細剝離痕剝片、剝片、石核などである。剝片石器は 106 点、礫石器は 65 点であった。内訳は石器組成表の通りである。掲載したものはうち 44 点である。

#### ① 剝片石器

石鏃 (第 129 図 1～8、10、写図 83)

遺構外からは 32 点出土している。有茎のものと無茎のものがある。基基部は凹基、平基、円基、菱形、尖基がある。また、ほとんどが縄文時代のものであるが、アメリカ式石鏃が 1 点出土している。6 は抉りが深くみられる。4 と 7 は第一次剝離面を残すが他は全面に剝離がみられる。

石匙 (第 129 図 9、11、12、第 130 図 13、14、16、写図 83)

遺構外から 20 点出土している。縦型と横型がみられる。11、12、14、16 は刃部加工が片面からのものであり、その他は両面からの加工がみられる。

石鏟 (第 130 図 15、17、写図 83、84)

6 点出土している。15 は明瞭なつまみをもち、つまみ部が二股になるような抉りを作り出している。17 は菱形を呈し両端に鏟部をもつものと思われる。15 は摺痕遺跡出土石鏟 II a 1 類、第 347 図 9 と類似している。17 は本郷遺跡出土石鏟第 158 図 62 と類似している。実測図は掲載していないがほかの 3 点は鏟部が細長い三角形を呈しており、つまみ部、鏟部先端ともに欠損がみられる。1 点は大型で三角形を呈し、鏟部に欠損がみられる。

篋状石器 (第 131 図 18、19、写図 84)

7 点出土している。平面形は長方形、三角形、卵型、楕円形がある。18 は卵型を呈し、片刃であり、刃部に欠損がみられる。19 は部分的に片刃の部分と両刃の部分が見られる。

不定型石器 (第 131 図 20～22、第 132 図 23～27、第 133 図 28～31、写図 84、85)

遺構外から 41 点出土した。縁辺部の調整によって、以下のように分類した。

a 類 一縁辺のみの調整がみられるもの

b 類 二～三縁辺の調整がみられるもの

c 類 周縁に調整がみられるもの

b 類が最も多く 23 点、次いで a 類の 16 点、c 類 2 点の順である。形状はまちまちである。

#### ② 礫石器

打製石斧 (第 134 図 32、33、第 135 図 34、写図 85)

図示した 3 点のほかに 8 点で出土している。石質は玄武岩質凝灰岩、凝灰岩、凝灰質千枚岩、チャート、硬質泥岩がみられ、玄武岩質凝灰岩が最も多い。32、33 は自然面をのこし、大きな剝離がみられる。

磨製石斧 (第 135 図 35、36、写図 85)

16 点出土している。石質は安山岩、凝灰岩、閃緑岩、細粒凝灰岩、玄武岩質凝灰岩、硬質泥岩がみられ、安山岩、凝灰岩が多くみられる。35 は刃部、36 は基部に欠損がみられる。

凹石 (第 136 図 37、写図 86)

4 点出土している。4 点とも両面の凹面がみられた。37 は両面の凹面に加え、側面に磨面がみられたが凹面が顕著であるため磨石と区別した。

磨石 (第 136 図 38、39、第 137 図 40、写図 86)

18 点出土した。平面形は円形、楕円形、三角形、棒状のものがみられた。出土数は円形 8、楕円形 5、三角形 3、棒状 2 である。石質は両輝石安山岩、流紋岩質細粒凝灰岩であり、前者が多い。38 は磨面が一面のみみられた。39 は凹面、敲き面を有する。

石皿 (第 137 図 41、写図 86)

5 点出土している。41 は中央部に直径 16 cm 程度の凹みがみられ、内面に赤色顔料の付着がみられた。裏面に欠損のため足が付くかどうかは不明である。45 は自然鏝をそのまま利用した石皿で凹みはみられないが筋状に使用痕がみられる。

砥石 (第 138 図 42、写図 86)

3 点出土している。42 は両輝石安山岩である。

③石製品 (第 138 図 43、44、写図 86)

43、44 は石棒と思われる。両端に欠損がみられる。44 は破片のため形状は不明である。

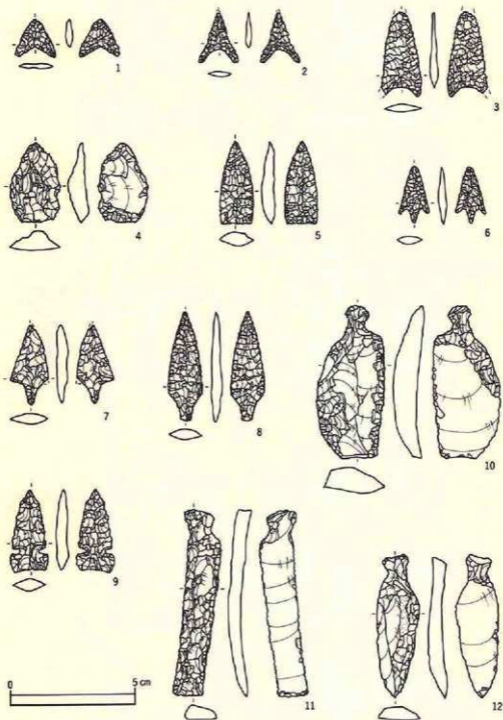
(3) その他の遺物

寛永通寶の「ハ」宝が 3 点、「ス」宝が 1 点、不明が 1 点みられた。それぞれバラバラに出土している。

また表土より、ロクロ使用の土師器坏が破片で 1 点出土している。

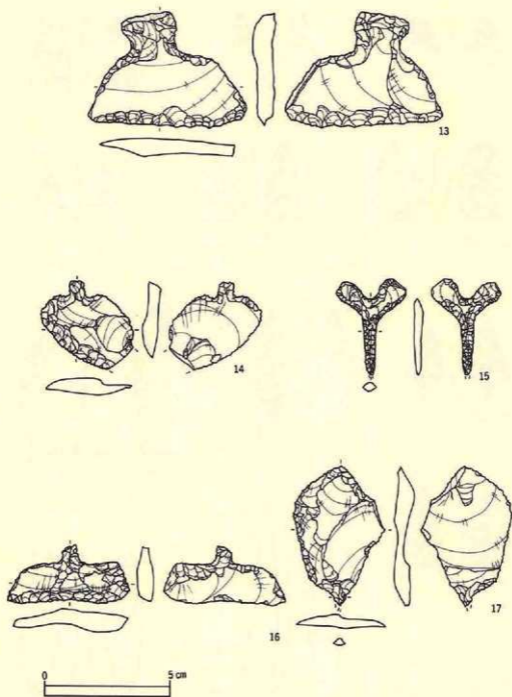
第12表 古銭観察表

図版番号	出土グリッド名	層位	銭貨名(面)	背文	単位 (mm)				重さ (g)	備考
					銭径	輪径	孔径	銭厚		
137-45	G 7	III層	寛永通寶	文	24	19	6	1.2	2.8	ハ宝
46	G 6 区	耕作土	〃	なし	22	18	7	1.2	2.35	ハ宝
47	F5.6中央水田	耕作土	〃	なし	24	19	6	1.2	2.45	ス宝
48	G 6 N 24	II層 B3	〃	なし	/	/	/	1.2	1.25	
49	G 7 M 03	II層 B3	〃	なし	/	/	/	1.2	1.4	ハ宝

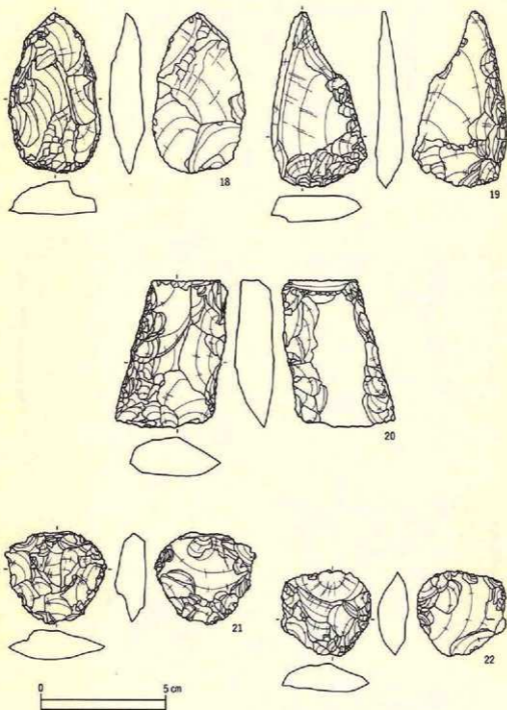


第128圖 遺構外出土遺物(石器 1)

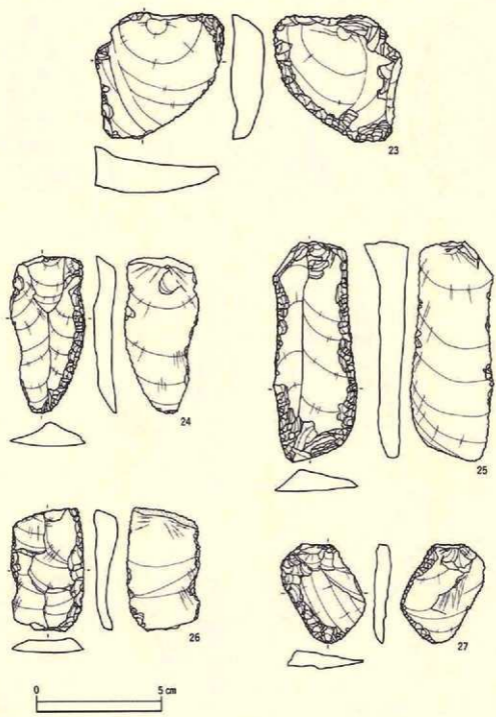




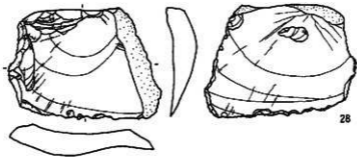
第129圖 遺構外出土遺物(石器 2)



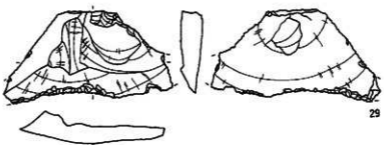
第130圖 遺構外出土遺物(石器 3)



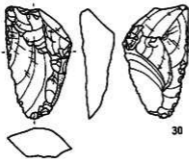
第131図 遺構外出土遺物(石器4)



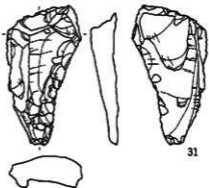
28



29



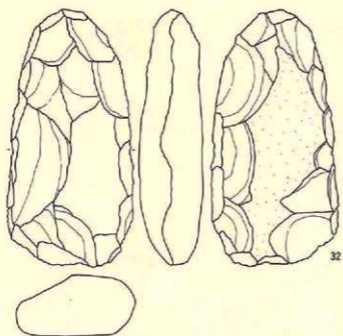
30



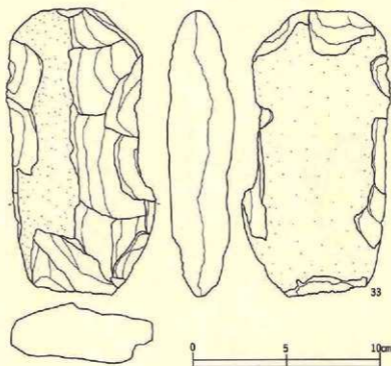
31



第132圖 遺構外出土遺物(石器 5)

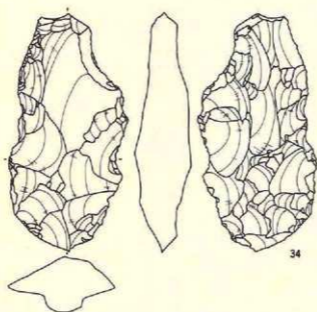


32

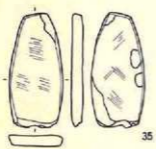


33

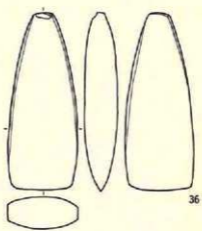
第133圖 遺構外出土遺物(石器6)



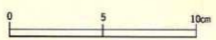
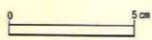
34



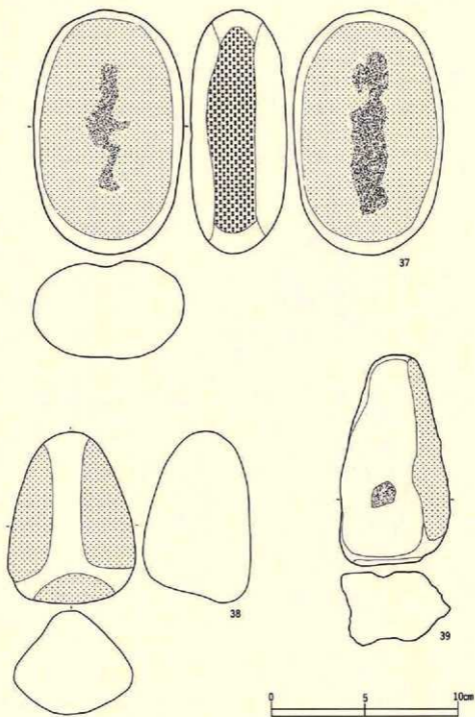
35



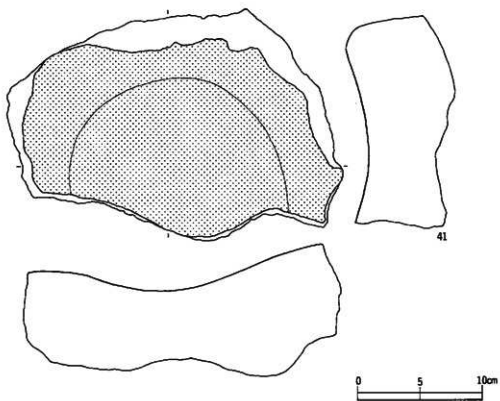
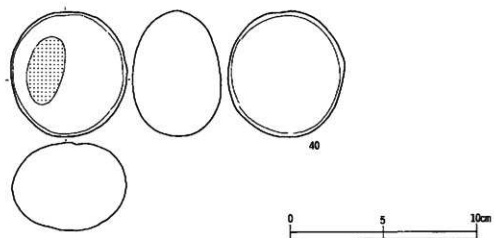
36



第134圖 遺構外出土遺物(石器7)

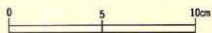
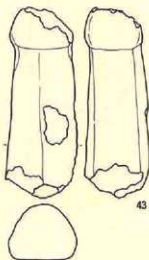
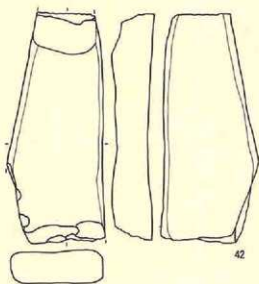


第135図 遺構外出土遺物(石器 8)



第136圖 遺構外出土遺物(石器9)





45



46



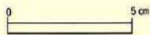
47



48



49



第137圖 遺構外出土遺物(石器10・古錢)

第13表 遺構外出土石器計測表 1

標頭番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	G6-G19	石鏃(凹基)	(1.5)	1.6	0.3	(0.42)	黒曜石	先欠
2	表探	石鏃(凹基)	1.9	1.6	0.2	0.39	硬質泥岩	
3	表探	石鏃(凹基)	(3.4)	1.6	0.3	(1.47)	泥質凝灰岩	先・基欠
4	G6-R22	石鏃(平基)	3.2	2.0	0.8	4.16	泥質凝灰岩	
5	G6-G20	石鏃(平基)	3.3	1.3	0.5	2.11	粘板岩	
6	G6-D14	石鏃(凹基有基)	2.3	1.2	0.3	0.53	チャート	
7	表探	石鏃(平基有基)	(3.1)	(1.5)	0.5	(1.42)	チャート	先・基欠
8	表探	石鏃(円基有基)	(4.4)	1.3	0.5	(2.19)	珪質泥岩	基欠
9	表探	石鏃(アメリカ式)	3.4	1.5	0.5	1.91	硬質泥岩	
10	表探	石匙(墩型)	6.1	2.7	1.2	16.03	珪質泥岩	
11	G6-M18	石匙(墩型)	7.6	1.6	0.6	9.12	チャート質粘板岩	
12	表探	石匙(墩型)	5.8	1.7	0.7	6.16	粘板岩	
13	表探	石匙(楕型)	4.6	6.3	0.9	20.59	硬質泥岩	
14	表探	石匙(楕型)	2.4	4.7	1.0	7.14	珪質泥岩	
15	G6-E13	石匙(楕型)	2.7	(3.8)	0.8	(7.88)	粘板岩	先欠
16	G6-F13	石鏃(つまみ)	3.8	2.8	0.4	1.53	泥質凝灰岩	
17	表探	石鏃(不定形)	(5.6)	2.7	0.7	11.12	粘板岩	鎌欠
18	表探	笄状石器	6.5	3.7	1.5	30.66	チャート	
19	G6	笄状石器	7.1	3.8	1.2	25.82	硬質泥岩	
20	G6-I22	笄状石器	6.4	3.8	1.7	44.39	泥質凝灰岩	
21	G6-F13	不定形石器(b)	3.7	4.0	1.4	16.31	珪質泥岩	
22	G6-E2	不定形石器(c)	(3.7)	3.7	1.4	(15.18)	硬質泥岩	刃部欠
23	G6-E2	不定形石器(a)	5.0	5.3	1.8	42.16	珪質泥岩	曲刃
24	G6-E17	不定形石器(a)	6.3	3.0	1.1	17.68	珪質泥岩	微細刻離痕
25	G6-L22	不定形石器(b)	9.0	3.4	1.5	36.49	粘板岩	
26	G6-D16	不定形石器(b)	4.9	2.9	0.9	14.02	珪質泥岩	
27	G6-P24	不定形石器(b)	4.1	2.7	0.7	8.18	粘板岩	曲刃
28	表探	不定形石器(a)	4.5	6.1	1.2	36.81	珪質泥岩	
29	G6-F18	不定形石器(a)	3.6	6.8	1.3	20.60	赤色凝灰岩	凹刃
30	F5	不定形石器(b)	4.5	2.6	1.3	13.06	珪質泥岩	
31	G7-X03	不定形石器(a)	5.7	2.9	1.3	16.11	硬質泥岩	凹刃
32	表探	打製石斧	13.5	6.7	3.2	410.0	玄武岩質凝灰岩	
33	G6-D10	打製石斧	15.3	7.5	3.5	445.0	玄武岩質凝灰岩	
34	G6-O25	打製石斧	12.8	6.3	3.3	175.18	硬質泥岩	
35	G6-K20	磨製石斧	9.5	3.8	2.0	110.23	凝灰石	
36	G6-D13	磨製石斧	(4.6)	2.2	0.5	(8.70)	粘板岩	刃部欠
37	表探	凹石	13.0	8.0	5.1	775.0	玄武岩質凝灰岩	磨有
38	表探	磨石	8.8	6.0	5.9	420.0	流紋岩質凝灰岩	
39	G6-E12	磨石	11.5	5.7	5.3	340.0	流紋岩質凝灰岩	凹・縁有
40	表探	敲石(円)	7.0	6.5	4.6	299.1	玄武岩質凝灰岩	
41	表探	石皿	18.6	27.0	10.0	6700.0	安山岩	
42	表探	砥石	12.2	5.2	1.8	219.6	両輝石安山岩	
43	G6-H12	石棒	(10.4)	3.8	2.9	(151.61)	流紋岩質凝灰岩	男模状?
44	H7-H8	石棒	(4.8)	(2.8)	(0.6)	(19.87)	粘板岩	
45	表探	石皿	29.8	29.3	7.2	12300.0	安山岩	ほぼ完形 写真のみ

第14表 遺構外出土石器計測表 2

探洞番号	出土位置	器	種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	G6-O 22	石鏃(凹基)		2.2	1.6	0.4	0.82	褐色凝灰岩	
2	G6-K 23	石鏃(凹基)		(2.7)	1.6	0.4	(1.45)	硬質泥岩	先欠
3	G6-N 20	石鏃(凹基)		(1.8)	1.4	(0.4)	(0.62)	粘板岩	先欠
4	G6-K 23	石鏃(凹基)		(2.0)	(1.5)	0.3	(0.62)	チャート質粘板岩	先欠
5	H7-M 10	石鏃(凹基)		(2.0)	1.7	0.7	(1.60)	チャート	先欠
6	G7-D 12	石鏃(凹基)		(1.5)	1.4	0.3	(0.32)	チャート質粘板岩	先欠
7	G6-O 24	石鏃(平基)		3.0	1.9	0.6	2.82	硬質泥岩	
8	G6-F 13	石鏃(平基)		2.1	1.3	0.3	0.77	チャート	
9	G6-L 24	石鏃(平基)		3.3	(1.5)	0.4	(1.64)	泥質凝灰岩	甚欠
10	G7	石鏃(平基)		2.9	(1.8)	0.4	(1.68)	硬質泥岩	先欠
11	G6	石鏃(凹基)		(2.4)	(2.3)	0.5	(2.32)	泥質凝灰岩	先・甚欠
12	G7-1 10	石鏃(凹基)		(2.8)	(2.1)	0.4	(2.11)	硬質泥岩	先・甚欠
13	G7-1 02	石鏃(凹基有茎)		2.0	1.3	0.3	0.44	チャート	
14	G6-D 13	石鏃(凹基有茎)		(2.0)	1.8	0.5	(1.37)	赤色凝灰岩	先欠
15	G6-E 17	石鏃(凹基有茎)		(2.3)	(1.6)	0.7	(1.82)	赤色凝灰岩	甚・甚欠
16	表採	石鏃(凹基有茎)		2.6	1.1	0.4	0.79	粘板岩	
17	表採	石鏃(平基有茎)		(1.9)	(0.9)	0.3	(0.40)	チャート	甚・甚欠
18	G7-R 02	石鏃(凹基有茎)		(3.5)	1.7	0.4	(1.33)	チャート	甚欠
19	G6-E 15	石鏃(凹基有茎)		(2.5)	(1.4)	0.4	(0.98)	赤色凝灰岩	先欠
20	G7-D 12	石鏃(凹基有茎)		(3.0)	1.3	0.6	(1.80)	粘板岩	先・甚欠
21	表採	石鏃(凹基有茎)		(2.5)	1.5	0.4	(1.14)	チャート	甚欠
22	表採	石鏃(凹基有茎)		(3.3)	(1.4)	0.5	(1.81)	硬質泥岩	先・甚欠
23	G6	石鏃(菱形有茎)		(2.5)	(1.5)	(0.5)	(1.46)	チャート	先・甚欠
24	G6-I 22	石匙(線型)		4.8	2.6	0.7	6.42	粘板岩	
25	G7-E 13	石匙(線型)		7.5	3.8	0.9	18.76	硬質泥岩	
26	G6-M 21	石匙(線型)		5.4	2.0	0.8	6.56	硬質泥岩	
27	G6-M 23	石匙(線型)		5.4	2.3	0.8	7.69	粘板岩	
28	G6-E 13	石匙(線型)		3.8	2.2	0.4	3.75	硬質泥岩	
29	G6-N 20	石匙(線型)		7.0	5.6	1.9	48.19	硬質泥岩	
30	表採	石匙(線型)		(3.3)	(1.9)	0.6	(3.08)	泥質凝灰岩	先欠
31	G6-O 01	石匙(線型)		3.0	4.4	0.5	6.49	粘板岩	
32	表採	石匙(線型)		3.1	4.6	0.7	8.92	硬質泥岩	
33	表採	石匙(線型)		4.2	(3.5)	0.8	(9.68)	硬質泥岩	先欠
34	G6-N 21	石匙(線型)		3.2	(2.8)	0.7	(5.54)	粘板岩	先欠
35	G6-N 24	石匙(線型)		(3.6)	6.1	0.8	(14.44)	硬質泥岩	つまみ欠
36	G7	石匙(線型)		(4.6)	5.8	0.8	(23.29)	粘板岩	つまみ欠
37	表採	石匙(線型)		3.9	4.0	0.7	7.62	チャート	
38	G6-I 22	石鏃		(2.3)	(1.3)	0.5	(1.19)	チャート	つまみ欠
39	G6-I 02	石鏃		(3.0)	0.8	0.5	(1.34)	粘板岩	つまみ欠
40	G7	石鏃		3.0	1.5	0.8	2.91	チャート質粘板岩	
41	G6-P 24	石鏃		(4.0)	3.3	1.7	(16.16)	泥質凝灰岩	離欠
42	G6-D 10	寛状石鏃		(5.3)	4.5	1.3	(36.69)	凝灰質粘板岩	頭欠
43	G6-F 22	寛状石鏃		5.1	3.1	1.3	19.62	粘板岩	
44	G6-H 15	寛状石鏃		(3.6)	3.9	1.2	(15.10)	粘板岩	
45	G6-D 20	寛状石鏃		9.4	5.8	2.0	107.32	硬質泥岩	
46	G6-T 24	不定形石鏃(b)		2.2	2.1	0.6	2.30	黒輝石	
47	G6-H 15	不定形石鏃(a)		2.9	3.1	0.7	6.29	硬質泥岩	曲刃
48	表採	不定形石鏃(b)		5.7	2.9	0.9	16.75	泥質凝灰岩	
49	表採	不定形石鏃(b)		4.3	4.4	1.9	28.02	硬質泥岩	
50	G6-P 24	不定形石鏃(a)		2.2	5.5	0.7	7.68	硬質泥岩	凹刃
51	G6-P 25	不定形石鏃(a)		3.3	5.2	0.9	15.43	硬質泥岩	曲刃
52	G6	不定形石鏃(b)		3.9	4.8	0.7	11.22	泥質凝灰岩	
53	G7-D 12	不定形石鏃(a)		2.6	4.3	1.0	9.22	硬質泥岩	凹刃
54	G6-E 17	不定形石鏃(a)		7.9	4.4	1.2	24.60	硬質凝灰岩	凹刃
55	G6-F 18	不定形石鏃(b)		4.0	3.9	1.0	12.50	硬質泥岩	
56	G6-H 12	不定形石鏃(b)		3.3	2.9	0.9	6.89	チャート質粘板岩	
57	G6-E 17	不定形石鏃(a)		6.2	4.6	1.4	29.14	硬質泥岩	微細割離痕
58	G6-F 22	不定形石鏃(b)		3.4	3.9	1.0	9.14	チャート質粘板岩	
59	G6-E 17	不定形石鏃(a)		7.1	7.5	1.3	44.31	硬質泥岩	
60	G7	不定形石鏃(a)		2.3	2.3	0.6	2.47	硬質泥岩	凹刃
61	G6-I 22	不定形石鏃(a)		7.6	3.0	1.2	23.87	硬質泥岩	
62	G6-E 22	不定形石鏃(b)		3.9	2.4	0.8	5.19	硬質泥岩	凹刃
63	表採	不定形石鏃(b)		3.2	2.3	0.6	4.24	粘板岩	微細割離痕
64	F5-E 09	不定形石鏃(b)		3.3	3.7	0.8	8.15	泥質凝灰岩	

第15表 遺構外出土石器計測表 3

押出番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
65	表探	不定形石器(b)	2.0	3.6	0.5	2.76	粘板岩	
66	H7-G08	不定形石器(a)	2.3	1.9	0.2	0.93	硬質泥岩	
67	G6-D25	不定形石器(b)	4.2	4.6	1.3	21.98	珉質泥岩	
68	G6-B12	不定形石器(b)	4.6	3.8	1.3	17.56	流紋岩質凝灰岩	
69	表探	不定形石器(b)	3.6	3.0	1.3	12.94	流紋岩質凝灰岩	
70	表探	不定形石器(b)	6.7	4.4	1.7	41.66	硬質泥岩	
71	F5-F08	不定形石器(b)	4.0	2.6	1.1	10.52	粘板岩	
72	G6-B17	不定形石器(c)	3.3	4.2	1.2	14.17	チャート	
73	G6-O01	不定形石器(b)	2.9	4.2	1.2	11.39	チャート	
74	G7-I10	不定形石器(b)	2.8	3.0	0.9	7.62	珉質泥岩	
75	G6-F13	不定形石器(a)	5.3	4.9	0.9	12.46	硬質泥岩	
76	G6-K23	打製石片	11.3	5.4	2.7	230.79	凝灰岩	
77	G6-K23	打製石片	(10.6)	5.5	2.8	(135.62)	凝灰岩千枚岩	刃欠
78	G6-K24	打製石片	(9.8)	5.9	(3.8)	(380.0)	玄武岩質凝灰岩	刃欠
79	表探	打製石片	(10.0)	(5.0)	3.2	(238.64)	玄武岩質凝灰岩	刃欠
80	G6-E12	打製石片	13.6	5.3	3.4	380.0	玄武岩質凝灰岩	
81	G6-Q23	打製石片	(9.8)	5.1	3.3	(244.0)	玄武岩質凝灰岩	刃欠
82	H7-M10	打製石片	11.0	6.0	2.0	171.08	チャート	
83	G6-K25	打製石片	12.7	5.3	3.5	298.92	凝灰岩	
84	G6-M25	磨製石片	(9.7)	4.3	2.8	(207.94)	安山岩	刃欠
85	G6-F14	磨製石片	(9.9)	(4.6)	3.5	(167.62)	凝灰岩	刃欠
86	G6-H13	磨製石片	(10.0)	4.1	2.0	(129.62)	凝灰岩	刃・刃欠
87	G6-D14	磨製石片	(7.9)	(4.5)	2.8	(160.95)	凝灰岩	刃・刃欠
88	G6-M23	磨製石片	(10.2)	4.6	2.7	(177.83)	閃綠岩	刃・刃欠
89	G6-N03	磨製石片	(14.7)	5.3	3.0	(350.0)	凝灰岩	刃欠
90	G6-K20	磨製石片	(9.4)	4.0	2.6	(177.89)	安山岩	刃欠
91	G6-E12	磨製石片	(5.8)	3.9	2.1	(82.35)	安山岩	刃欠
92	G6-E02	磨製石片	(3.0)	4.2	(2.2)	(33.90)	安山岩	刃欠
93	G6-F17	磨製石片	(5.1)	(4.2)	(2.6)	(92.13)	安山岩	刃欠
94	G6-F17	磨製石片	(11.6)	5.2	2.4	(296.19)	凝灰岩質凝灰岩	刃欠
95	G6-L22	磨製石片	(6.0)	6.5	3.2	(185.06)	玄武岩質凝灰岩	刃・刃欠
96	G6-D18	磨製石片	(8.3)	4.5	2.3	(149.61)	安山岩	刃欠
97	表探	磨製石片	(6.8)	(3.8)	(2.4)	(103.16)	安山岩	刃欠
98	G6-N24	凹石	11.6	6.3	3.0	340.0	粘板岩	凹面有
99	G6-E17	凹石	13.2	6.8	3.1	400.0	凝灰岩	凹面有
100	G6-P24	凹石	10.0	6.4	4.7	385.0	流紋岩質凝灰岩	凹面有
101	G6-O23	磨石(円)	8.8	7.7	6.8	675.0	西輝石安山岩	
102	G6-K23	磨石(円)	8.8	7.9	7.1	755.0	西輝石安山岩	縁直
103	G6-P21	磨石(円)	11.8	8.0	9.9	890.0	西輝石安山岩	凹有
104	G6-L22	磨石(円)	(6.0)	8.0	(5.1)	(335.0)	西輝石安山岩	凹有
105	G6-M24	磨石(円)	7.7	5.4	4.8	285.0	西輝石安山岩	
106	G6-M23	磨石(円)	12.5	11.4	6.3	1230.0	西輝石安山岩	縁直
107	G6-D20	磨石(円)	3.6	3.5	2.0	29.71	西輝石安山岩	
108	G6-I23	磨石(円)	3.5	2.8	2.6	29.37	流紋岩質凝灰岩	
109	G6-F18	磨石(楕円)	9.8	7.0	3.6	360.0	西輝石安山岩	
110	表探	磨石(楕円)	10.5	6.0	5.5	520.0	西輝石安山岩	
111	G6-M20	磨石(楕円)	10.0	8.3	3.1	340.0	西輝石安山岩	
112	G6-F13	磨石(楕円)	8.1	6.8	5.9	370.0	西輝石安山岩	
113	G6-H24	磨石(楕円)	8.0	4.7	3.1	160.0	西輝石安山岩	
114	表探	磨石(三角)	(6.2)	(5.6)	(4.9)	(200.0)	西輝石安山岩	
115	G6-D13	磨石(三角)	(11.5)	7.0	5.5	(520.0)	西輝石安山岩	
116	G6-I21	磨石(楕)	(6.2)	(6.8)	(4.7)	(305.0)	西輝石安山岩	
117	F5	磨石(円)	(6.0)	(11.4)	5.2	(410.0)	西輝石安山岩	
118	表探	磨石(円)	7.7	6.3	6.0	380.0	西輝石安山岩	
119	表探	磨石(楕)	(8.2)	5.5	3.3	(260.0)	西輝石安山岩	磨有
120	G6-I23	磨石(楕)	17.2	5.0	2.6	305.6	西輝石安山岩	凹・磨面
121	G6-O23	石皿	(21.2)	16.1	3.6	(820.0)	流紋岩質凝灰岩	
122	G7-R02	石皿	13.5	12.8	3.3	910.0	西輝石安山岩	
123	G6-I20	石皿	(10.7)	13.7	4.2	750.0	アルコウス砂岩	
124	G6-N20	磨石	(14.3)	(6.0)	2.8	390.0	アルコウス砂岩	
125	G6-D14	磨石	(5.2)	(4.7)	2.1	90.0	アルコウス砂岩	
126	G6-H25	石皿	6.4	7.9	1.9	125.0	凝灰岩千枚岩	
127	表探	石皿	6.1	6.4	1.2	62.5	凝灰岩	

## VI 分析・鑑定

### 向館遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

關ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子、明瀬雅子

長田正宏

帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく、これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子<sup>(1)</sup>、約5千年前のハーゼルナッツ種子に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した<sup>(2)</sup>。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて向館遺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

### 1. 土壌試料

岩手県盛岡市に所在する向館遺跡は縄文時代中期のものと推定されている。この遺跡中の住

居址床面下から倒立状態で埋設されていた直径約 30 cm、高さ約 50 cm の深鉢形土器が出土した。この土器内の中位から採取した土壌試料 2 点分析に供した。住居址内での土器出土地点と各土器内での試料採取地点を図 1 に示す。試料 No.G は住居址 RA 21 から出土した土器内、試料 No.H は住居址 RA 19 から出土した土器内から、それぞれ採取した。

## 2. 残存脂肪の抽出

土壌試料 645~831 g に 3 倍量のクロロホルム-メタノール (2:1) 混液を加え、超音波浴槽中で 30 分間処理した残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び 30 分間超音波処理をする。この操作をさらに 2 回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出液に 1% 塩化バリウムを全抽出液量の 4 分の 1 容量を加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表 1 に示す、抽出率は 0.0017~0.0091%、平均 0.0054% であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、土器等の試料の平均抽出率 0.0010~0.0100% の範囲内のものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

## 3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に 5% メタノール性塩酸を加え、125°C 封管中で 2 時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン-エチルエーテル酢酸 (80:30:1) またはヘキサン-エーテル (85:15) を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成を図 2 に示す、残存脂肪から 8 種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸 (C 16:0)、ステアリン酸 (C 18:0)、オレイン酸 (C 18:1)、リノール酸 (C 18:2)、アラキジン酸 (C 20:0)、エイコサモノエン酸 (C 20:1)、ペヘン酸 (C 22:0)、リグノセリン酸 (C 24:0) の 8 種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中での脂肪酸組成パターンを見てみると、2 試料ともアラキジン酸含量が若干多いが、谷状の組成パターンを示した。これは試料中に動物性脂肪が多く含まれている場合の典型的な脂肪酸組成パターンである。炭素数 18 までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、主要な脂肪酸はパルミチン酸で約 38~40% 分布していた。次いでステアリン酸、オレイン酸の順に多

く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来していると推定される。また、ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。他にオレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数 20 以上のアラキジン酸、ペヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸は、それら 3 つの合計で約 34 % と多量に分布していた。通常の遺跡出土土壌中の高級脂肪酸の含有量は約 4~10% であるから、いずれの試料中にも高級脂肪酸は大変多く含まれているといえる。従って、試料採取地点に高等動物の脂肪が非常に多く残存していたと推測される。

#### 4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノール-エチルエーテル-酢酸 (80:30:1) を展開溶媒とするゲイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸 (1:1) を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図 3 に示す。残存脂肪から 16~19 種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど 8 種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは約 3~5% 分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは 4~8% 分布している。従って、試料中のコレステロール含量は特に多いものではなかった。

植物由来のシトステロールは約 14~24% 分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロール 30~40% 分布している。従って、試料中のシトステロール含量も少ないといえる。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンベステロール、スチグマステロールは、カンベステロールが検出されず、スチグマステロールが約 6~7% 分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンベステロール、スチグマステロール、は 1~10% 分布している。従って、試料中に含まれている植物性ステロールは、通常の遺跡出土土壌よりも全般的に少ないといえる。

微生物由来のエルゴステロールは試料 No.G では検出されず、試料 No.H では約 2% 分布していた。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特徴的に分布するコプロスタノールは、約 1~2% 分布してい

た。通常コブスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別が特定できる場合があるが、今回の含量は2%程度と大変少ないために、それらの特定は不能であった。しかし、僅かではあるがコブスタノールが残存しているということは、試料中に哺乳動物の脂肪が残存していると推測できる。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上<sup>(17)</sup>、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる<sup>(8, 9)</sup>。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す、表からわかるように、分布比は2試料ともに0.2であった。

以上のことから、試料中に含まれているコレステロール量や、コレステロールとシトステロールの分布比は、試料中に動物性脂肪が残存していることを示唆してはいなかった。この結果は、先の脂肪酸の分析結果とは一致しなかった。

## 5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成パターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に出土土壌を土壌墓と判定した兵庫県寺田遺跡<sup>(10)</sup>、出土土器を幼児埋葬用壺と判定した静岡県原川遺跡<sup>(11)</sup>、土器埋設遺構内の土器をヒト遺体埋葬用と判定した秋田県虫内I遺跡<sup>(12)</sup>、出土した土壌棺にヒト遺体が埋葬されていたと判定した東京都陣屋6号墳<sup>(13)</sup>、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県榴萩遺跡<sup>(14)</sup>、人間の骨油、住居址内の比較的小きな土器であることから胎衣である可能性も考慮して、出土土器を胎衣と判定した奈良県平城京右京三条二坊十五坪<sup>(15)</sup>、同じ平城京左京(外京)五条五坊十坪<sup>(16)</sup>、岡山県津寺遺跡および人間の胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図4に示す、図からわかるように、向館遺跡の試料2点は原川遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内で非常によく類似しており、A群と形成した、虫内I遺跡の試料と平城京右京三条二坊十五坪の試料はB群を、寺田遺跡と津寺遺跡の試料はC群を形成し、向館遺跡の試料が形成するA群とは相関行列距離0.1以内で類似していた。平城京右京三条二坊十五坪、平城京左京(外京)五条五坊十坪および人間の胎盤試料はD群を、陣屋6号墳の試料はE群を形成し、これらD、E群はA、B、C群とは相関行列距離で0.1以上離れていた。また、人間の骨を埋納したことに関わる榴萩遺跡と人間の骨油試料はF群を形成し、A~E群とは相関行列距離で0.3以上離れており、類似してはいなかった。

以上のことから、向館遺跡の試料はヒト遺体を直接埋葬した試料や胎衣試料に類似していることがわかった。しかし類似度からすれば、ヒト遺体を埋葬した試料の方によりよく類似しているといえる。また、向館遺跡から出土した土器の大きさや試料が原川遺跡の幼児埋葬用壺



棺試料と非常によく類似していることを考え合わせると、向館遺跡から出土した土器も幼児埋葬用であった可能性が推測される。

## 6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数 16 のパルミチン酸から炭素数 18 のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数 20 のアラキジン酸以上)との比を X 軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比を Y 軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第 1 象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第 1 象限から第 2 象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第 2 象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第 2 象限から第 3 象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第 3 象限から第 4 象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図 5 に示す。図からわかるように、2 試料共に第 1 象限内の Y 軸寄りで原点から離れた位置に分布していた。この分布位置は試料中に高等動物の脂肪が残存していることを示唆する所である。

## 7. 総括

向館遺跡から出土した土器の性格を判定するために、土器内の試料中の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、脂肪酸組成パターンは試料中に動物性脂肪が多く含まれている場合に見られる典型的な谷状のパターンを示していた。また、2 試料共にパルミチン酸が主要な脂肪酸として含まれており、高級脂肪酸含量も大変多く、試料中には動物性脂肪が多く残存している可能性があることがわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析では試料はヒト遺体を直接埋葬した試料と類似しており、特に幼児埋葬用甕棺と判定した試料と非常によく類似していることがわかった。また種特異性相関からも試料中に高等動物の脂肪が残存していることがわかった。

残存するステロール分析の結果、動物性コレステロールの含量は少なく、コレステロールとシトステロールの分布比の値も 0.2 で、ヒト遺体の存在を示唆するような値ではなかった。このステロール分析の結果は脂肪酸分析および脂肪酸組成による数理解析の結果とは一致しなかった。今回は対照土壌試料がなく、コレステロール含量が対照試料に比べて多いか少ないかを比較できなかったため、脂肪酸分析とステロール分析の結果が一致しなかった理由を追求することができなかった。

以上の成績から向館遺跡から出土した土器内にはヒト遺体を直接埋葬した試料と類似の脂肪

が残存していることがわかった。また土器の大きさやクラスター分析による類似度から考えると、土器は幼児埋葬用のものである可能性も推測される。

#### 参考文献

- (1) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」 [Archaeo Physika]、10 巻、1979、pp 260。
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, [Nature]、292 巻、1981、pp 146。
- (3) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle: 「Analyse fruhgeschichtlicher GefaB-inhalte」, [Naturwissenschaften]、70 巻、pp 33。
- (4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』、第 10 巻 (6)、1984、pp 124。
- (5) M.Nakano and W.Fischer: 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, [Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem.]、358 巻、1977、pp 1439。
- (6) 中野益男: 「残存脂肪酸による古代復元」, 『講演収録集—新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』、第 3 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、1989、pp 114。
- (7) 中野益男、伊賀啓、根岸孝、安本教博、畑宏明、矢吹俊男、佐原真、田中琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』、第 26 巻、1984、pp 40。
- (8) 中野益男: 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡—農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986、pp 401。
- (9) 中野益男、根岸孝、長田正宏、福島道広、中野寛子: 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所調査報告書、第 3 集、1987、pp 191。
- (10) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏: 「寺田遺跡土壌基状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』、兵庫県芦屋市教育委員会。
- (11) 中野益男、樋口剛、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡 I—昭和 62 年度袋井バイパス (掛川地区) 埋蔵文化財発掘調査報告書』、第 17 集、静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp 79。
- (12) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男: 「虫内 I 遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』、秋田県埋蔵文化財センター。
- (13) 中野寛子、福島道広、長田正宏、中野益男: 「陣屋 6 号墳周溝内の埴輪棺に残存する脂

肪の分析』、『未発表』、東京都世田谷区教育委員会。

- (14) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「摺鉢遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、宮城県教育委員会。
- (15) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子：「平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書—平成3年度』、1992、pp 38。
- (16) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏：「平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胸衣蓋の残存脂質について」、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書—昭和63年度』、1989、pp 5。
- (17) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男、福島道広：「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析』、『未発表』、岡山県古代吉備文化財センター。

表1 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料 No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
G	住居址 RA 18 床面下埋壙中	644.9	58.8	0.0091
H	住居址 RA 16 床面下埋壙中	830.6	14.4	0.0017

表2 土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料 No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
G	3.08	13.79	0.22
H	4.71	23.77	0.20

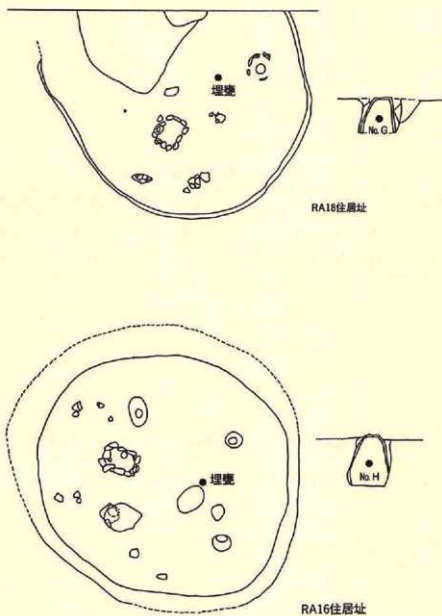


図1 住居址内での土器出土地点および土器内での試料採取地点

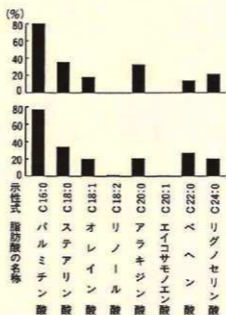


図2 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

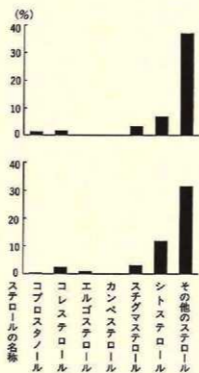


図3 試料中に残存する脂肪のステロール組成

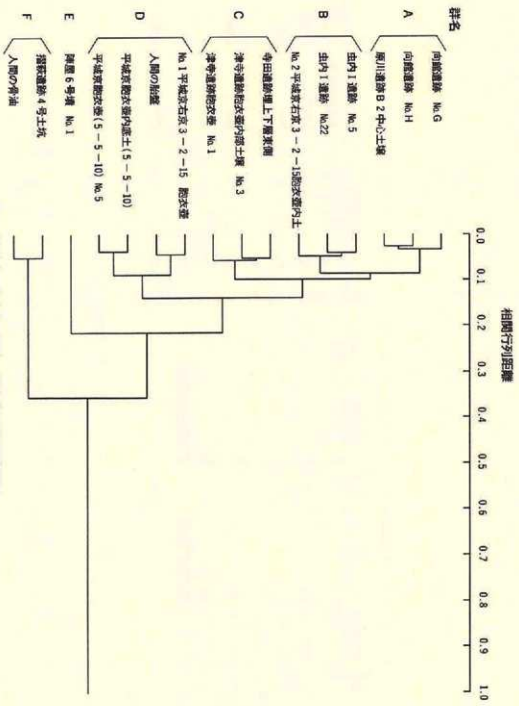


図 4 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

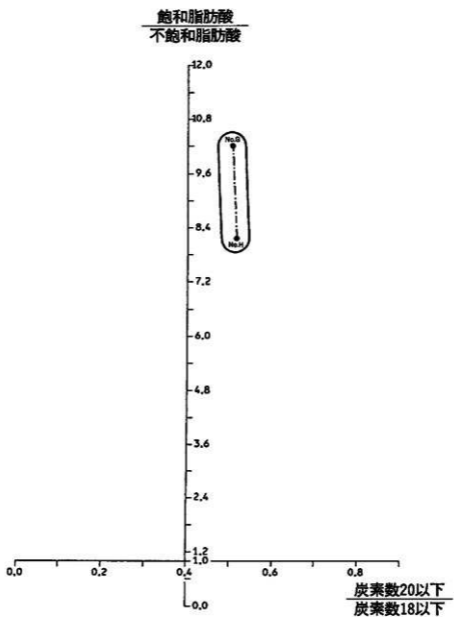


図5 試料中に残存する脂肪酸組成による種特異性相関



## VII まとめ

### 1. 竪穴住居跡

本遺跡で検出された竪穴住居跡はいずれも縄文時代に属するものである。中期に属するものが最も多く17棟で、後期中葉が2棟である。また竪穴状遺構2棟は1棟が中期、1棟が後期と思われる。2基の炉跡も中期に属する。

開田時に遺跡内で著しく削平を受けた部分があり、住居跡のプランを把握できたものが少ないため、規模、柱穴配置、床面積などを比較する資料は乏しい。しかし、19棟中17棟の炉が検出できたため、炉跡の2基と合わせて、炉の比較を行なっていきたい。また、竪穴住居跡の床面から検出された底部穿孔埋設土器についてもふれていく。

#### (1) 竪穴住居跡の占地

調査区にかかる地形については大きく4つに分けられる。

①最も標高が高いG6区の中央部で土坑が集中する地区である。緩やかな南斜面の縁にかけて地山面で検出された。RA 03、05のみ検出され、時期は中期後葉から末葉である。

②G6からG7区にかけての平坦部でII層黒色土中で検出されたものである。RA 16からRA 19までの4棟である。遺構の残りは良く、床面からの出土遺物は多くみられた。時期は中期中葉から後葉である。

③G7区の緩やかな南斜面で南側はIIからIII層が削平されているため、IV層で検出した。RA 8からRA 13までである。RA 12のみ後期中葉で他は中期中葉または後葉である。

④H7区川側の南斜面の地山で検出されたものである。RA 01、02、04、06、07、14、15が検出された。床面が礫層まで達しているものもある。川による削平のために南側が不明なものがほとんどである。時期は中期中葉から末葉で時期幅が最もあり、検出された住居跡数も最も多い。

これらのことから、土坑とは異なった占地であること、時期によって占地が異なっていた可能性が考えられる。

#### (2) 炉について

炉は大きく6つに分けられる。石囲い炉のみ時期差を考慮に入れない分類である。

##### ①石囲い炉

形状が不明なものを一括した。RA 03、13がふくまれる。時期は中期後葉である可能性が高い。

##### ②円形石囲い炉

第16表 竪穴住居跡一覧表

遺構名	プラン	規模、埋高 ( )は残存(cm)	土層階 ( )は推定	施設	伊の種類	伊の規模 (cm)	時期	重複	備 考
RA01	不明	不明	—	柱穴2本	円形石置伊	52×48	中期後～末期	なし	伊は門礎を使用
RA02	不明	(240×185)10～3	(5.1)	柱穴2本	不明	—	中期末葉	RA04より 新しく RA14より 古い	
RA03	不明	(290×210)、25～3	(5.6)	壁柱穴? 柱穴2本	石置伊 (形状は不明)	66×48	中期後～末期 (大木9～ 10式)	なし	
RA04	円形?	(370×320)、不明	(8.8)		石置土器埋 設伊	96×32	中期後～末期	RA02、 RA14より 新しい	円礎と表柱の石により伊石を構築 している
RA05	不明	(350×350)、28～20	(15.8)	柱穴6本 区内 ピット1	石置複式伊	190×100	中期末葉 (大木10式)		二筋の石置部と前扉部を持つ
RA06	不明	(340×300)、8～3	(9.6)	柱穴5本	石置複式伊	160×80	中期末葉	RA07より 新しい	石置部に敷石がみられる
RA07	不明	(165×34)、6～1	—	柱穴3本 周溝	不明	—	中期末葉以前	RA06より 古い	
RA08	不明	(350×250)、不明	—	柱穴2本	石置複成 伊?	(118×40)	中期末葉?		伊石に円礎を使用
RA09	円形?	(356×293)、不明	(7.3)	—	方形石置伊	86×81	中期末葉 (大木8b～ 9式)	なし	消失住居
RA10	不明	(400×261)、不明	(5.1)	柱穴1本	石置伊	66×56	中期末葉	なし	円礎の伊石
RA11	円形?	(340×298)、18～4	(7.3)	—	石置伊	82×64	中期末葉	なし	#
RA12	楕円形	380×340×、63～1	10.2	住居内 ピット	石置伊	88×86	後期中葉	なし	#
RA13	不明	不明	—	—	複式伊?	196×72	中期末葉?	なし	同一の礎使用
RA14	円形	225×213	4.2	—	円形石置伊	54×52	中期末葉	RA02、06 より古い	
RA15	円形?	483×310	12.2	1本	石置伊	(72×64)	後期中葉?	なし	
RA16	不明	(418×202)	12.3	4本	方形石置伊	68×44	中期後葉 (大木8b～ 9式)	RA19より 新しい	石置同一のものを分割、埋設土器 有
RA17	楕円形	370×340、40	9.8	土柱穴4 本	方形石置伊	52×50	中期末葉 (大木8b～ 9式)	なし	大木9式の遺物が主流である
RA18	不明	(420×290)、13～4	15.3	—	方形石置伊	56×46	中期末葉 (大木8b～ 9式)	なし	円礎 埋設土器有
RA19	楕円形	418×390、53～16		7本	方形石置伊	60×56	中期後葉 (大木8b)	RA16より 古い	伊石の複合有

円礫を使用し、礫の方向を無意識に円形に並べているものである。RA 01、10、14 で出土土器は大木 9 式の範疇に入る。RA 10 は中でも若干方形に近いことから円形石囲炉と後出する方形石囲炉との中間的なものと思われる。

### ③方形石囲炉

短軸に横位の石を一つ以上並べ、方形の板状の礫及び角礫を方形に並べたものである。RA 09、16～19 はいずれも中期中葉から後葉で大木 8b から 9 式の土器を出土している。RF 01、02 もこの時期である可能性が高い。また RA 17 は若干円形に近いことから円形石囲炉との中間的なものと思われ、RA 10 より後出するものと思われる。

### ④石組複式炉

二つの石組部と前庭部を有する。RA 05、06 である。RA 06 では中央部石組部で敷石がみられ赤変していた。RA 05 では敷石はみられなかった。中央部石組部は最もレベルが低くなっていた。時期は中期後葉から末葉である。

### ⑤複式炉

一組の石囲部と何らかの施設を伴うと思われることからこの名称を用いた。RA 08、13 が属する。RA 08 は中央に石組部をもち、その内側には焼土が残っていた。さらに礫で「ハ」の字に囲まれたと思われる掘り込みがみられた。RA 13 は方形の石組部の南側に石で囲まれた粘土の固い部分がみられ、中央部に縦位に石を据えていた。さらに炉石同士が接合できたことから同一の石を分割して使用した可能性がある。出土遺物がわずかで時期決定できるものがなく、消極的模倣であるが石囲複式炉より古く、方形石囲炉より新しい中期後葉から末葉と思われる。

### ⑥石囲土器埋設炉

RA 06 は礫を二重に巡らし、その内側に土器を埋設している。南側は削平を受けたため不明であるが複式炉または独立した円形の土器埋設石囲炉の可能性も考えられる。時期は中期後葉と思われる。

## (3) 埋設土器について

本遺跡では埋設土器が 4 ヲ所で検出されている。RA 16、RA 18 竪穴住居跡床面から検出されたものと RA 06 の炉内から検出された土器、RZ 10 埋設土器である。RA 06 の炉内から検出された土器と RZ 10 埋設土器は正立した形で検出された。一方、RA 16、RA 18 竪穴住居跡床面から検出された埋設土器は倒立した形でほぼ完形で検出されたが、底部は焼成後に故意に空けた円形の孔がみられた。ここでは底部穿孔埋設土器を出土した竪穴住居跡と埋設土器そのものについてふれていく。

### ①埋設土器と埋壺

埋設土器は「埋壺」とも呼称される。単に「埋壺」という場合は「屋内埋壺」あるいは、よ

円形石囲炉



RA01



RA10

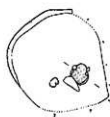


RA14

方形石囲炉



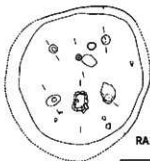
RA06



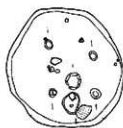
RA11



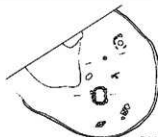
RA09



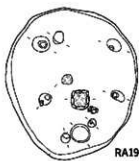
RA16



RA17

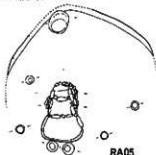


RA18



RA19

石船複式炉



RA05



RA06  
RA07



RF01



RF02

複式炉



RA08



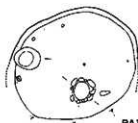
RA13

石圍土器埋設炉



RA02  
RA04

後期円形石囲炉



RA12



RA15

第138図 向館遺跡竪穴住居跡集成図

り限定的に「出入口部埋塞」を指していることが多いようである。(註1) 本遺跡の場合、竪穴住居跡の出入口部を考えると必ずしも出入口部に土器が埋設されているとは断言できない。そこで「埋塞」とは区別する意味で「埋設土器」という名称を用いた。

#### ②底部穿孔埋設土器

粗製(RL 縄文)土器である。RA 16 出土土器は平縁の深鉢で最大径 30.0 cm、器高 41.1 cm、底径 13.6 cm である。RA 18 出土土器は最大径 24.5 cm、器高 31.8 cm、底径 10.0 cm であった。RA 16 出土土器の方が大型の深鉢であり、口縁の厚さが 1 cm で幅 3 cm 程度の無文帯をもつ。最大径は胴部にもち、口縁部にかけて内傾する嚢形である。RA 18 は外反気味に立ち上がる深鉢で口縁はわずかな波状を呈する。いずれの土器も外面は胴部に、内面は底部付近に炭化物の付着がみられた。このことから、埋設するために特別作られた土器というよりは日常使用していた土器を転用して用いた可能性の方が高いと思われる。さらに竪穴住居跡床面から出土した遺物は大木 8b から 9 式のものであり、竪穴住居跡の時期は中期中葉から後葉に属するものと思われる。

本遺跡と同時期で同様に床面から出土した北上市坊主峠遺跡 2 号-a 住居跡出土の埋設土器は、粗製(RL 縄文)土器で、最大径 34.5 cm、器高 45 cm で底部穿孔がみられ、倒立した形であった。この土器は発掘時点でも壺内の約 2 分の 1 は空洞であったという報告であったが本遺跡のものは底部から口縁部まで土がいっぱいになっていた。

#### ③竪穴住居跡内の埋設土器の位置について

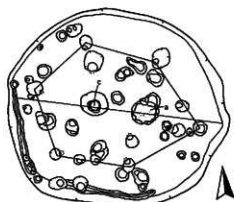
RA 16、18 竪穴住居跡とも床面確定時に埋設土器を検出し、いずれも竪穴住居跡に伴うものと思われる。本遺跡の埋設土器の出地点は炉の中軸線の延長線上に位置する。その他県内で倒立した形で底部穿孔の粗製の埋設土器が竪穴住居跡床面から出土した例は 2 遺跡あった。盛岡市大館町遺跡と前出の北上市坊主峠遺跡である。この 2 つの遺跡出土の埋設土器も炉の中軸線の延長線上に埋設土器がみられた。(第 139 図底部穿孔埋設土器集成図) このことは埋設土器と炉の関係、竪穴住居跡の内部構造を考える上で重要である。

#### ④ RA 16 竪穴住居跡と RA 18 竪穴住居跡の関係について

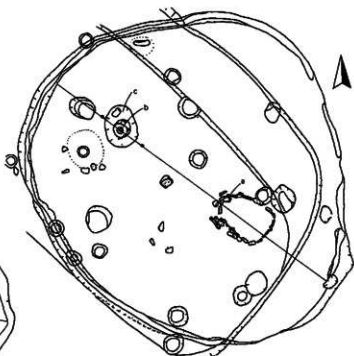
第 139 図からもわかるようにこの二つの住居跡は近接し、同時期とおもわれる。住居跡内をみると炉の形態はほぼ同じであり、炉と埋設土器を結ぶ中軸線の向きもほぼ同じ角度であった。しかし、RA 16 が炉を住居の西側に持ち、埋設土器を東側にもっているのに対し、RA 18 は炉を東側に持ち、埋設土器を西側に持っている。二つの住居跡は同時存在を十分考慮できる配置にあるのではないだろうか。意図的に配置を逆にしていただろうか。資料の増加を待ちたい。

#### ⑤埋設土器の性格について

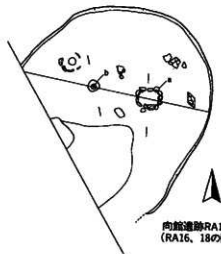
- a→炉跡
- b→埋設土器
- c→埋設土器掘り方



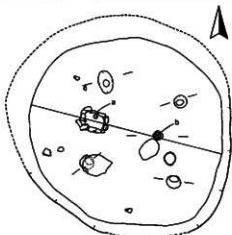
盛岡市大館町遺跡 RA2368



北上市坊主峠遺跡2号-a住居跡



向館遺跡RA18竪穴住居跡  
(RA16、18の配置は検出事と同じ配置である)



RA16竪穴住居跡

第139図 底部穿孔埋設土器出土竪穴住居跡集成図

埋設土器内の土について脂肪酸分析の結果、ヒト遺体を直接埋葬した土料と類似する結果となった。さらに、土器の大きさやクラスター分析による類似度から幼児埋葬用甕棺と推測される結果となった。RA 18 壜穴住居跡の埋設土器の場合、器高が 31.8 cm、最大径 24.5 cm、底径 10.0 cm という規模を考えれば、幼児という範囲のなかに生後間もない乳幼児も含まれるのではないだろうか。

## 2. 土坑

本遺跡で検出された土坑は 55 基であり、検出面から RD 54 土坑を除き縄文時代に属する可能性が高い。

### (1) 立地

G 6 区 12 ラインから 20 ラインの範囲で 32 基検出されている。そのうち、フラスコ状土坑と思われるものが 15 基で約半数である。一方、斜面下位の G 7 区ではフラスコ状土坑が 1 基の検出であった。このことから G 6 区 12 ラインから 20 ラインの範囲は土坑が密集して検出され、その上フラスコ状土坑も密集していた地区といえる。また、G 6 区 20 ラインから G 7 区 5 ラインまでは RD 47 以外土坑が検出されなかったことからこの地区は土坑の希薄な範囲といえる。さらに、F 6 区の RD 54 は形状や検出面が削平された地山より下であったことから井戸跡の可能性も考えられる。G 6 区 12 ラインより北側では開田時の削平のため遺構は検出されなかった。

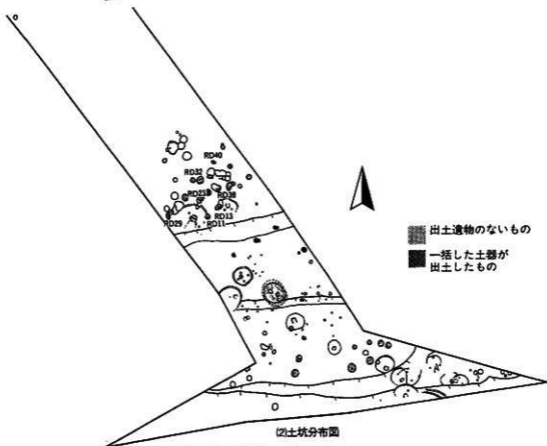
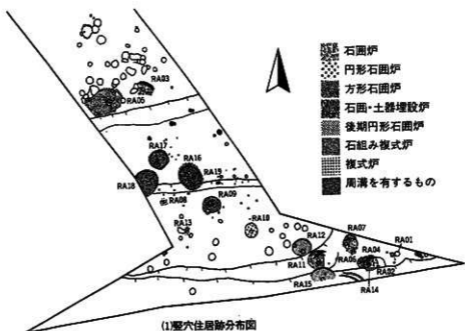
G 7、H 7 区では開田時に削平を受けた地区では浅い土坑がみられた。G 7 区 5 ラインから 14 ラインでは楕円形の土坑が比較的多く検出されている。

### (2) 堆積土の状況

土坑の堆積土の状況を見ると、人頭大の礫や河原石が埋土に多量に混入しているものがある。また廃棄焼土が埋土上面にみられるもの、人為的に埋め戻されているものがみられ、自然堆積と思われるものは少ない。人為的堆積と思われる土坑は G 6 区 20 から G 7 区 5 ラインの土坑の希薄な地区を円形に囲んでいる分布と思われる。

### (3) 土坑出土遺物について

出土遺物として目立ったのは第 IV 1 群土器である。他群の土器に比べて多量に出土している。とくに G 6 区平坦部の RD 11、13、23、29、32、38、40、46 土坑では一個体以上まとまった量の土器の出土があった。RD 32、38 土坑では大型甕が出土しており、特に RD 38 土坑出土のものは全面に赤色顔料の付着がみられた。RD 13、38 土坑では腕輪型土製品が出土している。さらに RD 23 土坑では焼成前に意図的に切断された赤色顔料付着の吊り手付甕型土器が出土している。これに対し G 7 区斜面に立地する土坑では出土遺物がほとんどみられなかった。



第140図 竪穴住居跡、土坑分布図



第17表 土坑一覽表

番号	グリッド	プラン	規模 (cm)	開口部 形状	深さ (cm)	断面形	重 複	遺物時期	備 考
RD01	G7N14	楕円形	154×110 100×98		80	フラスコ状		中期～後期	人為的堆積・レキ・焼土
02	H7L08	円形	90 80		70				
03	H7N08	不明	長軸108		60		RF02より古い		
04	G7V07	不整形	約79 約59		36				
05	G7Y07	楕円形	110×88 100×72		32				
06	G7X06	円形	約118 約95		26				
07	G7W06	不整形	95×80 69×50		38				
08	H7N06	楕円長方形	長軸60 短軸42		30		RD03と近接するが新 旧関係は不明		
09	G7L05	円形	100 90		19	皿状		第III～V群	
10	G7N09	円形	129 90		38				人為的堆積・レキ
11	G6G20	楕円形	93×78 120×118		112	フラスコ状	RA07と重複	第IV群土器	レキ・焼土
12	G7P06	楕円形	56×30 42×19		20				
13	G6G19	楕円形	176×166 160×88		55		RD18より新しくRA05 より古い	第VIII群土器	人為的堆積・レキ
14	G7W08	不整形	136×112 90×75		50				人為的堆積・レキ
15	G7W07	楕円形	122×96 62×55		50	餅り鉢状		後期初頭	人為的堆積・レキ
16	G7Q08	円形	約120 95		34				レキ
17	G7L09	楕円形	75×60 62×44		46				レキ・焼土 RA13の柱穴の可能性有
18	G6G19	楕円形	158×95 断面165×95 直径約100		88	フラスコ状	RA05、RD13より古い	第IV群土器	人為的堆積・レキ
19	G7J11	円形	約120 約100		38				人為的堆積・レキ 炭化物、焼土
20	G7L11	円形	約140 105		78			第III～IV群土 器	レキ
21	G7O05	円形	約90 約60		43		RA11と重複		レキ
22	G7N07	楕円形	112×88 約60		70		RA15と重複		人為的堆積・レキ
23	G6E18	円形	約110 100		36		RD25より新しい	第IV群土器	人為的堆積
24	G7U09	楕円形	161×136 136×119		30				人為的堆積
25	G6E18	円形	約95 約95		95	フラスコ状	RD23より古い		
26	G6D19	円形	約190 150		58	フラスコ状		第II～III群土 器	
27	G7M07	楕円形	150×100～70 63×42		74		RA15と重複	第IV群土器	人為的堆積
28	G6C20	楕円形	180×50 84×50		74				
29	G6C20	楕円形	124×73 114×62		68			第III～IV群土 器	人為的堆積・レキ
30	G6D16	円形	約80 約125		75	フラスコ状		第IV群土器	人為的堆積
31	G6E16	楕円形	90×75 92×87		25				
32	G6F16	円形	約130 約130		64			第II～IV群土 器	
33	G6G16	円形	約80 約120		95	フラスコ状	RD34より古い	第II～IV群土 器	
34	G6G16	円形	約109 約75		95				人為的堆積
35	G6H15	円形	約100 長軸67×短軸35		57		RD44より古い		

番号	グリッド	プラン	規模 (cm)	開口部 高さ	深さ (cm)	断面形	重 複	遺物時期	備 考
36	G6H16	楕円形	140×90 約70	140	106		RD41より新しい		
37	G6G10	円形	100×83 112×105	25	25				人為的堆積・レキ
38	G6G15	円形	100 61	92	92		RD39より古い	第IV群土器	人為的堆積
39	G6G14	円形	170 150	90	90		RD38より新しい		人為的堆積・レキ
40	G6F12	楕円形	110×80 約90	97	97	フラスコ状		第IV群土器	人為的堆積・レキ
41	G6H16	円形	約110 約90	30	30		RD36より古い		
42	G6E14	円形	約140 約150	62	62	フラスコ状		第III～IV群土器	
43	G6D10	楕円形	134×80 約180	97	97	フラスコ状	RE01より古い	第IV群土器	
44	G6H12	円形	約100 断面90 高さ約120	110	110	フラスコ状	RD35より新しい		
45	G6J14	楕円形	122×87 断面65 高さ80	62	62				
46	G6F17	楕円形	120×90 152×115	99	99	フラスコ状		第IV群土器	炭化物を含む
47	G6P23	不整円形	60 45	90	90	柱穴状			
48	G6B11	円形	約95 95	80	80	円筒状			人為的堆積・レキ
49	G6D17	不整円形	130 約95	45	45				人為的堆積
50	G6J14	円形	100 100	40	40				
51	G6D18	円形	140 断面110 高さ約152	76	76			第IV群土器	
52	G6C19	円形	120 140	68	68				人為的堆積
53	G6I16	不整円形	90×70 断面68×42 高さ約130	106	106	フラスコ状		第IV群土器	
54	F6O04	円形	約76 約63	84	84				
55	G6D12	不整円形	約170 約110	88	88			第IV群土器	焼土?

#### (4) 土坑の性格について

フラスコ状土坑は貯蔵穴の用途に使用されている検出例が多くみられるが、本遺跡のフラスコ状土坑からは植物種子や植物の炭化物は出土しておらず、特殊な土器のまとまった出土があった。さらに、フラスコ状土坑の埋土に礫や炭化物を含む人為的な堆積がみられ、RD 01、38では埋土上位に廃棄とおもわれる焼土が厚さ 25～30 cm でみられ、RD 01 は底面に最大厚 2 cm の現地性焼土がみられた。したがって、これらの土坑は基坑である可能性が考えられる。一方、底面が二段になっている RD 03、27、29、51 土坑や開口部に不完全なものもあるがテラスをもつ RD 18、22、26、38 土坑は二次的に転用された可能性が考えられる。

G 7 区 5 ラインから 14 ラインでは出土遺物のない楕円形の土坑が検出されていることは基坑の可能性が考えられるが、重複関係があることや出土遺物がみられなかったこと、形態の相違から G 6 区の特長遺物を出土したり、人為的堆積がみられたフラスコ状土坑とは時期差が考えられる。

### 3. 出土遺物について

#### (1) 土器について

##### ① RA 16 から 19 竪穴住居跡床面出土の土器について

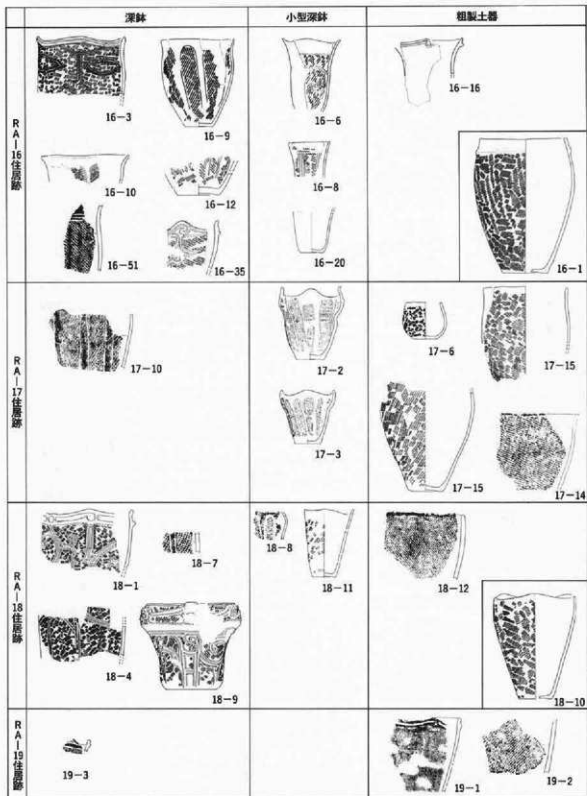
本遺跡で検出された竪穴住居跡は中期中葉から末葉のものと考えられる。特に時期が重複する RA 16 から 19 竪穴住居跡で確実に床面から出土し、時期決定の決め手となるものを比較してみた。(第 141 図 RA 16～19 竪穴住居跡床面出土遺物集成図) RA 16、RA 18 竪穴住居跡とも大木 8b 式と大木 9 式の土器を出土している。RA 16 では小型深鉢は形態や文様から大木 8b 式でも新しい時期のものと思われ、深鉢 3 は波状口縁で胴部まで渦巻き文による文様がみられることから、大木 8b-2 式より新しいと思われる。RA 18 は深鉢 1、4 や 9 の形態からやはり大木 8b-2 式より新しいと思われる。したがって、RA 16 と RA 18 の新旧関係については出土遺物からは明言できないが同時存在の可能性も考えられる。RA 17 は大木 9 式の土器を主体にしており、RA 19 は RA 16 より先行する。このことから 4 つの竪穴住居跡のなかでは RA 19 が最も古く、RA 16 が新しいと思われる。

また RD 23 土坑から出土した大木 9 式土器は無文帯の懸垂部分の沈線が横につながり「H」字状の文様にみえる。類例として大迫町観音堂第Ⅱ群 3 類土器がある。

##### ② 第Ⅳ群 1 類土器について

本遺跡の土坑よりまとまって出土した深鉢について類例を求め、比較してみた。滝沢村湯舟沢遺跡第Ⅳ群 4 類土器と大迫町立石遺跡第Ⅲ群 2、3 類土器、観音堂遺跡第Ⅵ群 1 から 3 類土器である。

第 142 図 1、5 から 8、10 は本遺跡出土で 1 は RD 29、5、6 は RD 32、7、8 は RD 40、9 は RD 46 から出土している。これらの土器は波状口縁で S 字状沈線や波状文、平行沈線などの文様とボタン状貼りつけなど文様のモチーフとして共通性がみられる。1 は 2 から 4 と類似している。2、3 はボタン状貼りつけを起点として文様が構成される点、2 の口縁の隆起線は類似しているが、口縁部に突起が付く点、胴部の文様が底部付近までみられる点で大きく異なる。4 は口縁部の無文帯の隆起線とボタン状貼りつけには相違がみられるが、胴部の文様は平行沈線で文様体を区切る部分が類似する。5、8 は 9 と類似する。波状口縁で地文を残し、胴部まで沈線による文様が見られる点で共通するが、5 は口縁部の頂部と異なる部分に縦位に 2 つの刺突が見られる点で異なる。6 は 5 と共伴する小型深鉢で口縁部は外反気味に立ち上がりと思われ、S 字状沈線による文様が見られる。7、8 は共伴した出土遺物であり地文は網目状懸垂文と縄文という点で異なるが文様のモチーフは同じである。7 は 4 の深鉢と器形が類似する。10 は 11 から 13 と文様に共通性がみられる。10 と 11 は波状口縁頂部に刻みを持つが口縁部の無文帯の有無、胴部下位まで文様が見られる点で相違がみられる。10 は折り返し口縁的に波状



第141圖 RA16~19 竪穴住居跡床面出土遺物集成図

口縁に沿って二本の平行沈線がみられ、ボタン状貼りつけとその上部に刺突がみられるが12の文様はそれを簡略化していると思われる。13は把手を持つことや隆起線がみられることで相違があるが、文様モチーフは類似している。

このように、三つの遺跡では文様に共通性がみられるが、本遺跡出土のものは磨り消しによる文様がみられなかった。時期的には文様の胴部への広がりや文様の簡略化により多少の時期差は考えられるがほぼ同時期のものととらえることができよう。

## (2) 石器について

本遺跡出土の石器は総数807点のうち未製品574点、微細細剥離痕剥片85点、剥片486点、石核3点、剥片石器150点、礫石器83点であり、剥片石器が礫石器より多く出土している。最も多く出土しているのが不定形石器で全体の25%、ついで石鏃の20%、石匙の13%、磨石11%となっている。石鏃のなかで、凹基無茎石鏃が27%を超えてもっとも多く、ついで有基円形石鏃の21%となっている。石匙では縦型が横型より多く出土し、6対4の割合である。不定形石器は遺構外出土遺物の中で周縁の調整によって3つに分類したが、最も多いのは二～三周縁の調整がみられたものであった。逆に周縁全てに調整を行なっているものは全体の3%に満たなかった。このことから簡便的な目的によって作製されたのではないと思われる。

## 4. まとめ

今回の調査では土坑の埋土から多く出土した第IV1群土器を床面から出土する竪穴住居跡群は検出されていないことや遺構によって分布が異なることから墓域と居住域との使い分けがなされていたことが考えられる。また配石遺構と墓域の関係についても今後の調査結果による資料の増加が待たれる。

米内川対岸の上米内遺跡でも縄文中期後葉から末葉の竪穴住居跡が数多く検出された。上米内遺跡からさらに米内川上流の未調査である畑井野遺跡でも周囲の畑地から多くの土器が表採でき、大木8b式の大形深鉢が完形で出土している。したがってこの地域は縄文中期後葉から末葉にかけての大集落があったことが推測され、中期以降も後期、晩期まで集落が存在していた可能性がある。

向館遺跡出土土器

RD  
29



RD  
32



RD  
40



RD  
46



立石遺跡 第III群 3類



立石遺跡 第III群 2類



湯舟沢遺跡 第IV群 4類



湯舟沢遺跡 第IV群 4類



観音堂遺跡 第VI群 1類



観音堂遺跡 第VI群 2類



観音堂遺跡 第VI群 3類

第142図 土器集成図

第18表 石器組成表

遺構番号	剥片石器				礫石器												礫石器計	石器合計	微細剥離痕剥片	剥片核	石	未製品計	總計	
	石	石	石	片状石器	不定形石器	剥片石器計	打製石斧	磨製石斧	石錘	石皿	磨石	凹石	敲石	砥石	石棒	石劍								石
遺構内	15	11	1	0	17	44	0	2	1	1	8	2	0	0	0	1	2	17	61	41	125	2	1	157
遺構外	32	20	6	7	41	106	11	16	2	5	18	4	5	3	2			65	171	65	372	1	417	588
合計	47	31	7	7	58	150	11	18	3	6	26	6	5	3	2	1	2	82	232	85	486	3	574	806
組成A	5.8	3.8	0.9	0.9	7.2	18.6	1.4	2.2	0.4	0.6	3.2	0.7	0.6	0.4	0.2	0.1	0.2	10.2	28.8	10.5	60.3	0.4	71.0	
組成B	20	13	3	3	25	65	5	8	1	2	11	3	2	1	1	0.9	1	35						

※組成Aは、石器類総数に対する比率：Bは、加工された石器数に放する比率

※表中の大きさの単位はcm：重さの単位はg

※不定形石器 a = 一縁辺調整：b = 二～三縁辺調整：c 周縁調整

第19表 遺構内石器出土数一覽表

## 1. 住居跡

遺構番号	剝片石器					礫石										礫石器計	石器合計	微細剝片	剝片	石核	未製品計	總計			
	石鏃	石鏃	石鏃	寬狀石器	不定形石器	剝片石器計	打製石斧	磨製石斧	石鏃	石鏃	磨石	凹石	敲石	砥石	石棒								石劍	礫石器計	
RA01																	1	1	1					1	
RA02	1					1												1	2	1			3	4	
RA03																			5				5	5	
RA04	1				1	2										1	1	3	4	1			5	8	
RA05		1			2	3												1		3	1	11	14		
RA08					1	1												1	1				1	2	
RA11					1													1		2			2	3	
RA12	2	2			3	7				1							1	2	9	3	22		25	34	
RA14	2				2															3			3	5	
RA15	4	2			2	5				1								5	1	9	12	1	18	27	
RA16	1				1	2												1	3	3	5		8	11	
RA17	1	1			1	3												4	7	4	7		11	18	
RA18										1								2	2	1	2		3	5	
RA19					2	5												5	2	13			15	20	
合計	13	9			13	35				1							1	2	12	47	30	78	2	110	157

## 2. 土坑

RD01																			1	3			3	3		
RD02			1			1													1					1		
RD09					1	1													1	1	1		2	3		
RD13																				3	3		6	6		
RD16																					1		1	1		
RD18										1									1	1	3		3	4		
RD19	1					1													1					1		
RD20																			2				2	2		
RD23		1				1													1	1	3		4	5		
RD25																					1		1	1		
RD27					1	1													1		2		2	3		
RD28					1	1													1		2		2	3		
RD32		1				1													1	1	2		3	4		
RD33																				1	2		3	3		
RD34																					1		1	1		
RD37					1	1													1					1		
RD38																			1	1				1		
RD39										1									1	1		1		1	2	
RD40											1	1							2	2		3		3	5	
RD42																					1		1	1	1	
RD43																					1		1	1	1	
RD45																				1	1		2	2	2	
RD46																					1		1	1	1	
RD53	1					1													1		1		1	2	2	
RD54																						4		4	4	4
合計	2	2	1		4	9				1	1							5	14	11	36		47	61		



第20表 遺構内出土不定形石器一覧表

出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
RA04	不定形石器 (a)	3.8	4.1	1.2	12.59	珩質泥岩	直刃
RA05	不定形石器 (b)	3.9	5.8	0.6	10.51	チャート	匙(横)?
RA05	不定形石器 (b)	2.9	2.3	0.7	3.96	硬質泥岩	
RA08	不定形石器 (b)	2.4	2.7	0.7	4.22	珩質泥岩	
RA12	不定形石器 (a)	(4.2)	3.7	1.1	(10.91)	泥質凝灰岩	刃欠
RA12	不定形石器 (b)	3.3	3.5	0.9	7.63	珩質泥岩	
RA12	不定形石器 (b)	3.7	2.5	1.2	12.76	チャート	
RA15	不定形石器 (a)	4.3	3.0	1.2	16.67	粘板岩	直刃
RA15	不定形石器 (b)	4.8	2.2	0.4	3.61	硬質泥岩	凹刃
RA16	不定形石器 (a)	2.2	2.7	0.6	4.04	粘板岩	曲刃
RA17	不定形石器 (b)	(3.1)	4.3	0.7	(8.24)	硬質泥岩	
RA19	不定形石器 (b)	3.0	3.5	1.4	12.55	珩質泥岩	
RA19	不定形石器 (a)	4.2	3.4	0.8	7.01	赤色凝灰岩	曲刃
RD09	不定形石器 (b)	5.3	3.6	1.9	28.33	粘板岩	微細割離痕
RD27	不定形石器 (b)	3.6	3.3	1.0	10.61	粘板岩	
RD28	不定形石器 (a)	8.9	4.2	1.0	34.56	チャート	直刃
RD37	不定形石器 (b)	2.8	1.8	0.4	2.37	チャート質粘板岩	

※表中 ( ) は、残存部の計測値

※不定形石器 (a) は一縁辺調整：(b) は二～三縁辺調整

参考・引用文献

- 青森県教育委員会 (1983)：『弥栄平遺跡(2)・発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 81 集
- 〃 (1985)：『弥栄平遺跡(1)・発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 98 集
- 〃 (1985)：『沖附(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第 101 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1984)：『葦窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 84 集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1983)：『小畑内 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 52 集
- 〃 (1988)：『飛鳥台地 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 173 集
- 〃 (1991)：『上村貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 158 集
- 〃 (1992)：『石曾根遺跡発掘調査報告書・東北横断自動車道関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 165 集
- 〃 (1992)：『川向遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 173 集
- 〃 (1992)：『上八木田 III・IV・V 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 177 集
- 大船町教育委員会 (1974)：『崎山弁天道跡』岩手県大船町吉里吉里
- 加藤晋平 他 (1981)：『縄文文化の研究』雄山閣出版株式会社
- 木下 忠 (1970)：『戸口に胎盤を埋める呪術』考古学ジャーナル 42
- 北上市教育委員会 (1983)：『坊主峠遺跡発掘調査報告』北上市立博物館研究報告第 4 号
- 小林達雄 (1989)：『縄文土器大観 1, 4』小学館
- 杉山 武 (1980)：『白浜式・小舟渡平式土器にかかわる館平遺跡出土の早期貝殻土器について』奥南創刊号
- 高橋憲太郎 (1982)：『柿ノ木遺跡—縄文時代の遺物について』岩手大学考古学研究会他
- 滝沢村教育委員会 他 (1986)：『湯舟沢遺跡』滝沢村文化財調査報告書第 2 集

- 滝沢村教育委員会 他 (1987)：『仏沢III遺跡』岩手県滝沢村教育委員会文化財調査報告書第5集
- 長崎元広 (1973)：「ハケ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のありかたとその意識」信濃III 25-4.5
- 中村良幸 (1978)：『岩手県稗貫郡大迫町立石遺跡・昭和52年・昭和53年度発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告書第3集
- 〃 (1982)：「複式炉について」考古風土記7
- 〃 (1986)：『観音堂遺跡』大迫町埋蔵文化財報告11
- 〃 (1986)：「岩手県内の配石遺構」北奥古代文化第17号
- 八戸市教育委員会 (1987)：『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書V・田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 〃 (1990)：『八戸市内遺跡発掘調査報告書2・風張(1)遺跡I』八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 水野正好 (1978)：「埋壘祭式の復原」信濃III 30-4
- 宮城県教育委員会 (1984)：『東北自動車道遺跡調査報告書IX』宮城県埋蔵文化財調査報告書第99集 二屋敷遺跡
- 宮城県教育委員会 他 (1987)：『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第122集
- 百瀬忠幸 (1988)：「埋壘と境界性について」長野県埋蔵文化財センター紀要1
- 盛岡市教育委員会 (1990)：『大館遺跡群』盛岡市教育委員会
- 八木光則 他 (1992)：「大館遺跡群 大館町遺跡 平成3年度発掘調査概要」
- 八幡一郎 他 (1968)：『岩木山』岩木山刊行会
- 吉田義昭 (1956)：「藁棺と思われる縄文文化中期の土器群」石器時代 NO 3
- 渡辺 誠 (1970)：「縄文時代における埋壘風習」考古学ジャーナル 40

# 写 真 图 版



調査区遠景(1)



G6、7遺構集中区遠景(2)

写真図版1 調査区遠景航空写真

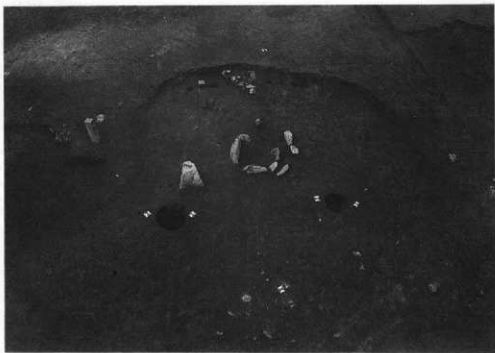


G 6 区土坑群



RA02 竖穴住居跡 全景

写真图版 2 G 6 区土坑群、RA02 竖穴住居跡



RA03 斲穴住居跡 全景



RA05 斲穴住居跡 全景

写真図版 3 RA03、05 斲穴住居跡



RA06、07豎穴住居跡 全景



RA10豎穴住居跡 全景

写真図版4 RA06、07、10豎穴住居跡





RA11竖穴住居跡 全景

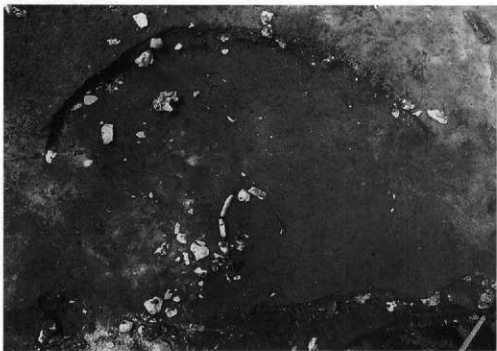


RA12竖穴住居跡 全景

写真図版 5 RA11、12竖穴住居跡

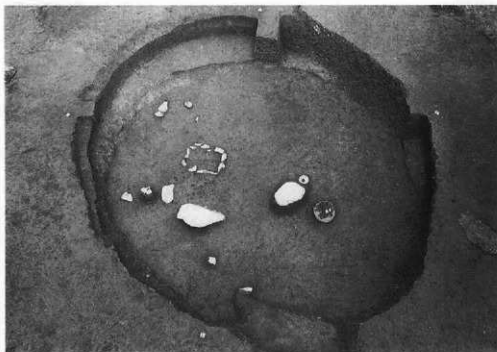


RA14竖穴住居跡 全景

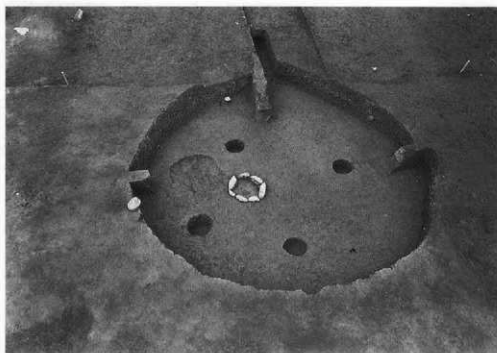


RA15竖穴住居跡 全景

写真図版 6 RA14、15竖穴住居跡



RA16鑿穴住居跡 全景

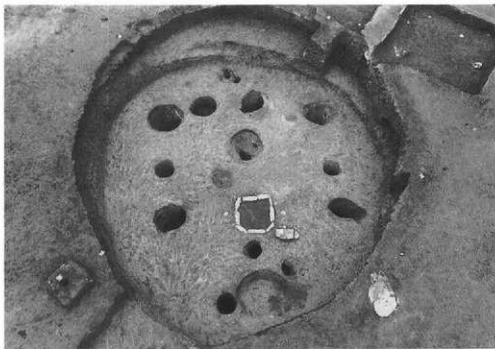


RA17鑿穴住居跡 全景

写真図版7 RA16、17鑿穴住居跡



RA18竖穴住居跡 全景



RA19竖穴住居跡 全景

写真図版 8 RA18、19竖穴住居跡



RA01豎穴住居跡 炉完掘



RA04豎穴住居跡 炉完掘



RA05豎穴住居跡 炉完掘



RA06豎穴住居跡 炉完掘



RA08豎穴住居跡 炉完掘



RA09豎穴住居跡 炉完掘



RA13豎穴住居跡 炉完掘



RA15豎穴住居跡 炉完掘

写真図版 9 豎穴住居跡 炉完掘状況



RA17竪穴住居跡 炉穴掘



RA02竪穴住居跡遺物出土状況



RE02竪穴状遺構 遺物出土状況



RA16竪穴住居跡埋設土器(床面)



RA17竪穴住居跡遺物出土状況



RA17竪穴住居跡遺物出土状況



RA18竪穴住居跡埋設土器(床面)



RA16竪穴住居跡遺物出土状況

写真図版10 竪穴住居跡、炉穴掘状況、遺物出土状況、RE02竪穴状遺構遺物出土状況



RE01豎穴狀遺構 完掘



RF01尸跡完掘

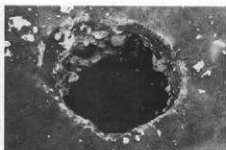


RF尸跡完掘

写真図版11 RE01豎穴狀遺構、RF01、02尸跡完掘狀況



RD01土坑 土层断面



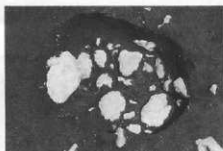
RD01土坑 完掘



RD02土坑 完掘



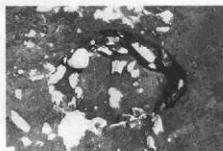
RD04土坑 完掘



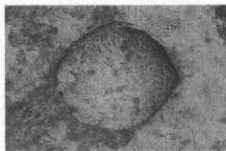
RD05土坑 完掘



RD06土坑 完掘



RD07土坑 完掘



RD09土坑 完掘

写真图版12 RD01、02、04~07、09土坑





RD10土坑 土层断面



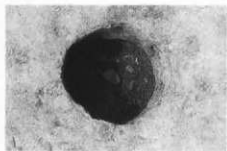
RD10土坑 完掘



RD12土坑 完掘



RD13土坑 曝出土状况



RD14土坑 完掘



RD15土坑 完掘



RD16土坑 完掘

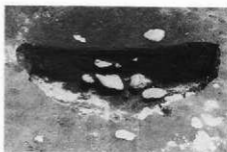


RD17土坑 完掘

写真図版13 RD10、12~17土坑



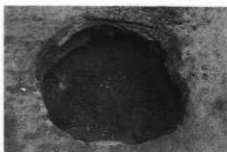
RD18土坑 曝出土状況



RD19土坑 土層断面



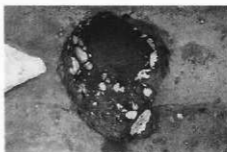
RD19土坑 完掘



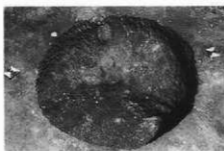
RD20土坑 完掘



RD21土坑 完掘



RD22土坑 完掘



RD23土坑 完掘

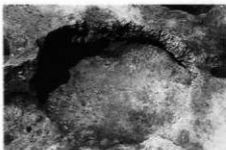


RD24土坑 完掘

写真図版14 RD18~24土坑



RD25土坑 完掘



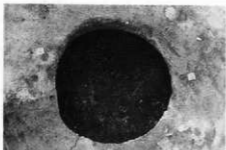
RD26土坑 完掘



RD27土坑 完掘



RD28、29土坑 完掘



RD30土坑 完掘



RD31土坑 完掘

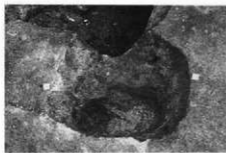


RD32土坑 完掘



RD33、34土坑 完掘

写真図版15 RD25~34土坑



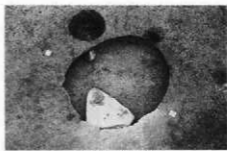
RD35土坑 完掘



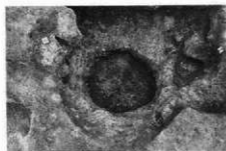
RD36土坑 完掘



RD37土坑 土层断面



RD37土坑 完掘



RD38土坑 完掘



RD39土坑 土层断面

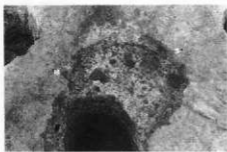


RD39土坑 曝出土状況



RD40土坑 完掘

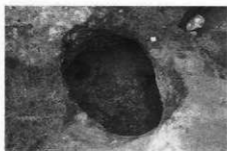
写真図版16 RD35~40土坑



RD41土坑 完掘



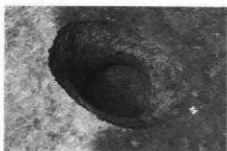
RD42土坑 完掘



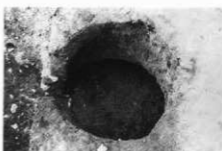
RD43土坑 完掘



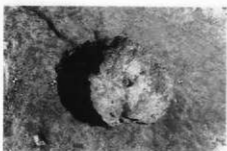
RD44土坑 完掘



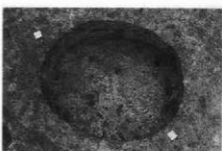
RD45土坑 完掘



RD48土坑 完掘

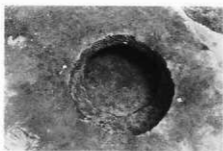


RD49土坑 完掘



RD50土坑 完掘

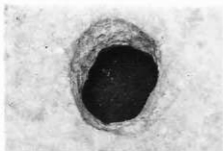
写真図版17 RD41~45、48~50土坑



RD51土坑 完掘



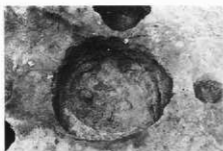
RD52土坑 完掘



RD53土坑 完掘



RD54土坑 完掘



RD55土坑 完掘



RZ02烧土断面



RZ06、07烧土検出状況



RZ01烧土検出状況

写真図版18 RD51~55土坑、RZ01、02、06、07烧土遺構



RZ10埋設土器 検出状況



F5区全景



F5区旧沢 土層断面



RH01配石 (列石石組状況)



RH01配石集石検出状況



F5区 遺物出土状況



RG01溝跡 完掘



柱穴群3 完掘

写真図版19 RZ10埋設土器、F5区、RH01、RG01溝跡、柱穴群3



G6区 木根痕



G6E18グリッド遺物出土状況



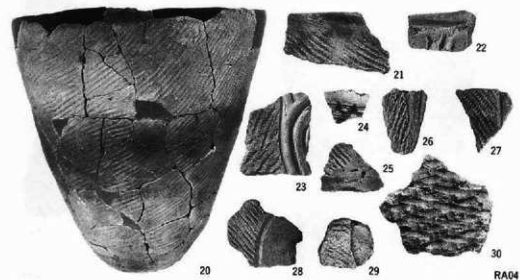
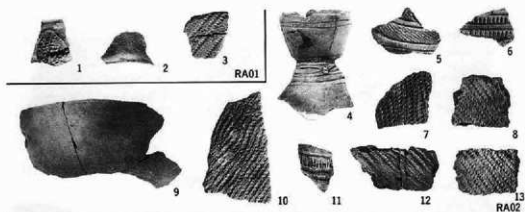
G6F17グリッド遺物出土状況



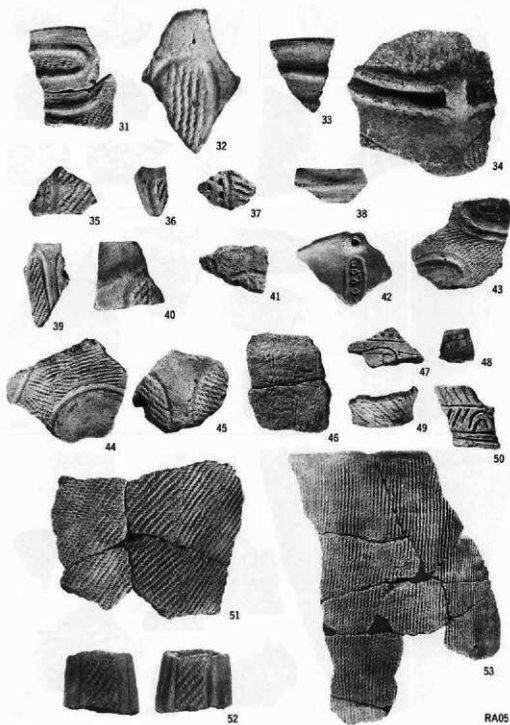
G6E18グリッド遺物出土状況

写真図版20 G6区木根痕跡遺物出土状況

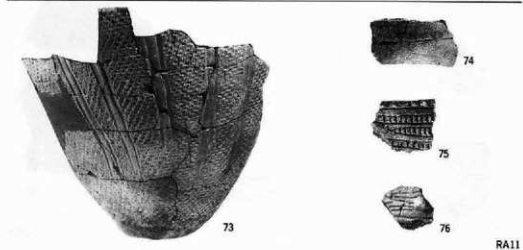
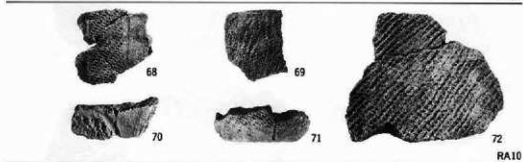
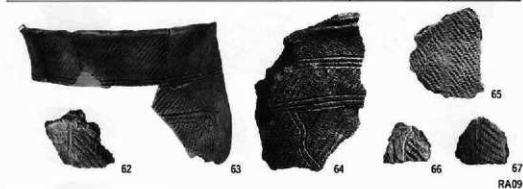
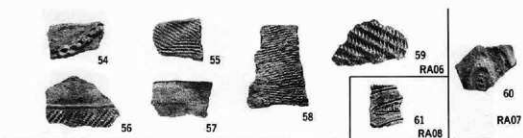




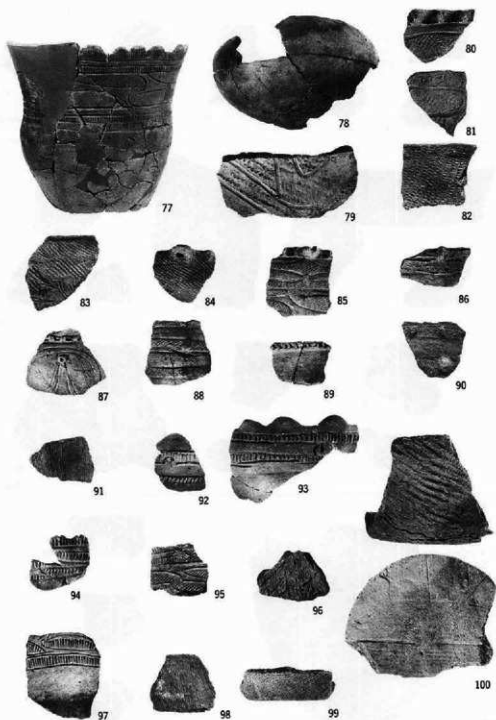
写真図版21 RA01～04竪穴住居跡出土遺物（土器）



写真図版22 RA05竪穴住居跡出土遺物（土器）

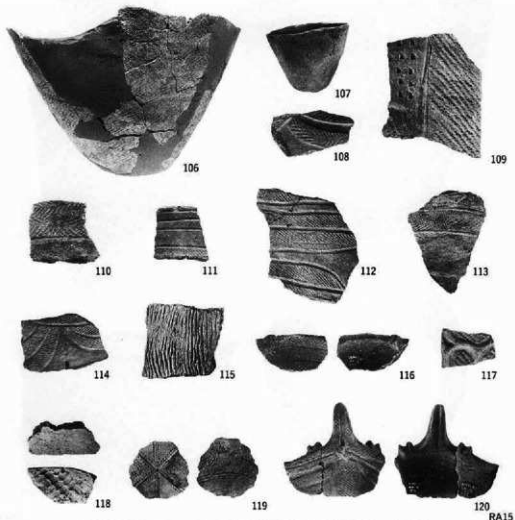
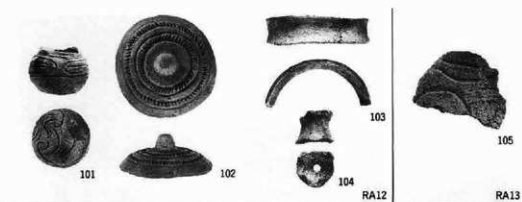


写真図版23 RA06~11竪穴住居跡出土遺物(土器)

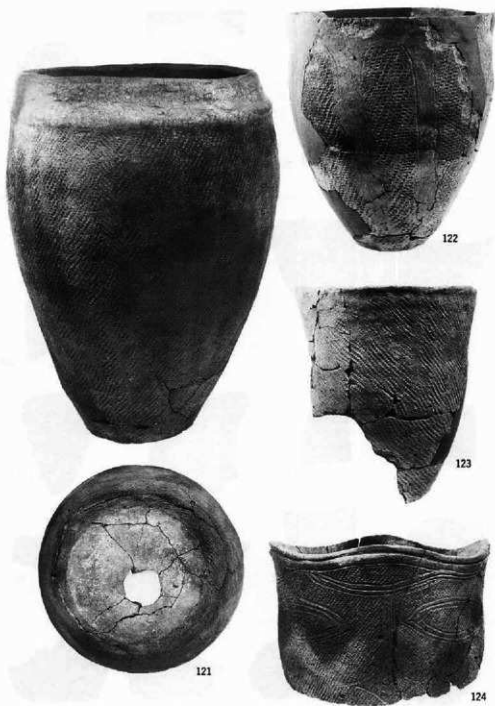


写真図版24 RA12竪穴住居跡出土遺物（土器）

RA12

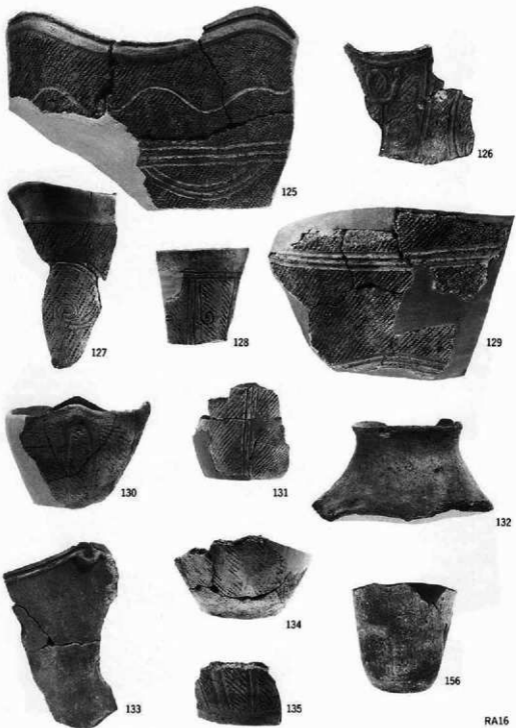


写真図版25 RA12、13、15竪穴住居跡出土遺物（土器、土製品）



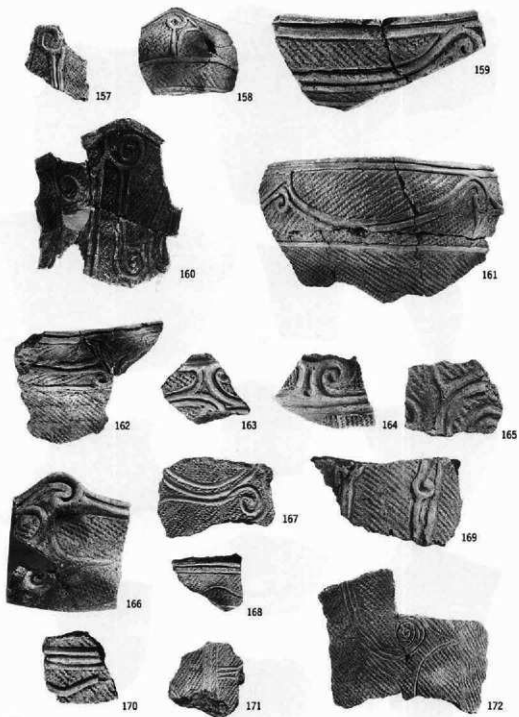
RA16

写真図版26 RA16竪穴住居跡出土遺物（土器1）



写真图版27 RA16竖穴住居跡出土遺物（土器2）

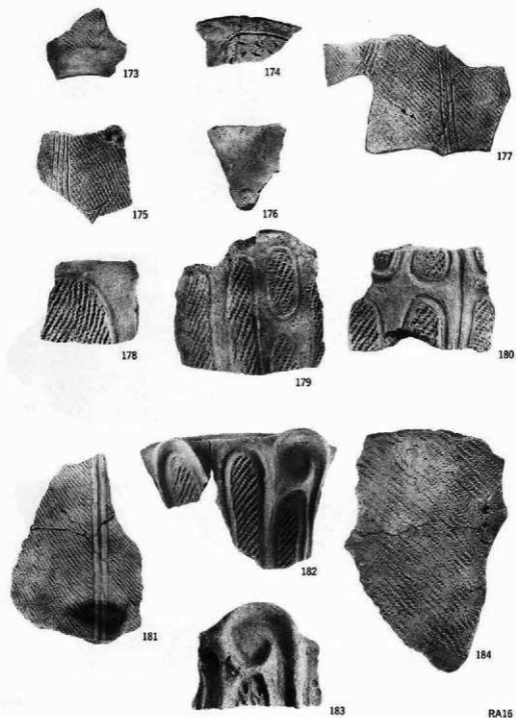
RA16



写真図版28 RA16竪穴住居跡出土遺物（土器3）

RA16





写真图版29 RA16竖穴住居跡出土遺物（土器4）



185



186



187



188



189



190



191



192



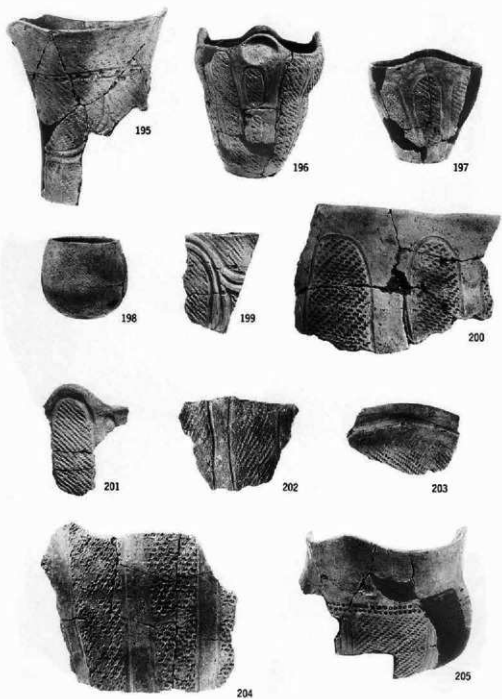
193



194

RA16

写真図版30 RA16竪穴住居跡出土遺物（土器5）



RA17

写真図版31 RA17竪穴住居跡出土遺物（土器1）



206



207



208



209

RA17



210



211

RA18

写真図版32 RA17(土器2)、18竪穴住居跡出土遺物(土器1)



212

213

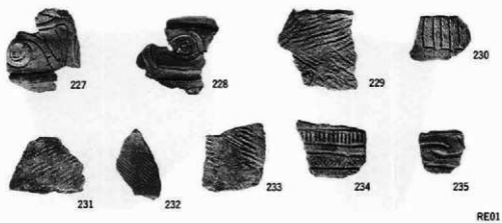
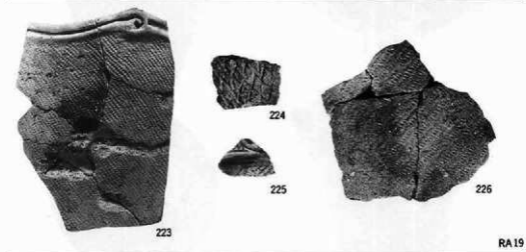
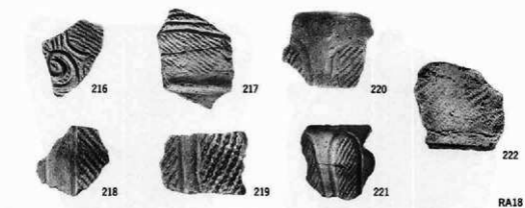


214

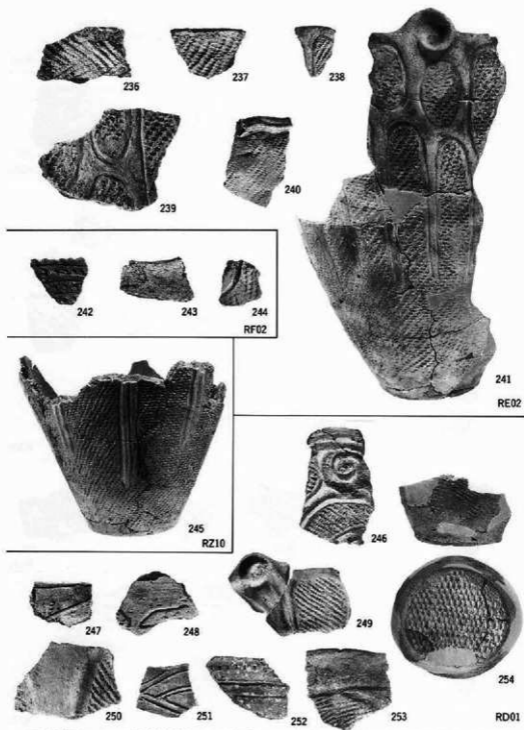
215

写真図版33 RA18竪穴住居跡出土遺物(土器2)

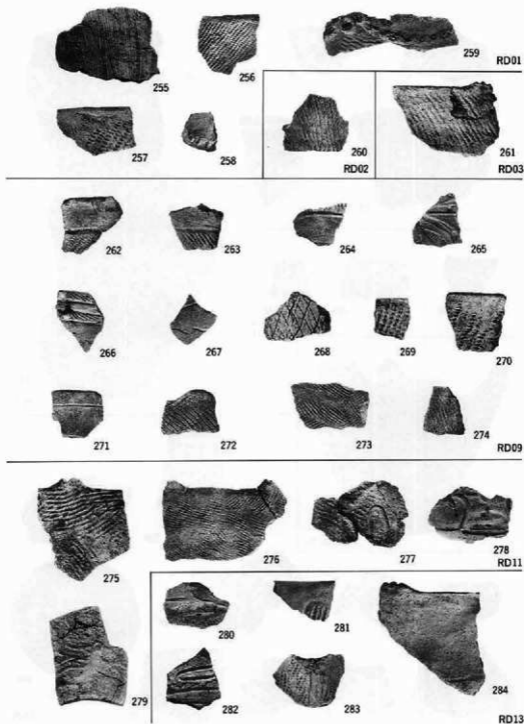
RA18



写真図版34 RA18(土器3)、19竪穴住居跡、RE01竪穴状遺構出土遺物(土器)

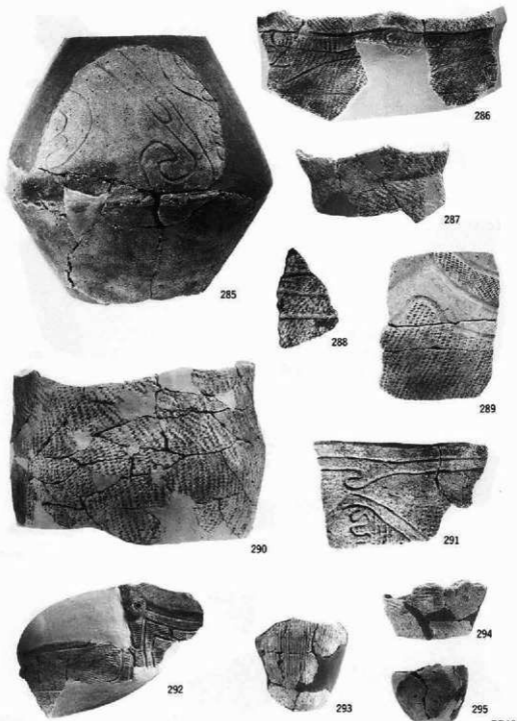


写真図版35 RE02竪穴状遺構、RF02炉跡、RZ10埋設土器、RD01土坑出土遺物（土器）



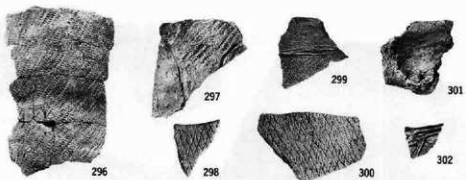
写真図版36 RD01~03、09、11、13土坑出土遺物（土器）



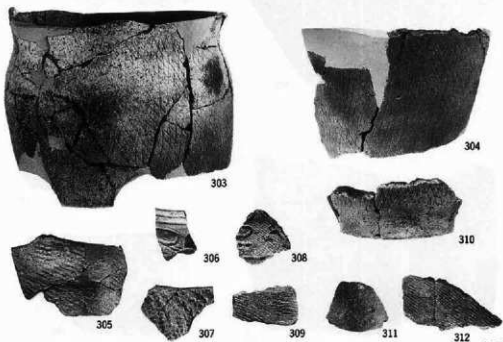


写真図版37 RD13土坑出土遺物（土器）

RD13



RD15

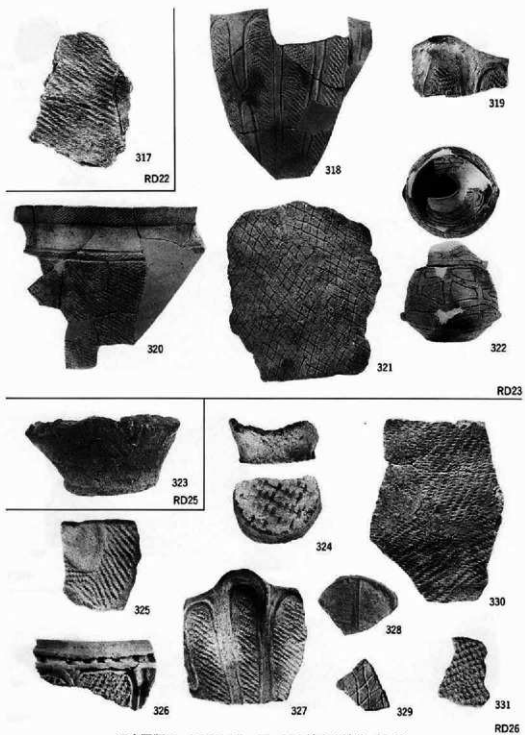


RD18



RD20

写真図版38 RD15、18、20土坑出土遺物(土器)



写真図版39 RD22、23、25、26土坑出土遺物(土器)



RD29

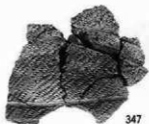


RD30

写真図版40 RD27、29、30土坑出土遺物（土器）



346



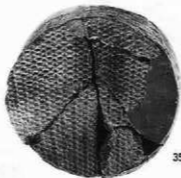
347



348



351



350



352



349



353



354



355



356



357

RD32



358



359



360

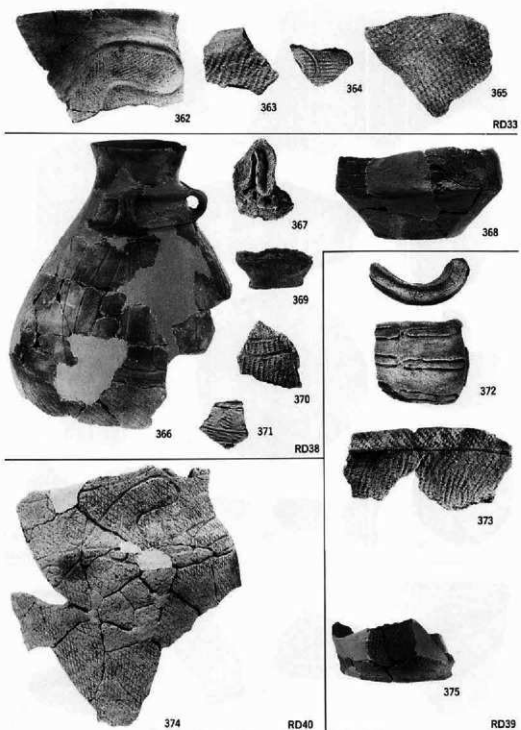


361

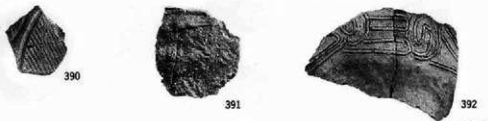
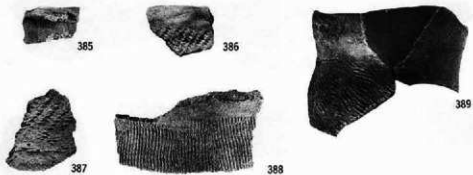
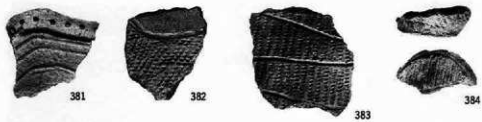
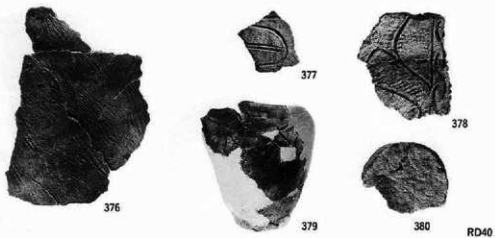


RD33

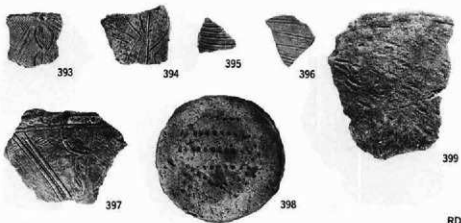
写真図版41 RD32、33土坑出土遺物（土器）



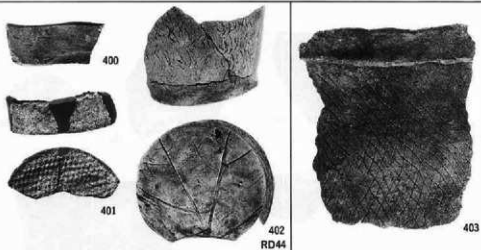
写真図版42 RD33、38~40土坑出土遺物（土器・土製品）



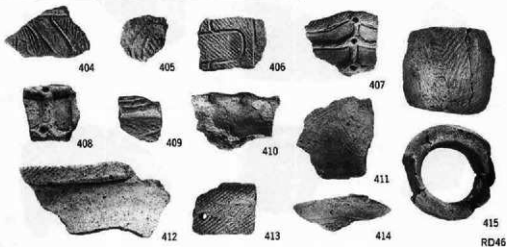
写真図版43 RD40、42、43土坑出土遺物(土器)



RD43



RD44



RD46

写真図版44 RD43、44、46土坑出土遺物（土器・土製品）





416

RD46



417



418



419



420



421



422



423



424

RD51



425



426



427



428



429



430



431



432

RD52



433



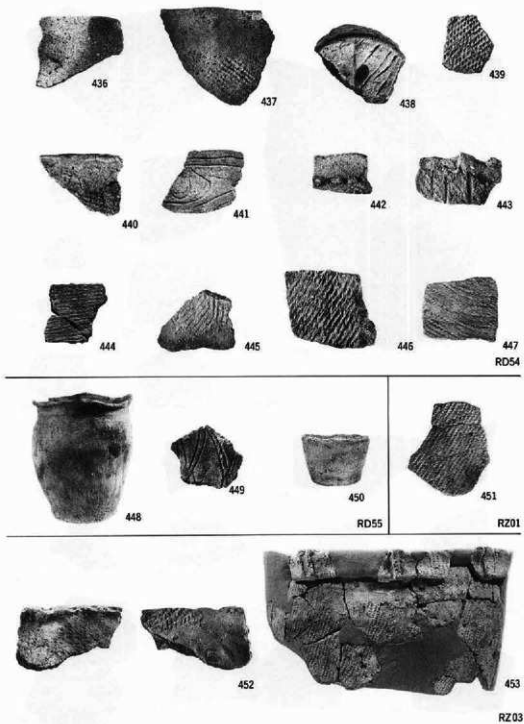
434



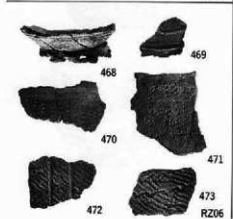
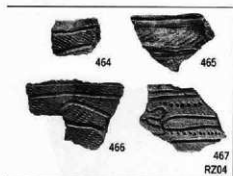
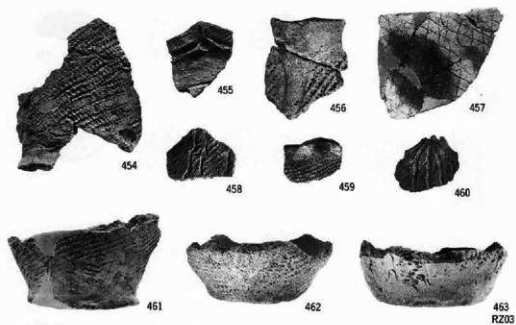
435

RD53

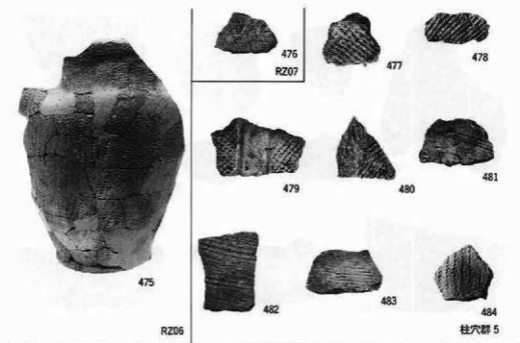
写真図版45 RD46、51~53土坑出土遺物(土器)



写真図版46 RD54、55土坑、RZ01、03焼土遺構出土遺物（土器）



写真図版47 RZ03~06焼土遺構出土遺物（土器）

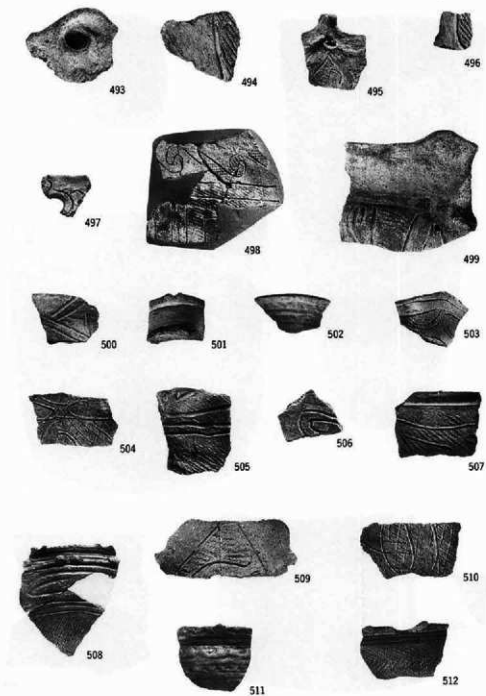


F 5 区

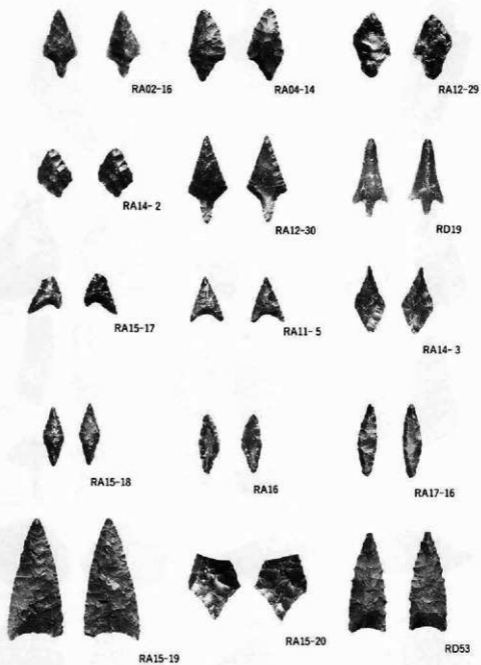
写真図版48 RZ06、07焼土遺構、柱穴群5、F5区出土遺物(土器1)



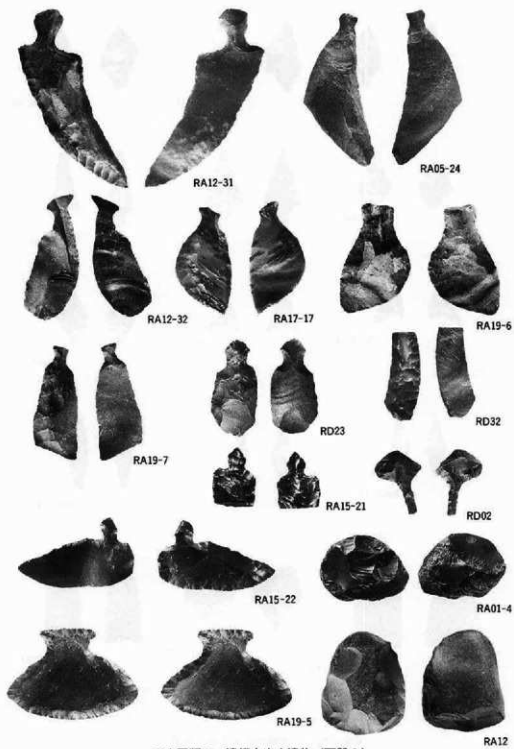
写真图版49 F5区出土遺物土器(土器2)



写真図版50 F5区出土遺物(土器3)

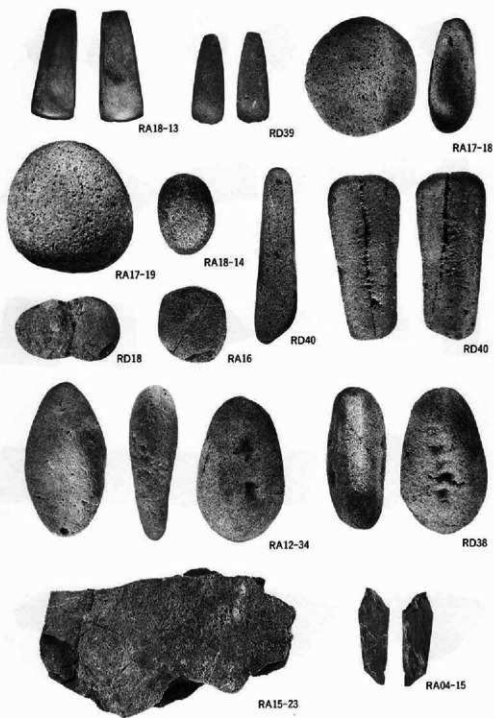


写真図版51 遺構内出土遺物（石器1）

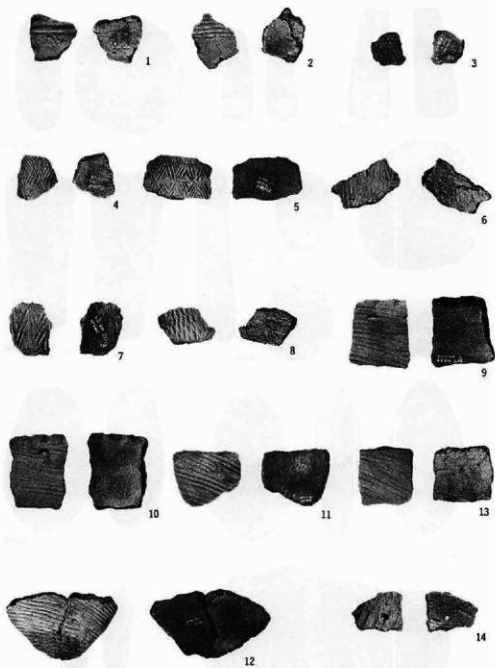


写真図版52 遺構内出土遺物（石器2）

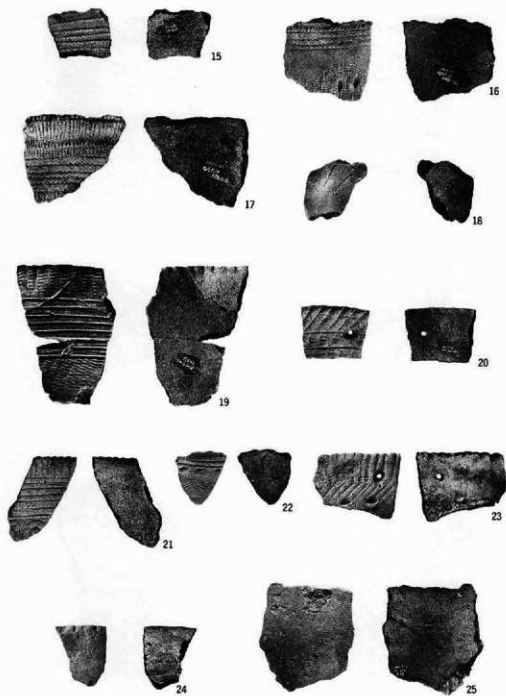




写真図版53 遺構内出土遺物（石器3）



写真图版54 遗物外出土遗物（第I群土器1）



写真図版55 遺構外出土遺物（第1群土器2）



26



27



28



29

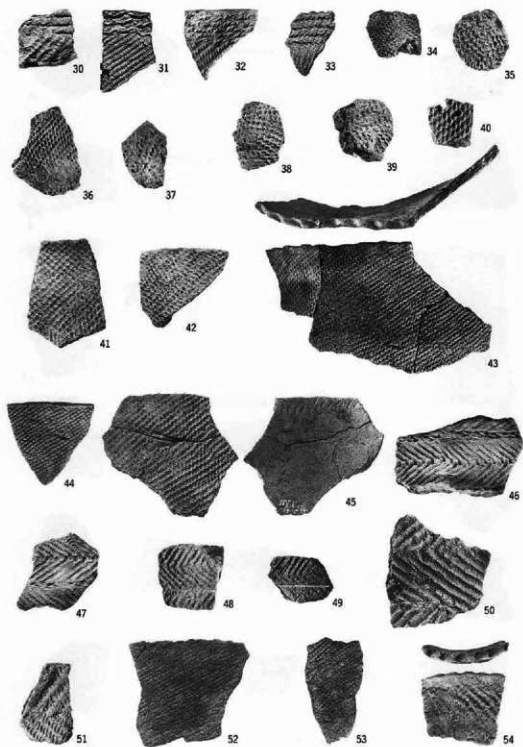


68

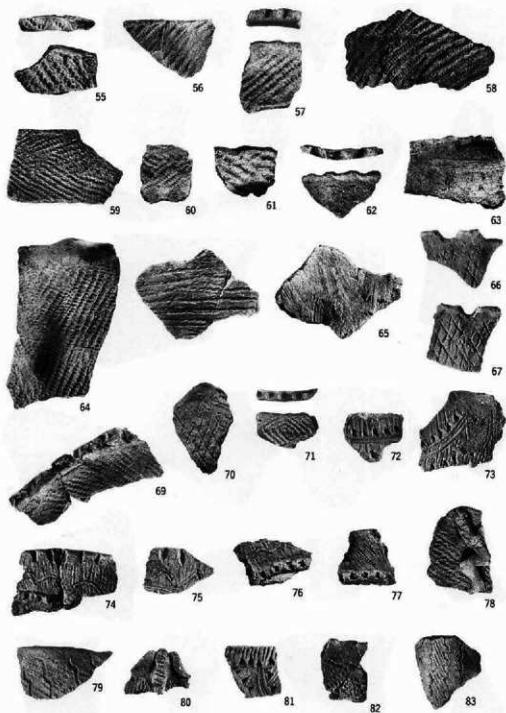


86

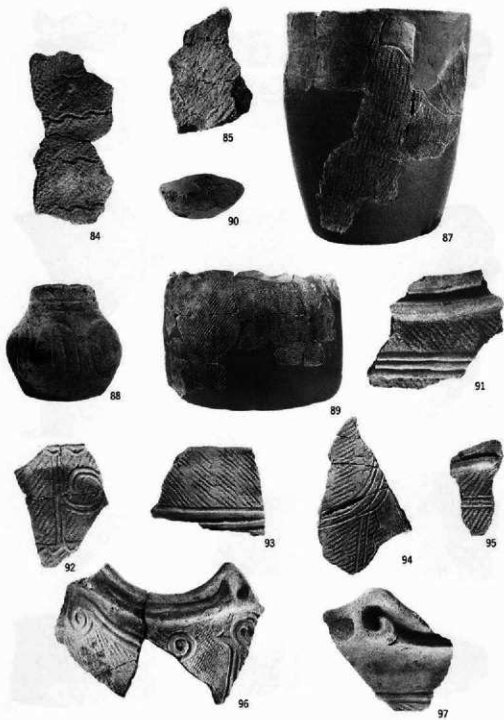
写真図版56 遺構外出土遺物（第Ⅱ群土器1、第Ⅲ群土器1）



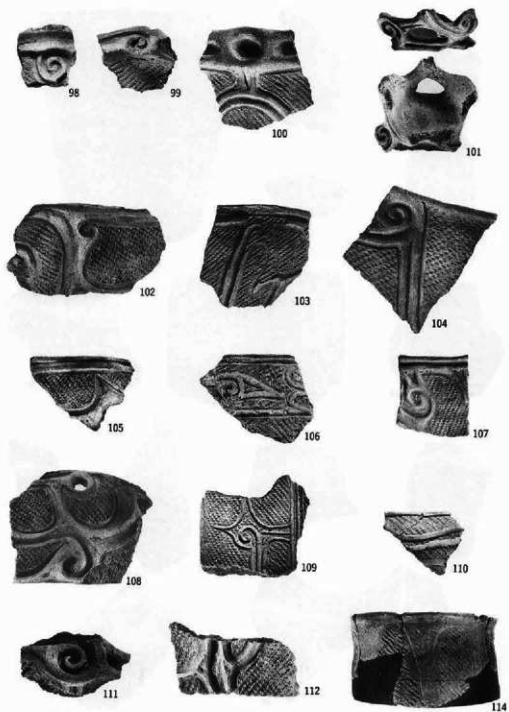
写真図版57 遺構外出土遺物（第Ⅱ群土器2）



写真图版58 遺構外出土遺物（第II群土器3）

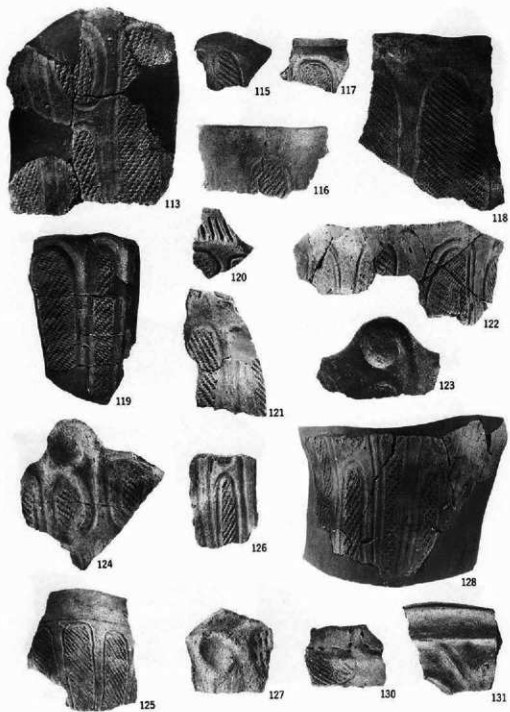


写真図版59 遺構外出土遺物（第Ⅲ群土器2）

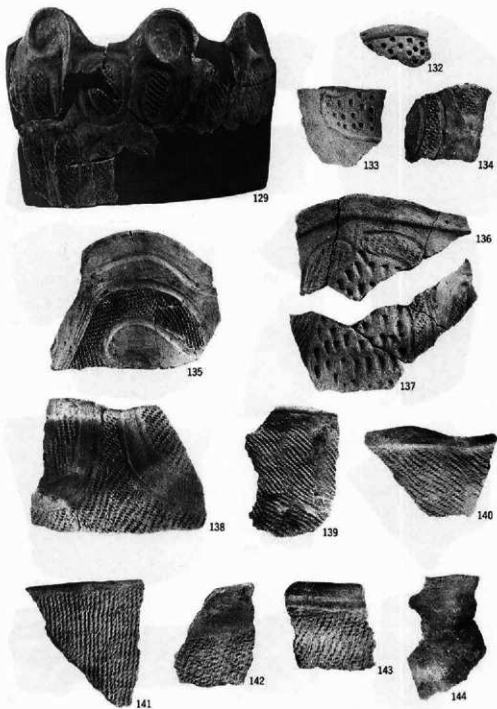


写真图版60 遺構外出土遺物（第Ⅲ群土器3）





写真図版61 遺構外出土遺物（第Ⅲ群土器4）



写真图版62 遺構外出土遺物（第Ⅲ群土器5）



145



147



146



148

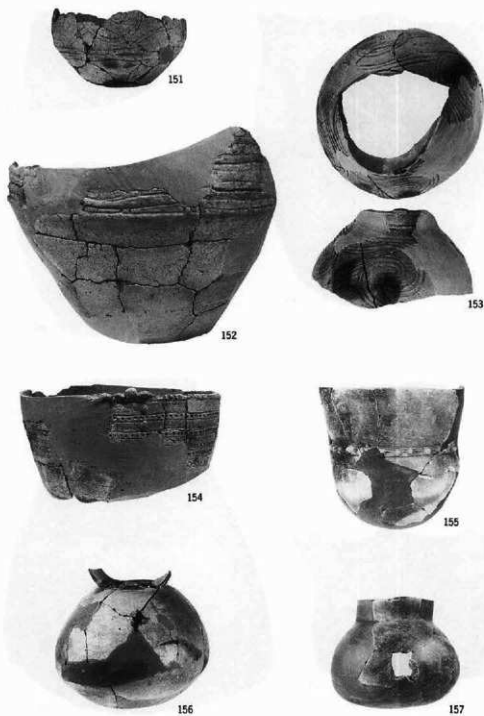


149

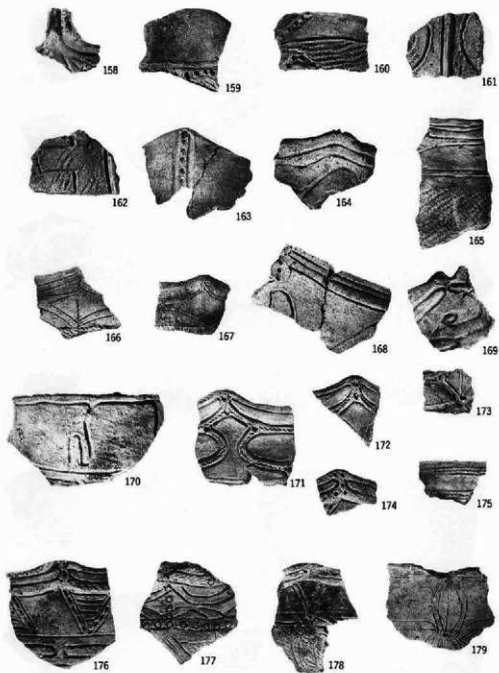


150

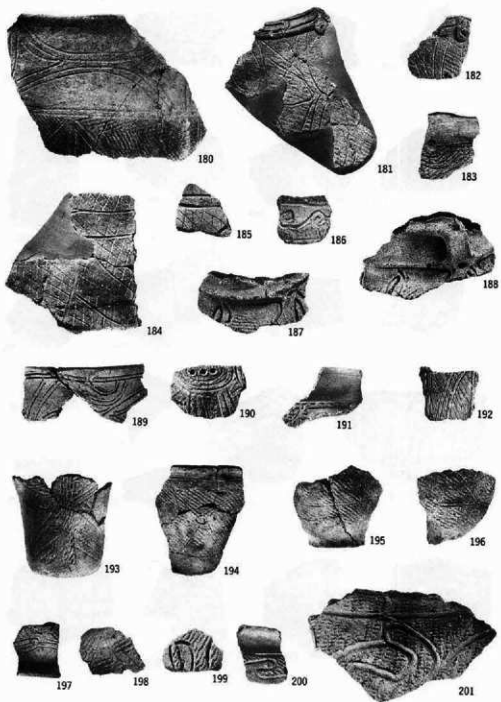
写真図版63 遺構外出土遺物（第Ⅳ群土器1）



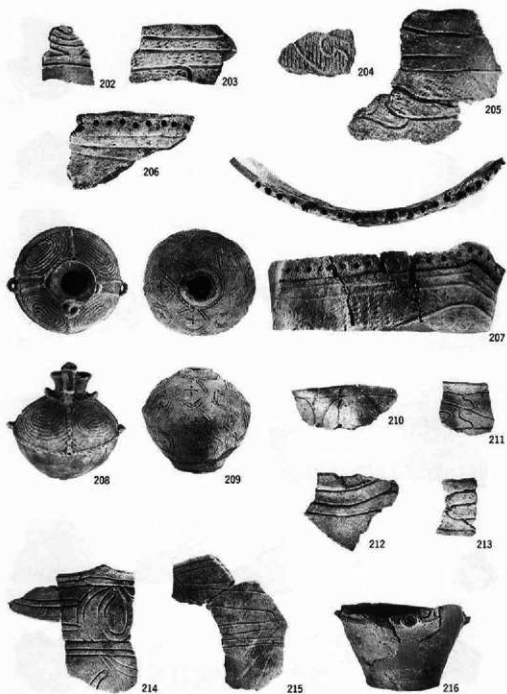
写真図版64 遺構外出土遺物（第IV群土器2）



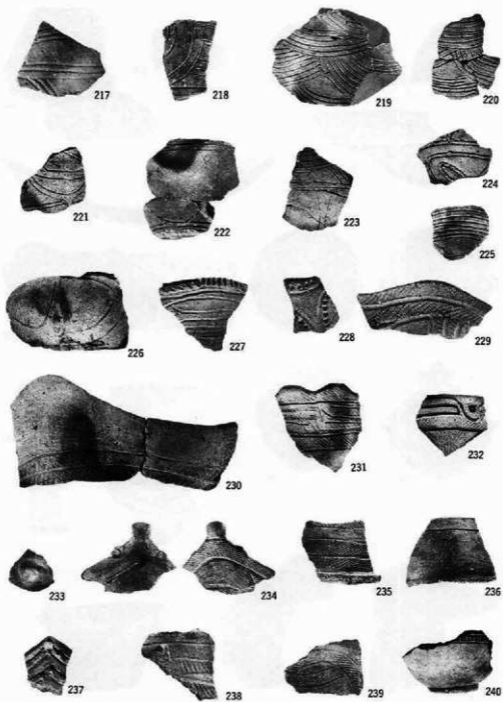
写真图版65 遗構外出土遺物（第IV群土器3）



写真図版66 遺構外出土遺物（第Ⅳ群土器4）

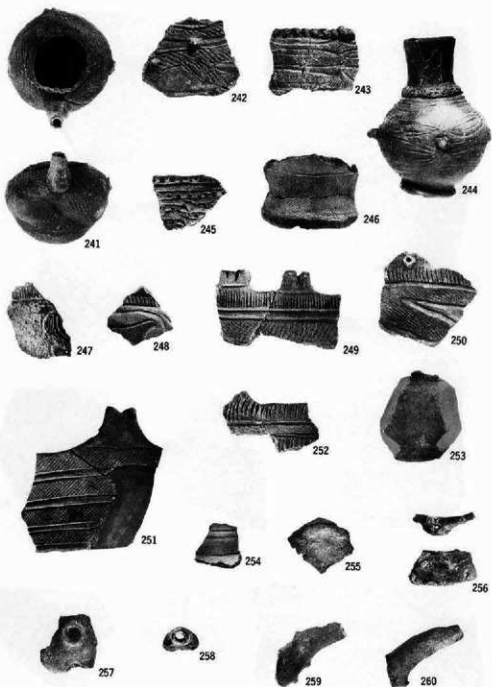


写真図版67 遺構外出土遺物（第IV群土器5）



写真図版68 遺構外出土遺物（第Ⅳ群土器6）





写真図版69 遺構外出土遺物（第IV群土器7）



261



262



263



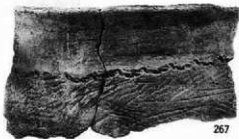
264



265



266



267



268



269

写真図版70 遺構外出土遺物（第Ⅳ群土器8）



270



271



272



273



274



275

写真図版71 遺構外出土遺物（第IV群土器9）



276



277



278



279



280



281



282

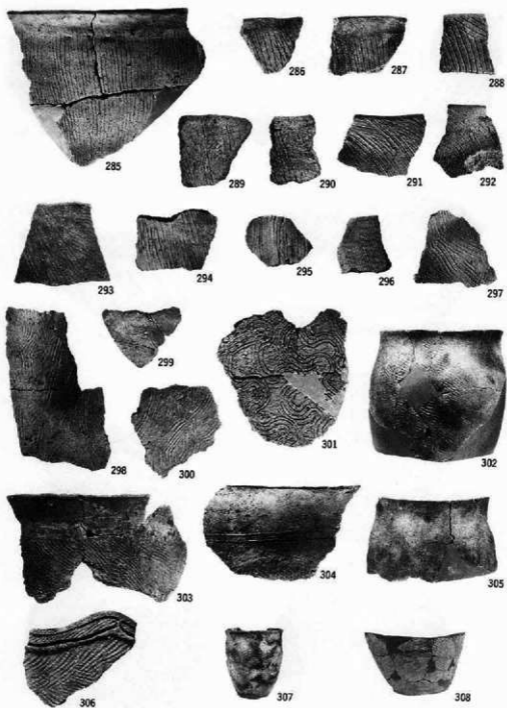


283

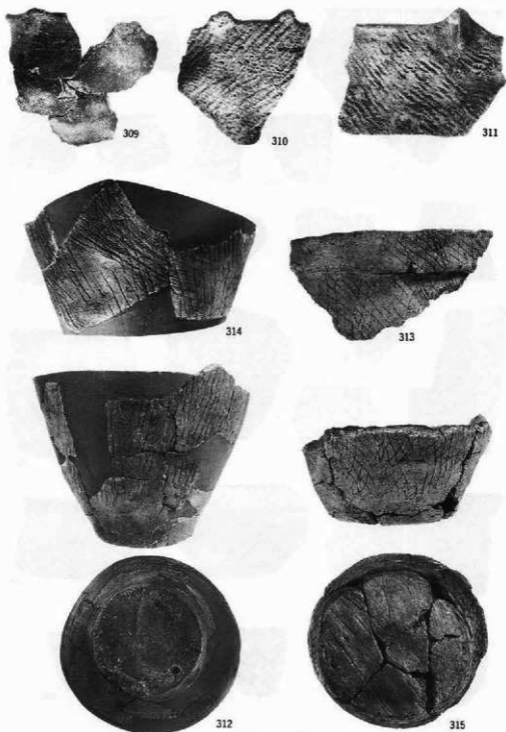


284

写真図版72 遺構外出土遺物 (第IV群土器10)



写真図版73 遺構外出土遺物 (第IV群土器11)



写真図版74 遺構外出土遺物 (第IV群土器12)



316



317



318



319



320



321

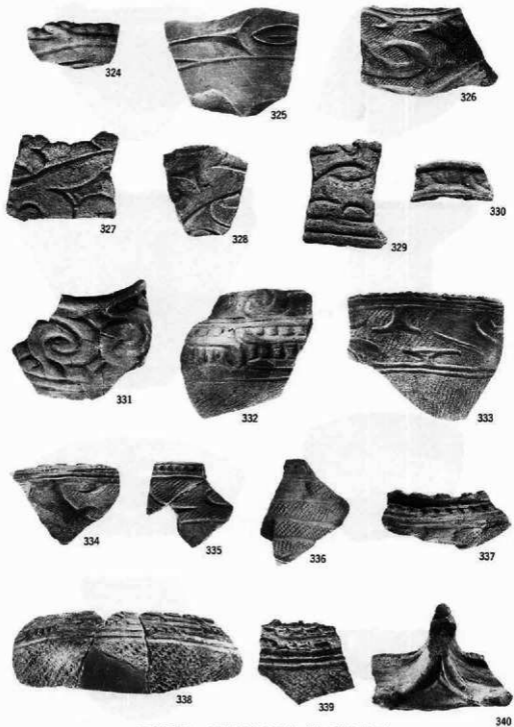


322



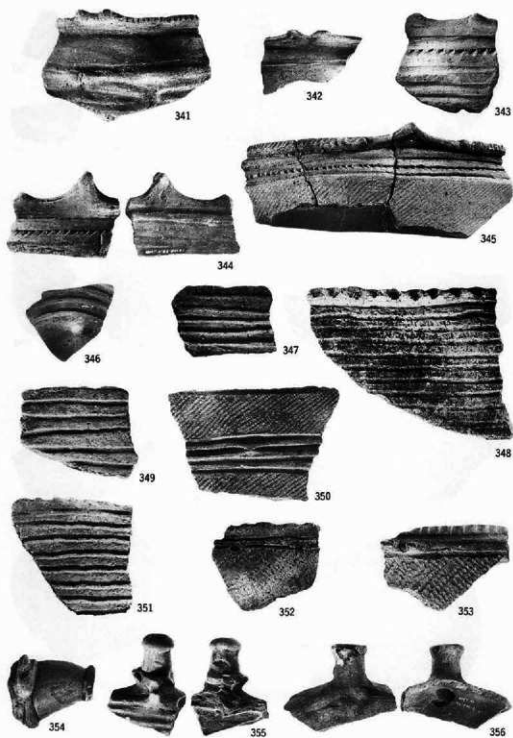
323

写真図版75 遺構外出土遺物(第V群土器1)

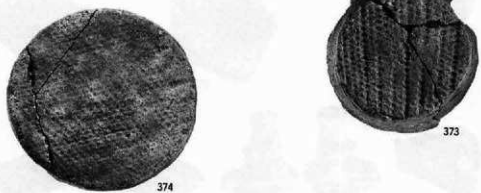
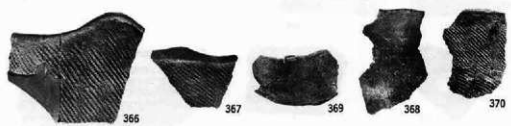
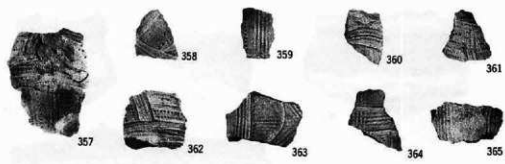


写真図版76 遺構外出土遺物（第V群土器2）

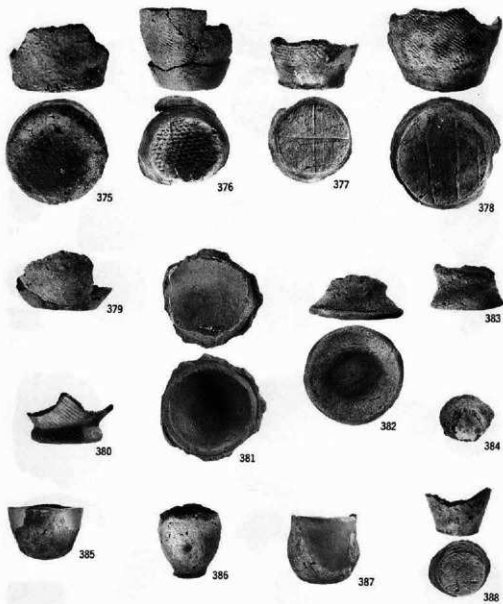




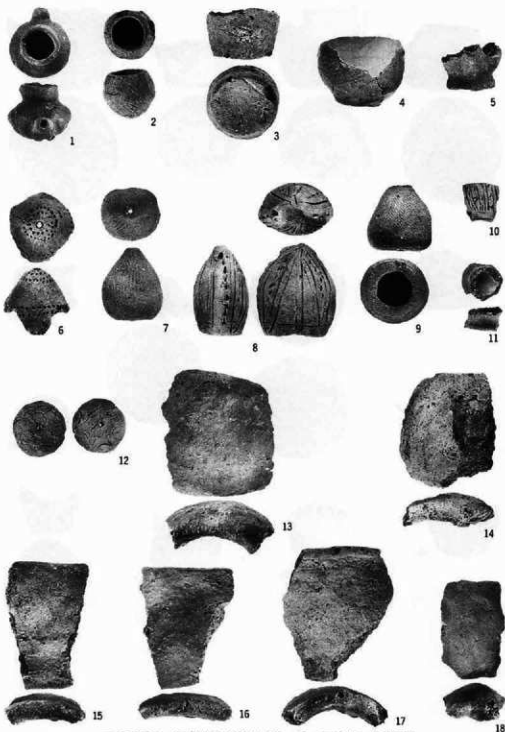
写真図版77 遺構外出土遺物 (第V群土器3)



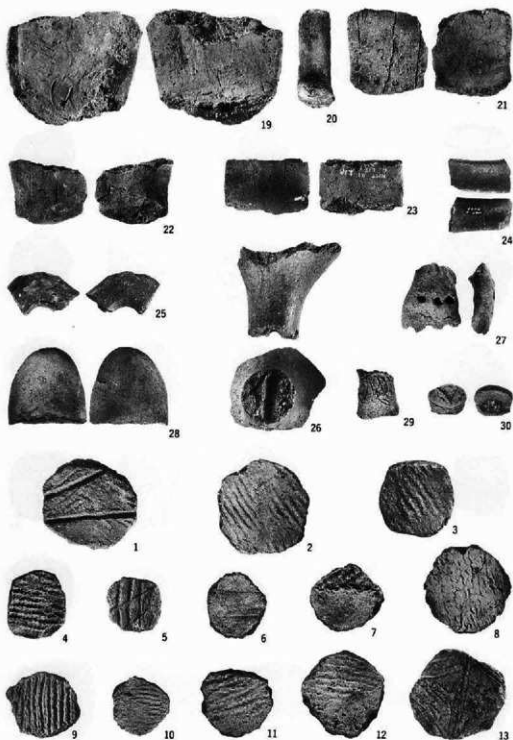
写真図版78 遺構外出土遺物（第Ⅳ群土器、第Ⅶ群土器Ⅰ）



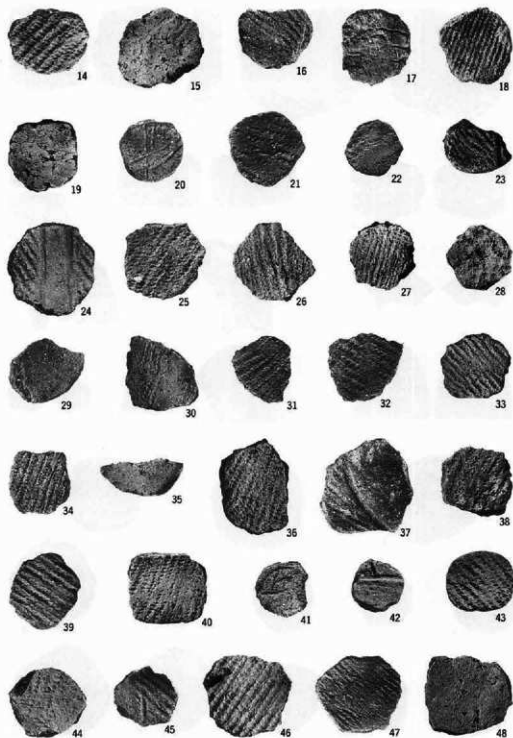
写真图版79 遺構外出土遺物（第Ⅶ群土器2、小型土器）



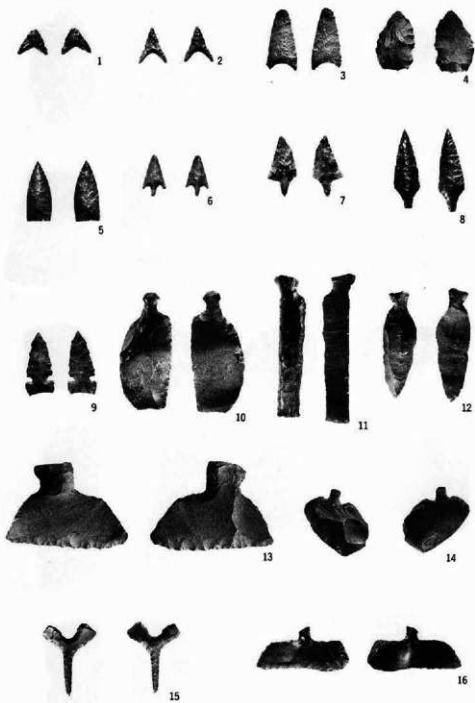
写真図版80 遺構外出土遺物（ミニチュア土器、土製品）



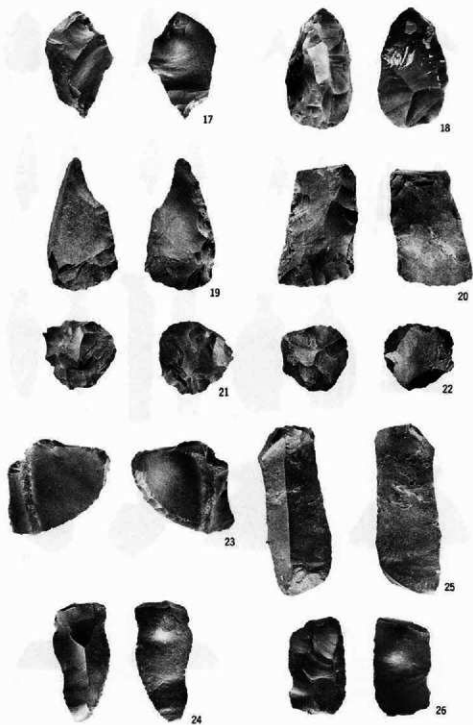
写真図版81 遺構外出土遺物 (土製品、円盤状土製品)



写真図版82 遺構外出土遺物 (円盤状土製品)

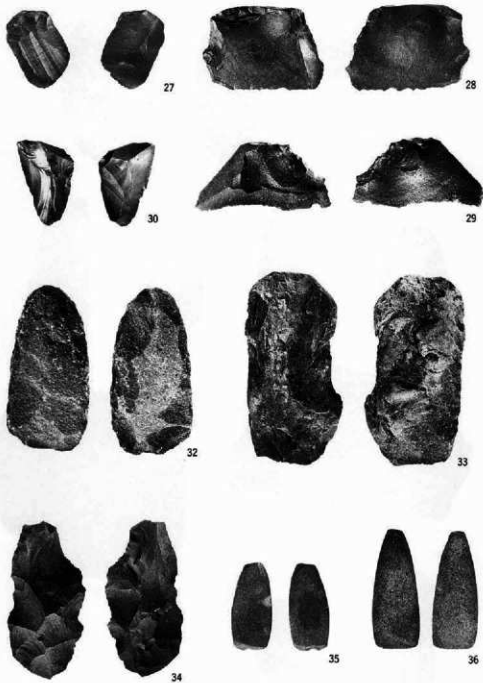


写真図版83 遺構外出土遺物（石器1）

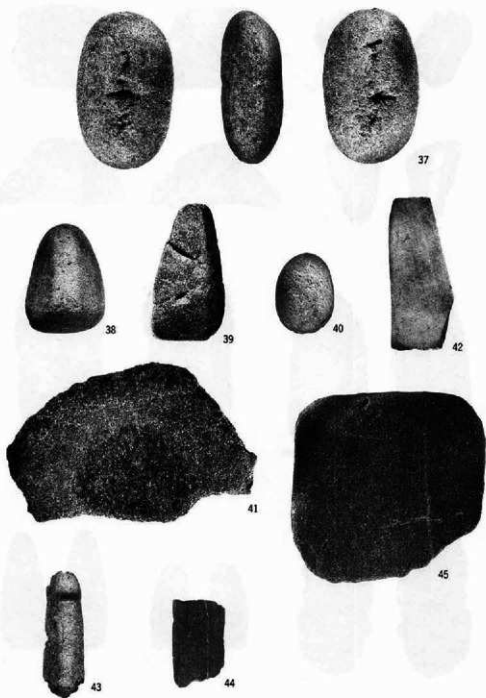


写真图版84 遺構外出土遺物(石器2)





写真図版85 遺構外出土遺物（石器3）



写真図版86 遺構外出土遺物 (石器 4)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實				
副 所 長	高 橋 敬 明				
〔管理課〕					
管 理 課 長	澤 田 寛	嘱	託	吉 野	田 崎 十 次 夫
主 事	佐 藤 幸 恵	〃			
〃	久 保 田 幸 恵				
〔調査課〕					
調 査 課 長	鈴 木 恵 治	文 門	化 調 査	財 員	松 本 建 速
課 長 補 佐	三 浦 謙 一	〃	〃	〃	笹 平 克 子
〃	高 橋 與 右 工 門	〃	〃	〃	花 坂 政 博
主 任 文 調 査 財 員	菊 池 強 洋 一	〃	〃	〃	佐 々 木 昭 彦
〃	渡 辺 洋 一	〃	〃	〃	金 濱 田 部 勝 宏
〃	高 工 正 利 幸 紀	〃	〃	〃	阿 星 阿 部 勝 雅
〃	中 藤 川 重 文 介	〃	〃	〃	佐 々 木 清 義 直
〃	高 橋 義 介	〃	〃	〃	高 村 高 木 上 昇
文 門 化 調 査 財 員	斎 藤 孝 雄	〃	〃	〃	柳 田 精 造
〃	川 村 均 行	期 門 限 職 付 員	〃	〃	柳 田 千 葉 悟
〃	鈴 木 東 貞 格	〃	〃	〃	高 溜 高 橋 英 治
〃	伊 吉 田 邦 敏	〃	〃	〃	佐 藤 修 雅
〃	斎 藤 敏 明	〃	〃	〃	稻 垣 烟 博
〃	高 橋 一 浩	〃	〃	〃	田 八 重 座 の り
〃	小 原 井 一 孝	〃	〃	〃	八 重 座 の り
〃	酒 井 田 勉 透	〃	〃	〃	杉 平 昭 太 郎
〃	小 山 内	〃	〃	〃	澤 祐 子
〔資料課〕					
資 料 課 長	村 松 義 夫				
文 門 化 調 査 財 員	駒 嶺 高				

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第206集

## 向館遺跡発掘調査報告書

一般県道上米内停車場線整備関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年3月25日

発行 平成6年3月31日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5

TEL (0196) 41-0585